

¥1800

風俗奇譚

〈男女性風俗の粒より話題の探究〉

昭和35年12月1日発行（毎月一回1日発行）
昭和35年8月30日国鉄東局特別扱承認第868号

風俗奇譚

縛虐悦態特集

風俗奇譚12月号

昭和35年12月1日発行（毎月一回1日発行）通巻13号
昭和35年8月30日国鉄東局特別扱承認第868号

特集
伊藤晴雨
写真
自選傑作集

12

縛虐悦態特集



定価 1 4 0 円

Sweet Gwendoline.



Faithful Frederick
(our hero)



Sir d'Arcy d'Arcy
(the foul fiend)



Dad" (poor but honest)



the Mysterious
Countess.

"Ah! who will save her!"

“美しきグウェンドリンの悲しみ”という、ジョン・ウイリーの絵物語の一部と登場人物。奸策と嫉妬と嗜虐とにもあそばれる、孤児の美少女サリーを助けるのは、誰か？



飯口器やサルグツワを咽ませる過程の珍しい写真。ふたりとも美人のところが、珍重に価する



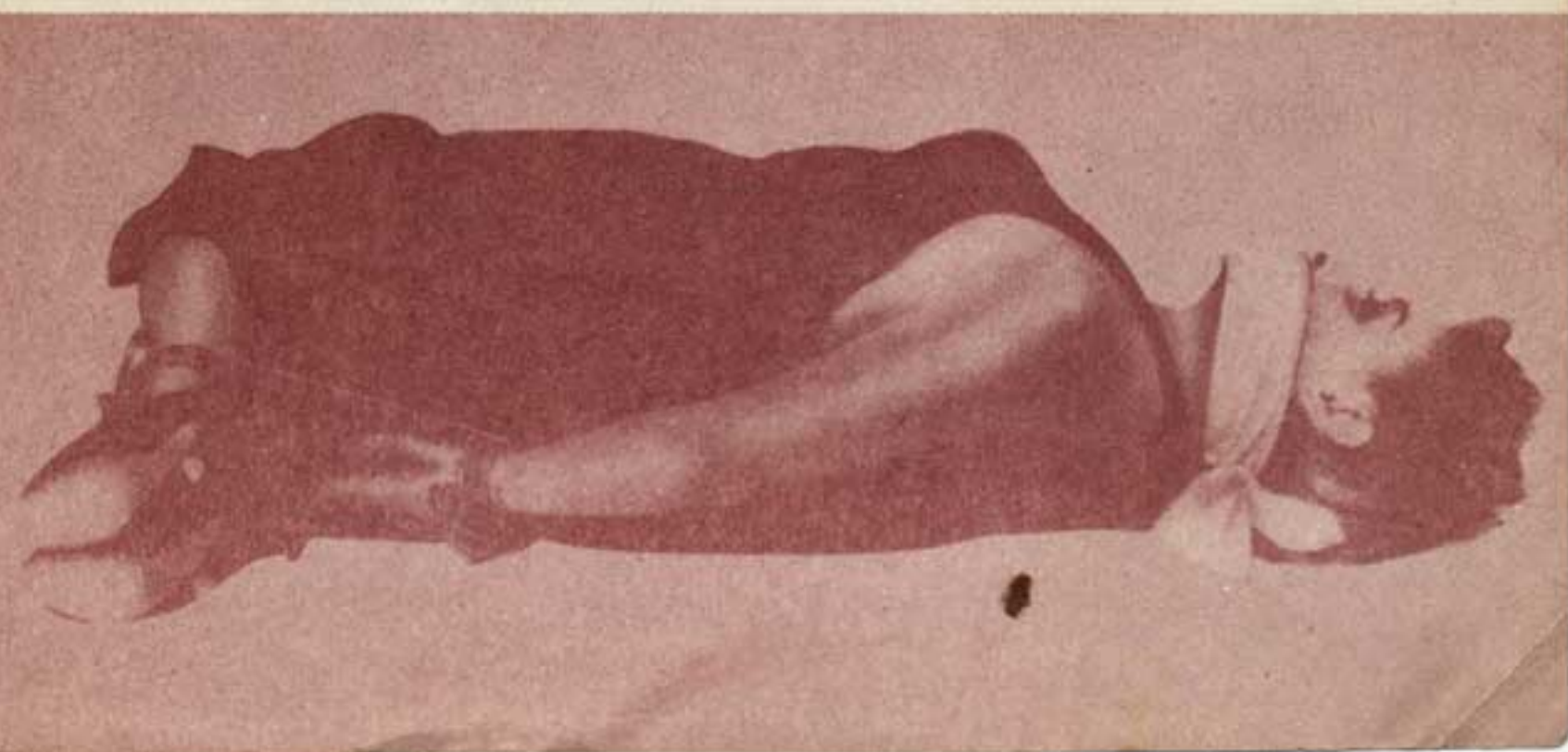
両手をヒザの下からバンドで結ばれ
手には拘束用手袋をはめられた女性

特集 伊藤晴雨 絵画 写真 自選傑作集

(多色口絵)野ざらし……………(折込)	責め絵スケッチ集……………(折込)	火の靴をはかせて……………(三五)	駿河責め……………(三六)	しもと責め……………(三七)	引きずり責め……………(三八)	死体責め……………(四〇)	すり鉢責め……………(四二)
---------------------	-------------------	-------------------	---------------	----------------	-----------------	---------------	----------------

晴雨女体緊縛写真集……………(四二)

伊藤晴雨さんのプロフィール……………江古田八朗(五二)	晴雨さんの雪責め……………宮原静雄(五五)	石段の緊縛裸女……………(二)	浴室の悶姿……………(二四)	めしい鳥……………(二四)	廃墟のとなれびと……………(二六)	石垣の前で……………(二八)	花模様のなかで……………(二八)	長じゅばんも乱れて……………(二八)	事務所の狼藉……………(三〇)	棒しばり……………(三〇)	松の木吊り……………(三二)	露台の白肌……………(三三)	庭園の二つのポーズ……………(三四)
-----------------------------	-----------------------	-----------------	----------------	---------------	-------------------	----------------	------------------	--------------------	-----------------	---------------	----------------	----------------	--------------------



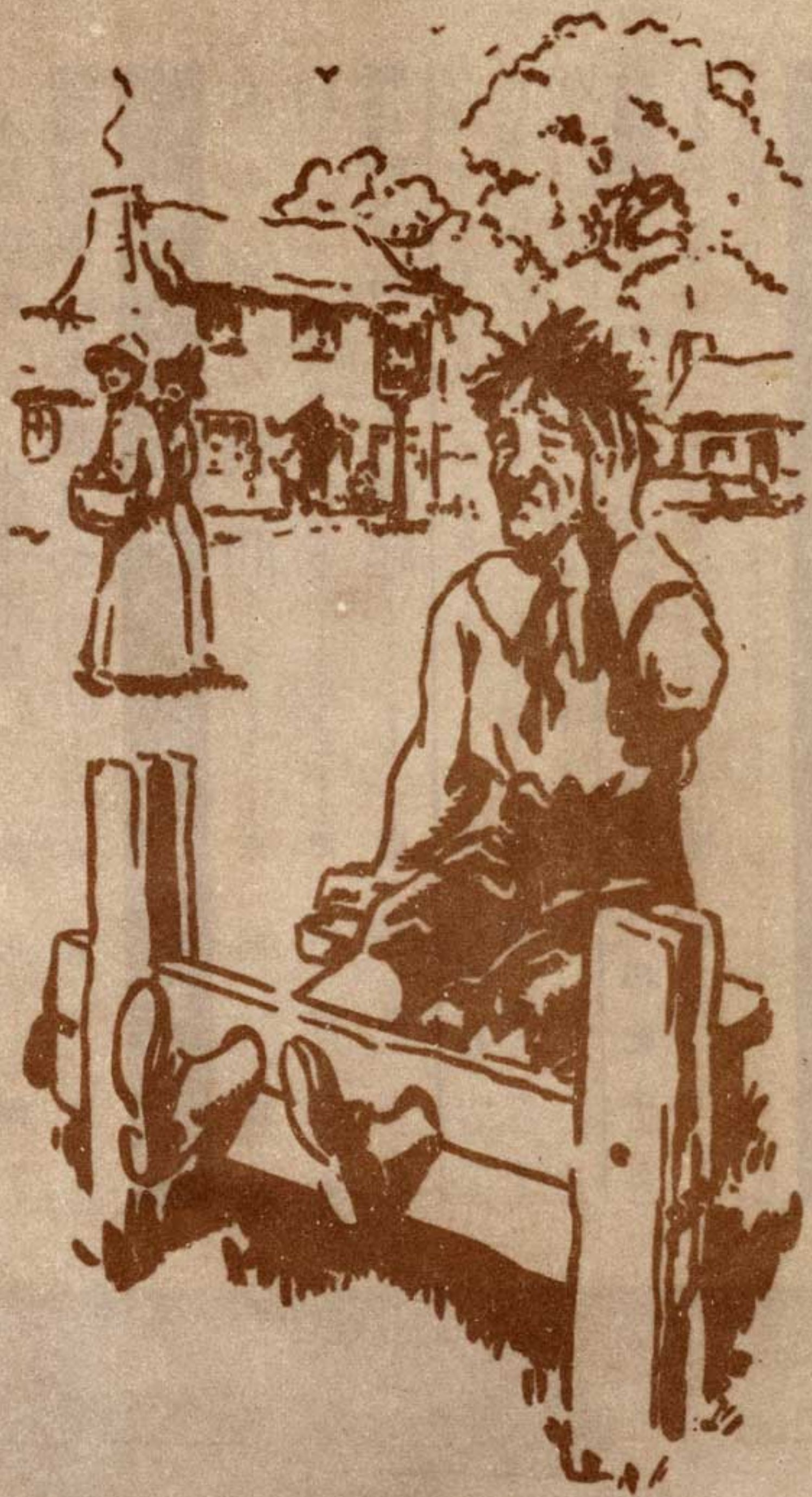
“魅惑の水”を求める男……………松井宏水(二七)	告白 美しきムチの下で……………とやま・かづひこ(二三)	マゾヒストの手紙から⑥……………谷貫太(五八)	ほも禁 “五角形”のなかの成人儀式……………かびや・かずひこ(七〇)	秘帖② “木馬責め”と“滑車吊り”……………藤川潤(七八)	異常願望を刺激遊戯4つの法……………真野麗(一二三)
--------------------------	------------------------------	-------------------------	------------------------------------	-------------------------------	----------------------------

アブ “顔のない足”クラブ……………獅々村裕(八四)

女レポの拷問……………東門博(二〇二)	白い蝶……………津田耕造(二四)	男性責め 立石さま縁起……………蘆立鋭吉(二三八)	郷土史 ヴォアイヨール(のぞき)……………番場多計夫(六九)	においのフェチズム……………田島末吉(七七)	スナミチズムということ……………岩崎弘一(一二三)	女萎願望 あたしの“結婚生活”……………平井由紀子(九六)	者の手記 あるパンティー・マニアの告白……………杉浦三郎(二四八)	☆読者サロン……………(二七〇)
---------------------	------------------	---------------------------	--------------------------------	------------------------	---------------------------	-------------------------------	-----------------------------------	------------------

小説 サド 耽美荘の恐怖……………青山三枝吉(一五)

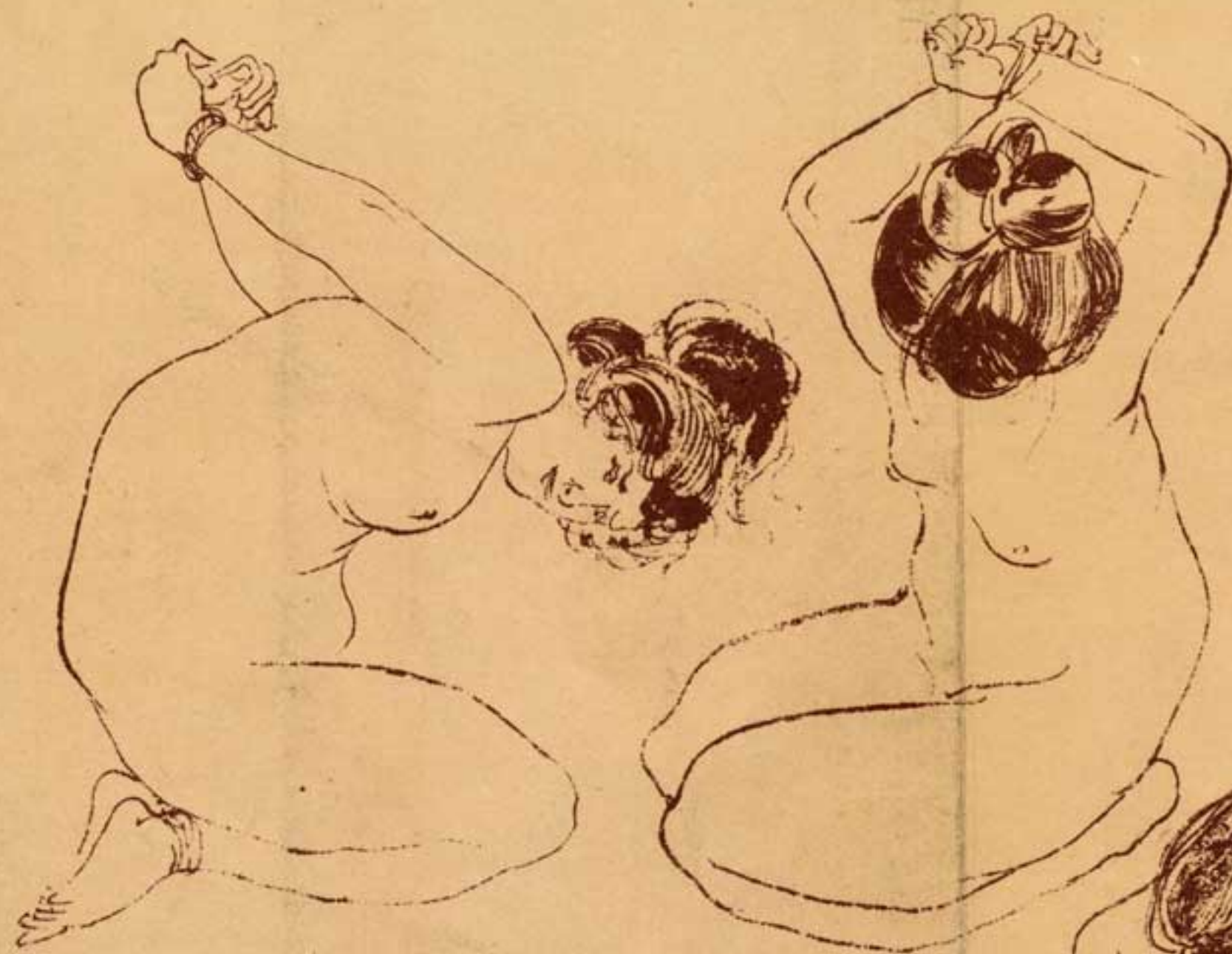




公開の足カセ刑にかけられた男



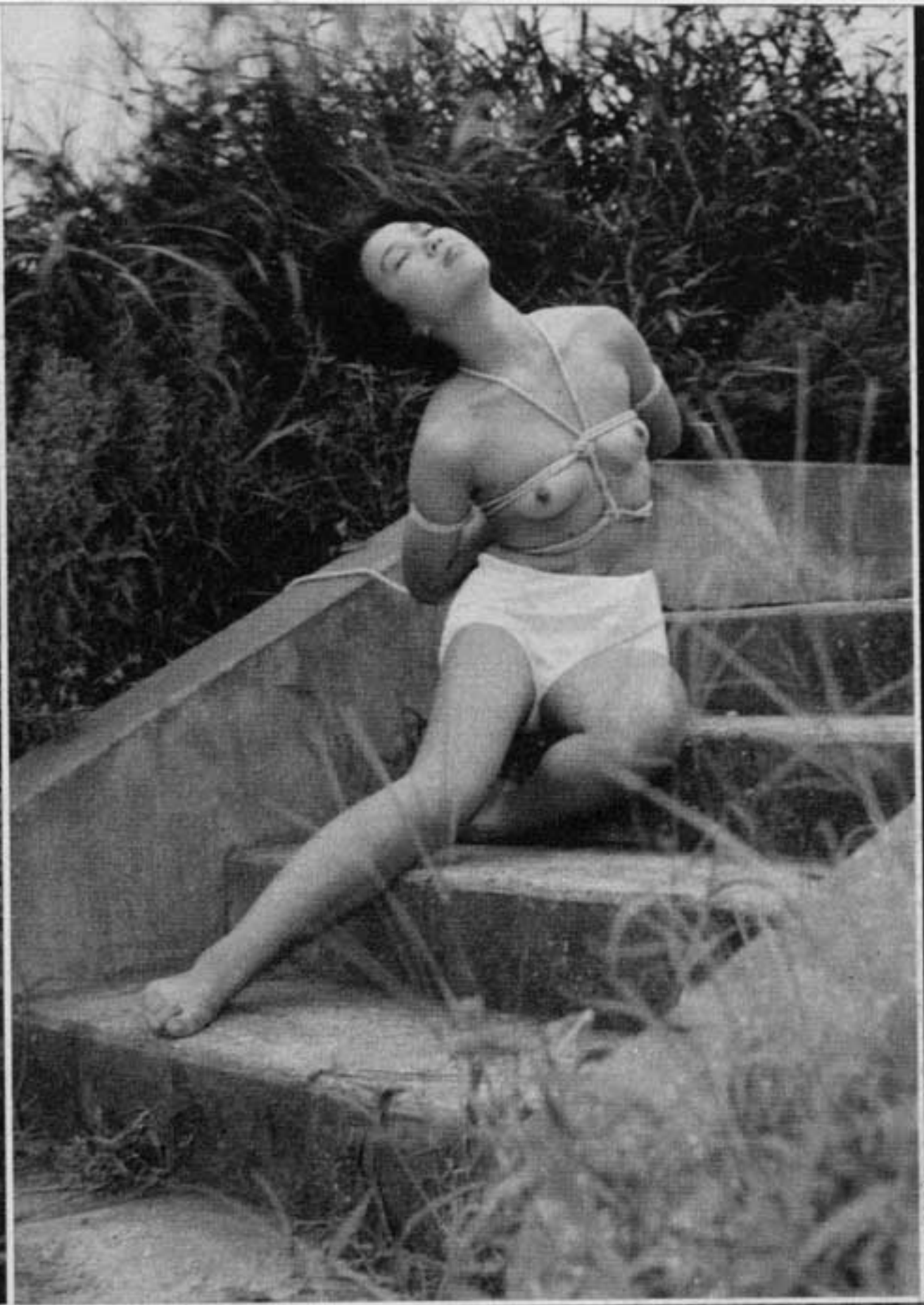
伊藤晴雨
責め絵
スケッチ集



歡喜の絶頂に 女の美が
あると同様に 苦痛のき
わみにも 凄烈たる女の
美しさが 光りかがやく

石段の緊縛裸女





くずれた石段は 古城の名残り 廃墟の寂寥が いちめ
んに張りつめている ぼうぼうたる草には 白い風が吹
き渡り うらさびしさが流れている 縄を受けた女の肌
が 年をへた石の上で ひっそりと悦虐にふけり 被縛
の感覚を噛みしめている これはまた 透明な風物詩だ

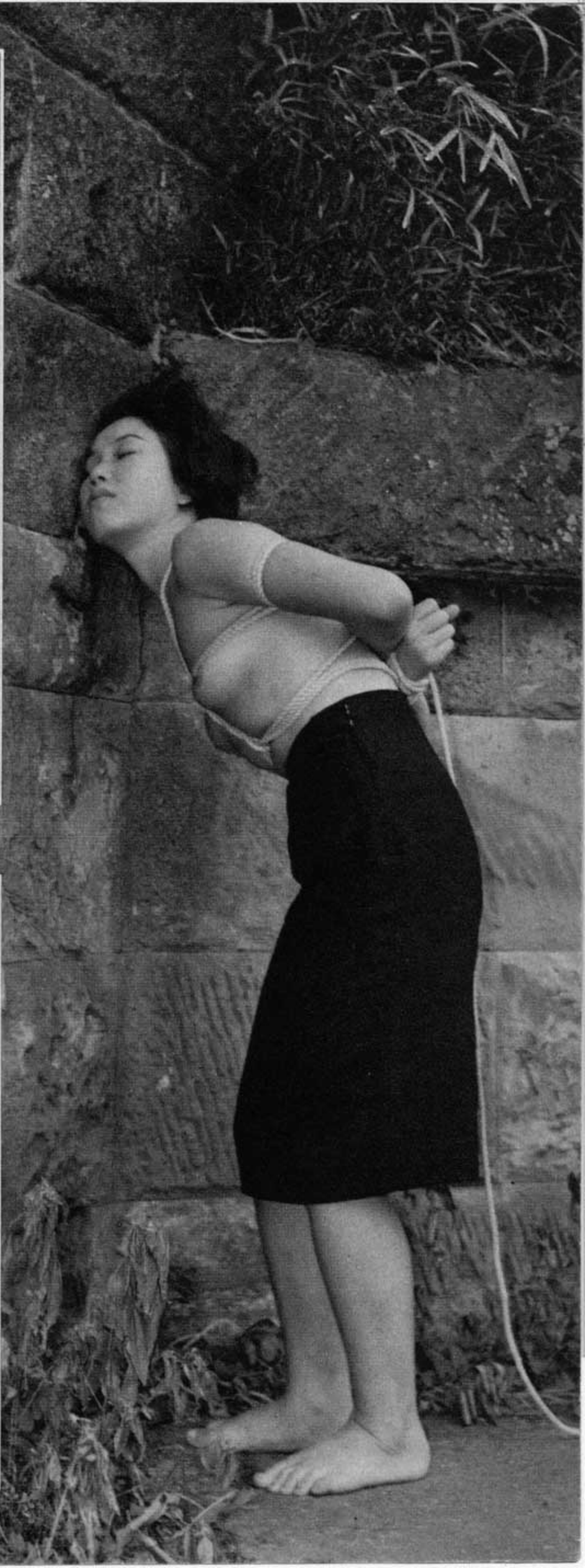




めしい鳥

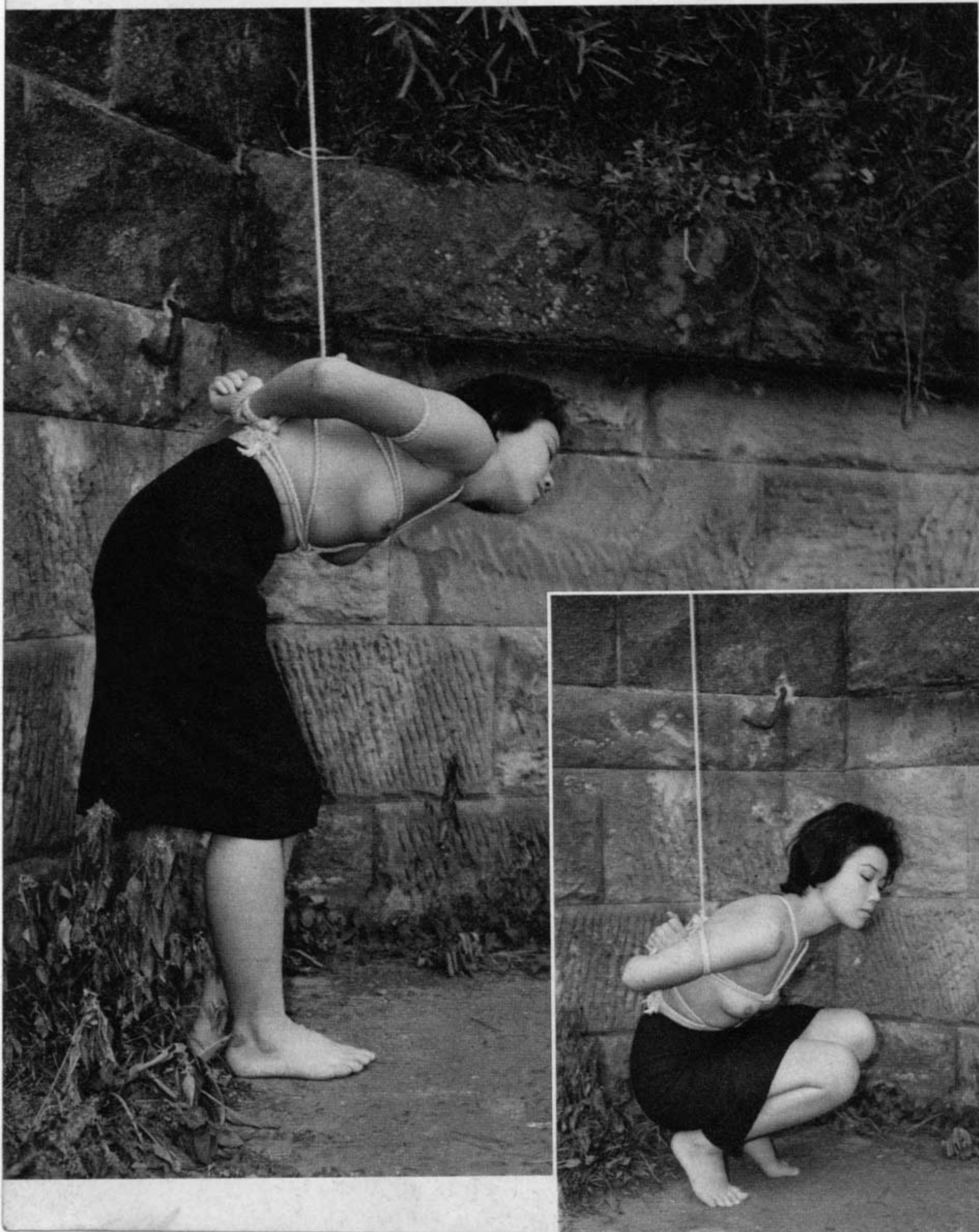
目をふさがれた めしいどり
自由を失われた 緊縛の女
手をうしろ手に たかだかと
ああ とらわれの 白い肌
縄はなんにも言わないが……





石垣の前で

石垣は 長い歳月の風雨に耐えてきた 女はいま 身にまといつく
縄目を耐えている 上半身を裸にむかれ 縄はギリギリ肌を噛む
このひとときも 時は流れ 法悦の花園に 女を みちびいていく

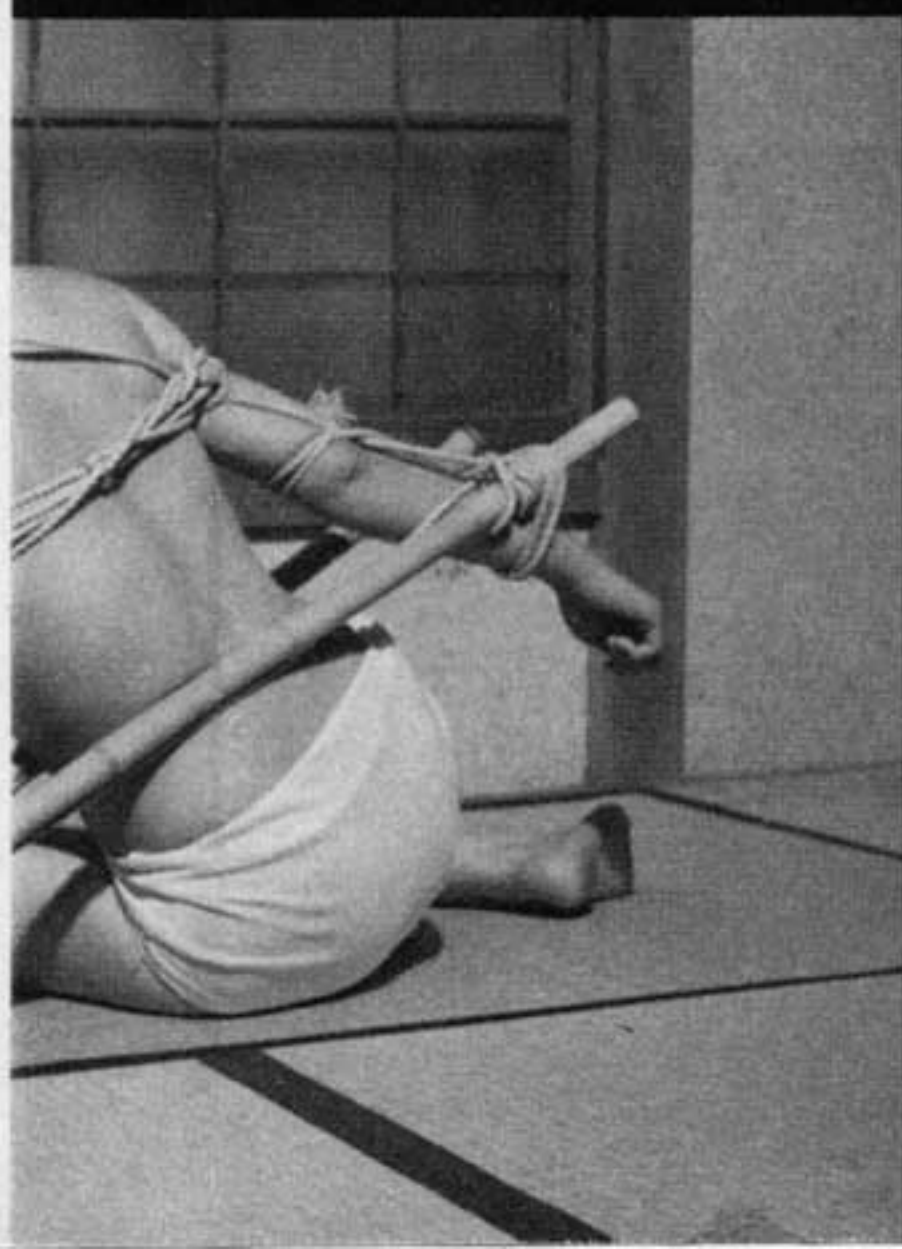
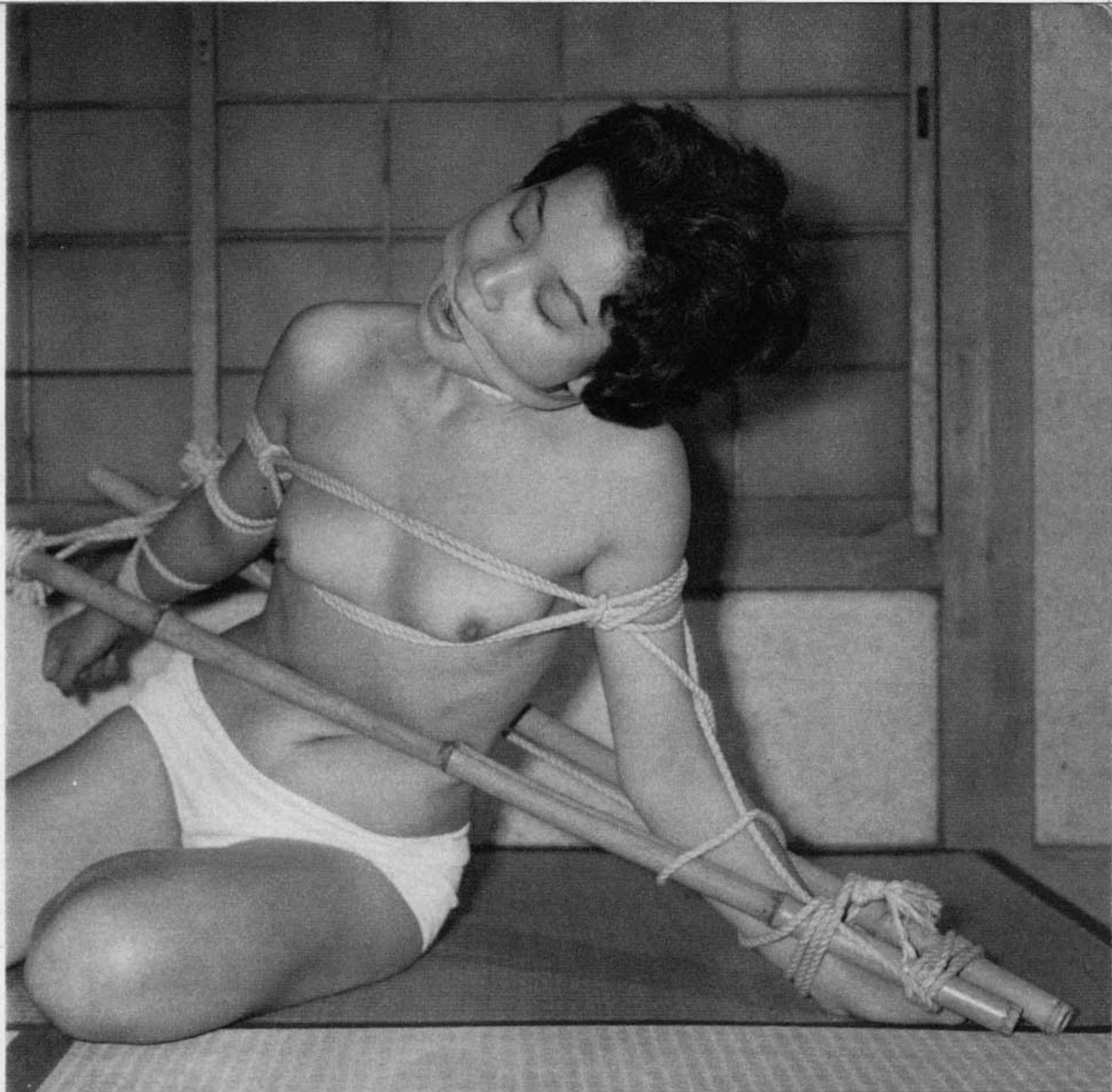




長じゅばんも乱れて

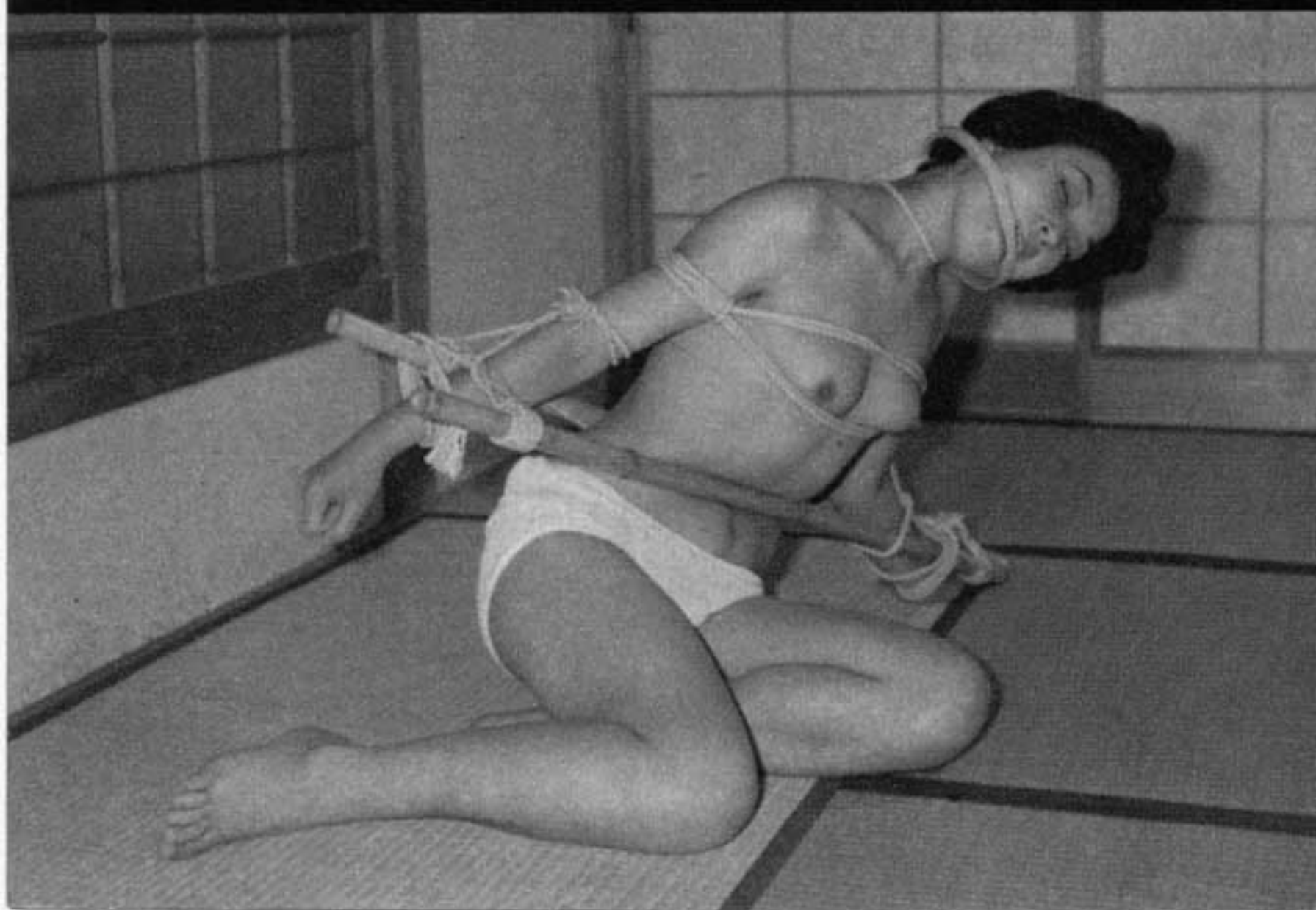
和室には 和風の責めというものがあるのだろうか すらりと着こなした長じゅばんのまま結え それをだんだん はいでいく この静かな無残絵は 色とりもはなやかに 花の散る風情だ 緋ちりめんが乱れると ピンクの湯文字がくずれる 白い脛がこぼれて 女は あきらめの心で 縄の感触にひたる そこから生まれでる悶悦の なんとなまめかしいことか

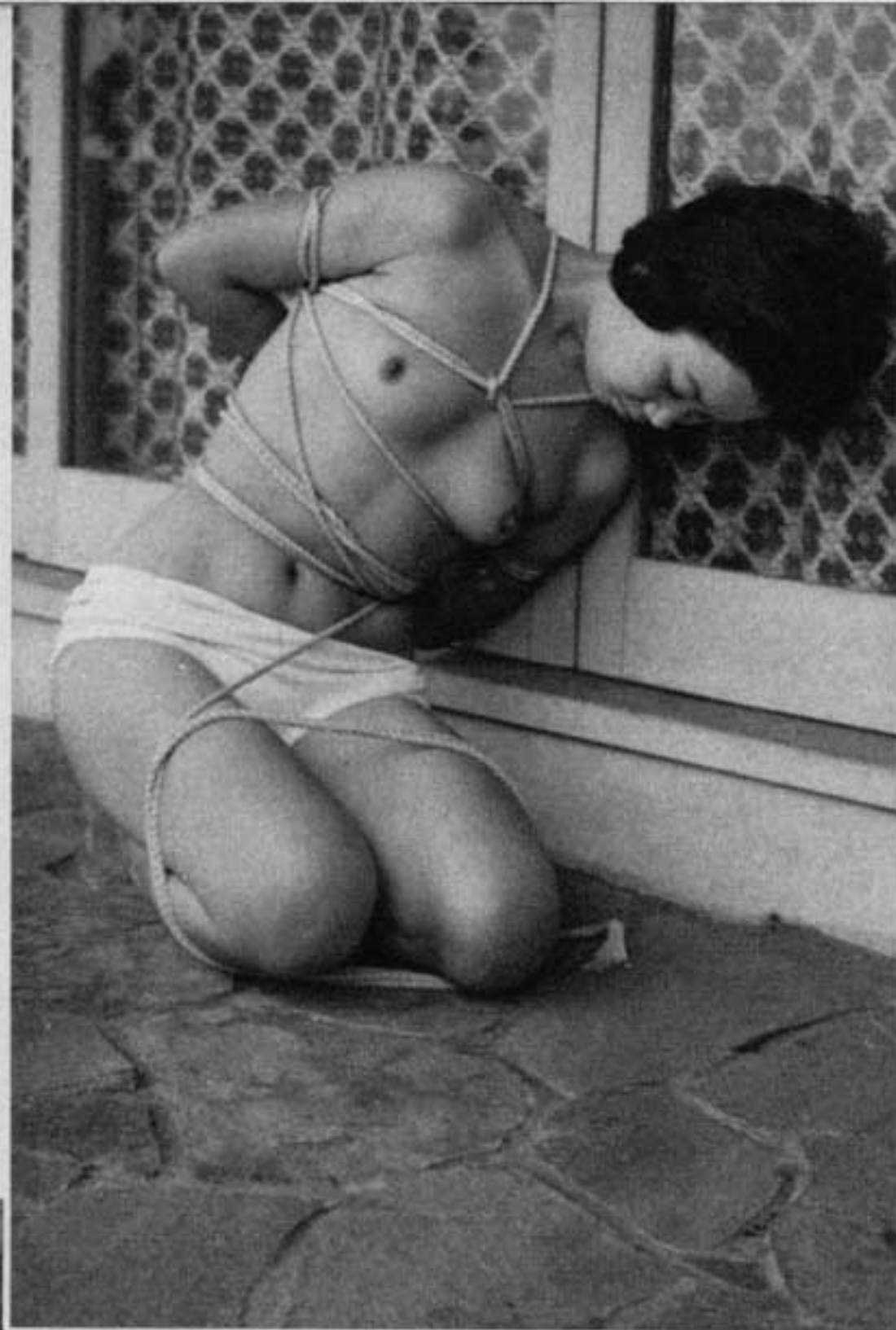




棒しばり

からだの前後を 竹の棒ではさみ その端で手を
ぐるぐる巻きにすると 竹の棒は グツとお腹に
くい込み 縄は乳房をしめあげる この格好で身
をもがくと スズメ踊りのように羽をひろげたス
ズメならぬ 両手を伸ばしたヤッコそのままの
無防備の姿勢になる サルグツワまで噛まされて







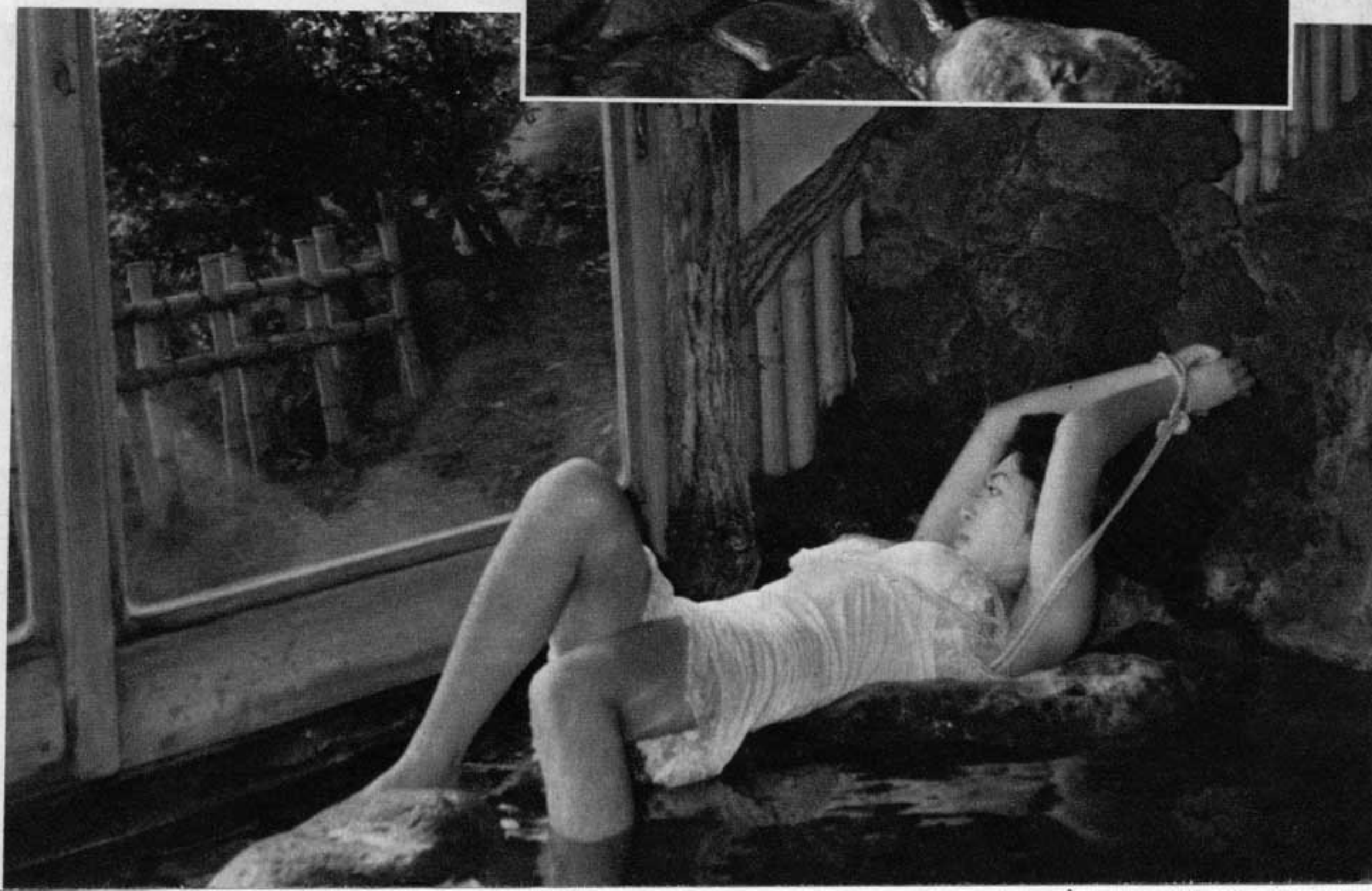
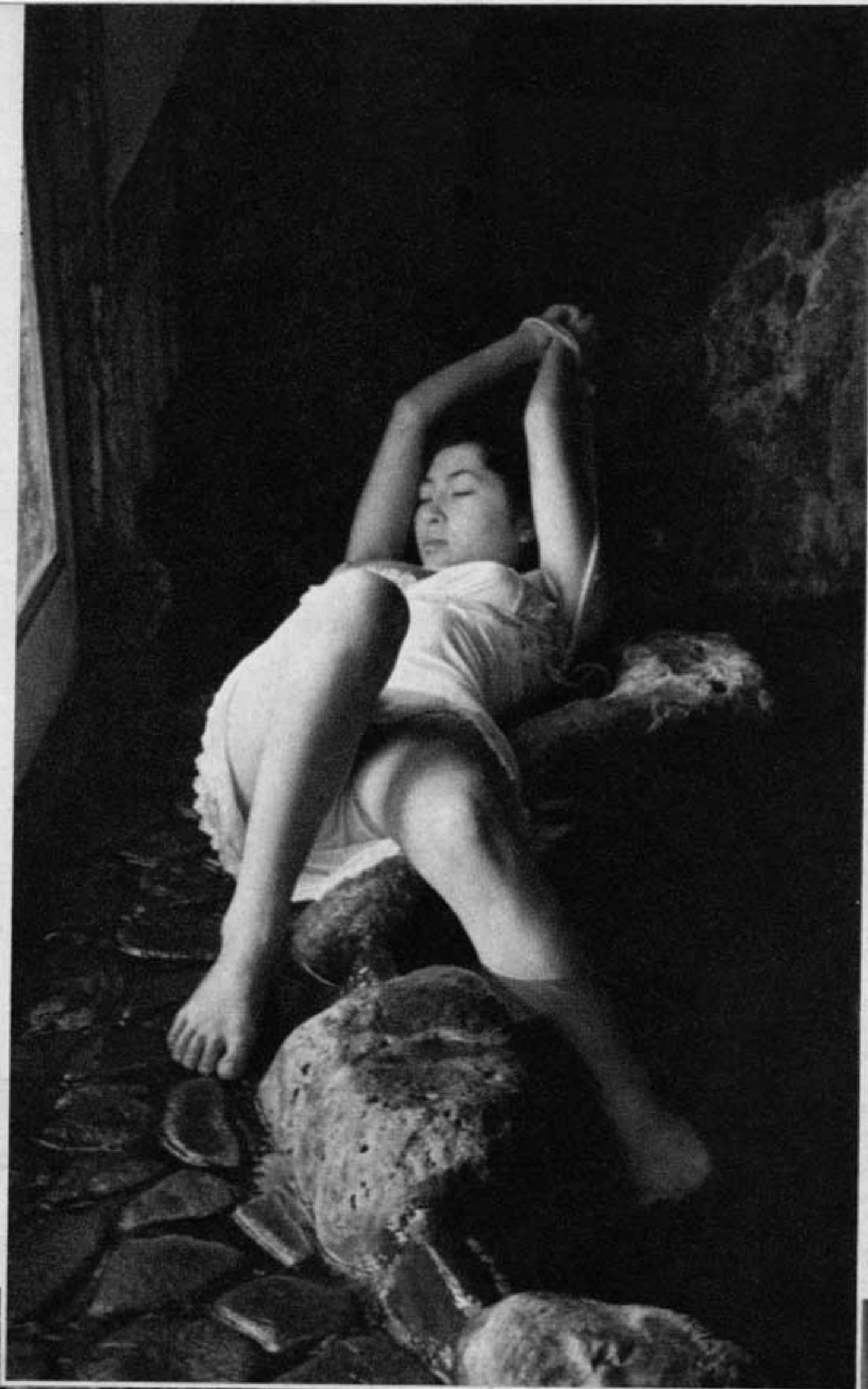
露台の白肌

露台の石の床は冷たく 空気は透明だった
そこに置かれた縛姿は 憂いを
ふくんで しろじろと冴えていた その
白い肌に 縄がからみつき 嗜虐の
哄笑が聞こえるようだ 愉悦がそこに
息づいて ああ 甘美な陶酔が やが
て訪れるだろう そのひとつのことの
ために 女は 縄を恋い ムチを期待
しているかもしれない この女は……



浴室の悶姿

自然石の浴槽のへりに 縛られて 転がされて 女は もだえ
る 縄と湯の 責めのダブル・プレイが 官能に火をともし
感覚をしびれさせる 石に寝た背中を 湯がはって流れ 濡れ
た縄が 徐々に 肌をしめつける からだの線をくつきりとあ
らわして 身もだえする女の 艶に美しくも 悩ましい姿態ノ





廃墟のとらわれびと





練瓦づくりの これは防空壕のあとなの
だろうが いろいろな夢が刻みこまれて
いる だが ひとりとして 後日 ここ
で 女が縛られ さまざまにいじめられ
る日があるとは 予期しなかったろう



花模様のなかで

ジュウタンも カーテンも 絢爛
たる花模様 そのなかに埋もれて
縛られた女が 放心している……







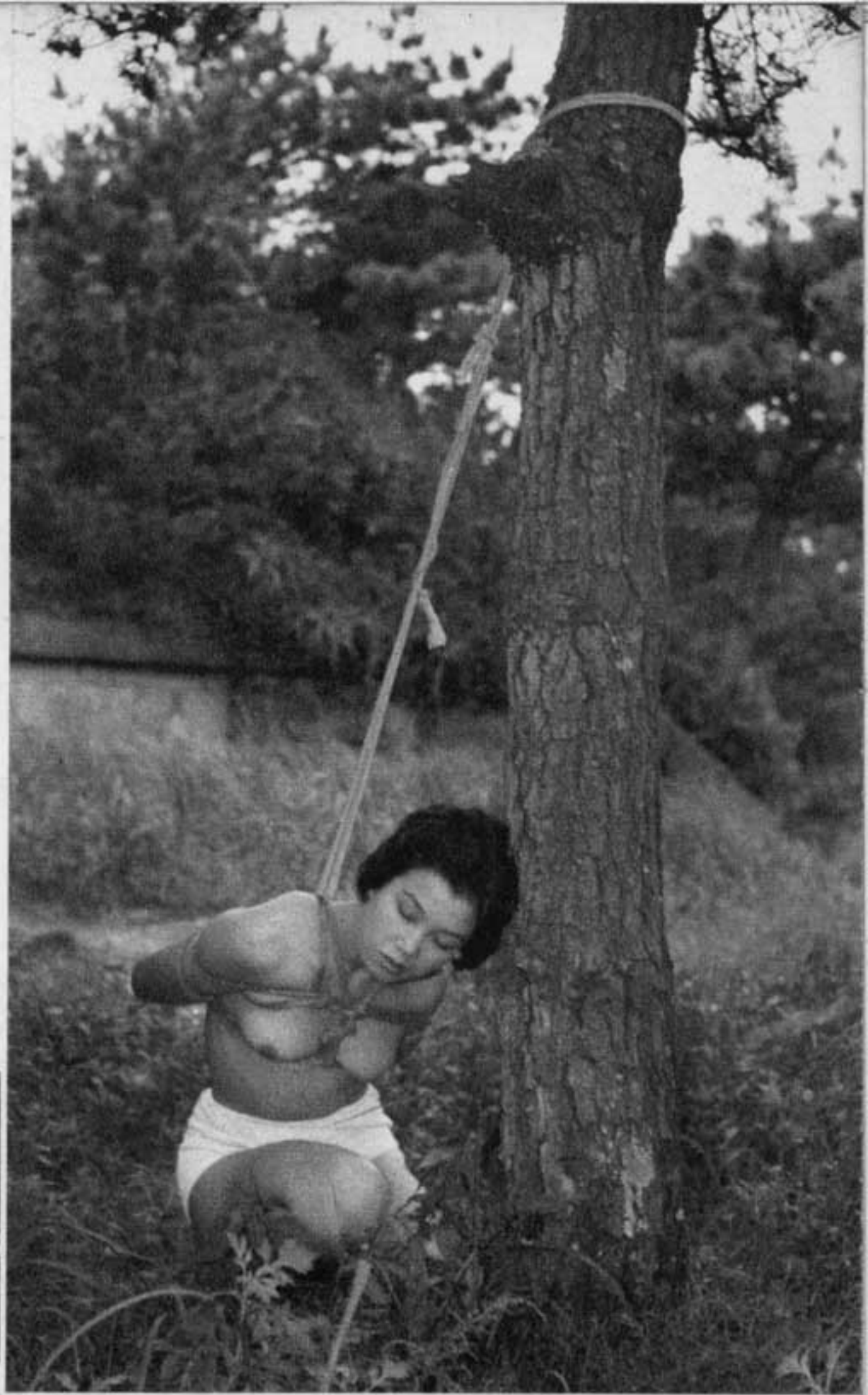


事務所の狼藉

人気のない事務所で 机の上に転がされた女は 荷物のようにガ
ンジガラメに縄目を受けて きて どんなお仕置きを受けるのか

松の木吊り

太いマツの木に縄をかけ その縄で首を吊ら
れた女 乳房は乳房で かたく締めあげられ
ているので 呼吸も苦しい いわば 犬殺し
につかまった野犬が 情け容赦なくつながれ
る あの姿態に似ている だが この女は
殺される運命におかれたのではなく 責めさ
い込まれるためにとらえられたのだ 責め苦
の悲鳴をあげさせるために 吊るされたのだ







庭園の二つのポーズ

自然のなかにおかれたとき 女はいちばん美しい だが
 人工が加えられると 別な美しさを発する 自然もまた
 人工を加えられる 庭園の布置をととのえる その人工の
 庭園に 緊縛という人工を加えた女を置くと そのまま
 燈籠と化し 立ち木ともなる そんなたたずまいの女の二
 つのポーズ 一つは石橋の上で水鏡をし 一つは庭の隅に
 佇立して放心している 素肌を 山の風がなでて 流れる



晴雨責め絵名作選① 火の靴をはかせて



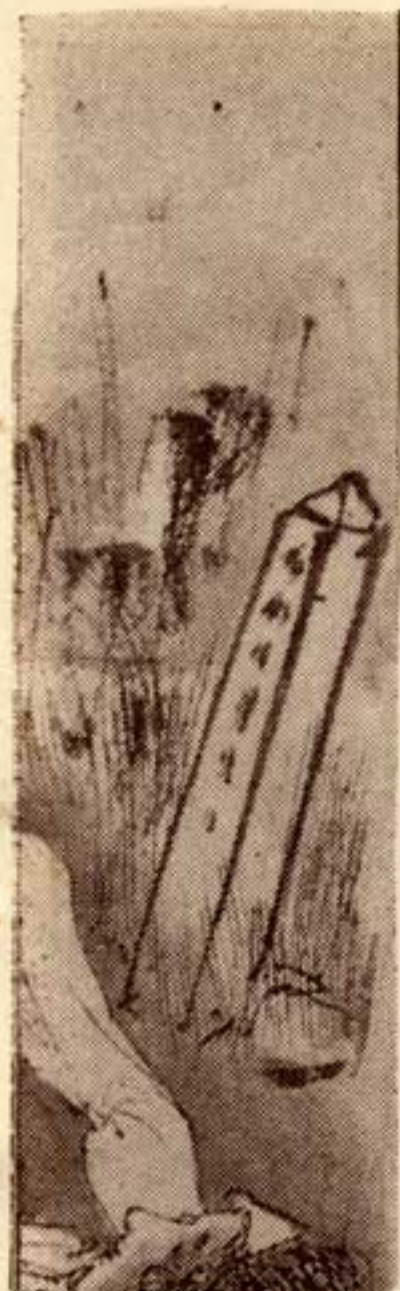




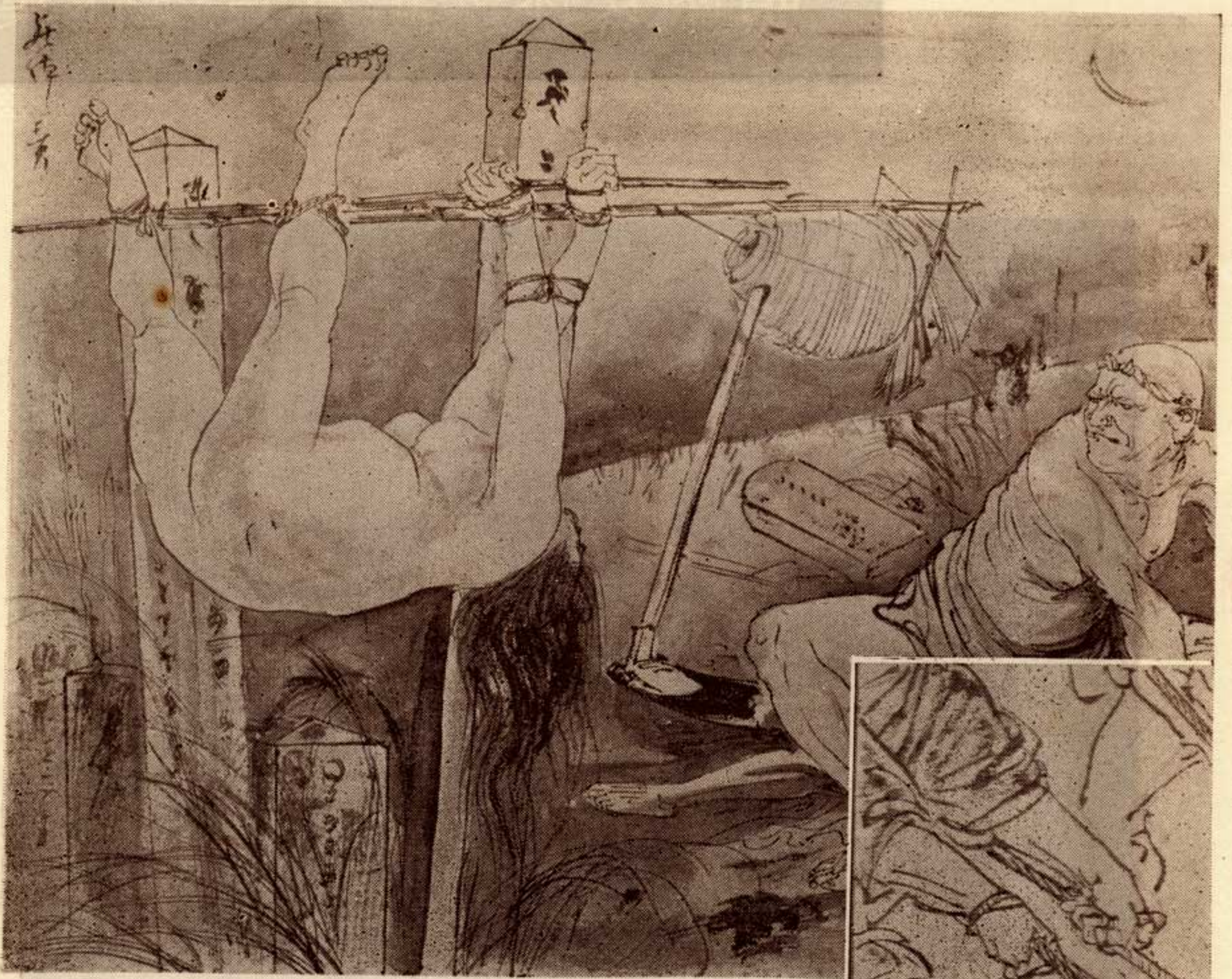
引責



晴雨責め絵名作選④ 引きずり責め



招体責



晴雨女体緊縛写真傑作集



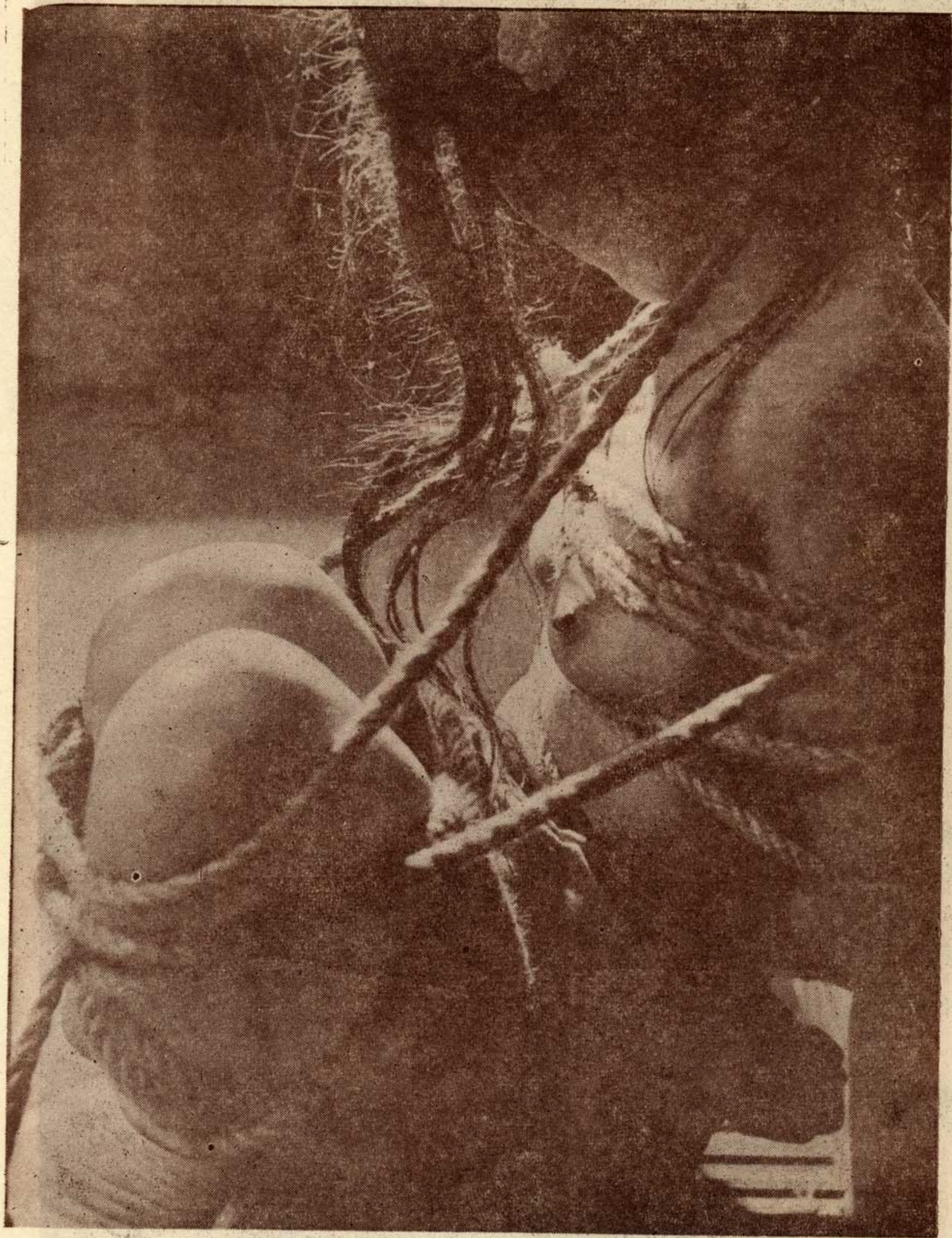
十字架にかけられた女は 受難の一つのポーズ
だ 髪が乱れ 胸はあえぎ 宿運の時が流れる





ハダカの肌に荒縄がくいこみ 責めの潮
どきが盛り上がる 嗜虐の昇華する一瞬



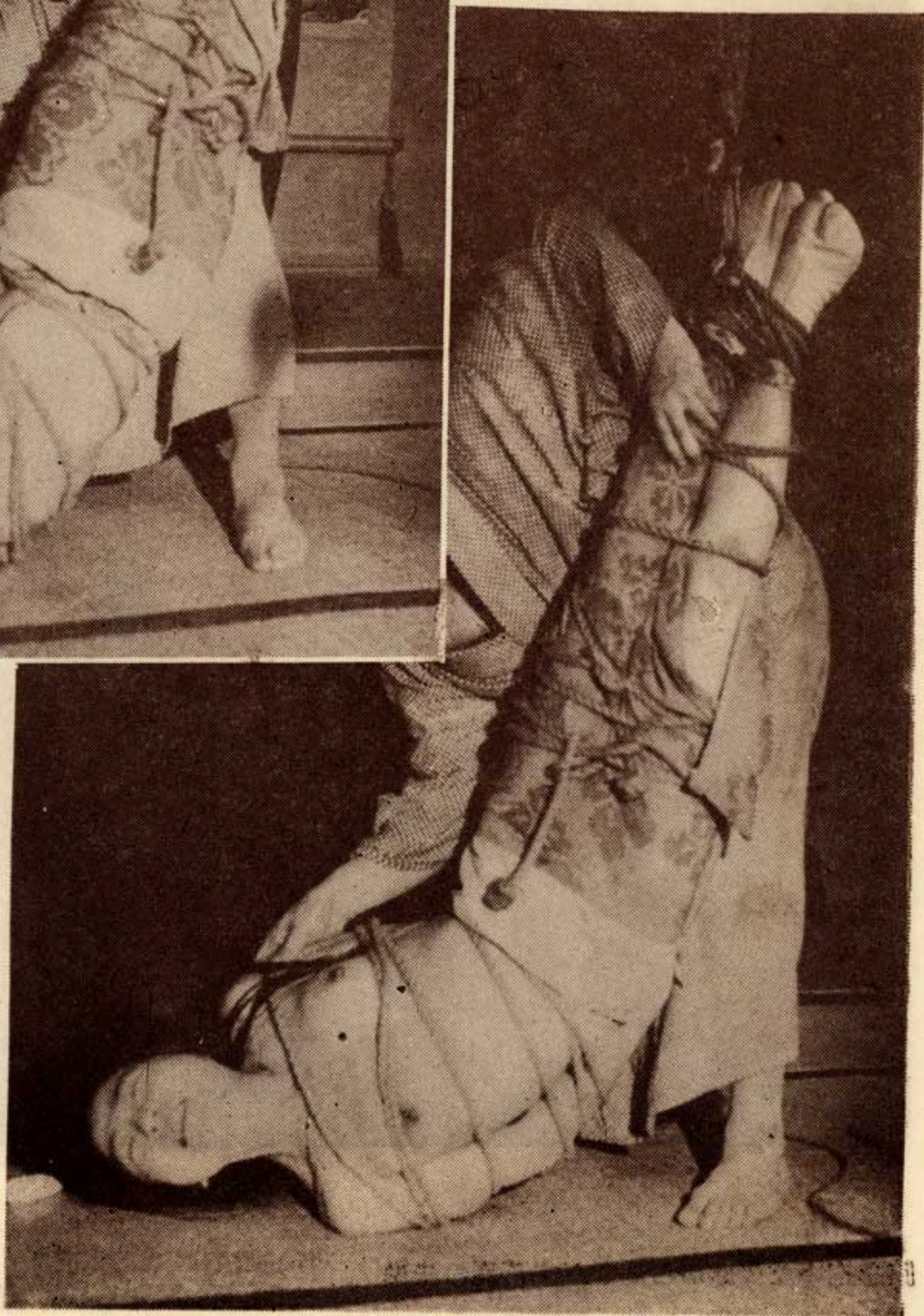
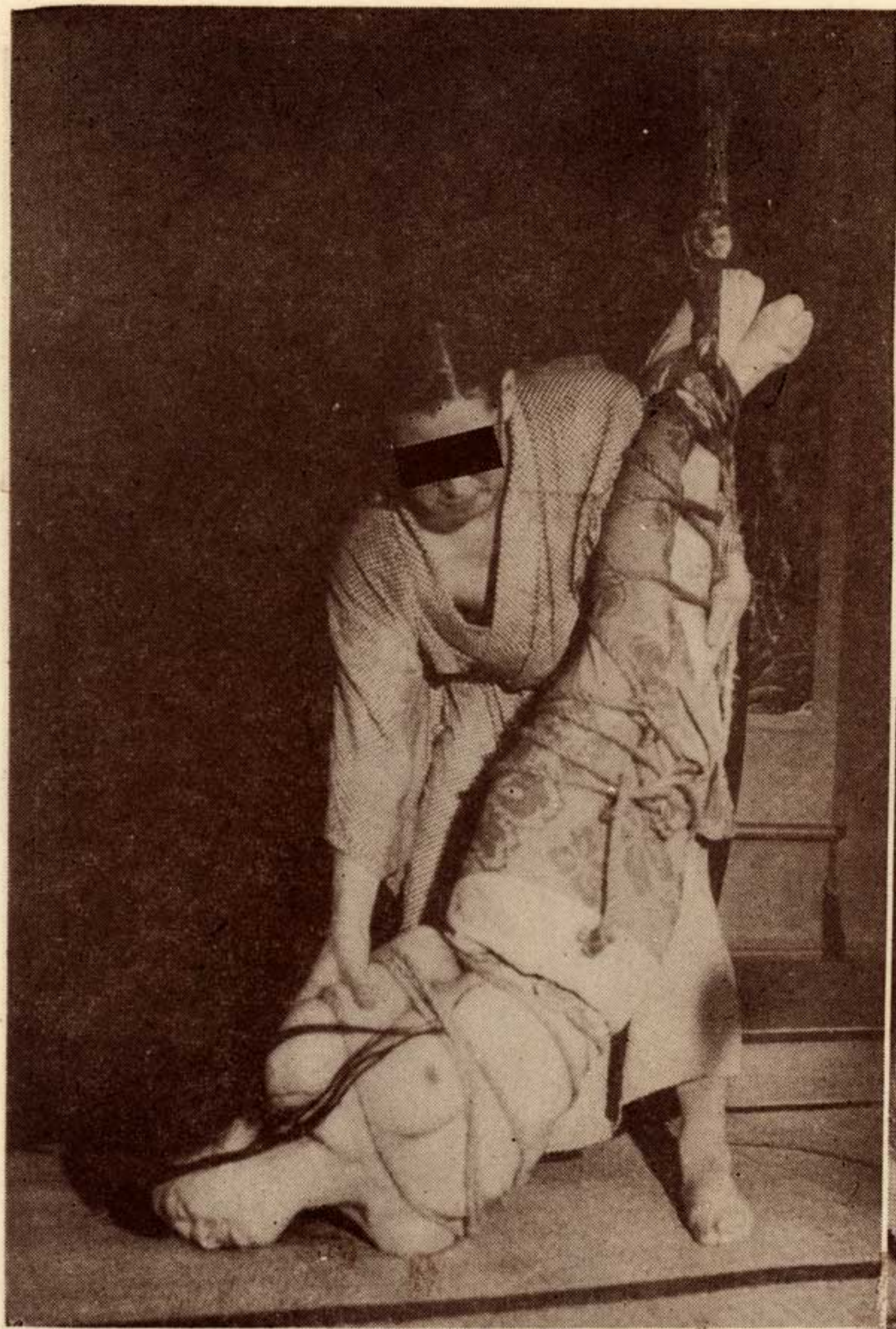


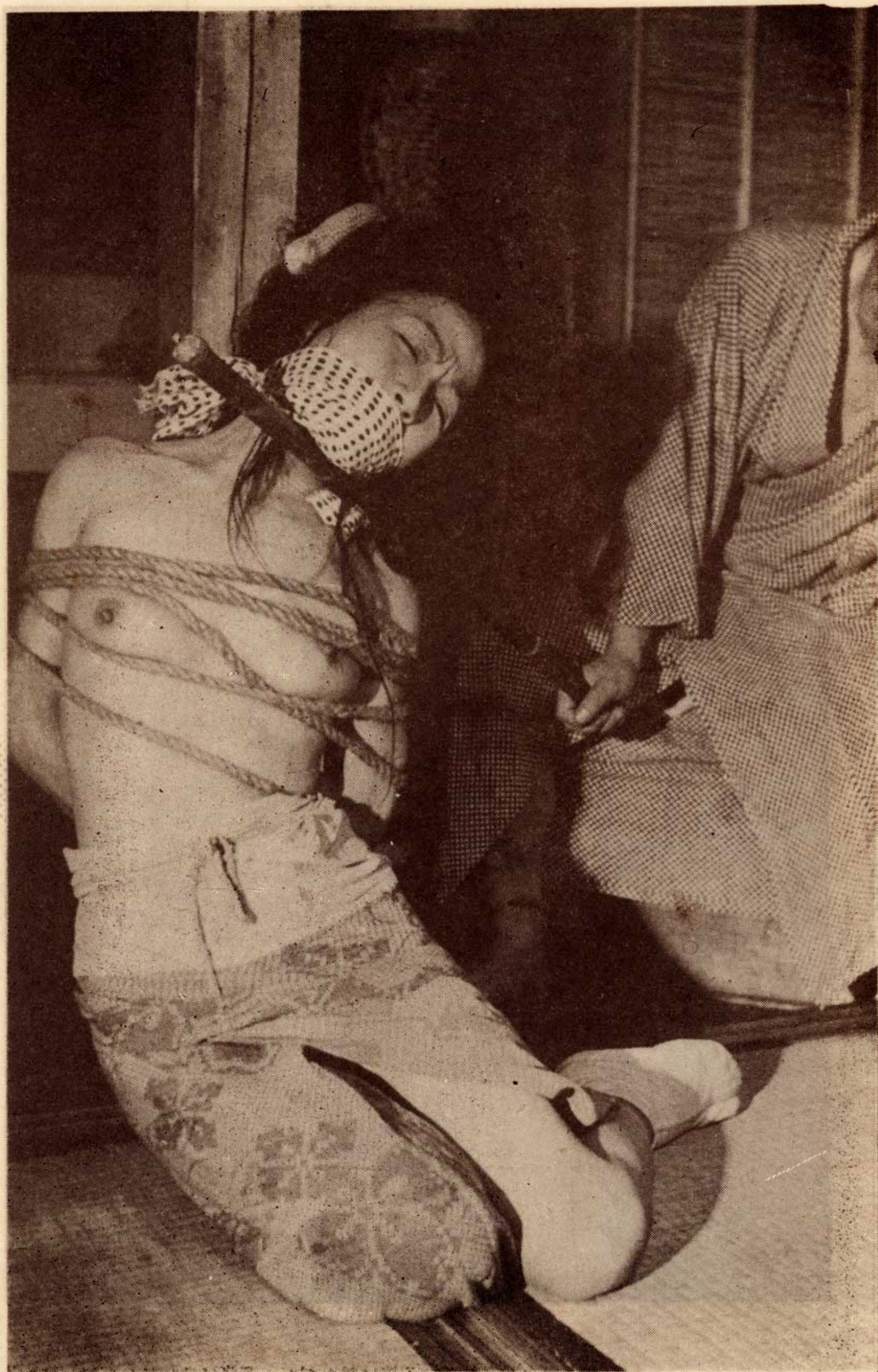
太い麻縄の緊縛から生まれ出る悦虐の陶醉



膝を抱いた姿態から湧きだす苦痛の法悦

ぐるぐる巻きにされて 足くびでグッと
吊られ これから本格的な責めが始まる







ブラリと吊られている姿は静かだが 苦痛はじわじわと増していく

譚奇俗風

12月号

特集 伊藤晴雨の人と作品

責め絵・責め写真の世界において、「晴雨のまえに晴雨なく、晴雨のあとに晴雨なし」と言われるくらい、伊藤晴雨の業績は、質においても、量においても、一頭地を抜いて偉大であり、膨大である。

だが、晴雨の歩んで来た道は、決して、平坦なものではなく、容易なものではなかった。女の真の凄絶の美を探究するという芸術的な立場を理解しえなかった当時の官憲によって弾圧を加えられたこともあったし、モデルさがしに足を棒にして徒勞の月日をむなしく過ごしたこともあった。

しかし、いつの時代にも、晴雨を理解し、支持するものは少なくなかった。そういうひとびとに支えられたとしても、とにかく六十年に及ぶその画業は、サンとして光輝を放っている。晴雨の、あくなき芸術欲求と、不屈の精神力なくしては、とうていなし得ないところであつたろう。そこに、晴雨の業績の屹立するヒミツがあるのだ。

ここに、伊藤晴雨の絵と写真を特集した。いずれも、円熟の境地に達した時代の作品で、逸品中の逸品を集めえたことを喜ぶ。しかも、広く世に問われることなく、一部のあいだに秘蔵されていたものである。恐らく、晴雨の作品を一挙に収録して発表した嚆矢であろう。だが、晴雨の人となり、エピソードを伝えるに、いささか手薄の観をまぬかれなかったのは、短時日のあいだの仕事としても心残りであったが、これは近い将来における第二弾に期していただきたい。

伊藤晴雨さんのプロフィール

江 古 田 八 朗

怪奇的微笑の彼

ぼくがはじめて伊藤晴雨さんに会ったのは、昭和何年ごろだったかハッキリとは覚えていないが、だいぶ昔のこと、ぼくが二十七、八のカゲダシ記者時代であった。

晴雨さんはそのころ四十八、九にもなっていたのだろうか、責め絵画家として、また風俗研究家として、すでに名を成しており、駒込千駄木町の交番で、晴雨さんの家をきくと、巡査は知りすぎるほど知っているという顔で教えてくれた。

夏のことで、玄関をはいったすぐの茶の間らしい座敷に、晴雨さんはゆかたの双肌ぬぎになっていた。ぼくは一目みるなり、その浅黒い、筋骨逞しいからだつきといい、いまにもかみついて来そうな野獸的な顔つきといい、なるほど責め絵画家、責めの実践家らしいと、感心した。

晴雨さんのわきに、やはりゆかたがけの奥さんが、言葉少なにすわっていた。

たしか三度目の奥さんで、色白の細っそりとした、弱々しい感じの、いかにも晴雨好みの人であった。

「あなたは、玉の井に、淫売屋が何軒あるか、正確に知ってますかね？」

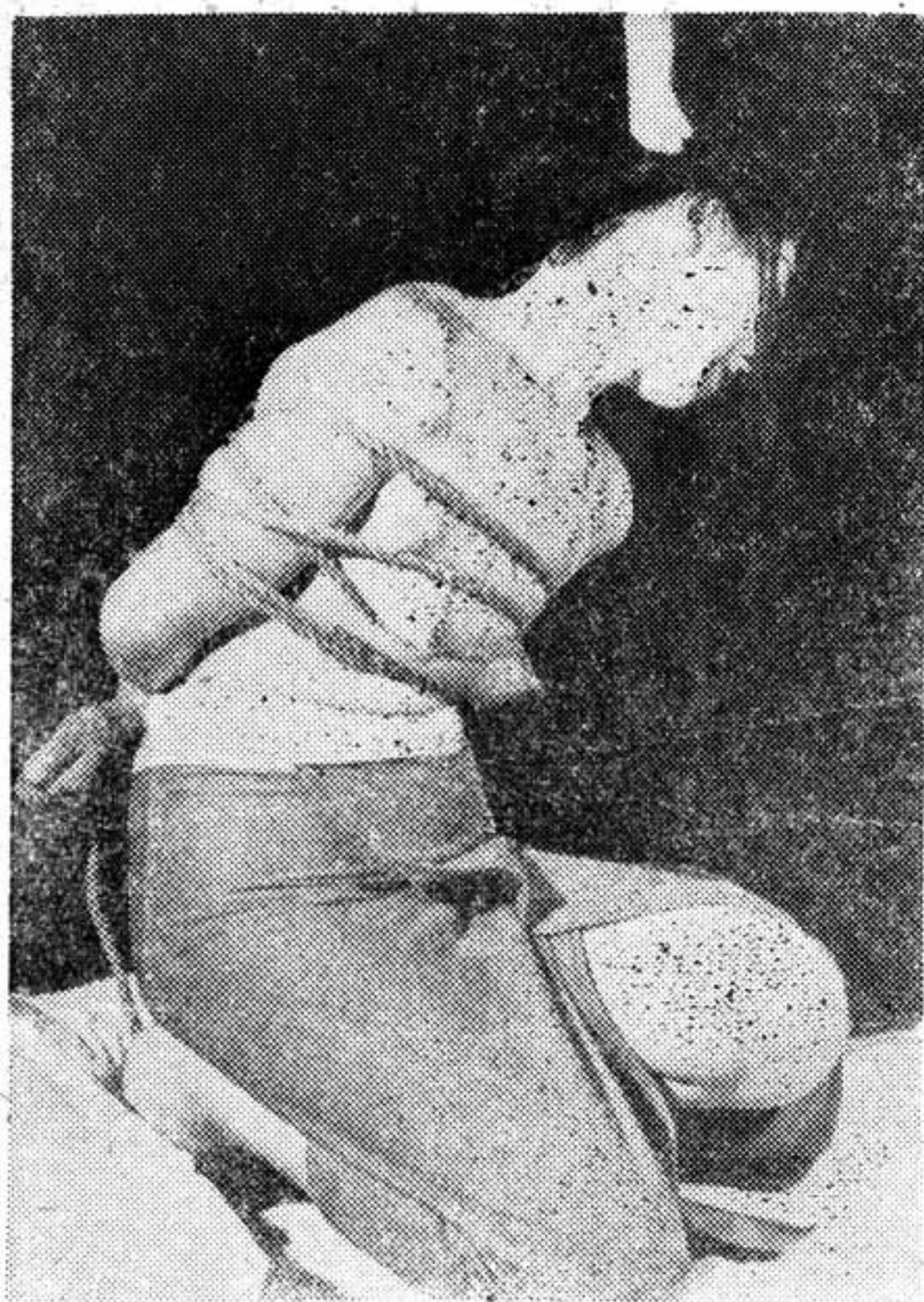
晴雨さんが開口一番、青二才のぼくを脅やかすように言い放った言葉は、こうであった。

「知りません。ぼくには置き屋の数なんか、どうでもいいんです。しかし、あすこの女のアスこの番付なら、いつでも作れます」

こうぼくが答えると、晴雨さんは口をゆがめて、イッヒッヒッと笑った。

あの怪奇的な感じの晴雨さんの笑いかたは、七十有余歳の今でも、すこしもかわりない。

そのころ晴雨さんは、出版物法違反のカドで、警察から未決までもっていかれ、ようやく釈放となったまもなくのことだったので、そのときの珍談奇談やら、責め絵のモデルの話、男色の話など、得意中の得意の談義を、口角洩をとばしながら、いろいろとぼくに話してくれた。



伊藤晴雨作の責め写真

責め絵における彼

晴雨さんが、いわゆる「責め絵」に興味をもちはじめたのは、すでに二十歳前後のころからである。美しい女体の残虐美——それに芸術欲をそそられたのだ。もとより、そこにサディスチックな欲求がともなっていたことは、いうまでもあるまい。

そして、それから五十有余年、その責め絵のモデルさがしが、延延としてつづけられて来たのである。

まず、奥さんをモデルにした。そのころ、晴雨さんは、自分の家

の天井を改造して、横に太い丸太ン棒を架け、細ひもで縛りあげた奥さんを、それに逆さ吊りにするのだ。

もちろん、最愛の夫人のことだから、注意に注意を重ねてやるのだが、夫人の「協力」なしにはできないことだ。その意味では、三度目の奥さんは、理想的の人であつたらしい。

また、あるときは「雪責め」の絵をかくために、高手小手に縛った奥さんを、積雪のなかによこたえて、写真を撮った。

やがて、奥さんだけではものたりなくなると、モデル屋として昔から有名な、上野谷中の「宮崎」に足をはこび、あるいは、東京中の安カフェーをシラミつぶしに歩きまわって、モデルになるような女給をさがした。また、知るかぎりの芝居の女優を当たつてもみた。

浅草オペラはなやかなりしころの歌劇女優であり、また当時を震撼させた大岡山五人殺し事件のとき、一人だけ助かったことでも知られている中山歌子も、晴雨さんのモデルになったことのある一人だ。

晴雨さんのモデルには、条件がある。それは、純日本的な容姿の、若く美しい女でなければならないということだ。なぜかという、彼は、責め場の女をかくとき、かならず、モデルに島田まげを結わせる。島田まげの女がもっともよく残虐美の感じが出るのだ。彼は、モデルを島田まげにゆわせたうえ、氣にいったようにいろいろとモデルを崩し、壊して、研究するのである。

晴雨さんはまた、芝居の女形をも責め場のモデルにすることを好んだ。彼にいわせると、女形の美は、真正の女よ

りも美しい場合があり、それは、プロポーション（均斉）の美と、襟足の美しさ——つまり、カツラのクッキリとした美しさにあるというものである。

盟友であった沢田正二郎の死後、晴雨さんはドサ回りの一座を組織して、「八百屋お七」の火あぶりや、「紅皿欠皿」の焼き直しなどの女の責め場を、美しい娘形に演じさせる脚本を自分の手で作り、そうした芝居を演ってまわっては、その場面をスケッチした。また、曾我廼家五郎一座の女形・秀蝶なども、大いに晴雨さんの芸術的食指をうごかしたが、これは、五郎からことわられたという。五郎は、自分の男色の愛人である秀蝶を、晴雨さんにとられると感違いしたらしい。

男色宗としての彼

晴雨さんが、かなり高度の男色宗であることは、あまり人に知られていない。

これは、晴雨さん生来のものか、あるいは親友・曾我廼家五郎の男色好きの影響を受けたものか、どちらかは知らないが、みずから堂々と広言しているように、相当の実践家であり、そしてまた、ソドムについては一家言をもっている。

経験談としては、こんな話がある——

晴雨さんが動坂にいた三十四歳のときのこと、近所に十二歳の可愛らしい男の子がいて、晴雨さんによくなついていた。

ある日、晴雨さんは、自分の関係している浅草の劇場の楽屋へ、その少年を連れていった。すると、一人の女優がその少年の美しさ

にみとれてしまい、あげくに、

「お化粧したらもっと奇麗になるわ」

と少年を化粧前（鏡）につれて行って、べに・おしろいをぬり、娘形のカツラをかぶせ、女のきものをきせてやった。

ところが、そのときの少年の喜びようといったらなかった。

晴雨さんは面白くなって、少年を女姿のまま、近くの「ちんや」（牛肉屋）へつれていった。すると酌に来た女中が、少年を一目見るや、「まあ、きれいなおねえちゃんですこと！」

と、ほんとうの十六、七の娘とまちがえ、感嘆した。

その後のある日、晴雨さんは、この少年と二人で物干しへ上って話しているとき、どちらから誘うともなく歓をまじえてしまったという。そのころの動坂は人通りがすくなかったのである。

男色好きといっても、晴雨さんはペデ（男型）のほうだから、女っぽい相手がいいたい。彼のいうところでは、芝居の女形は大半がこのケがあるとのことだ。そして、シロウトとくらべて、やはり役者が巧みだといっている。

おしろいをつけ、女の着物をきる。衣装をまくっても、ぷーんとおしろいのおいがし、カツラのびんつけ油のおいがすると、もう、矢もたてもたまらなく、ぐーっとエキサイトさせられるという。それは、ルッキングも女以上、感覚度も女よりよいと語る晴雨さんである。

晴雨さんの男色欲は、いまだに衰退しないらしく、つい三、四年前のこと、ぼくがゲイ・バア「湯島」を訪ねたとき、この店の女装の「ママさん」市蝶は、なにかの話にふれて、

「晴雨先生もよくごひいきにしてくださいのはありがたいんですけ

れど、ときどき私に妙なことをおっしゃるンでね……おれと遊ばないかと本気な顔でいうンですの」と洩らしていた。

小児のままの彼

晴雨さんには以上のほかにも、さまざまなアブチックな面がある。

学者の言うところからこれを考えれば、晴雨さんは、性的に小児のままで膠着^{こうちやく}しているわけだ。しかも晴雨さんは、ふつうの人なら秘にかくすべき、そうした自分の異常性的嗜好のいちいちを、むしろ得意そうに他人の前におちまける。

露出症的といえはいえるかもしれないが、それよりも、それだけに彼はいっそう小児なのだと、ぼくはいいたい。つまり、天真らんまんなのだ。彼は言っている。

晴雨さんの雪責め

宮 原 静 雄

風俗画家としての功績

伊藤晴雨さんがたおれて今年で七年目、以来、八十歳の今日まで

「へんたいの人をみわけする私どくどくの鑑定は目にある。へんたい者の目は、瞳孔がどんよりとして、目の周辺がくろずみ、そして、瞳孔が、たとえば白昼のネコの目のようだ。こういう目の人は、十中八、九へんたいとみてまちがいない」
ちやうどこの自分の目のようにといわんばかりの自虐的な調子で、こういうのだ。

あるいはそうかもしれない。そうであってもよい。ぼくのいいたいのは、それよりも、彼の風貌の怪奇さは、老人特有の狡獪^{こうかい}な怪奇さではないということだ。いうならば、小児的なそれである。

三、四年前、ぼくは何十年ぶりかで晴雨さんとふたたび会見したとき、彼の容貌にハッキリとそれを見とめた。

そしてまた、八十になんなんとする今、カクシヤクとして、精力みなぎっている感じの彼であった。

ずっと静養をつづけられているが、全国に多くのファンをもつ晴雨さんとしては、この七年間のブランクを、どんなに齒がゆい思いで過ごされてきたことだろうか。

過去、病気でたおれるまでの七十四年間のうち、すくなくも六十

年間を彩管にしたしんでこられ、明治、大正、昭和の三代にわたる晴雨さんの仕事はまさに旺盛そのものだった。

晴雨さんといえば、責めの研究家として、また刑罰画の第一人者として、誰でも知らないひとはないだろう。しかし、晴雨さん本来の仕事は、風俗画家として一家をなしたひとであり、江戸、明治、大正年代の庶民風俗を縦横に描かれてきたのである。ことに、明治末期から大正初期の東京風景風俗は、じつに正確に記憶されていて、晴雨さんの筆になる、そのころの風俗画は、年輩のひとびとにはまことに懐かしいものがある。

銀座にガス灯がつき、鉄道馬車が走った明治風俗など、私は、晴雨さんの絵によって当時を彷彿としたものである。晩年、晴雨さんの描かれた「風俗野誌」は、江戸、明治の風俗事典として最も出色のものである。

凄絶の撮影

晴雨さんが責めの研究に没頭されたのは後年のことで、私の秘蔵する写真などから想像しても、確か三十歳代からではなかったかと思う。そして、最も意欲的な絵画、写真を世間に問うようになったのは四十歳代で、そのうちでも、ことに珍重されたものは、やはり雪責めの写真であろう。

その雪責めの撮影に晴雨さんが意欲をかりたてたものは、「中将姫雪責め」とか「浦里の明烏」など、歌舞伎の雪責めの場に興味をもたれたからで、そうした責め絵画や芝居を、さらに掘り下げて現実化してみたいと思い始められたのである。

そこで晴雨さんは、三人の女性（このうち前後二人は、晴雨さんの奥さん）をモデルとして、前後十数回にわたって、大正十年から昭和五年ごろまでの十年間を、この実験についてやされたのである。その模様を、晴雨さん自身の記述されたものから抜粋すると――。

実験といっても、もちろん責められるほうも承知のうえで、写真の撮影を主にしたのであったから、拷問を目的としたものではない。だから、責めの表情という点からは、証拠が希薄になるが、雪中に裸体で縛られて雪を踏みながら、長時間、寒気にさらされているということ、もちろん私にとっても、全然、研究的なものであったことは事実である。

最初の雪責めは、自宅で行なったが、ある大雪の朝、三十センチ以上も降り積ったのを好期に、奥さんの髪を島田に結わせ、夜の明けるのを待って写真師を呼びよせた。

奥さんには酒を飲ませ、午前九時ごろから約二時間余にわたって、十四、五枚撮影した。

最初は、長襦袢一枚で雪中に埋め、シャベルで奥さんの身体に雪をかけて撮った写真は、凄絶なまでに効果的なものだった。

だんだん撮影の数を重ねてゆくうちに、奥さんの唇は痙攣を起こしてきた。唇を震わせ、目は充血して、瞳孔は一点を凝視するようになって、頬の色は、蒼いというよりは少し黒味を帯びてきた。

身体は堅くなり、縄目の食いこんだ肌は紫色になっている。庭から座敷へ上げると、足はまるで感覚がなくなっている。歩行ができないので、縄を解いて火鉢に当たらせようとすると、

「痛い」

という。凍傷状態を起こしていたのである。



伊藤晴雨作「雪責め」の写真

責めるほうが苦痛

「大丈夫かい？」

「大丈夫、まだ我慢できるわ」

「それじゃ、気がとおくなるまでやってみよう」

「ええ、いいわ」

そこで、彼女の腰のあたりに火鉢をおいて、徐々に足を暖めさせ、ふたたび庭に引きだして撮影を続行したのであるが、いま気絶するか、今たおれるかと、ハラハラしながらレンズを覗いているので、気疲れすることはなはだしく、責められるほうより、責めるほうが苦痛なことを、このときはじめて知ったのである。

だんだん時間がたつにつれて、奥さんは無表情になる。決して、芝居の舞台などにみるような、艶も美しさもない。

責めの時間がなくなるほど、女の表情に苦痛の色が深くなってゆくと思うのは一般のひとの想像であって、雪責めの場合は、寒さに負けまいという意識がだんだん強くなってくるので、身体を硬直して、女性特有の柔軟さがなくなり、男性的な荒削りになって内輪に踏んだ足が外輪になってくるので、絵画美はだんだん失われてゆくのである――。

この晴雨さんの真摯な実験態度には、ただ頭が下がるばかりだが、それにしても、こういう実験記録を、今後ふたたび見ることをできないのはさびしい。

終わりに、晴雨さんの一日も早く全快されることを祈り、ふたたび健筆を揮われる日を期待したいものである。

ヒストの手紙から⑥

—— マゾ・フェティストの往復書簡 ——

谷 貫 太

ずいぶんたくさんの手紙のなかから、この往復書簡をぬき出すのは、大変な仕事でした。というのは、この手紙は、一九四六年から始まり、一九五七年までつづいたからです。しかも、この二人——といっても、女性からは大変に少ないのですが——の手紙の量が大変なのです。全部で九十一通、そのうち、ハガキは二通、あとは全部封書で、そのうえ、たいていは九枚十枚と便箋にぎっしり書かれているのですから。

私は、自分が、この男性と似た傾向を持っているので、とくに印象に残っていました。これはもはや、変態性欲の充足のための手紙というよりは、二つの魂の愛の歴史でもあります。そして、この手紙のなかには、間接的に、神や人生が語られ、マゾ・フェティスト特有のもう一つの宇宙が、雄弁に説きつくされています。話題は、

舞踊から、演劇、音楽、文学とはしり、ついには、宗教や哲学にまで及びます。

その到達した、まれに見る孤高の境地のなかで、この男性は、胸を侵されて逝きました。

私は、生前、この男の人から、手紙の全部——厳密にいうと、最後の部分の四、五通は女性の手にゆきっ放しで、見ることはできませんが——の発表を、条件を付して許されています。

この、ささやかな欄で、この、ある意味では偉大でさえあったマゾ・フェティストの全容を紹介することは不可能です。しかし私は、できるだけ簡単に、できるだけひろく、その内容を、紹介したいと思います。

男性は大野君一（昭和元年生まれ）、女性は大野好子（昭和八年生まれ）とします。

君は僕の永遠の支配者

——一九四七年二月三日発 男性より

僕とあなたと知りあって、もう一年になる。そのあいだに、いろいろなことが起こった。僕は職を変え、学生であった君は職業を持つようになった。きっと、町をゆく僕たちの姿を見て、人たちは、恋人同士が歩いていると思うだろう。でも、僕たちは、恋人ではない。その意味を、君はよくわかってくれると思う。きっと、いまに、僕たちの日本にも、ふつうの生活が訪れるに違いない。そのときに、思い出ししてみよう。この焼け跡の貧しい町で、僕と君とが、どんな奇妙な友情に支えられていたかを。



マゾ

奇妙な友情、と僕は書いた。
これは、よい言葉だと思う。性を
まじえた友情、それは、昔、
遊牧民族が、放牧の旅に出て、
家畜の群れに対して感じた感情
と同じものだと、僕は思う。
美しい星空の下をゆき、冷た

い、激しい嵐の下をくぐり、人と獣とは同じ道を歩んでゆくが、その
目的地に待っているものは、飼主にはいくらかの黄金、家畜には貧
しい食糧の数日と屠殺者の鈍い刃とだ、ということ。これは、マゾヒ
ズムの詩的な発想の原型になるように思う。

僕は、たとえ、屠殺者の刃に至る道であっても、君の友情と、時に
は励ましの鞭によって、君とともに歩むことを望んでいる。

僕は、自分の才能や能力について、いまだに、人に劣る、と思った
ことはない。そして、君が、僕よりまさる才能があるとも思っていな
い。それでも、いいや、だからこそ、僕は、君の膝下にひざまずき、
脚やつま先に唇をつけ、靴の裏をなめさせられることを好むのだとも
いえよう。

君は、また、とくに美人ではないのだが、そのような瞬間に、また
とない美しさを見せてくれる。僕はきくと、君に、そのときに、美の
女神がのりうつったのだと思う。そう信じている。だから、その瞬間
に、君は永遠の支配者となっている。それだからこそ、この動物は、
君の無表情な鞭の下に平伏するのだと思っている。

いつか、僕は君に話したことがあると思う。吉原の娼婦に虐められて
らった日のことを。だが、僕には、その、存外美しい娼婦が、決して
女神でも、主人でも、いや、友達であると思えなかった。表情た
っぷりにふるう鞭は、かえって苦痛だけしか僕に感じさせなかった。
僕は、二度と、同じ考えを持たなかった。

古くから、たくさんマゾヒストが、たとえばソクラテスのよう
に、たとえばアルキメデスのように、娼婦や、それに準ずるような女
に、虐待をうけて満足したというのだけれども、僕には、理解できな

い。何か、波長の合わない、というより、合わすことのできないものを感じるからだ。

ずいぶん長たらく、むずかしいことを書いてしまった。でも、君は、ある程度理解してくれよう。

長い黒と赤の網の目のタイツがほしい、と君は言っていたね。それを、僕は手に入れることができた。進駐軍——なんてわずらわしい言葉だろう。占領軍と同じじゃないか——に出入りしているストリッパ——たちの取り仕切りをやっている同級生に頼んだら、きょう持って来てくれたのだよ。彼の話では、進駐軍の婦人兵ばかりのフロアで、日本のストリッパたちは、全裸で踊らされるのだそうだよ。あるいは君も知っているかも知れないけれど。

そのときに、婦人のなかから、フロアに踊り出て来て、全裸のストリッパとダンスするのがいるそうだよ。なんでも、粗いヴェネツシヤンの軍服を着たままの婦人兵に、しっかり抱かれて踊っているうちに、あられもなく欲情をまるだしにする女の子もいるそうだよ。

婦人兵のなかには、寢室用のゴムの鞭をいつも持っているものもあるそうだよ。それをも、頼んでおいた。

ともかく、タイツが、今、ここに、手もとにある。僕は、それを、電灯にすかして見たら、君が、その美しい長い脚に、これをはいたときの容姿を考えている。赤いほうが、きつと君に合うのではないかと思う。今度来るときには、ぜひとも、新しい、ヒールの高い靴をはいて来てもらいたい。でも、なるべく飾りがなく、単純な形のをさがしてはいて来てほしい。

では、また水曜日の午後、いつものところで待っている。君も、時

おりは、手紙ぐらい書いておくってくれたまえ。

妄想を逞しくしながら 午前三時

二月三日

好子さま

君一

僕は君に騎ってもらいたい

次は、少しとんで、一九四九年十一月十二日に、やはり、大野君が、安藤さんに出したものです。これには、かなり具体的な内容が見られますから、ここに掲げます。

——君が、進駐軍——いつもながらいやな言葉だ——の踊り子になったということを知りて、びっくりした。なんで、そんなことをしないでほならないのか。どうも、よくわからない気がしてならない。あるいは、僕に飽きて、外人兵に興味に移ったのではないかと、嫉妬心がわいてくるくらいだよ。

それは、ともかくとして、こんどの日曜日には、久しぶりで、二人で遠乗りをしないか？ それも、御殿場から奥の、ずっと人気のないほうに。

ぼくは、そこで、君に騎ってもらいたいと思ってるんだよ。

まず、一番始めに、僕が、馬から下りて、着物を脱ぐ。君は、僕の馬のくつわのなかから、小鞆をのこして、大鞆を僕にはめるんだ。そのときのための皮紐は持ってゆく。

それから、競馬の鞍を持ってゆくから、君は、その腹帯を、僕の腹

に二度巻いて、鞍をのせるのだよ。すると、珍妙な、小さな馬ができ上がる。

君は、いままで馬にのっていたのと同じ服装で、またがり、拍車で蹴り、靴で圧迫し、叱り、励まし、そして鞭で打つのだ。

もっとよい方法があるかも知れない。しかし、君が僕に乗馬を教えたときから、君が本当は、何に乗りたかはおわかっていたつもりだよ。きつと、本当の馬はびっくりして、その、珍しく、おかしい光景を見ているだろうよ。

僕の発案に、君の返事がほしい。ぜひともすぐ、この案に返事をくれ給え。

では、とりあえず、思いつくままに。

十一月十四日夜

君 一

好子様

これが私の考えた遊びよ

これに対する好子さんの返事。これは、十一月十七日に送られています。

——お手紙よみました。あなたの案は大変面白いけれど、山の中では、ちょっと無理でしょう。わたくしは、もう一つ、もっとあなたが恥ずかしい思いをする遊びを考えましたのよ。あなたの手紙をよみながら、ふと、進駐軍の婦人兵が言っていたことを思い出したのよ。彼女たちは、私を送ってくれる車のなかで、こう言ったわ。

「もっと面白いショウをやってみせない、お金でも煙草でも何でも払うから。もっとはげしいお色気のあるショウよ。たとえば、男を鞭で打ちめすとか、男女ともに裸でシロクロをやらせながら、皆でからかうとか、何かあるでしょう？」

って。

だから、わたしは、こんなことを考えたの。彼女たちに、必要な衣装を出してもらって、ビロードの水着と、長い皮手袋と、エナメル皮の長靴、それも、サーカスで使うようなのを、作ってもらうのよ。それから、ロウハイドっていうの？ あ、長い牛追い鞭を一本と、丸いメートルぐらいの輪も作ってもらうのよ。これは、私がつかうの。あなたは、そうね、何もいらないわ。いいえ、何もつくって上げないわ。生まれたままの姿で演るのよ。

まず、わたしが、レコードの行進曲に乗って、舞台に出て来るのよ。彼女たちはかたずをのんでるわ。あなたは、犬の首輪、っていうのも、ブルドックのするような、胸のところから何重にもなっているのをはめられて、太い皮紐でつながれた格好で、私に引き出されるわ。

彼女たちの笑い声がきつと、そちら、こちらからとんで来るわ。

私は言うの。

「これは、人間の形をしていますが、本当は犬なんです。時によっては、馬にもなります。怒らせると、虎にもなります。私がこれから、仕込んだ芸をお見せします」

私は、長い鞭をビューウッとならして、あなたを台の上に追い上げる。まず、逆立ちよ。一番始めは頭を台につけたままの三点立ちというの。次は顔を上げて……。

きっと失敗するわ。それでいいのよ。失敗しなくては、鞭で打ってはおかしいでしょう。

一打ちごとに、あなたの身体に赤い縞模様がついてゆくのが、目に浮かんで来るわ。

やっと逆立ちができれば、次は、輪をとびぬけるのよ。これはむずかしいわ。けれど、やるのよ！ やらせるわ！ 叩き込んであげる。でも、きっと、そのころは、あなたは、じゅうぶん興奮しているでしょう。ほんとうにみっともないけれど、畜生だから仕方がないわ。

その次は、ぐるぐると走るのよ。足音をたてないように。つま先だけで駆けるのよ。でも、きっと、あなたは、ときどきは、疲れて足音をたてるでしょう。

わたしの考えついた遊びの全部が、こういうぐあいには、だいたいはできるけれど、そのままやりつづけることのむずかしいことなのです。その一番おしまいに、私は、考えられる一番みっともない芸を考えつきます。

あなたは、中央に立って、ひざのあいだに、ピンポンの球をはさむのよ。そして、婦人兵の前で、その視線と照明とを浴びながら、女性だけの世界では、決して見ることでできないこと、つまり、オナニーを演じてみせるのよ。

もし、わたくしがあなたの恋人であったとしたら、決して、こんなことは考えつかなかったにちがいません。でも、私には、この手紙があなたに伝える効果を想像して、ひとり笑いがこみ上げてくるのです。わたくしは、そんな女なのです。

いつか、あなたは、私に、恋人ではない友情ということを書いて

きましたね。この気持ち、きっと、それなのでしょう。

では、この新しい計画が、一日も早く実現するように祈りながら。

君 一様

好 子

厳しい処罰を受けるつもりだ

このように、大野君の授じた一つの計画は、好子さんによって、早くも、別の形に変型してゆきます。もちろん、この種の手紙にあらがちなように、この手紙の内容は、必ずしも、事実そのままに立脚しているとは思えませんが、でも、その夢は、いつも具体性を持って、実現の可能性をたたえているのです。このような点は、ふつうのこの種の手紙が、多くの場合に、とびはなれた夢をだけ、述べつづけているのと、よい対照です。

そうして、大野君たちが、しきりと、「恋人ではない」とくりかえしているにもかかわらず、文章の心底には、あきらかに、大きな相互の信頼感がみられます。

では次に、二人の嗜好が、もっとも直接的になっていった時代、つまり一九五五年の七月八日に、大野君が好子さんに出した手紙を、全文ではなく、約半分ほど紹介しましょう。これは、その年の三月から六月まで、二人が離れ離れになっていた直後に出された第一信です。

——どんなに、僕が、ひとりでいるということの苦しさに責められ

つづけていたか、おそらく、君もわかってくださると思う。

もし、あなたが、遠い町で、このまま別れ放しになってしまったら、と思うと、本当に胸がふさがる思いだった。

けれど、今、電信をうけとって、いまさらながらのように、君が近くに戻って来ているのだ、と自分に言い聞かせる。

どうも、恋ではない、特別な形で友情と肉体の関係だと、何遍も何遍も言いながら、結局、恋に陥ちてしまったようだ。恋愛などという、そんなありふれた気持ちではない、と思ひながらも。

そこで、この三月から、昨日まで、僕が体験したことを知らせておこうと思う。

四月の初めまでは、なんだかだと、忙しくて、つい寂しさもまぎれていたのだが、四月も中旬になると、いても立ってもいられない気持ちになって来た。というのは、周囲は、春の陽のもとで、楽しげなカッブルが目立ちはじめたし、それに、三月以来、僕は、一切の排出の機会を持つことができなかったのだから、神経がいらだったり、淫夢というか、変な夢をみて、つい粗相してしまったりの日がつづいたのだから。

でも僕は、自分のそういう面までも、目に見えないあなたの支配がつづいていると考えていた。もちろん、今だって、そうなのだけれども。

一年ほど前、ある友人のところへ、オーストリアだかドイツだかの諷刺画を見たことがある。それには、題して、「腸詰めの献呈式」とあり、雄大な、そうして、えも言われぬ珍妙な型の腸詰めを一本、大きな金色の盆に載せ、高官貴紳立ち並ぶなかを、三人の竜騎兵が、そ

の盆を捧げ持ち、女皇陛下の玉座のほうに運ぶ光景が描かれていた。その玉座の裾のほうに直立して、若い農場主らしい逞しい男が、胸を張り、緊張した面持ちで、運ばれてくる大きな腸詰めを、じっと見つめている。

その、格式ばった様子と、得意の表情とは、自分の誇る腸詰め、それはきっと、自分の牧場にいた巨大な牛の腸で作ったものなのだろう。その腸詰めを、尊敬する女皇陛下の舌先の味わいに献上する、榮譽と感激とが、みちみちていた。

ちょうど、その農夫のように、僕は、この誇るべき腸詰めを、あなたの支配にまかせてしまった。だから、僕は、自分の意志だけで、そのものをどうすることもできないのだと、自分で思っているのだ。

ところが、その決心、いや、信仰にも似た気持ちにも、ちょっとしたゆらぎがあったのだと思う。

本当にすまないことなのだけれども、僕は、ある女性と、性的交渉を持ってしまったのだ。その女性に対して、僕は、愛情も何も感じてはいない。ただ、欲情のおもむくままに、僕は、あなたからの預かりものを使ってしまったのだ。

だから、一番初めに書いたように、ただ、単なる寂しさだけでなく、僕は、一種のおびえにも似た怖れをもって、あなたの帰って来るのを待っていたのだ。

僕は、決して、許してくださいとはいえないと心にきめているのだよ。むしろ、あなたの激しく、きびしい処罰を、うけるつもりでいるのだ。

おそれ、おののきながら、足もとにひれ伏す者に対しても、恐らく、

あなたの処刑の方法は変わらぬことだろうし、痛みが少なくなるわけでもあるまいと、思うには思っているのだけれど。やはり、怖いことは怖いのだ。

ザッヒヤー・マゾッホがしたように、自分の身体を責めさいなむ道具を、自分で用意するほどの勇氣も、アルブラグニイも、僕は持ち合わせていないのだと覚った。

どんな処罰でもいい、あなたの思う通りにやってよいから、前もって、その方法をおしえておくれ。

関係は一回だけだった。お互いに少々醜態（みにくさ）を呈（ひ）して、いたときのことだった。相手の女性は、



二十二、三歳、中肉中背の、僕の好みでないタイプなのに。

もう、このことはつづけて書くまい。

(一九五五年七月八日発) —— 以下略 ——

牛や馬と同じじゃないか

その返事は、四日たって投函されたようです。女性の手紙として、このようにはげしい言葉を連ねた例は、あまりありません。

ともかく、あまり長いものではありませんから、全文をここに掲げます。

——私は、こんな侮辱を与えられたことは、いままで、ただの一度だってないわ。

豚、犬、牛馬同然とは、きっとお前のような奴のことを言うのだわ。お仕置きなんていう、なまやさしいものではすませないから、覚悟していなさい。

それに第一、相手になった牝犬（めいけん）は、どこの誰なのか、一つもわからないの？

その牝を、今度の日曜日の午後、だまして連れておいで。必ず連れて来るんだよ。

そして、帰るときまでに、二人とも、どんな目にあうかは、いま考えてみるだけでも楽しいわ。

でも、殺しはしない。二人とも、どんな恥ずかしめに会っても、死ぬこともできないようにしてやるから。

今度の日曜日には、時間におくれたりしたら、それこそひどいよ。覚えておいで。(一九五五年七月十三日発)

あたしが課したお仕置き

次の日曜日、残念ながら、その時の往復書状は、実に簡単なものです。次の時日の取りきめとか、持参する物品の指定——それも、大したものではないのです。全部、遊びと無関係のものです。

私は、この日曜日の午後について、詳しく知りたいと思いましたが。サディスティンの復讐とは、いったいどのようなものなのか。そして、それによって、被害者はどのように苦しめられるのか、それを知りたかったのです。

幸いにして、私は、安藤好子さんの現住所を知っていましたので、ようやくのことでお目に掛かることができ、お話を伺うことができました。そして、安藤さんは、その話の要点を、次に記すように、かいつまんで書いて来てくださいました。

——その日、私は、ずいぶんいろいろなものを用意いたしました。まず、何種類かのサポテン、写真機、照明用具、馬具屋まで行って買って来た一メートル以上もある鍔皮を二本、竹の地下茎で作った笞、むかし軍隊で使った砲兵用皮鞭、ペンキ、羽布団の古くなったのを一つ、あと、いろいろと集めたように思いますが、今はよく覚えていま

せん。

時刻のちょうど五分ぐらい前に、君一さんと、女がやって来ました。女には、ただ、自分の友達の家にくこうと言ってつれて来たらしく、女は明るい表情でした。

幸い、私の宅は、祖父の書齋が空き部屋になっており、いつもそこで遊びをしていましたし、嚴重に扉を締めてしまえば、めったには音の洩れることもない部屋でしたから、そこを使うことにしました。

君一さんは、ちょっと怖がっていましたが、私がつとめて上機嫌にしていまして、気を許したのでしょう。

そのうちに、私から、女を縛り上げた絵などを見せて、話をそのほうに持ってゆきました。

やがて、私は、縛っても、自分ですぐに解くことのできる縛り方があると言いますと、女は、

「どんなふうにですか？」

と興味を示しましたので、あとで教えて上げるからと気をもたせて、二人にお風呂をすすめました。あたかも、二人が恋人同士であるようにしてやったのです。

それに、一緒に入れば、必ず男が先に上がってくるというのは、私の家でも、父や兄たちがとても早く上がって来るので、よく知っていました。

二人が入ってしまうと、私は、そっと足音を忍ばせて、脱衣室にゆき、二人の衣類を全部、私の部屋に運んでしまいました。上がって来た君一さんに、私は、

「これから、お仕置きをするから覚悟しておいで」と、ちょっと凄味のある声で冷たく言いました。

私は、彼を裸のまま、うしろ手に縛り上げて、部屋のなかに転がしました。

そのままほっておいて、私は、男女二人を責めるのにちょうどよい服装と思い、細い黒のスラックス——といっても、バレエを習ったときの練習用タイツですが——をはき、トックリの薄手のセーターをきました。

足には、スリッパではうごきが鈍いので、脚にピッタリした乗馬用長靴をピッタリとはきました。手には、鞭より痛いという、鍍皮のビジョウのほうを先端にして握りしめ、ドカドカと浴場にゆき、ガラリッと戸をあけますと、女は、ちょうど身体を拭いているところでしたが、はっとして、本能的に前をかくしながら、驚きのあまり、口もきけず立ちすくみました。

「出るんだよ！ この牝犬！」

ムラムラと憤怒がわき上がって来て、私は、女の幾分湿ったままの肩に手をかけて、書斎のほうへ追いやりしました。

部屋のなかで、君一さんが転がされているのを見ると、みるみる真っ蒼になり、

「許してください。何が悪かったのか知りませんが、どうか、許してください」

と叫ぶのでした。

「許してくれ？ 牝犬のくせに、何を言ってるの！ お前には、これが一番効くんだよ！」

私は、手にした皮を振り上げて、女の肩口から乳房にかけて、ピシッと打ち下ろしました。

「キエーッ！」

女は、床に転がり、苦しみもだえました。

その両手、両足を、それぞれ、右は右、左は左と縛りましたので、女は、両脚を開いた形でうつ伏せになってしまいました。君一さんをふり返ると、

「この女と、いいことをしたんだって！ お前も、これが欲しいのだろう！」

ふたたび太い皮帯は、宙に唸って、ピシッとして、男の背中に、幅ひろく赤いあとを刻みます。

女と男を交互に二十回も打ち据えてしまうと、何か、私が自分でも興奮を感じて来ました。

「おい牝犬、牝犬と交わってごらん！」

「なんだって？ それは許してくれよ！」

「生意気なことを言うんじゃないよ。おやり！ 私の目をかすめてやった通りにするんだ。それとも、できないというのなら、私が手伝ってやるよ」

私は、わざと意地悪く、君一さんの前下半身に手を延ばしました。（この箇所四行を削ります。理由は直接描写があるためです——谷）

彼は、屈辱と、奇妙な興奮とを我慢できないらしく、女もまた、抵抗をあきらめたようでした。二、三十分も私のふるう鞭の下で、彼らはあらゆる痴態を演じました。

そんな彼らが、私の支配下にありながら、二人だけの世界に耽って

いるようなふうに見えるのが、わけもなく腹立たしくなって、私は、サボテンの枝を一つ一つ切り取って、床の上にまき散らしておいて、挽き馬用の長い皮鞭を握ると、片手で、女をひき離しておいて、サボテンの上につき転がしました。

急に生き返ったように、縛られたままの女は、声を限りにわめくのでした。

私は、その波打っている腹を目掛けて、ふたたび、さっきよりもはげしい鞭を当てました。白い腹は、みるみる赤黒い鞭痕がついてゆきました。

君一さんは、もう、疲れ切ってしまったて、身動きもろくにできないようでしたが、私は、靴の先を、彼の肩にのせて、蹴倒しておいて、女を打っていた鞭で、もう一度改めて彼を責めました。

その単調さにあきた私は、女に、ペンキをうすく塗り、羽布団の羽毛を出してふりかけました。みるからに、女ターザンかチンパンジーの化け物のような、変な生きものができ上がりました。

私は、女の首に、犬の首輪をつけ、ひき皮で引っ張り、両手、両足をほどいてやりました。手首や足首には、紫色に縛られたあとがついていました。

その女を、鞭で追い立てながら、君一さんのそばに連れて来て、彼にも同じように首輪をはめて、ひき皮をつけました。ただ、男には、犬を調教するときにつかう、内側にトゲのついた首輪をつかいました。ちょっとでも、ほかの方向にゆこうとすると、首にトゲが食い込むのです。

そして、まだ身体にサボテンのトゲがささったままの女と向い合っ

て立たせておいて、（——この部分、同じく二行削除します——谷）私は、照明を一二〇〇ワットつけて、その様子を、十二枚の写真に撮りました。

そうしておいて、二人を、さんざんに打ちのめして、別の部屋にゆき、二人をそのまま転がしておきました。

私は、ふと、自分が、すでに大した怒りを感じていないことに気づきました。

十五分か二十分、隣では、ゴソゴソ、ヒソヒソと二人で何かやっている気配です。二人とも、ひき皮を柱にむすびつけておいたのですが、ギシギシという皮の音がします。

解いているに違いない、と私は思って、ガラリと戸をあけて、書斎にふみ込みました。

二人は、ただ、腰を下ろしてただけで、別に逃げる気配もなかったのですが、私は、隣室から持って来た登山用ナイフを持って、君一さんのほうにすすみました。

私の手が、彼の身体の一部をつかみ上げたとき、女は恐ろしい勢いで、私にとりすがりました。脚を上げて追っても、追っても、武者ぶりついて来るのです。

「許して上げて。許して上げてください。そんなことをしなくても、私が何でもおっしゃる通りにしますから、許して上げてください。」

さすがに、彼は蒼ざめてふるえていましたが、私は、ちょっとした茶目っ気でおどかしただけですから、

「では、なんでもいう通りにするわね」と念を押して、彼を離しました。

ともかく、その日は、それで終わりましたが、帰りぎわに、私は、
 こういうのを忘れませんでした。

「あんたたちは、私が別れるというまで、別れてはいけないよ。そして、私の命じた通りに行動しなくてはいけないのだよ。関係するのも、この部屋でだけするのだよ。私の見ている前でだよ。それが約束できないのなら、ナイフで切り取ってしまうよ。もうわたしには使い道がないんだからね」

二人は、約束をして、帰ってゆきました。

その後、二人とも、何も言って来ませんでした。私は、少々やりすぎたかなと思って、わざと、君一さんにも手紙を出しませんでした。(――以下重複するので省略します――谷)

一人と二匹でお会いしたい

その後のことは、一九五五年八月六日の手紙が説明してくれま
 す。これは、大野君から、好子さんに宛てたものです。

――重要な用件のみで失礼します。

僕は、あなたに、ああやって処罰されようとは思っていなかった。
 彼女だって、あんな目にあわされるとは思わなかった。あの人は、ト
 ゲがぬけずに、一週間も寝ていたそう。

けれど、不思議に、あなたに恨みがましいことを言っていないのだ
 よ。僕もあの日に、君のした、というより、君がさせたことに、妙な
 執着を感じはじめています。

あれが、もし、嫉妬だけの言葉のやりとりだったら、きっと僕は、
 あなたに失望したろうと思う。

けれど、あの日から、君は、今までよりさらに高位に登ったように
 思える。今となっては、僕とあなたとの接触は、ただ、あなたの靴と
 叱声とによってだけつながっているのだ、と思う。今まで、おこがま
 しも、君の肉体の所有を夢みたことも、正直に言えば、ないことはな
 かった。

しかし、先日のおの人との交渉が、君の目前で行なわれたことが、
 君を、神聖な、プラトニックな岸へとまつり上げてしまった。

ふしぎなことに、彼女――彼女は河野登志枝といえます――も、あ
 なたなしで、僕との関係を考えられない、と僕に言った。どういう意
 味かは、いろいろに考えられるけれども。

ともかく、ふたたび、近いうちに機会をつくってください。もう一
 度、三人で――いや、あなたは、一人と二匹と呼ぶかも知れないが
 ――会ってください。とにかく、先日の別れぎわのあなたの言葉は、
 僕をも登志枝さんをも呪縛してしまったようだ。

そして、あわせて、僕が今までのような手紙を出してもいいものか
 どうか、お返事ください。以上用件のみ。

八月六日

好子様

君一

これに対する返事は、まもなく、大野君のところにつきました。
 一九五五年八月十日付けでしたが、あまり長くなりすぎるので、以
 下は次号に譲ることにいたします。

ヴォアイヨール

(窃視症)

ヴォアイヨールということばがある。フランス語で、のぞき見る人という意味である。つまり、銭湯の女湯をのぞく男とか、公衆便所で壁に穴をあけたり、仕切りの壁の上から見下ろすとかするのや、男女の性行為をのぞき見して性的興奮と満足とを覚える者たちを言うのである。

★ マルセイユの妓楼では、娼婦が客をとっている隣の部屋で、のぞき見をさせる。のぞき見の希望者を集めて料金をとり、かわりばんこに見せる商売である。

女将は、それらの人を隣の部屋へ静かにつれ込む。そして、隣室との境におかれてある洋服タンスのようなものをはじへどけると、ガラス窓からパッと薄い光がさしこ



む。窓ガラスは二重のガラス板のなかに薄い水銀がぬってあって、明るい部屋からではまったく鏡にしか見えないが、暗い部屋から見ると、素通しのガラスにほかならない。隣室の秘戯は手にとるように見え、おまけに、声まで素通しである。

★ 小口末吉という男がいたが、その内妻はヒステリーで、ひどいマゾヒストだった。その結果、女の背中や腕に焼け火箸で「小口末吉の妻」と書いたり、腰や上腿に多数のやけどを作ったり、手足の指を切ったりして、ついには死にいたらしめたが、男自身はサディストではなく、単なるヴォアイヨールだったという説がある。

彼は、たたき大工だったが、この女との同棲いらい、なまけぐせがついて、生活に困ってしまい、魚の行商をしてあるいたことがある。そのときに、お得意先の家の造りをよくしらべて、寝室らしいところをつきとめておくのである。そうしては、夜になると、出かけていって、夫婦が同食するところを見て興奮し、そのまま見届けている。そして、夫婦が寝静まったところを見はからって、その家にしのびこみ、長火鉢にかかっているやかんを盗んで帰った。

やかんは、それを見ては、その現場を思いだし、ひとり楽しむということをつづけるためであった。彼の家には、だから、盗んで来たやかんが、ごろごろしていたという。

はも
禁秘帖

②

“五角形”のなかの成人儀式

かびや・かずひこ

近世ドイツのホモ誌ブーム

近世の艶笑文学として、粋士のあいだによくその名を知られている“Das Funkeck”（五角形）という小説がある。作者はドイツのタントリス、一九二七年にアムステルダムで刊行されたものである。

内容は、原名（“五角形”）が示すとおり、双生児の兄妹、外交官の息子、中年女とその娘、という五人の主要人物が織りなす交互接触の種々相を描いたものだが、このなかに、少年同士のホモや少女同士のレスボスのことが、すこぶる興味深くとりあつかわれているので、ここに簡単に紹介してみることにしよう。

なお、余談ではあるが、この書の刊行された時代のドイツには、同性愛に関する新聞や雑誌がさかん

に刊行されていた。

これは第一次世界大戦後旺盛をきわめたものであって、その絶頂に達したのが一九二一年から二三年にかけてのことといわれている。

それらの新聞雑誌のうち、最も有力であり有名だったのが、一九一九年からあった『わかもの』という雑誌。また、第一次大戦後に出た『ウラノス』という雑誌は、文化史的意義からも文学的価値からもすぐれたものであったが、惜しくもついに廃刊になってしまった。

売れ行きの点で最もさかんだったのは、一九一九年から二八年まで続いた『友愛』という週刊誌で、町の新聞売り子の手にも、駅の売店にも、ホテルの玄関にも、かならず売っていた。日本の同性愛などもしきりに紹介したものの由である。



このほか、『指揮者』『太陽』『激流』『女の愛』『友愛新聞』『ラッパ』などなどの、いずれも同性感専門の週刊誌が出ていたというから、当時この国に、いかにソドミアやレスビアンの数が多かったか、うかがい知れよう。

成人儀式第一夜

さて、この「五角形」は、全編八章に分かれているが、そのうち第一章と第三章とに、少年同士の同性愛が描かれている。

まず第一章では――

外交官の息子ラウール（十八歳）は、幼年学校時代、ブロンドで青い目の美しい少年エリック（十六歳）をチゴサンとして愛していた。その後、かれの心は少女のほうにひかれていたが、美少年の魅力はまだ忘れがたく、ときどきエリックとも会っている。

その日もかれは、夕方五時にエリックを訪ねる約束なので、エリックはわが家でかれを待っている。そのうち、エリックの心に、ふと、いたずら心が起こった。

――ラウールは、妹のエリカにも気があるらしい。ちょうどきょうは、エリカが外出しているから、ひとつ、エリカに化けて、ラウールをだまからかしてやろう。こいつは妙案だぞ。

われとわが思いつきの妙に、小膝を打つと、エリ

クはさっそく、妹の衣装戸棚をあけて、変装にとりかかった。

きものを脱ぎすてて素裸となり、戸棚にとりつけた大きな鏡の前に立つ。かれは、ふしぎな快感とともに、鏡のなかの自分のすがたに、じいーっとみとれる。

まるでエリカそっくりだ、とかれは思う。青い目と、エリカほど長いオカッパではないが、同じようにブロンドの巻き毛、それから、エリカとそっくり同じようにむっちり膨らんでいる乳、バラ色の小さな乳首もはさしげに堅くなって……。

だが、どうもたった一つだけ、娘には似つかわしくないものがある。エリックは手早く、そのものを股のうしろへおしやった。

これで、女装をじゃまするものは一つもない。エリックは満足げな顔で、鏡のなかの自分にニッコリと微笑いかける。そして、自分の魅惑的な姿にじゃれつくのだ。

やがてエリックは、妹の衣装を着けおわると、ひたひたと夕闇の迫る庭に出た。

いつもラウールと忍び会う定め場所、古い菩提樹の下椅子だ。

五時――。ラウールがゆうゆうとしたようすで庭にはいって来た。ラウールは、すぐに女装のエリックをみとめると、自分がひそかに恋している少女エリ



カとのみ思いこみ、かきいだいて、くちづけする。

「どう？ ラウール」

と、とつぜん、エリクが呼びかけた。

「ヘテロ（異性愛）の味は、ホモよりは甘いかい？」

「なんだ、エリク……君なのか」

ラウールは、少女姿のエリクをじっとみつめた。

それがエリクではなく、エリクだという失望の念は、新たにわきおこった大きな飲^{よき}びで、たちまちかき消されてしまった。

ラウールは、勢いよくエリクをだきあげると、勝手知ったエリクの部屋へはこびこんで、大きな寝椅子の上におろし、自分も、そのそばに身をよこした。

かれは注意深く、エリクの、絹でつつまれた脚を上のはうへとまでていった。上着とスカートをまくりあげると、金髪の可愛い少年と、短い、絹のストッキングで、紫いろの靴下止めとが、渾然一体となって、すばらしい魅力だ。

「エリク！ ……ぼくのエリク！ ……」

靴下とシユミーズのあいだにちらついている少しばかりの皮膚へ、ラウールの燃えるようなキスがふりそそぐ。

ラウールは、エリクに服をぬがせると、同じように燃えている少年の顔をみつめながら、左の手でや

さしく、エリクの真っ白な、まだ半ば眠りにおちているものを、しずかにゆりおこしはじめた。すると、それはたちまちにめざましい生命の源泉に溢れて来た。

そしてやがて、エリクは、ラウールのやさしい、活力のあるみちびきによって、またラウールは、可愛いクナーベの魅力のもとに、たがいのリビドーを解放した。

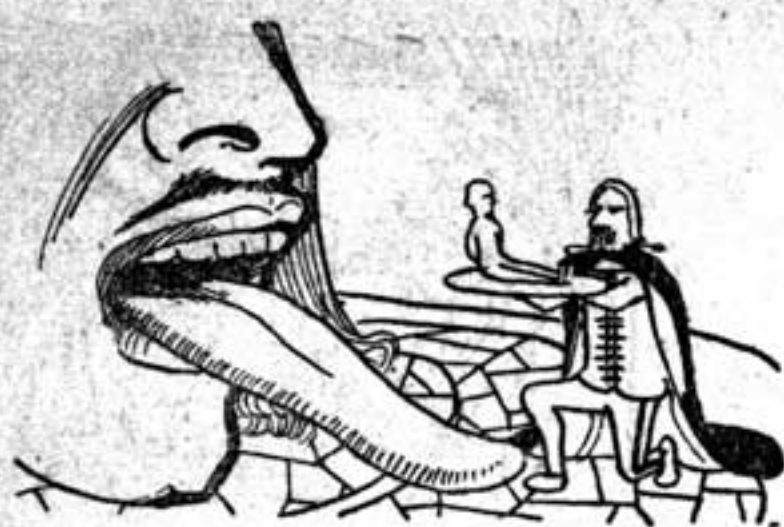
ラウールは、エリクをだきしめて、ささやいた。「これはまだ、ほんの一部分だけだよ。君はまだ、その口をぼくにまかせなければいけないんだ。それに、こんな宝物を君はもっている」

いいながら、ラウールは、エリクのむっちりした乳をつつき、

「そこへも、ぼくは訪問しなくてはならない。それからさいごにこの可愛い口でなく、別の……だが、きょうは、とてもだめだ。土曜日に、ぼくのところへ来ないか。そのときに、君に、愛というもののほんとうの神秘的な味を教えてあげよう。そして、やりかけの小児破壊を、成人儀式を、りっぱにさいごまでやってのけよう」

少年の身内に力を吹きこむもの

以上が第一章の骨子である。次に、第三章に移ると――。



て、浴室のほうへ消えた。

浴室から戻って来たとき、ラウールは、裸のままだった。

「さあ、こんどは役割を変更だ」

言って、ラウールはやさしくエリクを助け起こすと、自分が横になった。

——ああ、フレンチ・キスだな。

ど気がついたエリクは、すぐ適当な位置を占めた。

そして、天国が二人に訪れた。……

まもなく、二人は、身仕舞いをして、ラウールの書斎に戻った。ラウールは、なにかふしぎな飲みものを調合すると、

「エリク、飲みたまえ。きょうの疲れをできるだけ早く癒すために……」

そういって、黄金色の液をみたした杯をさし出した。

エリクは、いわれるままに、ぐっと飲み干したが、たちまち顔をしかめた。

「これはまずいや。これより、もっと、あのほうがうまいよ」

「あのほうって？」

「わかっているじゃないか……ねえ、ラウール、ぼくは、君を愛しているんだ。まるで、女が男を愛しているように、ぼくは君だけに女になり、そして君が望むときだけ男になるんだ」

急に大人になったように、ふ書きものテープ
っかりした語気でいいつづけた。……

——ざっと、こんな調子で、ギリシャ風の男

さまが、甘く健康的に描かれている。ここにはもちろん、その描写を避けたが、同性愛のさまざまな性的技巧がとりあげられている。

だが、それがすこしもいやらしくないのは、さすがである。

大人になる少女のレスボス愛戯

スペースがなくなったので、少女のレスボスというよりも、レスボスの愛戯——を描いた章については、駆け足で解説すると、まず第二章がそうである。

そのころのある日、エリク兄妹の家に、かれらの父親が若いときからの知り合いの、シリー・クルティザン夫人と、その娘のエルナ（十六歳）の二人が、モスクワから、保養地のノルダーニーへ向かう途中、立ちよった。

この母娘は、しばらく滞在することになって、そのあいだ、エルナは、エリカの部屋でいっしょに起居することになった。

同年ではあり、いずれもおませな二人は、すぐに十年の知己のように仲よくなり、滞在三日目の夜、エリカが父親の書斎からそっともちだして来たマグ



ヌス・ヒルシュフェルトの名著『男性および女性におけるホモ・セグシュアリテ』を読みあいながら、そこに書かれているレスビアン・リーベのさまざまな愛撫技巧を、好奇心半分で実践しはじめる。

次いで、第四章になると――

欲を通じたことで、エリカとエルナとの交情は、日にましこまやかになって来る。

夏のある日の午後、二人は、エリカの部屋で、またもいつものレスボス遊戯だ。

「きょうはめずらしいものがあるわ」

そういつて、エルナが、バッグからとりだしたのは、なんと、ニッポンの粹人たちが愛用する秘具「りんの玉」である。

不審げな顔をするエリカに、その使用法を説明したエルナは、さっそく二人の交歓にそれを用いる。この部屋には、揺り椅子やハンモックが備えてあるので、この珍具の効果はいっそうたかめられた。

つぎにエルナは、パリっ子の愛具「乳輪」をとりだして、エリカに示した。

「エルナは、いろいろなへんなものもってるのね、子どものくせに」

とエリカは一応くさしてみる。

「まあ、あたしのじゃないわ。ママのバッグから失敬して来たのよ。……これも、「りんの玉」のように、われわれ女性の快楽をたかめるための器具なん

だって。ただし、これを使うには、すこしばかり乳首に外科的手術がいるのよ。さあ、胸をあけてごらん」

いいながら、エルナは、針をとって、エリカにちかよる。

「なんだか怖いわ……あんたは、まるで、あたしを痛がらせるのが嬉しいらしいわね」

「あら、そうじゃいけなかったの？」

「ううん……じゃあ、よろこんで痛さをがまんするように努める」

「うれしいわ、それでこそ、あたしのエリカよ。……だけど、痛かったら、かまわず泣いてちょうだい。そのほうが、あたしにとって、いっそう嬉しいんだから」

エルナは、早くも目をかがやかしている。彼女の母親シリ―は、サディスチックな欲求の強い人だ。その血をうけてか、エルナにも加虐の性向が芽生えているらしい。

――以上が「Das Funkeck」のなかの男色とレスボスのすべてだ。作者タントリスは、こんな風に、少女の身内に生まれながら潜んでいるところの、いろいろの異常性的嗜好を、艶笑文学的な筆法のなかで、呵責なく剔抉しているのだと、私は解釈している。

においの フェチシズム



クラフト・エーピングは、「女の髪を嘆賞するものと、病的なフェチシストとの差は、紙ひとえである」と言っている。

つまり、女の髪の毛の香気のヒミツをさぐろうとする点において、共通した素因をもっているからである。

だが、こうした頭髪フェチシズムは、けっきょくは、嗅覚フェチシズムに帰するのである。

ということは、ハンカチ・フェチシスト、パンティー・フェチシスト・ブラジャー・フェチシストなど同系統の衣料フェチシストと同様に、頭髪や衣料に含まれているにおいから生みだされた倒錯性によるからで

ある。

とくに、腋窩フェチシストは、その強烈なものといえよう。

恋している女は、相手の恋人から、その腋窩のにおいを浸みこませたリンドを食べてさせられると、どこまでも、その恋人について行かねばならないことになる、メックレンブルグが言っているが、これは迷信である。だが、腋窩の体臭が強烈で、それにひかれる人々も、確かにいるのである。

★

人間の嗅官や嗅覚は、その役割を退化させつつあることは、心理学的にも、歴史的にも確かであるとする場合、嗅覚がいつも、ある種の倒錯症と結びついていること

は事実である。

その代表的なのはクニリングスで、これを好む男性は、例外なくフェチシストだといっているだろう。すなわち、毛髪に対して、異常な性向をもつと同時に、嗅覚フェチシズムであるといえるのである。一言にしていえば、においは、すべてのフェチシズムの源泉であり、フェチシズムを説明するうえに、その根拠となる場所である。

ということは、においのすべての魔力は記憶像と観念連合とを呼びさます点にあるということを考えれば、うなずけよう。もと、フェチシズムは、すべて、観念連合から出ており、においこそ、この記念像と思想の連関とへのかけ橋になっているのである。

★

人間に特有のにおいは、民族や人種によって異なっている。黒人の強い体臭は、有名である。

この体臭が、お互いにひきあうのは、インドシナや南洋にかけて、互いの鼻をこすり合わせてあいさつする風習があるのでもわかる。ビルマ人は、「キッスして」というかわりに「においをかがせて」といっていることでもわかるように、鼻あいさつの意味は、お互いに、においをかぎあうことである。そうすると、フェチシズムの根本は、においにある、といってよさそうである。

八田島末吉

〈責めマニアの体験記〉

木馬責めと滑車吊り

藤 川 潤

私刑用としての三角木馬

三角木馬は、公刑の責め道具として用いられたものではないらしく、私は、この計画を思いついて、手もとにある文献や絵画をしらべてみたが、木馬の形態や寸法について、これという基準を記録したものが見当たらなかった。

嘉永年間に刊行された朝川鼎著述の『善庵随筆』や『徒然草諸抄大成』に、木馬責めのことが出てくるが、それらはいずれも代官や名主などが、年貢をおこたった百姓を拷問したときに、私刑の責め道具として使ったもので、公刑の責め道具ではなかつたようだ。

外国のものにも、木馬責めの例が多く見られるが、まず、サド侯爵の三角木馬などは、手ごろの木片で組み立てた、きわめて原始的なものである。

その他のものにしても、丸太を三角形に削ったものとか、サド侯爵の木馬にすこし工夫を凝らした程度の、いずれも首も尻尾もない、「木馬」という体裁にははるかに遠いものばかりである。

ちょっと古い話だが、陣出達朗作の小説『艶魚肌』のなかに、木馬責めの場面が出てくるが、この場面の木馬には、簡単ながら、どうにか首らしいものがついているよ

うだ。

しかしこういう文芸作品に出てくる木馬は、たいてい作者の想像によって都合よく創作されたものであるから、実際の責め道具としての木馬とは、どこか違っているようだ。

木馬責めの実感

いずれにしても、木馬にまたがせられた被虐者（女）の足が、床から五、六十センチ前後は離れていなければならない。これは、被虐者の足首に重石とか分銅を結びつけて、三角形に屹立した木馬の背から被虐者が飛びおりないように足の自由を奪って



おくためである。それと同時に、この重石なり分銅は、被虐者の体に安定をあたえる役目をするので、そのまま木馬のうえの被虐者に、鞭打ちやくすぐり責めができるわけだ。

この場合、木馬のうえの被虐者は、痛さと、木馬から転げ落ちまいとして腰をよじって体の中心をとろうと身もだえするので、そのセクシアルな姿態に、加虐者は、サディスチックな悦びを二重に満喫することになる。

だいたい、こんなことが想像されるので、私は、およその形態と寸法を考えて、この責め道具をつくってみたのである。

首も尻尾もない、まるでハードルの台のようなもので、それに、白木のままでは責め道具としての雰囲気^{ふんぎ}に乏しいので、薄墨色の塗装^{カウ}をほどこすことにした。

「あら、なんですの、これ？ ハードルの台にしては変だし……」

案の定、寢室の隅に置いたこの異様な物体を見て、妻の伶子がいぶかしげに小首をかしげていたが、やがて、さぐるような視線を、私のほうへ移した。

大胆にカットしたブラウスの胸から、乳房の谷間がチラリと覗いて、それがひどく官能的である。

妻は、ブラウスの下で大きく揺れる隆起のあたりをおさえるようにして、ククと笑いをこらしながら、

「わかったわ。それ、三角木馬っていうんでしよう。でも、おかしいわ。首も尻尾もないお馬なんて。ホホホ……」

いつもなら、新しい責めをおねだりして強い刺激をもとめる彼女なのだが、なぜか、きょうは、この新しい計画に同調の色を見せないで、ただ全身をゆすって笑いこけるばかりなのだ。

「何がそんなにおかしいんだい。首も尻尾もない木馬が、どんなに素晴らしい乗り心地か、笑うんだったら、その木馬のうえで存分に笑ってごらん」

私は、素早く扉に鍵を下ろすと、ベッドのうえで笑いつづけている妻を尻目に、木馬を部屋の中央にひっ張り出した。

「さあ、こっちへきてごらん」

私は、用意の細引きをとり出すと、むっちりと、このごろいちだんと肉づきを増し

てきた妻の手首をつかんだ。手のひらにちよっと抵抗を感じたが、その手首はすぐうしろ手に高々とあがって、細引きは容赦なく柔らかい肉にくいこんでゆく。

スカートのホックをはずし、ブラウスを脱がせると、ナイロンのブラジャーから透けて見える乳房が、薄紅色に紅潮している。

「早く乗るんだ。その椅子に足をかけて」「痛いわ。こんなにとがっているんですもの……」

ノコギリの歯のように屹立した木馬の背を見て、妻はちよっとためらっていたが、それでもテレかくしに微笑しながら、長い足をそっと上げて、木馬の背にまたがった。が、ちよっと腰を下ろすと、

「うう、痛いわ」

と顔をしかめて、腰を上げてしまった。

「なんだい、伶子らしくもない。さあ、痛いのは瞬間、そのまま思いきって腰を下ろしてしまえば、乗り心地は満点だよ」

こんなふうに、妻を三角木馬に乗せ、その足首にアイロンを一個ずつ結びつけたのだが、実のところ、これは失敗だった。

誰しも、ちよっと考えると構図的には雰

囲気がありそうだが、彼女は、木馬のうえにももの三分とは乗っていられたなかった。屹立した木馬の背に苦痛をこらえる彼女の表情は、確かにサディストの目をたのしませてくれるものはあるが、肝心の彼女が、肉体的に辛抱できないのだから、この情景をながくつづけてはくれないのだ。

責め道具自体が、被虐者の肉体を傷つけるようでは、公刑の責め道具ならいざしらず、女の体からマゾヒスチックな悦びをひきだすためのアット・ホームなプレイは、とうていできるものではない。

かつて、浅草のメリー・ゴーラウンドで、若い母親が、子供といっしょに木馬に乗って嬉々としていた姿を、私はいま思いうかべたが、この若い母親が、ちよっとはにかみながら、遊動木のように揺れる木馬の背で、おぼつかなく安定をたもととうと体を微妙にくねらせる姿は、なんとなく色気のあるものだった。

私は、もういちど木馬責めをやり直さなければならぬが、そのときは、むしろ脚の下に櫓のついたローリング木馬をつかってみようと考えている。



Y.E.

高く低く、前とうしろが交互に上下するだけの単純な運動だが、それでも女は、うしろ手に縛られているのだから、おぼつかなく体で重心をとろうとする格好は、あんがい見る者の目を楽しませてくれるかもしれない。

いや、それよりも、木馬のローリング運動で、女は生理的に愛情をたかぶらせることだろう。

さらに、それに、くすぐり責めを併用すれば、この木馬責めは、変化に富んだ、おもしろいプレイではないだろうか。

滑車吊りの興奮

吊り責めといえは、責めのケースでは何か凄惨なものが連想されて、まるで責めの最高度のものであるかのように考えている人がある。

芝居などでも、番町皿屋敷とか、高尾太夫の吊るし斬りが構図的にも迫力をもっているの、そのままの姿が一つの「形」となって、印象づけられている。

伊藤晴雨翁が、かつて、生み月の妊婦を逆さ吊りにしたことが、話題にのこってい

る。この写真は、私も秘蔵しているが、あの写真は、晴雨翁にして成し得た記録だけに、ほかの何人が同じポーズのものを撮ったとしても、あれだけ迫力のあるものではないだろう。

私は、逆さ吊りには、いささかの魅力も感じていない。構図的にも単純で、ただ棒を立てたようなものだし、第一、色気に乏しいのが、決定的に、私の感覚に合わないのだ。

私は、滑車をつかって「半吊り」をこころみたことがある。うしろ手に縛った妻の体が、たぐり寄せるロープに、二センチ、三センチと上がってゆき、やがて爪先立った足が、辛うじて床に触れるばかりになると、彼女の足はしだいに空を蹴るようになってゆく。

もう一センチでもロープをたぐれば、妻の体は完全に宙吊りとなる。いや、そのままたちよっとでもうごけば、彼女の足は、すうッと床から離れてしまうのだ。

妻は、おのれの体重を爪先にたくして、体の重心をささえようとあせる。だが、その姿勢は、ものの一分とはつづけられない

のだ。

高手小手にいましめられた麻縄が、容赦なく肉に食い入るので、彼女は、その痛さで思わず体を縮めるのだが、たちまち重心が崩れてよろめき、爪先が床を離れると、そのまま前に、うしろに、あるいは右に左に、振り子運動を開始するのだ。

この滑車吊りで、私の最も興味を感じたことは、被虐者の爪先が辛うじて床に触れるということ、ちよっとでも体をうごかせば爪先が床から離れ、たちまち重心が崩れてロープで体が緊め上げられてしまう、ということである。

これが完全に宙吊りとなると、前記の三角木馬と同じように、一步まちがえば被虐者の体を傷つけることになり、いたずらに苦痛を与えることだけで、相手から被虐の悦びをひきだす感覚を、抹殺してしまうのだ。

プレイには、一方的な考えは危険だから、あくまで、被虐者の感覚を考慮しながら行なうべきである。

ここで、私の貧しい実験から得た、吊り責めの要点を、すこしメモしてみよう。

まず、女を縛る場合、乳のうえからは絶対に縄をかけないこと、うしろ手に縛った縄と吊り縄は別のものをつかうこと、この二つは、ほかの責めの場合でもそうだが、ことに吊り責めの場合は、注意しなければならぬ。

乳のうえから縄をかけたまま吊ると、女は呼吸困難に陥り、悪くすると絶息することがある。

また、うしろ手に縛った縄を「吊り縄」に関連させると、それへ体の重点がかかって、脱臼したり、骨折したりする危険があるから、吊り縄は、絶対に別の縄をつかうことを忘れてはならない。

次に、「腰縄」をかけ、さらに腹部に晒布を幾重にも巻いて、そのうえから縄をかけ、別に用意した吊り縄で、吊るするのである。

もっとも、半吊りの場合は、この必要がないので、私は、前記のとおり、故意に一本の長い麻縄で高手小手に縛って吊るしてみたわけである。

さらに、このプレイにもっと感興を添えようと思えば、つぎのようなことも考えら

neo-**ワゴリング**

本器を使用すればアナタの
悩み即日解消！



性に悩む男性に朗報!!

本ワゴリングを（併用）により
絶対に30分以上持続し効果絶大ノ

ハガキで申込次第力タログ無代
進呈▼送料共一組〓一、三五〇円
(個人名で急送します)

☆好評新発売！
特製品七種組一函…850円で急送！

短小の治療に！

真空
ラージ
療器

男性器發育不全、短小のため失望せる方は、最新式真空治療法「ラーシ療器」の出現により、局所の肥大、伸長を図り、大なる喜びを得られよ。

●ラーシ療器並に併用局所塗布クリーム(三百円)付送料共

●定価一組 一、六五〇円

東京都杉並区神戸町 128
株式会社 療養の友社
電話 (398) 4679 振替東京118443
(高田馬場より西武線井荻駅下車～徒歩2分)
(荻窪より井荻駅行バス5分、柿の木町下車)

もちろん、生命に危険のない程度に電圧を下げてあるが、被虐者は、鉄板に足指が

だが、滑車からのひたロープの端が体に結びつけてあるので、被害者が電撃をのぐれようと足を縮めれば、それだけロープがゆるめられることとなる。けっきょく、どちらかの爪足で危うく体を支えるよりほかない。

被虐者にはもちろん、サルグツワが嚙ま
 されているので、彼女の叫び声は空しく咽
 喉の奥へのみこまれてしまう。

彼女の足が交互に床の鉄板を蹴って、踊るようなその動作は、きわめてセクシアルな情景であろう。

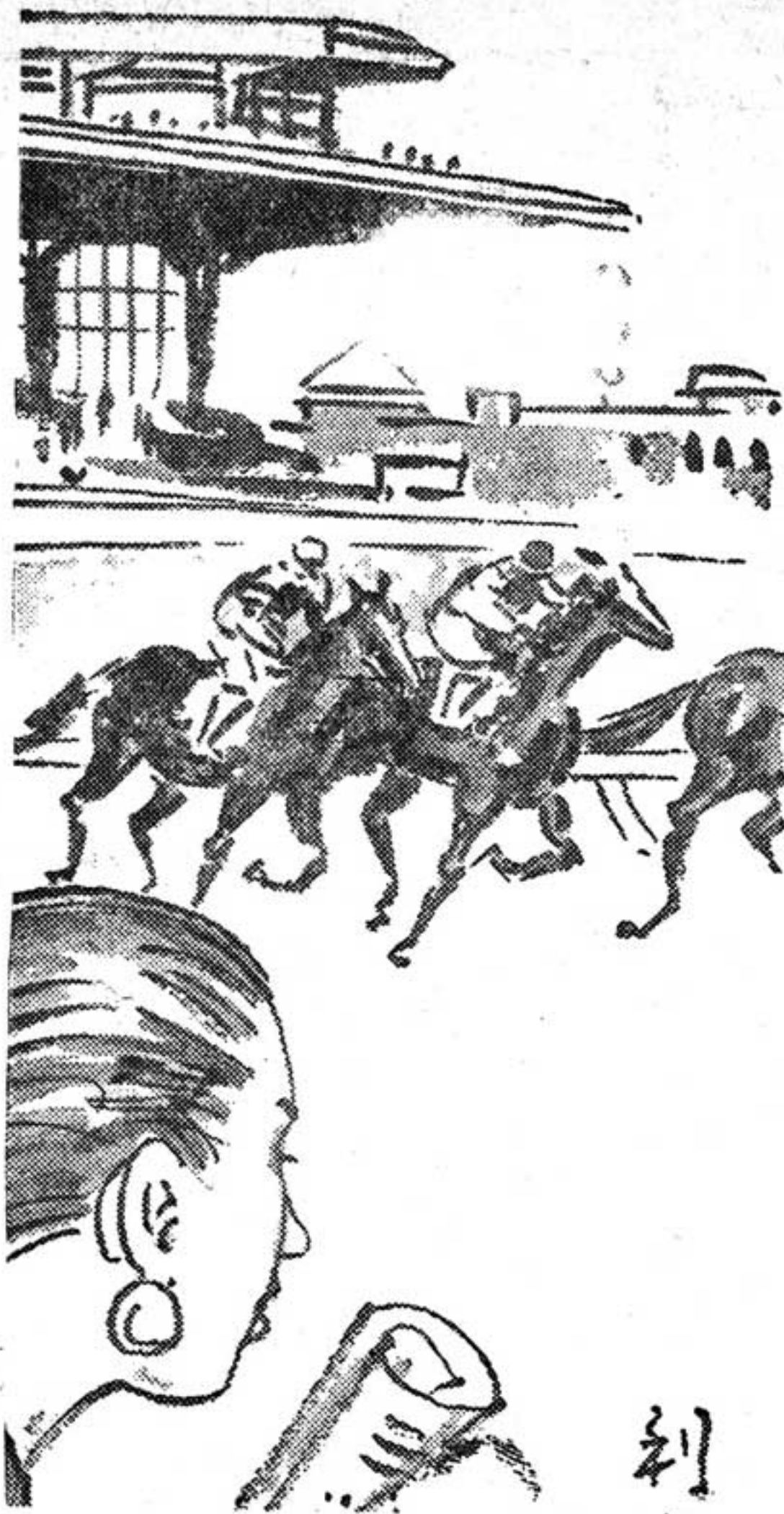
たとえ寒中といえども、彼女は全身に玉の汗をふきあげ、体をよじってあえぎもだえるだろう。

その間、ほんの七、八分の短い時間であるが、彼女は必死の運動で疲労困憊し、プレイの終わるころには、ぐったりとして、ほとんど失神一步手前という状態になるだらう。

エロトマニアということばにピッタリあてはまる女——拳闘を見ていればパンチの炸裂した瞬間、競馬ならゴール前のすごい追い込みのとき、彼女は絶叫し、もらし、そして失神するという……

顔のない足ニクラブ

獅 々 村 裕



1

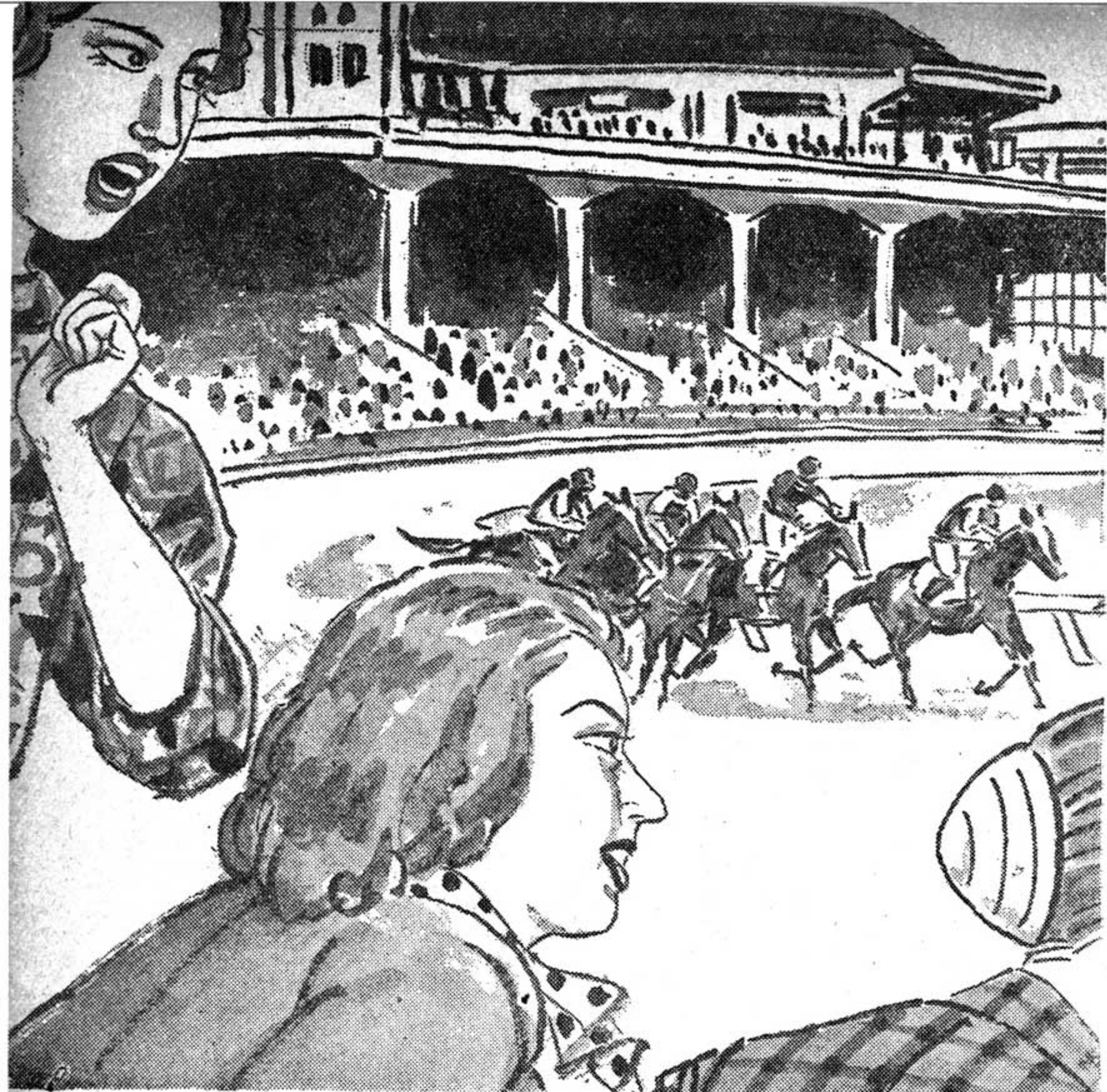
「セイ子のやつ、きょうあたり、また発作をおこし
そうだな」

私はなんとなく、そんな予感があった。

はたせるかな、そうだった。第九レースがすす
み、八頭の出走馬がほとんど一列になって第四コー
ナーをまわり、最後の直線にかかったとき、セイ子
のくちびるがあえぐようにすこしひらくと、そこか
ら、

「ああ」

という声もれた。官能のいちばんするどいところ



ろへジカにふれられたような、なんともいえない声だった。それと同時に、私の腕をつかんでいる彼女の手にギュッと力がくわわってきた。

私は、

「大丈夫？」

というように、彼女を見た。そして、私の見たかぎりでは、彼女は決して大丈夫でなかった。

鼻の穴はイッパイにひらかれたままだった。

目はトロンとかすみ、ほとんどレースを見ているようにみえなかった。歯がカチカチと鳴っているのがきこえた。こんな女の様子というのは、まっぴるまの戸外ではめったにお目にかかれるものではなかった。

「ああ」

またウメキ声がもれた。ああ、というよりも、

「オ」

と絶句したような、つまったウメキ声だった。

私はそんな彼女の様子に氣をとられながらも、一方ではレースの展開を夢中で追っていた。

そのとき、

「ワッ」

という大カン声が、スタンドの屋根をゆり動かし、みると、先頭をはしっている馬はすでにゴール前七、八十メートルのところのせまり、残る七頭がそれを追っていたが、それまで三番手につけていた

モーニング・フラッシュが、急に、つきささるようないきおいで追いついてきたのだった。カン声はそのため起こったものだった。そして、モーニング・フラッシュが二番手にせり上がり、さらに先頭のサングダーボルトとならぶと、カン声はさらに狂気のようにたかまった。競馬場の興奮はついに爆発点に達した。

その、耳を聳（も）するような大カン声のなかで、セイ子が、私に夢中でしがみつかながら、

「アア、アア、アア」

と、奇妙なこえをあげているのが、やるときこえた。バカげた話だが、それは、ベッドのうえ以外では聞けないような種類のこえだった。しかし私はそのとき、そんな悠長（ゆうちやう）なことを考えていたわけではなかった。セイ子の様子は危殆（きだ）をつけているし、一方、レースのほうではとうとうモーニング・フラッシュが鼻の差でゴールへなだれこみ、その日いちばんの大穴をあけたのだった。

「取ったぞ！」

私は躍りあがろうとしたが、喜ぶのはあとまわしにして、まずセイ子の処置をしなければならなかった。そのときすでにセイ子は、

「ウーン」

とうなったまま、ぐった、気をうしなっていたのだ。

2

指定席のいちばんうしろだったし、周囲はまだ、いまのレースの興奮で湧いていたのでさいわいセイ子の様子が気がつく人はなかった。かりに気がつく人があったとしても、セイ子は椅子にすわったまま私

の肩へ倒れかかり、私はうまいぐあいにそれを支えてカバーしていたので、「ああ、あの女の人、気分が悪くなったんだな」と思うくらいで、たいしてあやしむこともなかったのである。

セイ子のこうした発作にたいして私は、すでに予備知識をもっていたので、それほどあわてていているわけでもなかった。ただ、しばらくそうやって静かにしていればよかった。どっちみち、救護室に担ぎこむような種類の病人ではなかった。もしそんなことをしたら、セイ子だけではなく、パートナーである私も、とんだ恥ずかしい思いをしなければ、ならなかったのである。

第十レースがはじまるすこしまえ、セイ子は息を吹ッかえした。

「ゴメンなさい。取り乱しちゃって……」

恥ずかしそうにニッコリした。

「いや、いいんだよ。まいどのことだから」

「いじわる」

私をブツまねをした。

私がおも、

「しかし、きょうの取り乱し方は、ずいぶん派手だったよ」

と、からかうと、

「いや、いや」

顔を覆ってイヤイヤをしていたが、

「セイ子、トイレに行ってくる」

立ち上がると、ぴたりと身についたスラックスの足を、たったいままで気をうしなっていた人間とは思えないくらい軽快に動かして、人ごみの中へ消えていった。彼女は競馬場だとかボクシングだとか、そんな場所へくるときは、かならずパンツのおかわりを持ってくるのだ

った。そうしないと、ついクライマックスのところ、いつも「取り乱し」てしまうので、あとが困ったことになるのだった。

彼女は、プロ野球にも、そして相撲にも弱かった。二死、一、三塁、一発であれば逆転というような山場では、きまったように例の発作の前ぶれともいえるべき症状を見せるのだった。好きなピッチャーがピッチに追いこまれての投球場面では、緊張のあまり、死んだようにグッタリとして私にからだをもたせてきたし、ホームランの場面では、それが敵のホームランであろうと味方のそれであろうと、彼女は生理的に完全にノックアウトされてしまうのだった。だから、白熱した場面を展開するカードでは、パンツのおかわりが何枚あっても足りないくらいだった。

3

私はそんなふうにしてセイ子を取り乱した現場に、何回となく居合わせた。そのたびにセイ子は、私に対してキマリのわるい思いをするわけだが、それでも、そうした発作のあとでは、きまったように言うのだった。

「パパぐらいの男の人だと、セイ子のこんなとこ見ても、のみこんでくれちゃうからいいけど、若い男の子だと恥ずかしくて……」

つまり四十男の理解力と包容性みたいなものが好きだと彼女は言うのだ。

「若い男には恥ずかしくて、オレには恥ずかしくないのか？」

私はセイ子のことばになんとかムジユンがふくまれている気がして、そう反問しかけては、いつも思いとどまっていた。目にみえない

若いライバルへのやきもちを、彼女にさとられなくなかったからである。

私は彼女とつきあいはじめるとすぐ、彼女が一種の異常体質であることに気づいた。色情狂^{エロトマニア}といってはひどすぎるかもしれないが、色情の型も、その亢進の度あいも、たしかに、ふつうの若い娘のようではなかった。

彼女じしんもそれを知っていて、つきあいはじめたところ、あらかじめ了解をもとめるように、私にむかって、

「あたし、すこしH^{ニッチ}なの」

それでもよくって？　と言いたげだった。

私はそんなセイ子がちっともイヤでなかったばかりか、むしろかわいい感じだった。

「いくらHだといっても、たかがはたちの小娘じゃないか」

こっちは四十男の経験とテクニクがあるのだ、口にこそ出しはしないが、腹の中ではそう思ったのである。

ところがしばらくたつうちに、私はじぶんがすこしばかり思いちがいをしていたことに気がついた。こんな小娘のどこに、こんなにもすさまじい欲望の原動力がひそんでいるかと思うくらいだった。タジタジとするほどだった。しかし、そのために彼女がキラリになるところか、執着はいよいよつのるばかりだった。そして、私のこのかわいい熱い小鳥が、若いオスをもとめてどこかへとんでいってしまいそうな不安にかられるのだった。

はじめ私は、彼女を、ある酒場でみつけた。『ロリータ』に出てくるニンフエットめいた感じだった。男性用のジーン・パンツでヒップをぴったり包んでいるので、そのことをからかうと、

「だって、このほうが、アレするとき都合がいいでしょ？ 手っとりばやくて……」

上目づかいに私をみて、ニッとわらった。

このニンフェットめ！

私は一本とられたワイと思ったが、彼女のその一言ですっかりひきつけられてしまったのである。それから、二人のおつきあいはじまったのだった。

4

あいかわらず、二人の競技場あるきがつづいていた。今晚はボクシングだった。バンタム級の東洋選手権だった。

2ラウンド目、若いチャレンジャーがノー・カウントのダウンをした。力が入りすぎたあげくのスリップ・ダウンだったが、それでも場内は湧いた。

その直後のことである。相手のチャンピオンが、チャンスを得て、チャレンジャーをロープに追いつめ、そこで激しい打ちあいになったが、その打ち合いのまっさいちゅうに、フト、嘘のよう静かになった。しゅんがあった。アラシの前のしゅんけさというやつである。観客席もシュンとしている。そのとき、何におびえたのかセイ子が、

「キヤーア」

と派手な声をあげて私にしがみついた。

ボクサーの息づかいが聞こえるほどの静けさの中だったので、そのこえは場内いっばいにひびきわたり、ちょっとしたあいだ、場内にどっと哄笑がわいた。

つぎのしゅんかんにサク裂するかもしれないパンチの予感に、セイ子の生理が耐えきれなくなり、それでさけびだしたのだった。それがまわりの失笑をさそう結果になってしまったので、彼女は恥ずかしくて、しばらく顔もあげられなかった。

その失敗にこりたせいか、その晩はとうとう試合がおわるまで、例の発作をおこさずにすんでしまったのだった。もっとも、試合そのものも、後半はいたってよりあがりのない、つまらないものだったが——そのかえりみち、あるホテルの前までくると、ひとりで二人は顔を見合わせていた。

セイ子の息づかいがあらくなり、フニャフニャと私の胸に倒れこんできた。

「セイ子のやつ、今晚は不発だったから、エキサイトしている」

と私は思った。そんな彼女がかわいらしかった。で、ふたりは腕を組んでホテルの中に入ってしまったのである。

セイ子は母と弟がいる駒込の家から、池袋の酒場に通っていた。私が酒場のほうへ電話で連絡したり、また彼女のほうから私の勤め先へ電話がきたりして、二人は会っていた。連絡はけっこううまくいった。

ある日、やはり、会ってお茶をのんでいるとき、セイ子が気になることを言った。

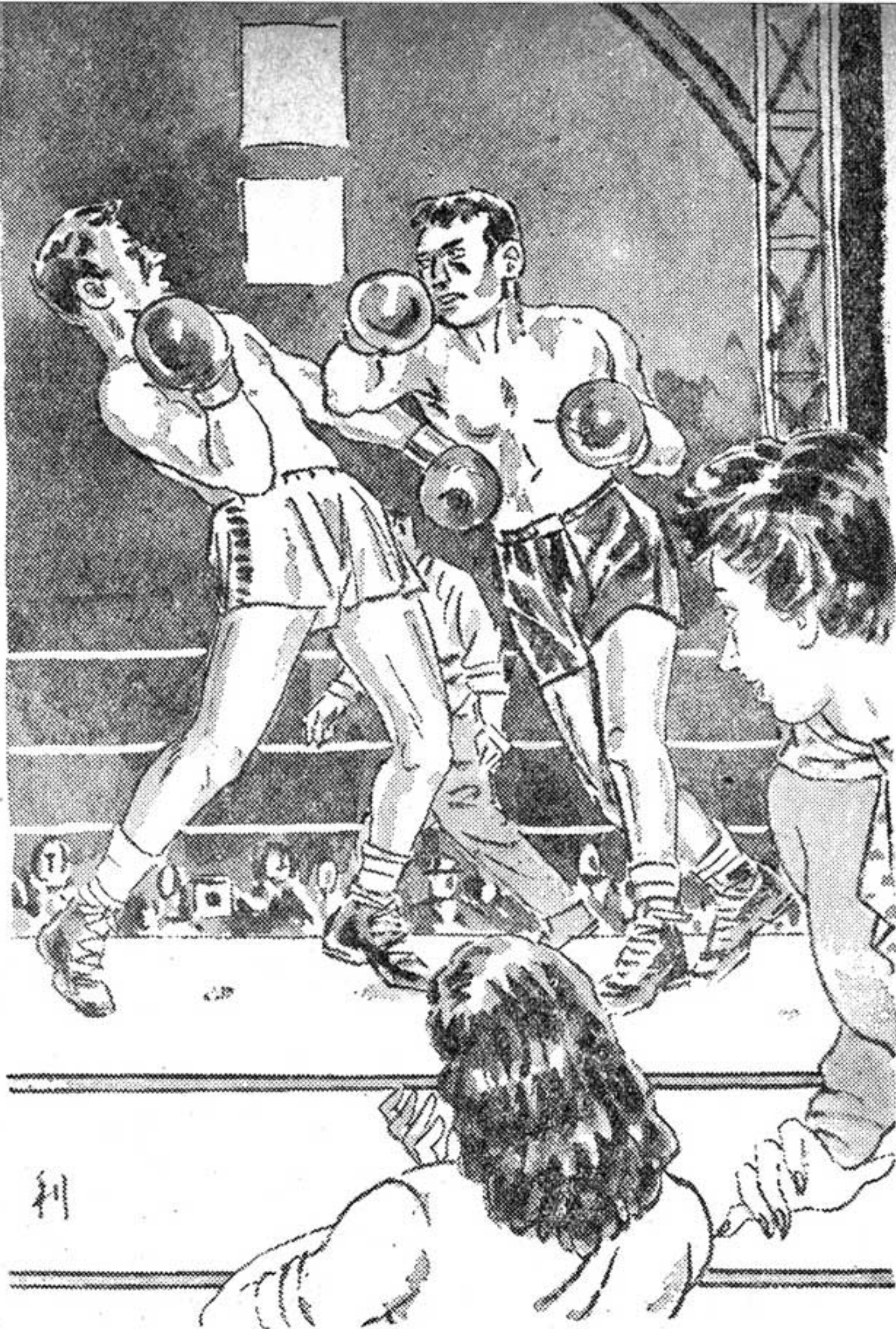
「きょうね、あたし、自動車の練習場で、ヘンになっちゃったの」

彼女は自動車の運転をならいはじめていた。その費用なんかは、むろん私がだしてやっていた。

「ちかいうちに車を買うつもりだ。そしたら、セイ子も運転をおぼえなさい」

「すてき。でも、買ってからじゃおそいわ。セイ子いまから練習する。そして、車買ったら、あたしが運転手になってあげる。セイ子の運転手なんてステキじゃない？ パパはいねむりしてればいいわ」

彼女は夢みるようなあまい声で、そんなことを言った。けっきょくは、彼女のいう通りにすぐに練習にゆくところになった。それも私にと



で、どうということとはなかった。

「チェッ、しようがないなア」

指導員は苦笑しながらセイ子にバックを命じたが、

「どうしたの？」

と言って、セイ子をのぞきこんだ。

って、彼女をつなぎとめておくための一つの手段だったのだ。

その日、何が起こったのだろうか？

その日、彼女は練習場でカーブの練習をやっていた。その教程の仕上げをする日でもあったので、いくら堅くなっていた。助手席から横目で操作をニラんでいる指導員の目がいつになくきびしく感じられた。

ちょうどカーブのなかごろにかかったとき、減速しないままだったので、車が急にノックをはじめた。

「あっ、いけない」

と思い、あわててギアをロウに入れようとする、ギアの回転がうまくいってなかった。で、今度は、ガ、ガッ、ガッ、とギアが激しい音を立てた。すっかりあわてる拍子に、ハンドルのほうがおるすになって、車はコースをそれて木柵にぶつかり、そこでストップしてしまったのである。

むろん、歩いているくらいの速度だったの

「ウーン」

とうなつてハンドルにしがみついたまま、セイ子が石のように動かないのだ。四肢が硬直していた。失敗のショックで、例の発作がおきてしまったのである。

「はずかしかったわ」

セイ子は思いだしたようにそう言った。とどのつまり、彼女はしばらくそうしていたのち、やっと平常にもどったが、平常にもどるなり、「じゃ、車おねがいするわ」

あっけにとられている指導員に言いおいて、トイレのあるほうへ、スタスタとあるいていった、というのである。

「セイ子、ときどきそんなふうになるのよ。高校のとき、時間が来ても試験の答案が書けないで、ああ困ったなア、なんて思っちゃうと急にからだがシビれてきちゃって、どうしようもないこともあったわ。そんなときシビれちゃうなんて、いやね」

彼女はそんなふうに言った。

私は、セイ子がなぜそうなのか考えてみた。

女子高校生の中には、教室でひそかにオナニーをやる子もあると言われているが、あるいはそんなことと関係があるのかもしれない。

つまり、教室でのオナニーなんかは、多少とも罪の意識をもって行なわれる、とかんがえるのがふつうだ。そうした罪の意識は、いつか心の隅に固定して残っている。なにかのばあい、たとえば時間がきても答案が書けなかったようなばあい、そうした罪の意識が目ざめてくる。それが、オナニーとおなじ、あの感覚をもたらすのだ。椅子の堅い感触とか、古ぼけた木机のにおい、そして教室独得のあの乾燥しきったかんじ——そうしたものが、例の感覚をよびさませる媒体にな

っていたのではなかったか。

私はまるで心理学者にでもなったように、むずかしい筋みちをたてて、そんなことを考えてみた。それからセイ子に、高校時代にオナニーをやったかどうかをそれとなくたしかめた。

その意味をさすると、彼女は、

「いやなパパ」

色っぽい目で私をニラむようにしたが、すこしあいだをおいて、ほとんど聞きとれないくらい早口で、

「やってみたわ」

とこたえ、それから上目づかいに私の様子をチラとうかがった。それは、イタズラッ子がつまみ食いをしたかどうかを問いつめられて仕方なく白状するときのような子供っぽい調子だったが、どこかに、「やってはいけなかったの?」

とひらきなおるような、ふてぶてしい調子がないこともなかった。

私はセーラー服のセイ子が、からだをひろげて、あるいはキュークツなちぢこまったような姿勢で、いたずらをしているところをチラと想像してみた。それはへんに私の心をそるものをもっていた。私はさらに、

「いまは、どうなの?」

と、さぐりを入れてみた。

「そうね。やってみることもあるわ」

「どんなとき」

「パパにあいたくなるとき」

「こいつッ」

私はそんなセイ子がかわいくてたまらず、どんなことをしても彼女

をうしないたくないと思うのだったが、そんな気持ちをぬりこめるように、ゆっくり彼女の手じぶんの手をかさねながら言うのだった。

「パパに無断でそんなことをしちゃいけない。それはセイ子のものであると同時に、パパのだいじなものだからね。できれば、カギでもかけておきたいくらいのもんだ。パパといっしょのときでなきゃ、それがつかえないようにね」

じっさい、私は不安だった。

私といっしょの時はいい。

しかし、私がいなくて、たとえば、きょうの自動車練習場であったような発作が起こったとすれば、時と場所によっては、どんなことになるかわからなかった。官能にモロいセイ子など、その弱点を男のほうで知って、その気になりさえすれば、どんなことだってできるのだ。

私は一人のとき、そんなことを考えはじめると、たったいまでも、セイ子の上にそうした悪い事態が起こっているような気がして、気も狂わんばかりになるのだった。

5

とうとう恐れていた事態がやってきた。それは、私が心配していたのとはべつな、思わぬ形でやってきたのだった。

とつぜん、私の男性が終わりを告げたのだった。

「どうしたのよ、パパ」

セイ子が心配するほど、ハッキリとした形で――。

私は、体力に自信があったし、年齢的にもまだそうなるときではな

かった。原因として考えられるのは、セイ子に対していよいよつのる狂的な愛情と独占欲、そして、それを脅かすさまさまの妄想――そうした心理が複雑に屈折し、私の機能をスポイルしてしまったということだった。

「チキ生。やりやがったな！」

私は、私から幸福をうばい取ろうとしている運命の黒い魔手にむかって、歯ぎしりをした。

しかし、そうした心理的な要因によるそれは突発的なものが多く、それだけに、ヒョイと回復する可能性もあった。たのむのは、それだけだった。私は祈るような気持ちで、二度目のチャンスをこころみた。はじめのときから一週間くらいたったころだった。

しかし、やっぱりダメだった！

そして悪いことには、それがどうやら固定観念となって、しっかり私にからみついてしまったことだった。

私はいまや、セイ子を死ぬほど愛しながら、その愛情を表現する手段がないのだった。しかもセイ子は、異常体質と思えるくらい官能にどんらんで、そのためにはじぶんの指先さえ汚しかねない、かわい仕方のないニンフェットなのだ。このまま手をつかねて見ていれば、どんなことになるかはハッキリすぎるくらいハッキリしていた。

「どうしたのよ、パパ――このごろバカに元気がないのね」

会っても私がいとも沈んでいるので、セイ子は心配そうにたずねた。「いや、ナニ、仕事のことでちょっとむずかしいことがもちあがっているんでね」

私はそんなふうにゴマ化した。

セイ子にだけは、ゼツタイに私の弱味を知られたくなかった。すで



に私は、彼女に対して二回ほど挫折しているが、さいわいなことに彼女は、それほど男の生理にくわしくはないので、まだ、ほんとうのことには気がついていない。私は二回とも、急に用事を思い出したというような口実で、その場をとりつくりつづけていたのである。

しかし、そんなゴマ化しが、いつまで通用するものではないことはわかっていた。もし私が、彼女の前で男性の誇りを保とうとすれば、だまって彼女から去るしかなかったのである。

しかし、私はまだ希望をすててはいなかった。このまま彼女への愛を断たれるなんて残酷すぎた。かならずもう一度、チャンスはかえってくるにちがいない。しかしそのためには、何かのこころみをやってみることが必要になりそうだった。

「セイ子ちゃん、パパはしばらく旅行をするよ。会社の用で、どうしても仕方がないんだ。だから、パパが帰ってくるまで、オイタをしないで、いい子ちゃんであっていなさい」

ある日、私はそう切りだしたのだった。

「あら、旅行なんて——どのくらい行ってくるの」

「そう、十日か二十日、ことによったら一月くらいになるかもしれない」

じっさい、それは、私にもわからないことだった。あるいは、ふたたび彼女の前に帰る日のないことさえ予期しなければならないのだ。そんな敗残の身を彼女の前にさらし、指をくわえて見ていなければならぬのなら、むしろ死んだほうがましなくらいだった。

「いやーン、そんなに長く——」

セイ子は鼻ごえを出しながらイヤイヤをした。これがホテルだった、さしあたり私の膝の上に馬のりにとびのってきて、首ッ玉にかじりつくところなんだが——ああ、しばらくは、もうそんなことは思わない——私は首をふりふり、

「だって、会社の用じゃ仕方がないでしょ」

と言ったが、語尾のほうはベソをかくような調子になっていた。しばらくのセパレートを前にして、私は彼女に対してできるだけのことをしてやった。開催中のゲーム、プレイというプレイ、それはスポーツであろうとなんであろうと、彼女のよろこびそうところへは全部つれてゆき、彼女をタンノウさせた。そうでもないことには、このかわいい妖女は、私の留守のあいだに、何をしでかすかわかったものではなかった。そして私は、男の再生を賭けた遍歴に出発したのである。

6

遍歴といっても、べつに遠いところに出かけたわけではなかった。私が、あくる日からはじめたのは、夜の東京の魔女狩りだった。セイ



子とおなじような顔とからだをもった女を捜しだして、アヴァンチュールをこころみることが、私のねがいだった。そこに再生のカギが秘められているかもわからなかったのだ。

セイ子にちょっと似た感じの女の子は、酒場やアルサロなどにちょいちょいいたけれど、よくみると、やはり本質的に異なっていた。それではセイ子を「ためした」ことにはならなかった。

セイ子の複製にはなかなか出っくわさなかったけれど、その遍歴のちゅうで私は、ずいぶんいろんな、刺激的な事件にぶつかった。

特定の会員組織で、いかがわしいショウを見せたりするのも、それまで私が話には聞いていても、じっさいには見たことのないものだった。それはそれで、ドギつい刺激を私にあたえ、安酒に酔ったような酩酊^{めい}をもたらしはしたけれど、それによって、持続的な機能が回復するとは思えなかった。かえって、そのひとときの酩酊がさったあとでは、虚脱感をとまったおもしろい疲労で、私のからだも心も蝕^{むしば}まれてしまったのだった。

そんなある晩、私が銀座うらの酒場でひとりぼつねんとグラスをなめていると、

「今晚は、ミスタア」

と声がかかり、いつはいつてきたのか、一人の似顔絵かきの若者が立っていた。

「いちまい描かしてくれませんか。うまく描きますよ。百円でいいんですから」

若者はそういうと、熱っぽいまなざしで、じっと私を見た。

黒々としたヒゲをべったり頬からアゴのあたりにはりつかせているその若者は、めっきり体格のよくなったちかごろの青年の中でも、さ

らに珍しいほどスバラしい体格をもち、見ただけで威圧を感じるほどだった。広いがっしりした肩幅。厚い胸、野生的なエネルギーを秘めたたくましい長い四肢。コンテをかまえたその手の大きさは、目を見はるばかりだった。たとえ彼が、何の才能もなく、絵も下手だったとしても、その肉体だけがあれば、それをモトになんとでも生きてゆけそうな感じだった。

私は彼に一枚描かしたが、じつは、そんなものはどうでもよかった。

私は、この風変わりな、なにかいわくありげな青年に、えらく興味をひかれていたので、スケッチがおわったあと、彼に千円札を一枚やり、さらに彼の好む酒をオゴってやった。

彼は大好きだというジンを五、六パイもダブルのストレートであおったが、酔いがまわってくると、その目はガラガラと妖しい光をおびてきた。しかしそのくせ、曇天の湖のように深いかなしみをたたえた目の色だった。

私は、その目の色に、不思議にしたしみをかんじ、そして惹かれていたのである。

その店を出てさらに二、三軒もハシゴをしたときは、もう夜もふけていて、その最後の店では、女たちは私たち二人を隅のボックスにおきざりにしたまま、帰り支度をはじめたくらいだった。

二人きりになると青年は、

「ねえ、センパイ」

深刻な告白の口調になって、

「笑わないでください。ボク、こんな大きなナリをして、じつはインポなんです」

「えっ、インポ？」

そうだったのか、私は青年の深かなしみをたたえた目の色が、じつはそのためだったかとはじめて気がついた思いだった。その目のうちに本能的に同病者を見だし、私はそれにひきつけられていたのだ。

「センパイはどうなんです。センパイはインポじゃないんですか」

青年の口調はべつに私をインポときめつけていたわけではないが、私は^{インポ}星をさされたようにギクリとした。

しかし、いまこそ何を隠す必要がある。青年はまず、じぶんから告白しているではないか。

そこで私は、さいきんのなりゆきを、ある程度正直に彼に話した。むろん、セイ子とのイキサツや、セイ子に似た女を捜してその女とアヴァンチュールをこころみ、その自信をひっさげて、セイ子にリターン・マッチしようとしていることなどは、伏せたままだった。

青年はげんしゆくな表情で私の話をきいていたが、

「ああ、センパイのはまだ軽いんですね」

それから、

「その程度の症状でしたら、実践がいちばんですよ。面白いところを案内しましょう。きっとお気に入りですよ」

7

青年が案内したのは、秘密クラブのようなものだったが、私がいいたこともない奇妙な趣向のものだった。こっちに客のすわる暗室がある。その正面に、幅三メートル、高さ一メートルくらいの舞台のようなものがあり、あかるく電気がついていて、そこに、水着をつけた五

人の女が出てきて、客のほうを向いてならぶのだった。

もっとも、ウエストから上のあたりは隠れるようになっていたから、正確にいうと、五人分の胴体と足がそこへならんだわけである。ショウ・ケースに入った下半身というわけだった。

そして、その足のかっこうなどを品定めして、じぶんの女をえらぶのである。

客の望みによっては、相手の女の上半身（したがって顔も）を、さいしょから終わりまで見ないですむようになっていた。黒いビロードの壁から、まるで奇術の胴体断裁みたいにつき出している下半身だけを相手にすればよかったのである。

この方法だと、客もまた、相手の女に顔を知られずにすむわけだった。

これはある種の男性には、心理的にきわめて適切な方法だった。

「どうです、面白いでしょう」

青年が耳もとにささやいたとき、私は、

「フン、変わってるね」

わざと冷淡らしく相槌をうただけだったが、内心では、ドキドキするほど、この奇妙なあそびに心をひかれていたのである。

で、私は右から二番目に立っている女、いや、女の足をえらんだ。

セイ子の下半身との不思議な相似に、あやしく胸をトキめかせながら――

あそびがはじまったとき、私は、じぶんの青春が見事に復活したのを感じていた。これは、やはり見事な対症療法だったのだ。それと同時に、相手の上半身をたしかめてみたい、モウレツな誘惑にかられた。そして、それは客として注文すればワケはないことだった。私は

それを実行したのである。

その結果、そこに、まぎれもないセイ子の上半身を見たのである。そのばあい、彼女がどういうわけでそんなところにいるのか、また同じように私を発見して驚いている彼女が何を感じているか、そんなことを考えるヒマはなかった。

私は、はじかれたようにとびあがり、身支度も早々にその部屋を飛び出した。

建物の出口がわからなくてウロウロしていると、例の青年がきて、びっくりしたように、

「どうしたんです？」

「いや、帰るんだ」

「帰るって――そんな」

「いや、いいんだ。今晚は奇抜なところを案内してもらって、ありがとう。じゃ、さよなら」

私はやっと見つけた出口から、深夜の戸外にとびだした。

ふと、背後の建物の中から誰かが――たぶんセイ子が――私を呼んだような気がした。

しかし、私はふりかえらなかった。私の青春には復活のキザシがあったが、セイ子はすでに私のコスモスから永久に消えていったも同然だった。

「ああ」

私は深夜の公園の樹立の中にまぎれこみ、大きなタメ息をついた。それから、深い深いかなしみをこめてエジャキュレーションをささげたのだった。

＜女装マニアの告白＞



あたしの結婚生活

平井由紀子

時計の針が五時をさすと、背広に手を通すのももどかしく、私は、オフィスをとび出すのでした。上役や同僚の批難がましい視線が背中に集中していることは、はっきりと感じているのですが、他人には絶対に知られたくない変身を、短い時間に済ませなければならぬ私にとって、他人の思惑^{おもわく}など気にしてはいられないのです。

夕食のお菜や、そのほか種々の買い物を買ってアパートに帰りつくと、私は、今まで着ていた男物の衣類のすべてを洋服タンスの引き出しの奥深くしまって鍵をかけ、かわりに、整理タンスから女物の下着をとり出して、手早く身につけます。たいていは洋装の下着ですが、日によっては、真紅の腰巻きに長じゅばんの緋^ひを重ねることもあります。

化粧も、毎日のこととて、あっさりとするま
せ、かつらをかむり、洋服なり着物なりを着
終わると、大好きなタブーを耳たぶや襟元に
少々つけ、エプロンをかけて夜の炊事にとり
かかります。夫が帰宅する前に、夕食の支度
をすべて済ませていなければならぬのです
から……。

やがて、二人だけの秘密になっている特殊
なベルを鳴らして夫が帰ってまいりますと、
すぐ夕食。時おりはビールの一、二本に、無
口な夫も世間話に興じることもありますし、
テレビのドラマ番組に見入ったりして、夜は
更けてゆきます。

おりにふれて、夫が私の身体を欲しがると
も、ふつうのご夫婦のそれと少しもかわりま
せん。

ジキル博士とハイド氏のような、知らない
人がみたら奇怪ともみえる二重の生活を、な
ぜ、私がするようになったのか、思い出は八
年ほど前にさかのぼるのです。

映画館の女便所

ほかの女装愛好の皆様がそうであるよう
に、私も、ずっと幼いころから、女になりた
い、という夢をえがいていました。谷崎潤一

郎の初期の短編に出てくるフェチズムやサ
ディズムの、怪しくも胸のとぎめく物語に、
日が暮れて、目の疲れるのも忘れて読みふけ
ったり、姉の下着をそっと自分の部屋に持ち
かえって身にまとったりした思い出は、今
も、目をつぶると、きのうのことのように浮
かんでまいります。

ですが、こうした初期の女装愛好への過程
をくどくどと描写することは控えたいとおも
います。今まで性風俗雑誌にのせられている
多くの記事と似たようなものですから。

こり性で、一つの事柄に異常なまでに打ち
こむ癖の強い私は、やがて、自室で夜、ひそ
やかに行なう、人知れない楽しみだけでは満
足できなくなりました。つまり、女装愛好と
いうより、女性そのものになりきって、女と
して、堂々と人前に出てゆきたい、と考える
ようになったのです。

男としては小柄で、肩幅よりも骨盤の幅が
広いような女性的な体格が、私の欲望の支え
となったことは、もちろんでした。

戦後、混乱した世相のなかで、数多くの性
風俗雑誌が刊行され、私と同じ傾向の人たち
の、告白記や体験記もしばしば目にふれるよ
うになりましたが、その多くは、あまりにも

フィクションじみていたり、または、私より
幼稚な段階で満足してしまったりで、やは
り、自分の欲望はみずから満たさねばならな
い、という決心は、動かしがたいものになっ
てゆきました。

ですが、少しずつ貯めた資金を惜しげもな
く投げ出し、あらゆる知恵をしぼって衣装、
靴、アクセサリから、洋・和髪のかつらに
至るまで揃え終わって、いつでも女姿で外出
できるような準備を完成するまでには、四年
近くの時日が経過しました。それでも、さて
外出を実行する段になると、いろいろな、思
ってもみない障害が出現しそうな不安が、夏
空の夕立雲のように、あとからあとからとわ
き上がってくるのでした。

そのころ、つまり、今から四年ほど前、私
は、口実を設けて、両親のもとを離れてアパ
ートに移りました。外出するのには、どうし
ても、ゆっくりと時間をかけて、ボロの出な
いようにお化粧や着つけをする必要があった
からです。

はじめのうちは、物珍しさも手伝って、母
や姉がちょこちょこのぞきに来るので、衣装
やかつらのかくし場所に大変な気をつかいま
したが、それも落ち着くころ、私は、日の暮

れるのを待って、家の周囲をぐるりと一めぐりすることから始めました。

しかし、これは、かえって、顔見知りにかう危険が大きいと気づいたのです。なんといつても、同じアパートの住人と、バツタリ顔を会わせる危険が多すぎたのです。

次に実行してみたのが、映画館に入ることです。それでも、最初に入り口を通過するときは、あとでふりかえってみて、われながら醜態と思えるほど、慌ててしまったようでした。受付嬢が入場券の半券をもぎって渡してくれるあいだの、たった数秒が、ひどく長い時間を感じられ、ひたたくように受け取ると、一番近くのドアから、映写中の暗闇に消えるだけのことで、手のひらやワキの下には汗がにじみ出ているのでした。

映画館で手をにぎられたり、お尻を撫でられたりしたという女装者たちの記事もみましたけれど、私には、そのような経験はありません。ただ、映画館の婦人用トイレに入るのは、映画そのものよりも、はるかに魅力があることは確かです。異性にみられていない、という気安さのせいか、品のいいお嬢さんが、思い切ったポーズでストッキングをなおしていたり、思わずハッとさせられるような

会話が耳にとびこんだりします。

私はそうしたふんいきを、少しでも長く楽しむために、鏡とにらめっこしてパフをたたいたり、ルーージュをゆっくりとひいたりするのですが、背後に立って順番を待ちながら、じろじろみつめている女の人の視線とあったりすると、たちまち、正体を見破られそうなきがして、大急ぎで廊下にとび出したこともしばしばありました。

こうした刺激にも馴れると、次に、昼間の外出をすることに決心しました。日曜は人出も多く、さけたかったので、ウィークデーに休養をとり、いつもより念入りに化粧を施して、公園や盛り場をぶらぶらしたり、あるときは女性用品の専門店として有名な銀座四丁目Sに入って、花壇に咲き乱れる色とりどりの花のように、きらびやかに並べられた下着やアクセサリーにあかず見入ったあげく、小さな声で、イヤリングとネックレスの一对を買い求めたこともあります。こんなことが一年ほどつづいたある春の日、私の生活を変えてしまう出来事がおこったのでした。

めぐりあつた彼

その日、私は、クリーム色のツーピースに

白い手袋、茶のハンドバッグに靴という格好で、I公園に出かけてゆき、いつものように、ひとりでボートを漕いだあとで、池畔のベンチに腰を下ろして、ぼんやり、水にうつる雲をながめていました。

私は、かなり長いあいだ腰を下ろしていたのですが、同じベンチの端で、雑誌に読みふけていた中年の紳士が「失礼ですが」と言いながら、名刺をさし出しました。

そこに書かれた文字を読んだときの私の驚き。

(僕はあなたにとって害になるものではないから、ご安心なさい。私も同じ趣味に生きる者。あなたの正体もわかっています。お茶でも飲みながら話をしませんか)

と書いてあるのです。

私は、頭にかっと血がのぼって、しばらくはその名刺を手にしたまま、足もとを見つめて、呪文にかかったかのように身体をかたくしてしまいました。

なんといつても男と女では、容貌、体格の一つ一つがちがうのですから、いかに上手に化粧を施しても、近々とよって眺められれば、それとわかるのは当然です。今までも、バスや電車のなかで、あるいはまた、喫茶店

の女の子から、不審な目つきでみつめられたこともありました。面と向かって、ずばりと指摘されたのは初めてだったのです。

「さあ、出かけましょう」

彼は、私が拒絶しないことは、とうに見すかしたかのように、命令的な口調で声をかけると、立ち上がりました。

その日、二人は、喫茶店の片隅で、長い時間、いろいろ話し合いました。彼は、自分の名前、職業を自己紹介したあと、

（自分は、さっき、同じ趣味といったが、自分ののは、女装の男性を愛する側の人間である



こと、あなたさえいやでなかったら、今後、月に二、三度会って、お互いの理解を深めたいこと」を提案しました。私はなぜか、彼の態度に圧倒されて、申し出を承知したのでした。

私の女装生活が大きく変貌しはじめたのは、このときからです。それまでの私は、自己愛に終始していたにすぎなかった

わけです。どんなにきらびやかに着かざっても、その姿をひとりでフィルムにおさめ、ひとりで散歩する行為だけで、満足していました。

初めて彼から来た手紙にも、そのことがするどくついてありました。彼は、

（女装する以上、女として男を愛し、また男から愛されるのが本当の喜びではあるまいか。あなたさえ嫌でなかったら、私は、あなたを、精神、肉体の両面から、女として扱うつもりである。そして、こうした仮面の世界にも、真実の愛の生活が存在し得るというこ

とを実証したい」というのです。

私の気持ちはぐらつき出しました。それまで私は、男同士の同性愛など、なんとなくけがらわしいものかと思っていました。しかし、彼からいろいろ命令的に指示されることに、いえ、そればかりでなく何事も受け身に立つことに、ほのかに喜びを感じるようになりはじめたのでした。

夏が訪れたときのことです。彼は「海へ行こう」と言い出しました。私は、目をみはりました。露出がちの夏は、ふつうの服装で外出するのすえためらわれるのに、まして水着一つになるなんて。

「大丈夫、かえって、裸の女が多勢いるんだ、目立ちはしないよ。まして、アベックの女なんかに、誰が注意を払うものか」

例によって、彼の強制的な誘いに、私も、

思い切って、出かけてみることにしました。

手足のむだ毛や顔はカミソリと薬品とでていねいに始末してありますし、顔には日焼け止めクリームを濃く塗り、サングラスをかけ、すれちがったくらいでは、気づかれない自信はありましたけれど、休憩所に入って水着に着かえようとしたとき、突然、二人のハイティーンの娘さんが声高に笑いながら入っ

てきました。

息のとまるほど驚くとは、こんなときのことを言うのでしょうか。幸い、バスタオルの大きなのを持っていたので、それを肩からかけると、狭い脱衣所の壁を向いて、棒立ちになっしまいました。先客がいたので、先方も、ちょっとびっくりしたらしく、

「あらッ、ごめんなさい」

と小声で言いながら、私は、のどがカラカラになって、声が出るどころではありません。しかし、いつまでも棒立ちのままにいます。にわけゆきませんから、タオルを羽織ったまま、やっこのことで、水着に着かえました。

話はちよつと横道にそれますが、私が女装で外出するとき、一番恐れたのは、突然話しかけられることだったのです。こちらから話しかけるさい、または、他人から話しかけられるかもしれないと構えているときは、女らしい言葉づかいや音声を出すことは苦にならないのですが、こわいのは、不意をつかれたときなのです。

いつぞやも、乗っていたタクシーが、子供をよけようと急停車したとき、運転手の背中にひどく顔をぶっつけて、かつらのズレに氣をとられていたおり、

「奥さん、すみません、大丈夫ですか」

と声をかけられたときなど、

「ええ、大丈夫よ」という簡単な言葉が口から出るまでに、一、二分かかってしまったくらいです。

このときも、「あら、ごめんなさい」と言われて「いいえ」とかなんとか応答すべき場合なのに、私は、ついに無言でした。

二人づれの娘さんは、幸いなことに、自分たちの話題に夢中でキャッキャッと笑いなから出てゆきましたから、おそらく私のことも気にしていなかったにちがいないのですが、心配して、脱衣所の扉の前まで迎えに来た彼も、さすがに真剣な顔つきをしていました。

私は、あたりに人気の途絶えたのを幸い、彼の手をとって、私の水着の胸にあてました。「あのときは、すごかったぜ。おっぱいの上から鼓動がドキドキとつたわってくるんだからな。しかし、全然嬉しくなかったよ。君の乳の感触は、まるで本物みないだったからね」と彼は、あとで、ニヤニヤしながら言ったものです。

これにこりて、帰りは、おおかたの人が引き上げてしまったから着替えることにして、太陽が水平線近くの茜色の雲のなかに姿をか

くすころまで、彼とたわむれたり、写真をとったりしていました。

砂浜に肩を並べて、一日の終わりのけだるい最後のひとときを楽しんでいたとき、突然身をおこした彼は、激しく唇を重ねてきました。そして、声をひそめて、

「由紀子さん、結婚しましょう」

とささやきました。理性が頭をもたげる前に私は、反射的にうなずいていました。

「ありがとう。もう何も言わないで……」

彼は、そう言うのと、立ち上がって、衣類をあずけた店にすたすたと歩いてゆきました。

海から帰ってすぐ、彼から、あらためて結婚申し込みの手紙をもらいました。それには、

——二人の結婚は、世の常識に反するものだけに、いろいろと障害もあると思うが、強い愛情でそれを持ちこえてゆきたいこと、結婚の条件として、お互いに、なんらかの支障がおこるまでは、一つアパートでくらすこと、自分の前では男装を絶対にしないこと、だけを守ってほしい、と結んでありました。

「新婚旅行」の宿で

こうして、私たちは、秋も終わりに近いころ、新しく借りたアパートの一室で、手と手



を重ねて、変わらぬ愛を誓いあいました。二人のほかに誰ひとり参列しない、寂しくひっそりとしたものでしたが、私たちは、それでじゅうぶん満足でした。

その日の夕方、二人は、蜜月旅行に出発しました。茶のダブルの背広の彼と、黒のワンピースに真珠のイヤリングとネックレスの私

は、夜もかなりふけてから、水上温泉に着きました。番頭さんの差し出す宿帳に、

(平井芳彦 妻由紀子)

と記す夫の横顔をみているうち、涙がにじんできて、あたりがぼーっとかすんできてしまいました。

家族風呂に入ると、夫は、

「一生一度の夜なんだから、全身に白粉を塗ってみよう」

と板刷毛を使って、首から襟、手足から内股、手足に至るまで、練り白粉をたっぷりとぬってくれました。

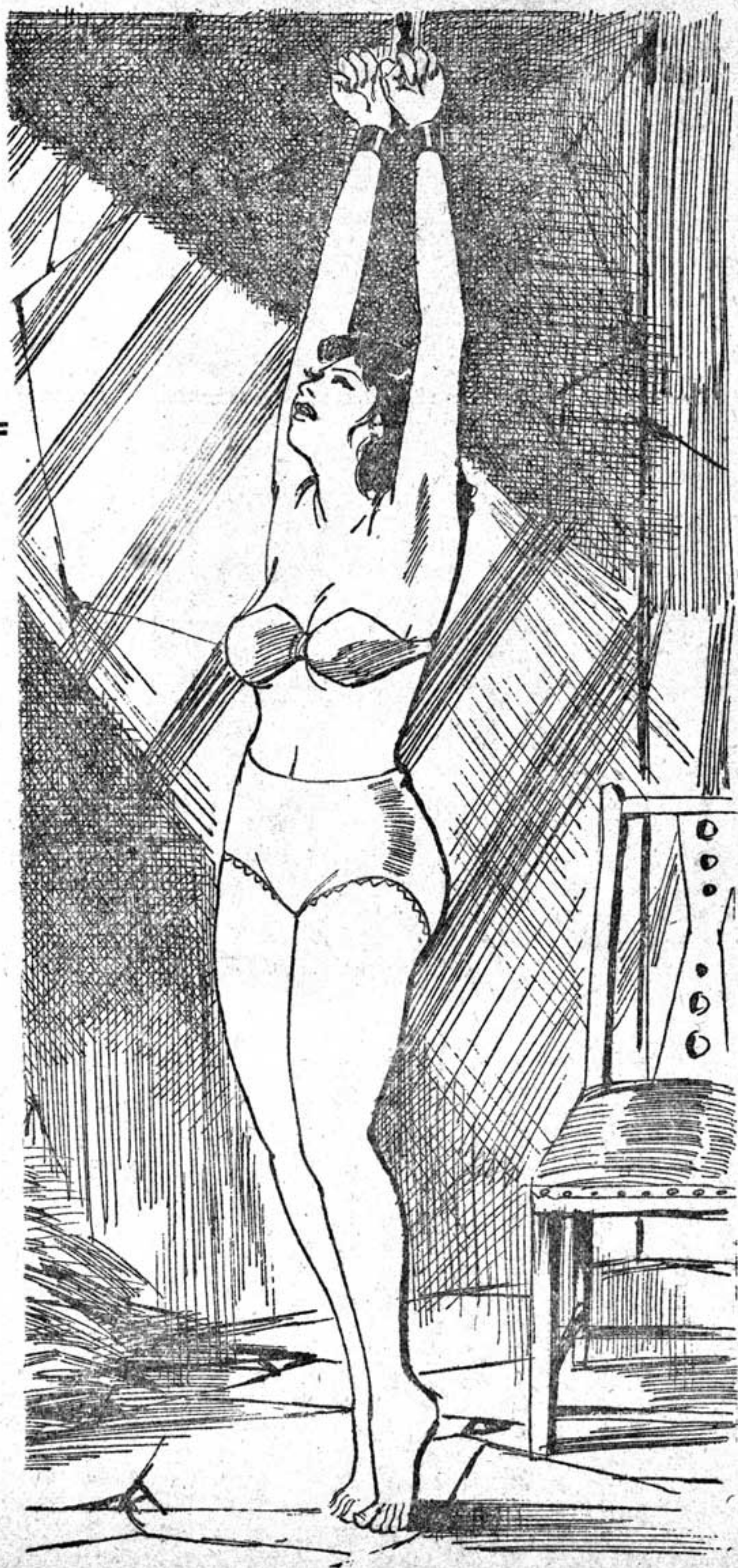
翌朝、まだ側に熟睡している夫からそっと離れて、お化粧をするために起き上がったときでも、お部屋のなかには、白粉の甘いにおいが、私の体臭のように、ほのかに漂っていました。

こうして、冒頭に述べたような、二重生活をいとなむようになったのです。こんなふうな生活がいつまで、つづくのか、私にもはっきりとはわかりません。夫は、たとえ世間の手前、将来、正常な結婚をしなければならぬとかが来ても、君のところへは、月に何回かは必ず訪れるようにすると言いますが、私は、二号さんのような生活にあきらめられるかどうか、そのときになってみないとわかりません。ですから私は、現在の楽しさを、心ゆくまで味わうことによって、将来の不安はつとめて忘れるようにしているのです。

そして、それを完全に忘れることができるほど、現在の毎日は、本当に素晴らしいものなのですから……。

(写真は全部筆者)

戦前、地下運動の党员、ことに女党员には、人権を無視した、言語に絶する、拷問が手をかえ品をかえて加えられた。現今なら当然問題となるようなそれを、身をもって体験したある女闘士の赤裸々な告白……



博

そのころ、私は、T大経済学部に在学していた。ちょうど二・一ゼネ・ストがマッカーサーの指令によって中止される前後の社会情勢と、戦後の思想解放の影響、そして経済学

を専攻すれば、おのずとマルキシズムに近づくかざるを得ない原因が重なり合って、私も少なからず左翼シンパ的になっていた。たまたま、学内細胞の友人からすすめられ

女レポの拷問

東 門

るままに、板橋小豆沢の某未亡人宅——未亡人であったかどうか、ともかく、その人が独身であったことは間違いない、——で、毎月第一、第三土曜の午後を開かれる日本共産党員の歴史研究会——それは、日本資本主義の成立過程を研究する、ごく真面目な研究会——にオブザーバーの形で出席していた。

その年、昭和二十二年も九月に入った第三土曜日、ラジオはあわただしく台風の来襲を告げていた。風速二十五メートルをこえれば電車もとまるというが、どうせこちらも学生の身軽さ、ままよとばかり、本郷から都電に乗った。

どうやら小豆沢までは行きついたものの、風雨は強まるばかり。果たして誰一人の参会者もない。すでに都電も運転を中止した模様で帰るに帰られず、思案するうちに、

「東門さん、帰ろうたって、この吹き降りじゃ仕方ないでしょ。いいから、あきらめて泊まってらっしゃい。私一人だもの、気兼ねなんていらないことよ。こんなお婆ちゃんじゃお気にも召しますまいけど、ホホホ……」

お婆ちゃんと自称はすれど、どうしてまだやっと四十を出たか出ないか、独身の気安さからか、世帯やつれも見えず、中年の女性特

有のあでやかささえのぞかれ、私はうぶにも身を堅くするのであった。

「何を堅くなってるの、いたずらなんかしませんよ。ためになるお話してあげる。昔だったら、こんなこと言ったら大変だけど、いい時代になったものね。あなたのような優秀な方が、誰に気兼ねすることもなく、勉強できるんだもの。私たちの若いころは、それは大変だったのよ。まあ、日本共産党史をお読みになれば、その苦労がおわかりになると思うけど」

「で、お婆さんは、そのころ？」

「ええ、うら若き、か弱き女性ですもの、歴史のページの句読点みたいなものよ。でも、何かご参考になればと思って。ある小さな出来事をお話ししましょうか」

といったやりとりがあって、彼女が語り出したことは、台風の夜にさわしい、恐るべき事実であり、告白でもあった——。

冷たい手錠

——知ってるでしょう、昭和三年三月の大検挙。あなた生まれてたかしら。おや、これは失礼。でも、まだヨチヨチ歩きのころね。私といえは芳紀正に二十一歳、そのころはこ

れで。体重も五十五キロはあったし、この通り五尺三寸なんだから、今の言葉でいえば、ちょっととしたグラマー——そのころまだグラマーという流行語はなかったから、ちょっとした肉体美という表現だったように思う——前年、日本女子大を、ちょっととした党活動でにらまれて退校させられ、そのころ党の大物といわれた村田のところにいたの。

そういうとすぐ、内縁とか何とか言われるけど、独身党員はとかく目に付きやすいので、大物には、女性党員が家政婦で入って、世間体を夫婦に見せかけ、平凡なサラリーマンを装ったものなの。だから私も、村田の前でブラジャー一つ取ったこともないのよ。

それはともかく、忘れもしない三月三日、女の子には桃の節句とかで、晴れ着も嬉しいその日、私には大変な日となってしまうわ。大学を追われてから、党から私に与えられた任務は、いわゆる街頭レポというもの、誰にだかわからない、ただ指示された通りに、神田橋で、眼鏡をかけ、右手に新聞をもった三十ぐらいの男に、「日比谷はどっちでしょうか」と問いかけ、「私もそっちへ行きます。なんならご一緒に」と答えたら、この紙を渡せという具合なの。

その日も、村田から小さな紙にギッチリと党員の住所氏名を書きこんだものを、シャープ・ペンシルの心こゝろを入れる小さな金属の筒に入れて渡されたわけなの。

「これは大事な党員の住所だ。度重なる検挙で党組織はほとんど壊滅に瀕している。再建をはかるのに、まず連絡をとることだ。で、書記局の大坪にこれを渡しいもらいたい」

そう言われて指定された末広町へ来たんだけど、この日に限って、大事をとって入れた小さな容器が、こんなことになるとは、そりゃ夢にも思わなかったわ。

指定された紺のスプリングの男をさがして妻恋坂を下りながら、うしろに人の気配を感じてふりむく間もなく、

「村田さんですね、本庁のものだが、ちょっと来ていただけませんかでしょうか」

言葉は一応丁寧だが、そのドスのきいた低い声と、目に鋭く光るものは、刑事そのものでなくてなんでしょう。ハッとする間もなく、いつのまにか左側にもう一人の男が近よったと思うと、ガチャンと冷たく手錠の音が聞こえました。

「何をするんです。人違いでしょう」

「冗談も休み休み言い給え。村田の情婦。ぐ

ずぐず言わねえで、サア、くさいところへ行こう」

当時の刑事といえば、ことに、思想関係のはゴロつきも同じ、男女同じ屋根の下に住めば、もう肉体的交渉があるものとみなして、情婦のなんのと、これが一番私の勘にさわりましたものの、もう言い争ったって仕方がありません。

「きょうは寒い日ね。なんだか、風邪をひいたみたいで……」

と言いながら、私は、激しくせきこみました。風邪なんかひいちゃいなかったんです、でも、手錠のかかってないほうの手を口にあてて、激しくせきこみました。なぜって、ウフフ……。

羞恥の身体検査

警察の門をくぐると、まず身体検査です。身に隠した凶器、なかには青酸カリを持っていて自殺した者もいますから、私に対しては、あのレポ用紙がなんとしてもほしかったのです。それはそれは厳重を極めた検査でした。どんなふうかって？ そうね、恥ずかしなくて、ちょっと言えないくらいなんだけど——。

とにかく、半地下室の、そう、柔道場みたいなところで、格子の入った高窓からわずかに夕暮れの鈍い光が差しこむだけのうすよごれた畳敷き、二十畳ぐらいあったかしら。

いま連行して来た二人の刑事と入れ違いに入ってきた三人の女看手。現在と違って婦人警官なんてないから、看手のよ。

「おとなしくして。着てるものを全部脱ぎなさい。身体検査をします。全部といったでしょう。誰がズロースをはいていろといいました。脱ぎなさい」

いくら女看手だけでも、私もまだ二十一の生娘よ。お風呂に入るんじゃないし、脱げるわけないでしょ。もじもじしていると、「強情な子だね、嫌でも調べなくちゃならないんだから」

言いさま、一人が近づくと、パッと足払いをかけられたからたまりません。不意を食らって私は、ドウと倒れる瞬間、早くも両手がうしろにねじ上げられ、難なく畳の上にうつ伏せに押えこまれてしまいました。相手は柔道を知っている女看手ですもの、手もなくズロースははぎ取られ、一糸まとわぬ裸体で転がされてしまいました。

一人は、いま脱いだ下着、セーター、ス

カートなどを、ポケットは言うに及ばず、縫目縫目、襟の折り返しなどを丹念に調べるのですが、何も出てくるはずはありません。出るのはゴミ屑ばかり、おかしくなって、思わずニヤリと笑ったからたまりません。

「何がおかしいの。え、おかしくないようにしてやろうか。レポ用紙、どこにかくした。早く出しておしまい」

頭の髪のなか、耳の穴、鼻の穴、口のなか、懐中電灯で照らすやら、棒を突っこむやら、苦しいのと、くすぐったいので、早くも私は肩で息をするのでした。でも、上半身はまだいいんです。

「寝ろ、股を開いて足を上にあげろ」

これには弱りました。そんな恥ずかしい格好ができますか。寝るには寝たけど、股を堅くして縮こまっていると、

「言うことが聞けないのかい」

三人が寄ってくる、左右から一人ずつ私の足をもってグツとばかりに押し開けるのだからたまりません、ご想像のようなあわれな格好にされて、秘所の検査をされました。もちろん、レポ用紙など隠してあるはずはありません。

「ないね、まさか肛門じゃあるまいね」

ついに、なんという機械か知りませんが、ペンチみたいなもので、穴を開くのがありますね、あれを押しこんで、思うさま押し広げ、懐中電灯で照らすんです。

二人にガッチリ押えつけられていますから、身動き一つできず、その恥ずかしさといったら——でも、女看手が犬ころでも扱うように、機械的にやってくれたのが、せめてもの慰めでした。

やっと許されて着物を着ても、まだ、いま機械を無理に突っこまれた肛門が熱っぽくて、歩くと、妙にヒリヒリし、それは苦しゅうございました。

どう、びっくりしたでしょう。でも、こんな生やさしいものじゃないのよ、これからあとの本格的取り調べが大変、あなた、目を回さないでよ。

隣室のムチの音

今度は、二階の取り調べ室へ連れてゆかれて、型通りの訊問が始まったけど、私は、名前も、住所も、本籍も、答えないで、ただ黙って、じっとすわっているだけ。今の黙秘権行使ってわけね。でも、そのころは、もちろん黙秘権なんて認められるわけもなく、秀吉

じゃないけど、「言わずば言わしてみしよう」という時代ですもの、あとが大変。

「おい、村田の情婦。いつまでも強情に黙りこくっていると、ためにならんぞ。今、なんでも吐いてしまえば、娑婆に帰してやる。お前のような、レポしかできんやつを留めておいたら、ほかの者を入れるところがなくなるからな。だが、それにや条件がある。つまり、おとなしく答えることだ。いいか、党のこと、何から何まで、知ってるだろうなんて思いやしないよ。しかし、

一、村田の住所

二、お前のレポの相手

三、お前が村田から受け取ったレポ用紙
 いいか、これだけだ。これだけ言えば、もうお前なんかには用はない。ええ、嫌か。痛い目にあわないうちは、おかしくってしゃべれないってわけか。そうか、それじゃ仕方がない、お気の召すままに、少し踊りを踊ってもらうか」

ずいぶんひどいものでしょう。なんと言われようと、私も党のために、そして民衆のために燃えていたんですもの、どんなことがあっても、絶対に口を割るもんか。たとえば、私の生命にもしものことがあっても、今は壊滅

に瀕している党だけど、やがては一大運動となって全国をなめ尽くす、赤旗の下、大衆の血で勝利が握られる、私はその捨て石なんだと、悲壮感が全身にみなぎり、大手をふって地下室へ歩いていったんですよ。これから、どんなすさまじい拷問を受けるかも知らないで……。

それにしても、いま、刑事の言った「踊りを踊ってもらうか」というのは、いったい、なんだろう。

導かれたのは、さっきの柔道場の隣の部屋。「しばらく、おとなしくしているよ」

荒々しく蹴込まれるようにしてほうり込まれた部屋は、また、なんと殺風景なことか。頑丈な鉄格子のはまった一尺四方ぐらいの明かり取りの高窓があるだけの総コンクリート。部屋の真ん中にある鉄製の椅子——腰を下ろすところも鉄張りで、しかも四本の足は床にしっかりと固定されていました——。部屋の隅にあるベッドも固定され、これも完全な鉄製。そのうえ、驚いたことに、天井には滑車を取りつけられ、二本のクサリがガラリと下がっている様をみて、私は、いまさらのように恐ろしさに身震いするのです。

突如、隣の例の柔道場からでしょう、

「やめて、やめて、あたし、何もしないよう」
 叫び声と、バシリ、バシリという鈍い音。まぎれもなく若い女が、棒か何かで激しく打たれているのに違いありません。

「横着なやつだ。これでもか。どうだ、言うか」
 怒声とともに、また、ひととき高く打擲の音、つづいて起こる、

「ヒエーッ、イタ、イタ、痛い。ヒエーッ、やめて、かんにんして、言う、言う、助けて……」

「よし、なんでも言うな。言わないと、もっとひどいぞ。調書とるから、いいな」

どやどやと人の去る気配は、また取り調べ室へひかれて行ったからでしょう。割合に我慢強くない女だなと思いつながら、私にはまだ実感がわきませんでした。

クサリと竹刀

やがて、鉄の扉がガチャリと錠の音も荒々しくあくど、刑事が三人、いずれも筋骨たくましい、それで、いかにも陰惨な目つきをした男たちでした。

「いまの聞いたか。あんなふうだ。痛い目にあわないうちに、言ったらどうだ」

「私、何も知りません」



「強情な女だな。じゃ、仕方がない、踊るんだな。よし」

二人の男に抱きかかえられると、もがく間もあらばこそ、手錠のまま、天井から下がっている一本のクサリに両手が結ばれ、もう一本が男たちに引っ張られると、私は万歳の形——といっても、両手を頭上で合わせた万歳の形——で立たされてしまったわけです。さらに、引かれるにつれて、ああ、私はやっと爪先が床にとどくかとどかないか、ピーンと張った腕、脇腹、ふくらはぎの筋肉がつっ張って、その痛いことといったら。

このままの姿勢で、果たして何分我慢できるのでしょうか。声を出すまいと思って歯を食いしばっているうち、早くも脂汗あせが額ににじんできたようです。

「どうだ、苦しいか。オイ、なんとか言ったらどうだ」

じっと目をつぶっている私のお尻に——申しおくれましたが、もちろん釣られるときには、ブラジャーとパンティー一つの、あられもない格好にはぎ取られていたのです——強烈な痛みが走り、バシッという音が、四方のコンクリートの壁に反響するのに、手間はかかりませんでした。

瞬間、あまりの驚きに、声さえ出ずに、目を見張った眼前に、刑事が竹刀を大きく振りかぶった姿が、映画の大寫しのようにとびこんできました。

次の一撃、痛いというより、火のような熱さがお尻から背中の方に走り、クサリ一本に支えられた私の体は、クルリと回りまわした。そのときの腕のつけ根の痛さといったら、ちぎれるのではないかと、さえ思われました。

また一撃。さすがの私も、ウーンとうなったように記憶します、一撃、また一撃、お尻は、ボワーッと熱でふくれ上がったように感じ、痛さというより熱さが、頭のとっぺんまで、ジーンとひびきわたります。

逃げようにも逃げられない。思わずのけぞると、足先が床から離れそうになり、腕のつけ根に全体重がかかる。もう、どうしようもない。本能的に襲いかかる竹刀を避けようとして、爪先で床を蹴り上げてとび上がれば、体はクサリに釣られて、左に右にクルリクルリと回るといふわけで、ここではじめて、「踊り」の意味がはっきりわかったのです。

でも、覚えていたのはこの辺まで。お尻がなんだか自分のものでないような気がして、

私は何度か叫んだようです。なんと叫んだか覚えていません。ワーンというような叫びが聞こえたような気がして、それが党の進行を歓迎する大衆の叫びのような気がして、私は万歳と叫んだような、すごく気持ちのよい一瞬でした。

あとはわかりません。気がついたら、クサリは手錠に結ばれたまま、冷たい床の上に横たわっていました。

尿意の苦痛

もうだいぶ時間もたったのでしょう、あたりは真っ暗で、廊下からもれる薄暗い電灯の光で、この拷問部屋もボーッとそれとわかるくらいでした。

意識が回復すると私は、たまらない尿意を催していることに気がついたのです。そうです。お恥かしいことですが、昼過ぎから——もちろん水一滴飲んではいなかったんですが——何時間もお便所へゆかず、しかも冷たいコンクリートの上にほうり出されていたんですもの、おしっこがしたくなるのも当然でしょう。

経験がおありになる？ そう、終戦直後の満員列車での買い出しで、汽車のなかで、と

でもお便所まで行けず、苦しい思いをしたことや、道を歩いていて公衆便所がなくてつらい思いをしたことはあるでしょう。

でも、留置場で、縛られたまま、身動き一つできず、尿意を我慢するのがどんなにつらいか、とても想像なんかできませんよ。

おしっこがしたいと思うと、そればかり気になって、ほかのことを考えてまぎらそうと思ったり、とても駄目なんです。

でも私は、歯を食いしばって我慢しました。十分、二十分。そのうち、刑事が来るだろう。声を出すのも癪なので、我慢していました。

ところが、誰も来ないんです。とうとう我慢し切れなくなりました。

「ちょっと、誰か来てくださーい」

と叫びました。ほどなく入ってきた刑事は、「どうした、気がついたか。白状するか、え」

「お便所へ行かしてください」

「なに？ お便所？ 小便か？ フン」

——しばらく腕組みして私を見下ろしていましたが、

「よし、白状すれば行かしてやる。どうだ、すぐ言えば、これだ。言わないと向こうへもって行ってしまおうぞ」

「そういつて私の目の前につけられたのは、部屋の隅にあった便器です。ふつうでしたら、便器になど、おおいやだというところですが、そのときばかりは、なんと、その便器がほしかったことでしょう。でも、私は黙って頭をふりました。」

「強情な奴だな。どうだ、いらぬのか。いらぬけりやしまつておこう。え、おい、小便したくないのか」

憎々しくそういうと、さっさと便器はしまわれてしまいました。ああ、出そうだ、洩れそうだ。その苦しさ、万が一粗相したら。そう考えただけでも、恥ずかしさで顔がほてってきます。その様子に、しめたと思ったのでしよう、刑事は近よってくると、足でポンと私を蹴って上向きに寝かせると、靴で下腹部を押しはじめました。

そうでなくてさえ、もう膀胱は尿で充満しているのです。そこを靴で押されるのですもの、グググッと靴に力が入るたびに、今にも尿道口から、お小水が飛び出しそうになるのです。

「ア、アッ、アッ、ウム」

私は、断続的な叫びを上げざるを得ませんでした。

「どうだ、どうだ。これでもまだ言わんか。それ、もっと強く押してもらいたい」

靴に力が入ります。ついに、私の全身から汗がふき出し、こぶしを握りしめ、足を突っ強って頑張るうちに、ガクガクと体がふるえ出しました。

見るに見かねたのでしょう、いつの間に入ってきたのか、ちょっとえらそうな刑事が、「便器、あてがってやれ」

ああ、その声が、天にも上るように聞こえたのは本当のことなのです。腰縄をされたまま、二人の刑事の目もものかわ、恥も外聞もなく、部屋の隅の堅い便器の上に、私はくずれ落ちるようになつたのでした。

放尿がすんで落ち着きを取り戻すとともに、恥ずかしさ、くやしさに、とめどもなく涙が出てきました。

指責めと鼻責め

「泣くくらいなら早く言つたらどうだ。言つてしまえば、お前のようなチンピラは、どうってことはないよ。十日か二十日もいれば、また娑婆へもどれる。言わなけりや、いつまでもこうだ。さあ、そろそろ、もう一度椅子にすわってもらうか。元気が出たら、また苦

しんでいただくとするか」

こうして再び鉄の椅子に縛りつけられた私は、次々に、あらゆる拷問にさらされるのでした。

どんなことをされたかつて？ あなた、気が遠くならなけりやいいけど、大丈夫？

最初は簡単なよ。ちょっと手を貸してごらんさい。ほら、こんな具合にして小指をうしろに思いきり反らすのよ。どう、アハハ、もう、そんなしかめ面してゐるわ。こんなもんじゃないのよ。刑事は馴れているから、指が折れるギリギリのところまで痛めつけるのよ。それから、人差し指をこうして今度は内側に曲げて、力いっぱい押えつけるの。痛いとかなんとか言うもんじゃなくなつてよ。

次には、人差し指と中指のあいだに棒をはさんで、両側から締めつけるの。ちょっと真似してみましようか。ホラ、こうして鉛筆をはさんで——どう？ なあんだ、もう痛がつてるの。そんなじゃ、とても拷問なんか耐えられないわね。要するに、指先だけ痛めつけられると思ったら大間違い、神経の鋭敏なところでしょう、頭の天っ辺までジーンとしてきて、さすがの私も、「痛い、痛い、やめて」

と叫ばざるを得ませんでした。それでも絶対に口は割りません。もうこうなれば、破れかぶれですよ。どうにでもなれと思えば気は楽なんです、果たして、これからどんなふうに責められるかと思うと、それだけが恐ろしくて、刑事の一挙手一投足にハッとする始末です。

相変わらず椅子に縛られたまま、猿グツワです。ふつう猿グツワといえ、口のなかに布かタオルを押しこむのですが、刑事のもってきたのは、ゴム製のマスクのようなものでした。きちっと口の上を覆われてしまうと、息は鼻からしかできません。

そうしておいて、鼻をグツとつまみあげるのです。どうなりますか？ もちろん窒息してしまいますよ。恐ろしい窒息責めなのです。不意をつかれて、たちまち私は、胸が苦しくなりました。首をふって合図します。

「どうだ、苦しいか。苦しいだろう。もう、この辺で口を割ったらどうだ。オレが鼻をものの三分も押えていれば、お駄仏だぞ。お前なんか、ここに在る限り、闇から闇へ葬られておしまいだ。いいか、死ぬまでやるぞ。言いたくなったら、首を前後にふれ、許してやる。いいか、わかったな。ソラ、どうだ」

激しく鼻がつままれます。一瞬、私は大きく息を吸いこんだものの、一分と持ちまじょうか。胸につき上げる苦しさ、お腹が波うっているのが、自分でもよくわかります。手を握りしめ、足を突っ張ろうにも椅子の脚に縛られているだけに、思うように力も入りません。額には脂汗がにじみ、その苦しさは、ああ、思い出してもゾッとするばかりの残酷さでした。

「どうだ、苦しいか。おい、なんとか言え」私ののが痙攣してきたのに驚いて、刑事は手を離しました。ああ、そのときの空気のおいしかったこと。でも、苦しさから解放された瞬間、何が口に出せましよう。フーッと溜息をつくばかりです。

「言いたくないのか。よし、何度でもやってやる。根くらべだ」

相手は、鼻をつまむだけの根くらべだからいいでしょうが、こっちは、窒息責めの、死ぬ苦しみです。二度、三度、次第に私も抵抗力を失い、ついに頭がボーッとなってききました。

半分仮死の状態になったのでしよう。今までは、クサリの下で、懸命に全身をゆり動かしてなんとか耐えてきましたものの、その気

力もなく、力がぬけてゆくのでした。そうです、とうとう失神したんです。

ふと、気がついてみると、ベッド——といっても、木の台の上に毛布を一枚敷いただけなんです——の上で人工呼吸をされていた。

くすぐりの苦悶

「世話をやかせるアマだ、まったく。どうだ、気がついたか。よし、今度は少し喜ばしてやるか」

喜ばすって、いったい、なんだと思います。これが、よく女性に用いられたくすぐり責めで、あまりのひどさに、発狂した者もあるといわれています。

子供のころ、よくコチヨコチヨコチヨなんて、教室でいたずらしたこともあるでしょう。でも、それは、ほんの一瞬で、ああ、くすぐったいと思うときは、もう止めてますね。だから、いいんですよ。連続、止めどもなくやられてごらんない。気も狂う道理ですよ。

私も、ベッドにしっかりと縛りつけられました。手も足も胴も、身動き一つできない状態で、羽毛の洗礼にさらされたのです。足の

裏、親指からはじまって、足の裏全体に羽毛がはい回ります。足は、くるぶしのところが縛られているので、足先は、なんとか動きまです。指を縮めたり曲げたり、そうすることに よって、なんとか精神を別の方向に向けてま ぎらすのです。

そのうち、羽毛は内股に上ってきました。

ここは、くすぐったさは大したことではない んですが、場所が場所だけに、羞恥のやり場 がなくて、どうすることもできませんでした。

大したことはないとみると、今度は、脇腹 と腋の下です。ここには、本当に参りました。そうでなくたって、私、くすぐったがり 屋なんですもの。頭の髄までジーンとしてく る。思わず、

「ウウッ、アーツ、クーツウ、アワワワワ」

言葉にならない叫び声が、恥も外聞もなく 口から矢つぎ早に出てゆくのを、止めようも ありません。脂汗が額ににじんで、のどはか らからです。羽毛は容赦なく、腋の下、脇腹 をかけめぐります。手足に力が入って、肩と 言わず、首といわず、足のふくらはぎも、硬 直せんばかり。とうとう、

「ああ、ああ、くすぐったい。かんにんし て、止めて」

と叫んでしまいました。

「もうよい、止めとけ。変なことになった ら、かえって面倒だ。そう言えば、連行する とき、馬鹿にせき込んだっていうな。ここへ 来てから、そんな様子、ないじゃないか。え え。——おッ、そうだ、レントゲンかけてみ ろ、透視でいい」

夢うつつに聞く刑事の声に、私はハッとし ました。

浣腸の恥ずかしさ

なぜ、ハッとしたかって？ 実は、レポ紙 は、ごく小さな金属の筒。そうね、シャープ ペンシル用の鉛筆の心を入れておく筒がある でしょう。あれよりもっと小さな筒に小さく まるめて入れてあったの。で、つかまったと き、私、せく真似をして、手で口を覆いなが ら、一思いに飲み込んでしまったのよ。どう せあとで、便とともに出るだろうぐらいに思 ってる。ところが、レントゲンで透視されたら 一ぺんにわかってしまうじゃないの。

私は、うしろ手に縛られて、医務室のレン トゲンの前に立たされました。ブーツと機械 が鳴って、もう一巻の終わりです。

「おいッ、これらしいぞ。うーん、大した、

天晴な奴だ。飲んでおったわ。紙だけなら 胃袋でメチャメチャだが、こりゃ、金属の筒 に入っとるらしい。よし、早く出させにゃい かん。女看手を呼んでこい」
ふたたび私は連れ戻されて、ベッドに縛ら れました。

「さあ、ヒマシ油をのんで」

甲斐なこととは思いつながら、私は、歯をく いしばって抵抗しました。予知していたので しょう。歯と歯のあいだにドライバーがねじ 込まれ、次は、ペンチを使って、難なく口は 大きく開けられてしまいました。

鼻をつままれ、瞬間、コップから、あの、 くさいドロリとしたヒマシ油がのどの奥深く 流し込まれます。はき出してやろうと思う間 もあらばこそ、のどの奥近く、舌のつけ根を 割り箸で押えられて、難なく大量のヒマシ油 は食道に流し込まれてしまいました。

間もなく便意が襲ってくるでしょう。ああ、 もう駄目だ、と観念の目を閉じて、三十分も したでしょうか。どやどやと入って来た女看 手の手にするものをみて、私は、はね上がり ンばかりに驚きました。

なんだって？ これから先はちょっと恥ず かしいんだけど、せっかくお話ししてきたん

だから——。イルリガートル浣腸器なのよ。
一〇〇〇c.c.はたっぷり入ってるでしょう、真
っ白な石鹼液があわ立っているの。

「刑事さんの命令で浣腸します」

「いやです。恥ずかしい、許して。あとで、
お便所へゆきますから、お願い。それだけは
よして」

「駄目です。検拳の材料は、一刻を争うんで
すから、浣腸して早く取り出すようにとの命
令です」

無理やりにパンティーをぬぎ取られ、両足
は縛られたまま揃えて上にあげられました。

そう、ちょうど赤ちゃんのおしめを取り替え
るときに格好そのままですわ。

ふつう、病気のときの浣腸といえば、ワセ
リンをぬって静かに嘴管しかんが入れられるのに、
女看手の荒っぽいこと。親指と人差し指で、
いやというほど左右に押し開くや、グッとは
かり、イルリガートルの嘴管を十センチぐら
い深く突っ込むんです。

チュルチュルチュル、そんな音がするよう
な気がするくらい勢いよく、一〇〇〇c.c.の石
鹼液は、私の直腸内に、奔流のように注ぎこ
まれました。

もう、ヒマシ油のきき出したところです。そ

こへ浣腸でしょう。全部注入し終わらないう
ちに、早くも猛烈な便意を催してきました。

「あの、もう出そうです」

私は、思いあきらめて、カのないような声
で訴えました。

「なに、もう出る？ まだ入り切らないじゃ
ないの。何言ってるのよ。しばらく我慢しな
くちゃ、近いところの便だけ出ちゃって、肝
心の筒が出てこなければ、なんにもならない
よ。何度も浣腸するのなんか、こっちが迷惑
だよ」

荒々しく言いながら嘴管を引き抜くと、脱
脂綿で強く肛門を圧迫するのです。お腹が張
って、グーッとなっています。ひとしきり便
意が強まって、今にも洩れそうです。

「ああ、出そう、洩れそう。許してくださ
い。あの、お願い、あああ……」

「我慢しなさい。できなければ、できるよう
にしてあげる」

と言うやいなや、私の内股をいやというほ
どつねり上げました。

「痛い、いたたた、ああ、うーん、いたッ」
内股の筋肉の神経が、どんなに鋭敏かお
わわりでしょう。その痛いことっていった
ら——

ひとしきりつねられると、痛さのほうに精
神が集中して、一時、便意もやわらぐ間もな
く、今度は、よりいっそう強い排便感が押し
寄せます。

「ああ、もう駄目です。お願いです、みんな
出します。もう、なんでも言います。許して、
許して、ああ、とても——」

「あたしたちに、何を言ったってしようがな
いんだよ。あたしたちは、お前に浣腸さえす
ればいいんだからね。十分我慢させて、腸洗
滌をすりゃいいのさ。筒が出なかったら、何
度も浣腸するんだよ、いいかい」

やっと、長い長い十分がすぎ、いましめを
解かれて、部屋の隅の便器をあてがわれたと
きの嬉しさ、もう恥も外聞も、人前も何もあ
りませんでした。

力なくベッドの上に横たえられたとき、私
は、夢うつうちに、

「あった、あったぞ。これだ、しめたぞ」
と叫ぶ声を、うつろに聞いていました。

そう、それから、その翌日、大検拳のあっ
たことを、ずっとあとになって知りました。
私のからだから出た筒のなかのレポ紙が、ア
ジトへの手引きにもなったのも、致し方ない
ことでした。

スナミチズム ということ



スナミチズムというのは、若者の香氣によつて、ひとたび失った若さを、ふたたび手に入れるという、信仰のようなものである。

むかし、ダビデ王が、純潔な処女・スネムのアビザブといっしょに寝て、別にそのからだに触れず、ただ、かの女の腕をマクラにして寝るだけで元氣を取り戻し、若々しくなった、という物語がある。このスネムにちなんで、スナミチズムということばができたのである。

ローマ人も、これを知っていたとみえて、L・クロディウス・ヘルミッパスという男は、若い少女の発散する香氣を不老長生の薬として、百五十歳になってもカクシヤク

としていたという。

★

スナミチズムの、いちばん盛んであったのは、十八世紀のフランスであった。この時代にフランスでは、その若い肉体で老紳士を若返らせるために、若い少女が、盛んに取り引きされたものである。

この周旋人で有名なのは、マダム・ジャヌで、かの女のことはレティフ・ド・ラ・ブレトンヌが、詳しく報告している。

かの女は、四十名の若い少女を抱えていて、老紳士たちの用に供した。一夜のおトギ料は、一ルイであったという。

若返りを目的に、マダム・ジャヌのもとを訪れる老紳士は、まず入湯して、少女た

ちにマッサージしてもらい、それから、二人の少女のあいだで休むわけであった。だが、その場合、男性の機能を行なうべき器官には、口籠（くちご）——ロカセのようなもの——を装置され、みだらな接触は、いっさい禁じられていた。

そのさい、一人の少女が引きつづいてサービスを許されるのは、八夜に限られていた。そして、一回の治療を完全にすませるには、二人一組の少女三組が必要とされていた。

この若返り法は、パリではとても好評であり、高位高官の知名人士が、われがちに用いたという。

しかも、この若返り法を行なうに当たって、羽目をはずすものはひとりもなかったという。おそらく、少しでもエロチックなことをすると、この治療の効果がなくなるばかりでなく、かえって害があるという宣伝が、額面どおり、一般のあいだで信じられていたからであろう。

★

わが国でも、政界・財界の長老といわれるひとびとが、これと同じく、若い女のあいだに寝ることによって、回春不老をはかった例は、少なくない。

西園寺公望や、大倉喜八郎などが、一つ夜具のなかに若い少女をはべらせ、その体温で、寒夜も暖かく夜、その香氣を、活動力の源泉とした話は有名である。

△岩崎弘一△

白

い

蝶

——
水車に縛られた女の幻想

津
田
耕
造



倒れていた若い女

夏も終わりである。この辺一帯を襲った激しい台風が過ぎ去ったあと、この部落に一軒しかない水車小屋に部落の者が立ち寄ったとき、水車小屋の住人である佐吉が首を吊って死んでいた。

このことは、たちまち、狭い部落の隅々まで知れ渡っていった。それは、確かに、この平和な山村にとっては、重大ニュースであったから。

人々は、いろいろと彼の死因を臆測した。

水車小屋の住人・佐吉は、この部落では誰知らぬ者もない変人で通っていた。まだ三代の働き盛りでありながら独身で、水車による製粉や精米の加工賃で細々と暮らしを立てていた。

警察からも検死に来たが、それは形式的なものであった。じゅうぶん死因の調査もしないまま厭世自殺として結末がつけられた。

だが、事實は、佐吉は、この小屋のなかで、みずから起こした異常な出来事に対して罪の意識にいたたまれず、死の道を選んだものであった。しかし、そのことは、佐吉の死によって誰にも知られずに終わってしまうか

も知れなかった。

——この辺一帯を襲った台風が過ぎ去った日、佐吉は、麓の部落まで、日用品の買い出しにいった。

その帰り道、竜神の滝の近くで、登山者風の若い女が倒れているのを発見した。

女は、黒いスラックスに、赤いチェックのシャツを着て、草のなかにうつぶせるようにして倒れていた。

たぶん、あの嵐に出食わして、疲労と空腹のために倒れてしまったのであろう。女は、死んだように身動きもしなかった。

近年、この付近が登山コースに選ばれたため、このような登山者の姿がめっきり多くなった。

部落の者たちは、この派手な服装をした、有閑じみた、若者たちを、嫉妬めいた気持ちで眺めていた。

山で育った者にとっては、山に登るということは労働であったからだ。

炭焼きの仕事も材木の伐採もすべては、ここよりまだ深い山のなかで行なわれた。そこには、不測の害が、常に牙をむいて待ちかまえていた。

山に、金と時間をかけて登るなどというこ

とは、この山の中に生活する者にとっては、不可解なことであった。

親しみ難いものを感じながらも佐吉は、なぜか、彼らに対して、一種のあこがれにも似たものを感じていた。

確かに、彼らは都会の洗練されたものを身につけていた。とくに女たちは、若く美しかった。この部落では見られない女らしさを感じさせた。女ばかりのグループを見たときには、佐吉の空想は際限もなく発展することがあった。

女は、佐吉が声をかけても、身動きもしなかった。

ハもう、死んでしまったのだろうか。

佐吉は、こわごわと近寄って、抱き起こした。

女の顔には、血の気がなかった。その青白い顔が、佐吉には、まぶしいものに感じられた。

今までにも、通りすがりにちらりと見ることはあったが、今、こうやって腕のなかに抱き起こしてみるのには、はじめてであった。

佐吉は、臆病そうにあたりを見回して、誰もいないと知ると、女の襟もとから、そソッと手を差しこんでみた。

濡れた肌着の下に、柔らかな感触が盛り上がっていた。それに触れることが罪悪であるかごとく思えて、佐吉は、ちょっとたじろいだ。しかし、その感触は、こころよい刺激となつて、佐吉の全身を包んでいった。

盛り上がった感触の下では、あえぐような鼓動があった。まだ死んではないかと思つたと、佐吉は、はじめてホーッとした気持ちになつた。

佐吉は、軽々とその女を肩に寄せ、水車小屋へ帰ってきた。

小屋へ帰ってきた佐吉は、まず女の濡れた服を脱がせた。

意識を失った女の体は扱いにくかった。グニャリ、グニャリと、まるで骨なし人形のよう動いた。

濡れた衣類を脱がせるたびに佐吉は、妖しい期待に胸を躍らせた。絶えて久しいあいだ触れることのなかった女の肌であつた。

これまで、変人として扱われ、誰からも相手にされなかったが、彼にもやはり、人並みな願望はあつた。女を知らないこともなかった。しかし、それは、金で買える種類の女でしかなかった。

いま、目の前にいる女は、そんな種類の女

ではなかった。恐らくは、まだ男の肌も知らないかも知れなかった。

佐吉は、震える手で、濡れた下着をはがした。白い肌は、薄暗い小屋のなかで、はなやかに光っていた。

白い女の裸身は、あまりにもまぶしかった。殺風景な狭い小屋のなかにも、そこだけ白い花が咲いたように、まぶしく輝いた。佐吉は、見ているならぬものを見た気持ちであつた。

濡れた女の肌を拭いてやり、浴衣ゆかたをかける、静かに床のなかに横たえた。女は、何事もなかったような静かな顔で眠りつづけた。

医者と呼ぼうにも、こんなところでは、大変なことであつた。それに、治ればこの女はここから出ていってしまうに違ひなかった。佐吉にとっては、大切なものを奪われてしまうようではなかった。

恐れていた日

佐吉は、水車を動かしながらも、仕事がつかなかつた。そわそわと落ちつかない気持ちで、女の寝ている小屋を出たり入ったりした。そして、静かな女の寝顔を見ると、安心した顔つきで、ふたたび仕事場に帰って

つた。

女は、翌日の昼ごろになつて、やっと意識を回復した。

最初は、気味悪そうに小屋のなかを見回していた。

「よかった。よかった」

佐吉は、わがことのように喜んだ。

粗末な服を着た、ひげだらけの、薄よごれた佐吉の姿に、女は、本能的な警戒心を示した。佐吉は、少しでも女に警戒心を起こさないために、つとめて優しく振舞つた。

命を助けて貰つたと思うと、みなりは悪いが、人はよさそうな佐吉の姿に、女は抱いた警戒心を少しずつほどこしていった。

「こんな山んなかで、大したものはないが、うんと食って元氣をつけてくれ」

佐吉は、こまごまと働いて、女のために食事の用意をしてやつた。そうやって働いていくことが楽しくてたまらない、というようであつた。

女は、遠慮勝ちに、佐吉のこしらえた食事

に手をつけた。重い口が少しずつ開いて、ぽつりぽつりと、語り始めた。

名前は高階道子たかかみ みちこといつた。友達数人と南ア

ルプスの縦走を計画し、その途中で嵐に遭遇したものであった。

友達と離れ離れになって、あの嵐のなかを当てもなく歩き回った。

どこをどう歩いたのか記憶もなかった。雨に濡れ、空腹と疲労で倒れたときは、本当に死んでしまうかと思った。

「でも、危ないところを助けていただいて、本当に命拾いました」

と言った。高階道子の瞳には、感謝の色が光っていた。

「いやあ、オレのしたことなぞ、大したことねえだ。それよりか、元気になって本当によかった」

佐吉は、朴訥な口調で言った。

高階道子は、めきめきと元気を回復していった。三日目には、起き上がって、ぶらぶらとその辺を散歩できるほどになった。

佐吉は、彼女が元気になるに従って、次第に憂鬱になってきた。

元気になった道子は、外に出たがった。しかし佐吉は、それを迷惑がった。部落の者に知れるとうるさいことになるという口実であったが、内心は、道子が外に出て行くと、そのまま帰ってこないように思われてならなか

った。

しかし、元気になったものを、いつまでも引きとめておくことはできなかった。一日一日、彼女が、この小屋を出て行く日が近づいた。それを佐吉は、身を切られる思いで待ち受けた。

しかし、佐吉が、その日をどれほど怖れ、一日でも長引くことを望んだとしても、その日はとうとうやってきた。

白い肌を巻く縄

「長いあいだ、本当にお世話になりました。もう大丈夫だと思いますから、明日は帰ろうと思います。帰りましたら、父や母にも話しまして、必ずお礼にうかがわせていただきます」

夕食後、道子は、はっきりと言った。佐吉の顔は、たちまち絶望の色が浮かんできた。その顔色は、絶望から青くなって、激しい口調で言った。

「オラあ、お前を帰すのは嫌だ。なあ、ここにいてくれ。こんなきいたないところだけれど、お前さえいてくれたら、オラあ、働くて、しっかり働いて、お前の好きなもの、なんでも買ってやる。なあ、頼むから、ここに

いてくれ……」

佐吉は必死になって哀願した。道子は、最初は、彼が何を言い出したのかと思った。だが、まるで、人が変わったように哀願する男の態度に、次第に恐いものを感じはじめた。

「でも、そんなこと——」

道子は、狭い小屋のなかで、佐吉から逃がれようとした。

「オラあ、嫌だ。どうしても、お前を帰さない。どうしても帰るといふなら……」

佐吉は、もう飢えたオオカミのような目つきで、道子をにらみつけた。

「嫌あ、——恐い——」

道子は必死になって、狭い小屋のなかを逃げ回った。

道子が逃げれば逃げるほど、佐吉は、気が狂ったように追いかけた。

どのように逃げてみても、しよせんは、男の力と女の力であった。たちまち、道子は、佐吉の、力仕事で鍛えられた腕のなかに取り押えられた。

「嫌あ、——嫌あ、——」

道子は、必死になって抵抗した。だが、けっきょくは、空しいあがきにしか過ぎなかった。

佐吉は、道子の細いしなやかな腕をうしろに、音がするほどねじ上げ、膝頭で押える。と、赤いチェックのシャツを、むしり取るようにして脱がせた。むしり取られたシャツの下は、下着一枚の白い肌が荒い呼吸にあえいでいた。

佐吉の意識のなかには、逃げようとする女のことしかなかった。この女を逃がしたら、もう女はいないと思った。それに、オレはもう恐ろしいことをしてしまった。

どのみち、この女は、ここから逃げたならば、このことを誰かに話すに違いなかった。そうなれば、オレは破滅だ。もう罪を犯してしまっている。犯したのなら、行きつくところまで行ってしまっただけだ。

佐吉の汗に光った顔が残忍にゆがんだ。強い力に押しひしがれながらも道子は、必死になって、土間まで逃げた。佐吉は、土間

の壁にかけられた縄を取り、その端を短く振り回した。

縄は、ヒュウ、と空を切り、道子のむき出しにされた肌に、ヘビのようにまつわりついた。

「ピーッ——」

道子は、のけぞるようになってうめいた。佐吉は、荒々しく道子の上に馬乗りになって腕を折り、もだえる女の手首に縄をかけた。

縄は腕から胸へと幾重にもかけられた。道子は、必死になってあらがった。だが、しょせんは悲しい女の非力であった。

衣服をはがれ、恐怖と、羞恥に打ち震える肌の上に、身動きもできないほど縄をかけられ、乱暴に、堅い床に投げ出された。

佐吉は、フーツと荒い溜息とともに、流れる汗を拭った。

恐怖にあえぎ、縄をかけられた不自由な姿

で、なおも逃げようと、道子は、壁のほうにいざり寄った。

獲物を追いつめるように佐吉は残忍に笑いながら、女のほうにいざり寄った。

壁ぎわに追いつめられ情欲に狂った男の視線を感じたとき、道子は、はっきりと、もう逃げられないと感じた。

「なぜ、こんなことをするの？」

恐怖におののきながらも、道子は男に問うてみた。

「オラあ、お前がほしいんだ。もう、どこにもやらない、お前はオレのものだ」

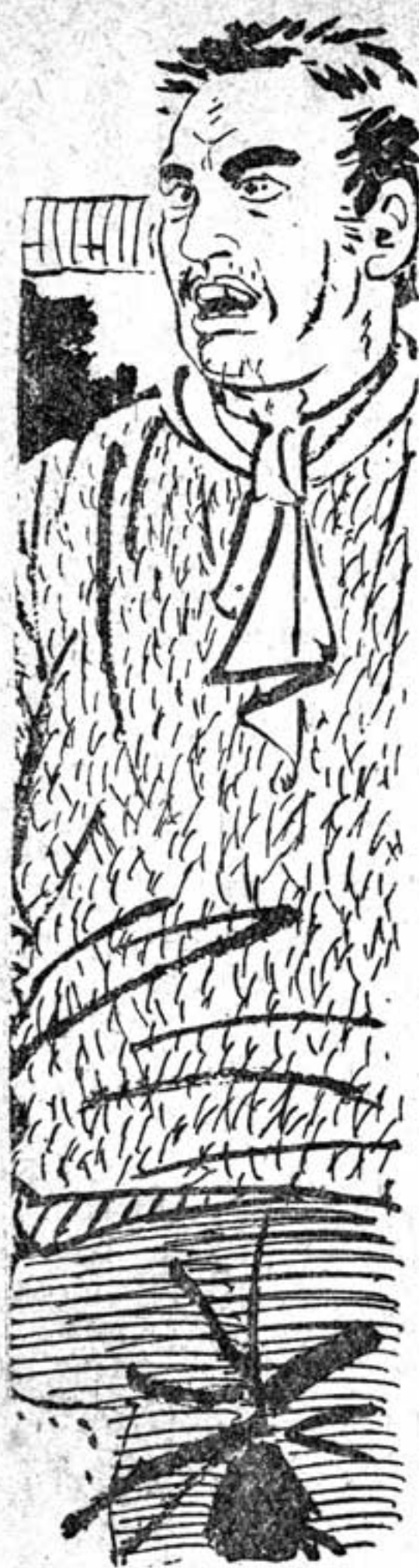
と、言いながら、佐吉は低く笑った。

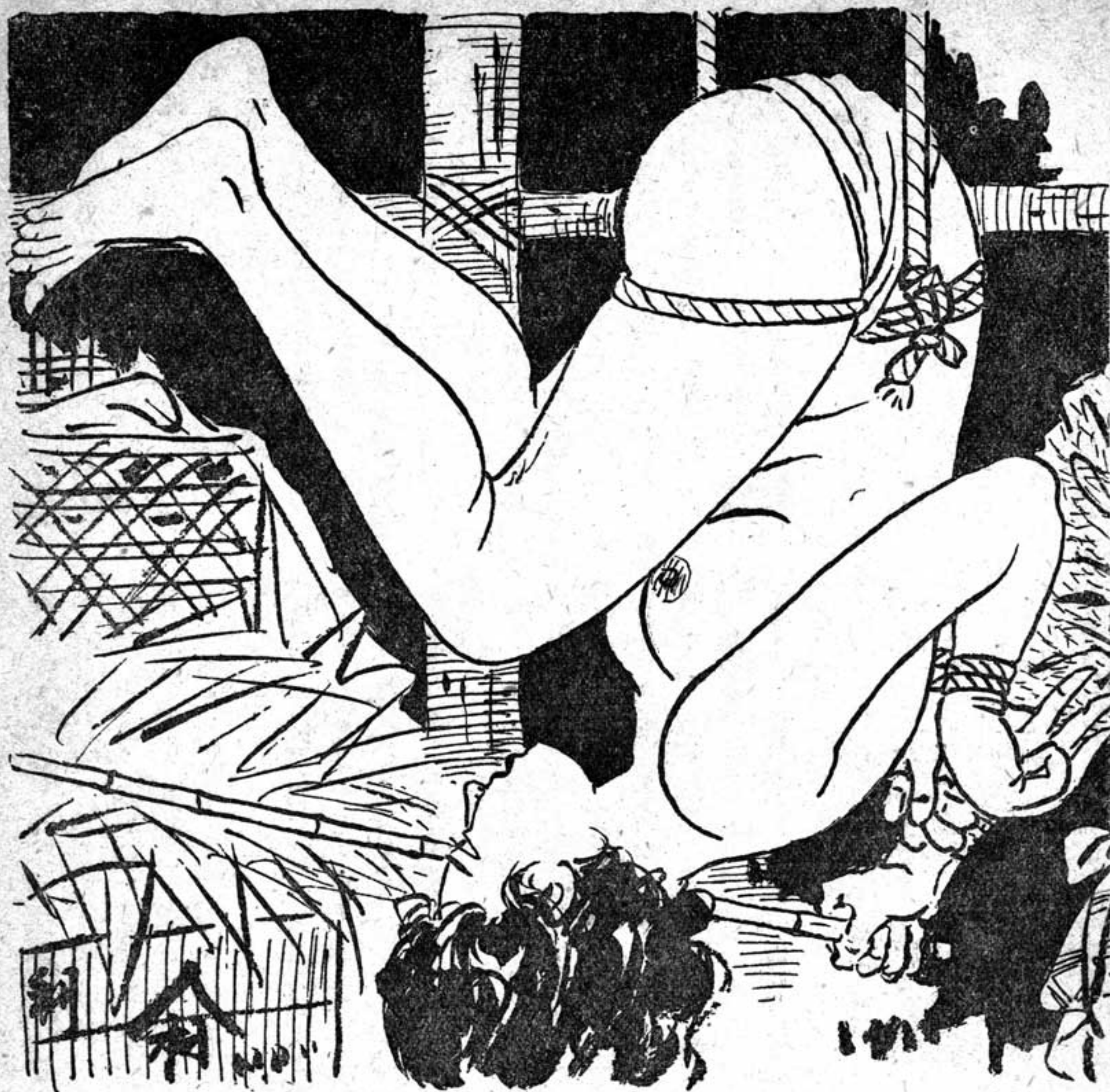
山村の夜気は、不気味に思えるほどの静けさで、ふけていった。時おり、どこかで鳥の鳴き声が、静かな空気を突き破って、流れてきた。

その声も、消えてしまうと、あとはまた、もとのような不気味な静けさであった。

小屋の梁にさげられたランプが、ジューッとかすかな音を立てて燃えた。

ランプのあかりに誘われたように、どこからかが飛んできて、あかりのまわりを無心に飛び回った。その虫もやがて、火に焼かれて、短い生命を終わってしまうのだろう。そ





れはちょうど、道子の生命を暗示しているみたいであった。

佐吉は、縄の端を梁に通して、徐々に引いた。引かれた縄は、嫌でも女の体を持ち上げていった。足の爪先がかるうじて床についた位置で、縄は固定された。

かけられた縄が肌をしめ上げ、身もだえするたびに、道子の肌は薄く紅潮していった。

佐吉は、それを美しいものを見るように、あかず眺めた。

女の美しい肌は、佐吉にとって、長いあいだ神秘的な憧憬であった。

かつて、女の入浴姿を垣間見たことがあった。そのときの女の肌は、湯槽のなかで白く息づいていた。いま、ここで見る女の肌は、それにも増して美しかった。

女が縛られ苦悶するごとに、その精力が美という形に凝固されるのであろう。女の苦悶する度合が深ければ深いほど、それは、妖しい美しさとなって、眺める者の心を奪わずにはいなかった。

苦痛の底の陶醉

佐吉は、この女をもっと苦しめたならば、これ以上、どのように美しい形を、くりひろ

げるだろうかと思つた。

もう、何も、怖れるものはなかった。ただ、鬱積された欲情だけが暴発した。

佐吉は、裏の竹藪から細い篠竹を切ってきた。細い竹はよくしなつた。この竹が、ヒューッと空気を切る音を思うと、それだけでも

佐吉の胸は妖しい期待に燃え上がった。

一ツ、二ツ、篠竹が肌の上で鳴った。佐吉は、皮肉に鳴る音を、ドキリとする思いで聞きながら、打ち続けた。

「ヒイ！」

篠竹が鳴るたびに、道子は身をよじった。

しかし、爪先は、かろうじて床の上をはうだけであつた。

限られた自由のなかで、道子の体がもだえた。しかし、その力も次第になえていった。

腕に食いこむ縄目が、全身の重みを感じさせ、皮膚の上を暴れ狂う痛覚が、次第に鈍いものとして感じ始められた。

道子は、もう、男の手によって打ち下ろされる、細いしなやかなムチの音にも、あらがう力は持ち合わせていなかった。

軽い、鋭い音を、道子は、鈍くなって行く意識の底で感じ取っていた。

苦痛に麻痺して行く感覚のなかで道子は、

不思議なものを感じていた。それは、山々の上を吹き渡っていく風の音にも似ていた。

あるいはまた、遠いところから聞こえてくる海鳴りでもあろうか。腹の底をゆさぶる音にも似た激しい感覚が、静かに全身を洗っていた。

ひたひたと軽い音を立て、あるいは怒濤にも似て、地の底からでも盛り上がってくる激情、それは、道子の体のなかを洗い、打ち寄せ、血管のなかを激しい奔流となって渦巻き流れた。

激しい男の力で打ち下ろすムチを、その肌で受けとめながら、道子は、忘我の境に遊んでいた。それが、あたかも、定められた女の宿命であるかのように。すでに道子の顔には、苦痛の表情はなかった。そこには、激しい陶酔の面持ちがあるだけであつた。

激しいムチ打ちが終わると、佐吉は女の体を梁から下ろした。縄を解かれても道子は、ぐったりとしたまま動く力もなかった。ただ、うつろな目つきを、力なく男の上ですべての力尽きて、白い裸身を長々と横たえた女の体を、軽々と抱き上げて、佐吉は外へ出た。

水車に縛つて

外は明るい月夜であつた。白い月の光が、女を抱きかかえた佐吉の上に冷たく光った。佐吉は、柔らかな草の上に静かに、女をおろした。

縄はほどかれていたが、道子は動こうとしなかった。今はもう全身を襲った、妖しい感覚の陶酔と、まださめやらぬ激情の余韻を反芻し、さらにこれから始まる期待に、胸を打ち震わせていた。

月の光が、これからくりひろげられようとする情痴のかずかずを、あますところなく照らし出すかのように輝いていた。峰々の上から吹きおろした風が、木々の葉を震わせて通り過ぎると、月の光も少しばかりゆれたようであつた。

黒々と静まるように立った小屋の影、その前に、クルリ、クルリと回る水車、それだけが、生きているようであつた。水車の輪からしたたり落ちる水が銀色に光っていた。

佐吉は、細い流れを伝わってくる水を落とす水車を止めた、月光に濡れて光る水車の大きな輪が、中空を指して止まった。

深夜、動あるものが静止した。静寂の瞬間

であった。

佐吉は、柔らかい草の上に肢体を伸ばした道子の腕をつかんで引き寄せた。ずるずると地面を引きずって水車のそばまで運んだ。道子は、うっすらと目をあけた。

もう、たとえ、どのように痛烈な感覚が彼女の肉体の上に加えられても、それに対して抵抗する力はなかった。なかったというより、体の奥底から湧き上がるひそかな期待が、全身を包んでいた。

佐吉は、女の体を水車のそばまで運ぶと、軽々と持ち上げた。

両手、両足を、思い切り伸ばし、水車の心棒をまたぐ格好で、水車のケタに思い切りハリツケられた。

縄が腕に触れた瞬間、道子は、電撃にも似たものを感じて、いやいやというようにわずかに首だけを動かした。

しかし、佐吉の荒々しい力は、そんなものを一切抑圧するように激しかった。

手足を水車にハリツケられた女の姿は、ピンで押えられた虫であろうか、あるいは、翅を思い切り伸ばした白いチョウのようでもあろうか。

冷え冷えとした、山の夜気が、恥ずかしさ

と苦痛とともに、女の全身を覆っていた。

道子は、水車の心棒の上にまたがされた格好で、身をよじった。たとえ、どのように身をよじったところで、捕われのチョウであった。この苦痛と恥ずかしさから逃がれ出すことはできなかった。

佐吉は、落とした水を、ふたたび流し始めた。水車は、ギィーッと、重苦しい音をたてて、グラリと大きくゆれて、回転し始めた。

水の流れるままに、水車はゆるい速度で回転した。ハリツケられた白いチョウは、夜光虫のように白い燐光を発してゆれ動いた。

道子は水車の上で、ものうい目を開いた。グラッと頭から下がるときは奈落の底に吸いこまれるように、水車の輪が登りつめるときは大空に舞い上がる気持ちであった。そのたびに、月明かりのなかに浮かぶ山の姿が、回転しているようであった。

このまま回転すれば、どこまで落ち、そして、どこへ舞い上がるというのだろうか。ただ、水車の回転に合わせて、身を責める苦痛のなかに静かに落ちこんで行く自分の姿を発見していた。

佐吉は、目の前で回転する、白いチョウの姿を、目で追っていた。

「回る、回る。もっと回れ——」

今は、うつけた人のように、回転する白い裸身に、心地よげに見入っていた。

やがて、寒い冬も去り、若葉の萌えるころになると、この山深い部落にも、ちらりほらりと登山者の姿が見えるようになった。

佐吉の縊死以来、誰も気味悪がって近寄らない水車小屋に、ある日、若い女ばかりのグループが足を止めた。

彼女たちは、この鄙びた水車小屋を、さも珍しそうに眺めていた。

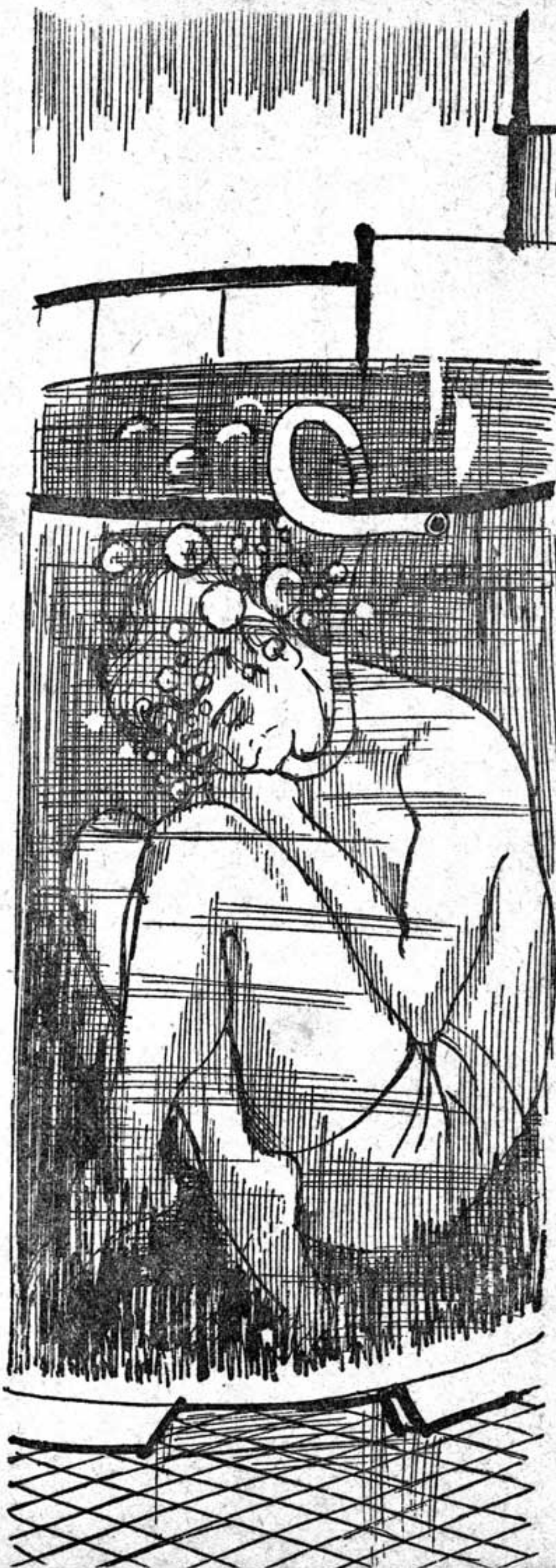
そのグループから離れて、感慨深げに眺めている一人の女があった。高階道子であった。彼女は、この水車小屋で起こった、異常の一夜を、心静かに反芻していた。

水車は、あのときの姿で回っていた。彼女が縛られた縄であろうか、水車のケタにからまったまま、水を潜り、半ば腐りかけてが、一筋、二筋、ヘビのようにならみついていた。彼女は、先を急ぐ友達の声も聞こえぬかのように、そこに、立ちすくんでいた。

道子の手のなかから花びらが一ツ二ツ、ハラハラと落ちた。花びらは、流れに落ち、静かに、どこへとも知れずに、流れていった。

異常願望を昇華できる

↓刺激遊戯4つの法



真野麗

ぴいばあ遊び

なんびとの体内にも潜んでいる異常性的嗜好のなかでも、窃視欲は、とくに普遍的なものである。男で「覗き」に興味をもたぬ者など、おそらく一人もおるまい。女に

しても、男にくらべて強弱の差はあれ、同じことである。

しかし、他人の入浴姿や情事のさまなどを覗き見することは、ゆるされない。万一、みつかりでもしたら、軽犯罪法でひっぱられる。

そこで、その安全なる充足方法として、夫婦のあいだ、ないし恋人同士で窃視の欲求を発散させるには、どうすればよいかということになるのだが、筆者は、そうした善良な人びとのために、「ぴいばあ遊び」というのをすすめている。

別に、それに必要な道具もいらぬし、金もかからない。あいてが、あなたから見られて、いるということを知らない状態を、ぬすみ見すればよいのである。

こういふと、いつも見あきるほど見ていゝ妻（あるいは夫）のすがたなど覗き見したとて、なんで窺視欲を満足できるものか、などという人がいるかもしれない。ところが、どっこい、そうではないのだ。方法を示そう。

たとえば、夫を窺視者とする。彼は、夜もややおそく勤め先から帰って来る。そのとき家へはいる前に、かねて仕掛けておいた窓の隙間とか、節穴から、妻の居間をそつと覗くのである。

妻は、夫をまつつれづれに、電灯の下で本を読んでいるかもしれない。縫い物をしているかもしれない。あるいは、居眠りをしているかもしれない。いずれにしても、他人を意識しない、単独のすがたで、彼女はいる。

そうした妻のすがたを、夜の闇のなかからじつとぬすみ見していることは、夫にとつて、他人のそれを窺視するとはまた異なつた、異常な興奮をかきたてられる。

ときには、夫がいままで気づかなかつた妻のふしぎなくせを、こうした窺視でみつけることもあるかもしれない。また、妻がひとりきりの、セックスの慰めをもってゐることを、発見しないものでもあるまい。後者の場合などは、夫は、性的興奮とともに、妻にたいして、なにかいじらしいといったような気もちになるにちがいない。

また、妻の入浴のさまを、あいてに知られずに窺視することも、興味がある。

筆者の知っている、ある中年の男性は、いつも妻との交渉が円滑にゆかないことをかこつていたが、筆者のすすめで、この方法をこころみたところ、その夜、妻との愛撫を、いつにない満足ですますことができたと言つていた。

妻の裸体そのものが、かれをエキサイトさせたのでは、もちろんない。他人を意識しない、妻のひとりきりの入浴姿態が、窺視者たる夫に、異常な刺激をあたえたのである。

次にまた、フラウの外出をひそかに尾行するという方法もある。

途中の電車のなかでのフラウのすがた、

デパートでの買いものさま、店員とのやりとりのあれこれ——別に何の奇もない、そうした妻のようすを、あいてに知られないようにひそかに観察するのだが、これがまた、マンの窺視欲をぞくぞくするほど満足させることができる。

もしまた、フラウがダンスホールにでもはいつて、ほかの男をパートナーに踊るさまを、そつとうかがいみることでできれば、フラウから別の魅力をみいだせるものである。

以上とは逆に、フラウが窺視者となる場合も、マンのそれと大同小異だ。

医者と患者遊び

幼いころに、同性の友だち同士、あるいは異性の友だちと、「お医者ごっこ」という遊びをした経験をもつ人は、すくなくないだろう。子どもの展覧欲——医者となる側には窺視欲だが——を満足させる遊戯である。とくに女の児が好きのようだ。

これを、成人の男女がプレイとしてやるのが、筆者のいう「医者と患者遊び」である。

展覧症もまた、ごく普遍的な現象といっ

ていいだろう。そして、その欲求は、夫婦または恋人同士の閨房裡で、ほとんど充足させられているが、これを、医師にたいする患者の立場となつての遊戯として行なうならば、また、別種の興趣があるというものだ。

準備用具としては、聴診器と、白衣もあればあるにこしたことはない。そのほかは家庭常備の医薬・器具で、じゅうぶんである。

まず妻が患者、夫を医師とする。医師たるマンは、白衣をつけ、手指をじゅうぶんに消毒したのち、ベッドによこたわるフラウのからだを診察しはじめる。

もちろん、フラウの展覧欲にかかわりのない体部は診なくともよい。

展覧症者が展示を欲する部分は、その者の主たるエロゲン・ゾーン（発情帯）である。マンは、フラウのそうした体部を知りすぎているであろうから、それにたいして、聴診、打診、触診などをこころみるのだ。

もし、それが乳房であれば、双乳の谷間に聴診器をあてて、心音をきき、あるいは乳房や乳くびを触診する。

このさいマンは、けっしてふざけた態度をとってはいけけない。ほんとうの医師のような、子細らしい厳しい表情であればあるほど、フラウの展覧欲はみたされる。

もしまた、フラウの主たる展示欲求の体部が臀の部であれば、マンは、彼女の臀の双丘に、尻打ちにも似た強度な打診を加えたのち、二つの山のその谷間の奥深く鎮座している、幽遠なところのアヌスを触診する。

臀部展覧症者にとって、この部分、つまりアヌスの展覧こそ、おそらく最高の快感なのではないだろうか――

「これは浣腸しなければいけませんなあ」そんなことをマンはいつて、フラウのアヌスに浣腸器を挿入することも、フラウの展覧欲を、いっそうまんぞくさせるであろう。

そしてさいごは、「内診」である。

ウィルヘルム・シュテーケルが、こんなことを言っている――

「女の患者は、しさいに内診してやらなければいけない。彼女らは、それを期待しているのである。もし、医者が、女患者の内診につめたく無関心だと、彼女らは、不満

といかりを感じ、その医者の悪口をいったりする」

女性に恥部展覧症の多いことをいっているのだ。もっとも、これは、医者にたいしての場合であるが……。

そこで、「医師」たるマンは、ていねいにフラウの内診をしてやらねばならない。ふつう女性というものは、羞恥心が強いから、おのれの秘所になにか異状を感じても、それが微弱なときは、夫にさえも話さないことが多い。

ところで、この微弱な異状が、放置しておく、時として大きくなることもある。ひどくなつてから、医師に訴えても、治療がおそい。

そこで、フラウは、この「医者と患者遊び」の機会に、マンの前に、その秘所を開いて、おのれの展覧欲を充足させるとともに、そこに異状あるやなきやを検べても、例えば、禍を未然に防ぐことができるわけで、一石二鳥の効果というものではないか。

自虐遊戯

前々号にかいた刺激遊戯も、この編の上

掲のものも、すべて配偶者同士または恋人同士など、複数で行なうプレイばかりなので、こんどは、そうした相手のない人のために、ひとりのできる遊戯の方法を、二、三挙げてみよう。

その一つは「自虐遊び」である。

自虐とは、サディズムとマゾヒズムを同時に自己一体で満足するという、異常セックスの形である。

自分で自分の身体を傷つけたり、なぐったりするのだ。昔の宗教家、ことにインド教徒の苦行者は、かならずそうした自己虐待をやって、修道したという。

一週間も十日も断食をしたり、牛糞や馬糞だけを食べたり、片手両手を長時日のあいだ高く差し上げていたり、もっと激しいのでは、釘の上にすわったり、焚木を燃やして、炎々たる火炎のなかにじっとすわっていたり、太いクサリを首からからだぜんたいにまきつけて、いつまでも立っていたり、などなどの、残酷なまでの自体損傷の苦行をおこなった。

そうした苦行者のなかには、おそらく、自虐の快感を与えていたものも、すくなくなかったのではないだろうか。

が、ここにいう、「自虐遊び」は、さいしょから、サドあるいはマゾの傾向の者が、ほかにめいわくかけることなしに、自分の身体でそれらの欲求を発散させようという方法である。偽善的苦行など、それこそクソくらえという遊びだ。

この遊戯は、自分ひとりでサディストとマゾヒストの一人二役をしなければならなところ、趣向がある。

まず、遊戯者を男性としよう。

彼は、顔に怖ろしい悪魔の仮面をつけ、胴から脚の前面に、黒の細めのズボンをはく。もっとも、はくといっても、前がわだけだから、足くび、腿、腰のあたりの要所を、細いひもでうしろへ結んでおけばよろしい。

これで、サディストの着付けができた。つぎは背面で、このほうは、責められる少女役を現わすのだから、頭のうしろにオカッパ、ないしはお下げ髪のカツラをかぶる。背には、ピンクかなにかのシュミーズまたはスリッパをつける。そして、これもなまめかしい色のパンティー。このくらいでじゅうぶんだ。

両面の扮装がおわったら、遊戯者は、ム

チを手にして、なるべく大きな三面鏡の前に立つ。

彼はまず、前面のサタンの姿をじゅうぶんに鏡にうつしたのち、

「こやつめッ」

こわらしい声で一喝とともに、すぐに鏡面にうつしかえた少女姿のスリッパをひきむしり、パンティーをひきはいで、むきだされた臀へ向かって、ぴしりッと鞭をくれる。

一撃、二撃……満足のいくまでムチを振るうがよい。

「あれーッ」とか、「痛ッ……」とかと、少女の音色も合の手にはさはさめば、申し分あるまい。

この場合、遊戯者がマゾ傾向のほうが強い男性のときは、以上とは逆に、身体の前を女の着付けにすることだ。女髪のカツラ、胸には乳パット、ブラジャーをつけ、股間の男のシルシは、上海の相公がしたように、サラシかなにかで胴へ締めあげて隠す。

背面は、生地のままのはだかの男姿でよい。そして、サディストたる前面の「女」が、背面のマゾの男を鞭打つのだ。

次に、女性が遊戯者の場合だが、これは、前面だけでサド・マゾの二役を現わしてもよろしい。

たとえば、目の上に黒いマスク、手の片方に黒の手袋、脚の片方に黒ズボンをはいて、サドつまり男性を象どり、乳房のあたりや裸のほうの脚はマゾつまり女性の姿とみて、それを交替的に鏡面に映しながら、一人二役を演じるわけである。

胎児遊び

強度な孤独型の人には、胎児妄想つまり子宮内妄想をもつものがすくなくない。これも、学問的に異常性的嗜好のなかに加えられている。

胎児妄想とは、自分は女性の子宮内にいるという妄想である。

そこでは、外界のきびしさから保護されているという感じをうけることができるからなのだ。

こうした妄想は、かれらの夢にあらわれ、そして、目覚めている日常生活をも、一種の夢のなかの生活にしてしまう。つまり、睡眠状態とほとんどかわりのない白昼夢にとらわれているのだ。

かれらが大きな室を嫌って、小さな室を好むのは、そうした子宮内妄想の夢から来ているのである。

よく、小さな便所のなかで、時をすごすことを好む、孤独タイプの人がいるが、こうした人は、一応この傾向をもつものか、すくなくとも、それに近いものとみてよいかもしれない。

まえおきが長くなったが、こうした夢の家のために、私は「胎児遊び」というのを案出した。

その一つの方法は、自分の部屋の押し入れの上段または下段を半分ほどに区切って、そこをプレイの場所とするのである。

そして、そのなかに、丸く夜具ふとんを敷きつめ、その空洞内を子宮ウテルスと考える。

遊戯者は、そこへ毛布を耳までひっかぶってはいりこみ、胎児のような形にからだを折り曲げる。

これで押し入れの戸をしめてしまえば、遊戯者の子宮内妄想は、かなりにみたされようというものである。

その二つは、胎児ははだかでないければならないということから、浴室の小さな浴槽のうちをウテルスに見立てて、裸でその

なかにはいるのだ。

浴槽はもちろん、湯がはいっていたほうが、暖かくてよい。湯船のふたはしめるが、そのすきまから、水道の蛇口につないである細いゴムホースを浴槽のなかに入れ、その先端を遊戯者がくわえる。これは、へそのおの見立てだから、口でなく、へそにあてれば、いっそう直実感があるが……。

入浴は多くの場合、かれらの性的興奮を招来するようだ。

「私は入浴をするたびに自慰をする」

と子宮内妄想をもつ二十八歳のある医師は告白している。

そこで、そのための頻度なオナニズムが、かれらの健康に害があるとあれば、こんなあそびはどうだろうか――

それは、遊戯者のグラランスだけを湯の上に浮かべて、その上に羽はねをむしったハエをとまらせる。

ハエは逃げようとするが、四辺が水なので、逃げることができず、グラランスの上をあちこちと這いまわるわけだ。

名づけて「ロビンソン・クルーソー」という遊びである。

ネ ク タ ー ル 魅惑の水を求める男



医学博士

松井宏水

この患者は、私が受け持った患者のなかで、一番特異な「悩み」をもっていた……。まず率直に、彼の悩みを聞いてみよう。

幼い日の記憶

まず、私の、この「異常な性癖」の原因となるだろうと思われることを、先生に申し上げます。

私には、生後二十数年間、女友達というものがありませんでした。これは、私が真面目なタイプだったということです。そして、日本の戦争政策が、私にそれが正しいことだと教えていたからだと思います。

私が、そうした時代に、学校時代も首席を争い、級長選挙で級長に推選された立場が、ますます女友達をもてなくしていたとも考えられます。女性からは、好かれるより尊敬されるという、つまらない立場に立っていたというのでしょうか。

こうして、女性との交際のなかった私にとって、女性は、神秘的な、手の届かない高嶺の花といった憧憬的な立場に立っていたのだと思います。

また、私には弱い者に味方し、強い者と戦うという性格が強いことも、私の病癖をつく

り上げて行った要素だと思います。元来が乱暴でしたが、単純に直接行動をとる性格でもないのです、内攻的にこの性格が進行し、それが弱い女性に同情し、その女性のやることなら頭を下げていいと妥協しているのだと思います。

したがって、今でも、私のマゾヒズム観は、強い者が弱い者に虐げられて悦びを感じることであって、弱い者が強いものに虐げられて悦ぶことには、何か割り切れないもの、つまり、社会的にそれでいいのさと放っておけない人権問題的な憤りさえ感じています。

このマゾヒズム観が、私をして、社会的にも許される考えだと自己満足をさせて、私の病癖を育てていったのだと思います。

こうした私が、なぜ小水愛好に入ってしまったか、私はまだ、その原因について思い当たりません。

幼いころ、あれは小学校二年生のときでした。ちょうど、その日は大雪の日で、私が母に連れられてお使いの帰り道、私より三ツ四ツ年上の女の子が、軒端でしゃがんでおしっこをしていたが、そのとき、下の雪が二つに割れて、そこに黄金色の跡がつけられていくのを、つばをのみながら、

「ああ、あの、汚された雪をつまんで、たべてみたいなあ」

と、呼吸をはずませ、どうにもならないうちに、母に手を引きずられて家に帰ったことはおぼえています。

このときの女の子のポーズを空想しながら、私はその後、一、二回、留守番のときに、ご飯に自分のネクタールをかけて食べたこともありました。

しかし、それでいながら、私は、どちらかというと、幼いときから潔癖な性質で、虫が一匹、お汁のなかに落ちていても、そのお汁を絶対に口にしようとせず、茶碗にネズミの糞が一つあっても、そのご飯は食べようと思わないほうです。

きたないという物の見方、私の場合は、それが変わっているとしても申しようか。私には、きたないということが、他人を不幸に落とすような人間の気持ちとか、または、人間の肉体を害するような病原体、愛情を伴わない場合の不潔物、こうした物と比較すれば、自分の愛情を感じたときのその物は、たとえそれが、他人から見てもどんなにきたないに見えても、きたないと断定することはできないと思います。

まして、自分の愛する女性の体内から、直接排出されたものは、純粋でこそあれ、なんでも、きたないと思うことができるものでしょうか。

きたないということに対して、私の考え方は、この面に固定されて行ったのです。したがって、私はそのとき、とくに好意をもったただ一人の女性についてこそ、その女性の便器にしてくれないかと願い、その女性の排泄のにおいのしみたパンティー、または排泄の後始末をしたキレー紙をもらいたいと、心から思うようになりました。

そのほかに、たとえばどんな美しい美人だと思ふ女性があつたとしても、少しも、そうした欲求は感じないし、むしろ、そうした欲求に對することを想像してさえ、激しい不快感を抱くのです。

妻の前にひれ伏して

こうした私が、何を考え、どうしたかを、次に申し上げます。

まず、データの面から申し上げますと、私が結婚したのは二十七歳、妻は六ツ年下で、まあ平凡な結婚でした。結婚するとき、私は、すでに妻に對して、現在の私の性癖があ

るらしいことを打ち明けておきました。

妻から、いや女性から、初めてネクタールをのませてもらったのは、結婚十カ月目のことです。

あけ方、寝床で味わった「魅惑の水」（この日、このように命名したので）は、私の口中に溢れるまでは素晴らしくおいしい飲みものであり、胃の腑に流れるころは、なんとも知れない奇妙な味と思ひ、しかも四、五時間とするとどうにもならないほど、また、ほしくてたまらなくなる、忘れがたい、やみぐたい欲望を誘う、妖しい魅力を持ったものでした。

結婚後、その日までの十カ月間に味わった、この種傾向の行為を申し上げますと、結婚四日目には、すでに妻の口にした物、半分嚙った残りの部分などを食するときに、異常な興奮をおぼえました。

そして五カ月目には、妻に嚙んでもらって、口移しで食べ物をとるようになり、さらに、そのさい、食べ物をドロドロになるまで嚙んでもらってから口移しで食べています。

また、「魅惑の水」の味を覚えた私は、一カ月目に第二回目、三カ月日には第三回、第四回と続けて十二回味わい、こうして最初の

一年間に六十四回、私は妻の前にひれ伏したのです。

二年目以後は、鼻紙の鼻汁をなめとらせてもらったり、「魅惑の水」に、ミルクや酒、シロップなどを入れてカクテルを作ったのん

だり、その方法を変えて、この四年間、今は、正確な記録も失ってしまいましたが、ともかく、二百回近くのデータはつくられたわけです。

一日に五回程度の妻の全ネクターの量を



いただいたのは三回です。そうして、当然の発展として、妻のお下がりをいただいたのは魅惑の味を覚えてから四年目のことであり、その日から三日目に、第二回目のご馳走を拝しましたが、これは、やはり、空想的産物としてこそ、やるせない魅惑をそそのめるのであって、その後、あまり行動的には求めず、食べさせる、ご馳走する、という示唆行為として味わっています。

妻との行為の面で満足できないところは、意中に占める他の一人の理想的女性を対象とした空想の発展、そしてまた、書籍をあさることによって補足しているわけですが、この書籍あさは、終戦直後から始まりましたが、まだ、徹底した作品には触れることができず、なお多くの未練を捨てずにあります。

「華嚴の滝」と「岩清水」

それでは次に、どのようにして妻のネクターを求めるかを申し上げます。

通常行なわれるのは、座敷のなかの「お厠」です。仰向けになった私の口中に、体内の愛情の水流をほどばらせるのです。私は座敷を濡らさないように、全水流を受け入れる義務が課せられるのです。

時間はおもに就床時ですが、私としては、勤め帰りの直後をもっとも望みます。しかし夕食の支度に忙しい妻は、なかなかこの時間には相手になってくれません。

夕食の支度に忙しい妻は、時には「生ビール」をのませてくれます。

「コップを持ってらっしゃい」

といわれると私は、特用のコップを持ってとんで行きます。妻は支度の手を止めて、コップを受けとると、ニコッと笑って、生ツバをのんでいる私に、つくられて間のない「ビール」を、コップになみなみと注いで渡してくれるのです。

「おビールのみながら、もう少し待ってて頂戴ね」

こうして妻は、また忙しく夕食の支度にかかるのです。

私は、妻からもらった「ビール」をチビチビと味わいながら、大きな満足に浸っているわけです。もちろん、この「生ビール」は、妻の体内でつくられたものです。

あるいはこの「ビール」と同じ方法で、「紅茶」がつくられることもあり、「ミルク」や「シロップ」などでカクテルがつくられることもあります。

しかし、この「カクテル」は、半々にした程度では、はるかに妻のネクタールの妖しい味に占められています。

「どう、おいしい？」

「おいしいよ」

私はそう答えるのです。

食事のときには「お茶漬け」として食べさせてくれるときもあります。これは、タップリとかかっている大変ですが、ご飯がしめっている程度がいいと思います。妻の気分をこわさないよう、妻の食事の終わったところとか、ともかくあまり行ないません。

「いいこととしてあげるから、ついていらっしゃい」

妻に連れられて風呂

ニューフォトのセクシードレス

今、評判の当社のおしゃれ下着類各種

(例一) ベビードール型



(例一)

生地……ナイロンオーガ
ンディー
色……赤・黒・ローズ
サイズ……大・中・小
ナイロン透き通りパンテ
ィ付き

¥1,900 (〒100)

(例二)

当社独自のデザインにな
るビキニパンティ
生地……サテン、前レー
ス付き ¥500 (〒30)

(例二) ビキニパンティ



30円同封お申込み次第、各種ドレス・下着類のカタログ及び直接焼付け写真送呈

東京都杉並区大宮前6-412 ニューフォト社洋品部

場に入ると、

「そこに寝て、アーンと口をあけて……」

と言われます。これが「華嚴の滝」です。

奔流が顔一面に飛沫をとばし、口中に流れ込むのもまた一興です。

トイレでは、「岩清水」が行なわれます。

かがんでいるうしろから両手を伸ばして、手ですくい飲みをするのです。この場合、手に触れる生暖かい液体の感触を楽しむこともできるのです、よく行なわれます。

愛する人の固形物については、私は、から「岩清水」と同じように、両手で受けるのですが、

「みんな食べておしまい」

といわれても、ほんの一口で終わりにしてあります。これは「お掃除」を舌でするのはほとんど効果も薄いし、むしろ「お洗濯」といって、ガーゼに拭きとり、そのガーゼを口中のツバと舌できれいにするとところが、いいのではないかと思えます。

こうしたことは、妻に対する激しい愛情が湧いたときでなければ行ないません。元来が、やはりマゾ的な妻は、私の欲求に対して応ずるよう努力しているというのが本当のところでしょう。ただ、私の病癖をよく理解し

てくれているので、適度に行為をくりかえして、私もそのために妻以外の女に現実的にこれを求めようとあせったこともありません。

一人の男の子の父親として、ささやかな生活のために産児制限を考える夫婦にとって、夫が、家庭と妻に対してマゾ的であり、外にあってはじゅうぶんな活動をする、そしてマゾとしても肉体を傷つけて、また疲労を多くして、日常活動に支障を起こすことはやめたい。こうした欲求に対して選んだ現在の私のやっていることは、正当なのでしょうか。ただ心配なのは、妻のそのなかに含まれている「尿素等の人体に及ぼす影響」であります……。

わたしの忠告

以上が、この患者の「悩み」だったが、これに対して私は、こう答えるしか方法がなかった。

——愛する女の排泄物を飲用して汚物視しない感情は、この人の独占する世界でありますから、いかようにでも味をつけて、ご自由に賞味してください。ただし、同じ排泄物でも、唾液とか涙とは違って、その肉体的意味を考えてください。

つまり、人体内では価値のない有害物ばかりです。ですから、これを飲用することは、精神的にどうあろうとも、肉体的にいいはずがありません。

健康尿の、一日における排泄量とか、その含有成分、尿素、尿酸、アンモニア、各種塩類など、化学的なものから、細菌学的なものを検査してみますと、驚くべき内容をもっています。個々の成分の量においては、さして悪い作用も考えられないといえます。

この人の場合、最愛の女性のものであり、性的興奮を伴っているという点が、大いにこの悪作用を緩和しているのではないかと考えられます。

また、こういうことは、個人差もはなはだしいのではないかと考えられます。

なお、月一回ぐらいは、医師について、血圧測定、尿蛋白、糖、尿沈査などの検査を受けられるよう、おすすめます。

幼いころから対女性被圧感情を、自分で分析してみるのも、また、他人の経験、写真などによって霧散させることも、よい解決策であります。

ただ、はなはだしく病的感情に陥って、自責の念に駆られることは禁物です。

— 告白小説 —

美しきムチの下で

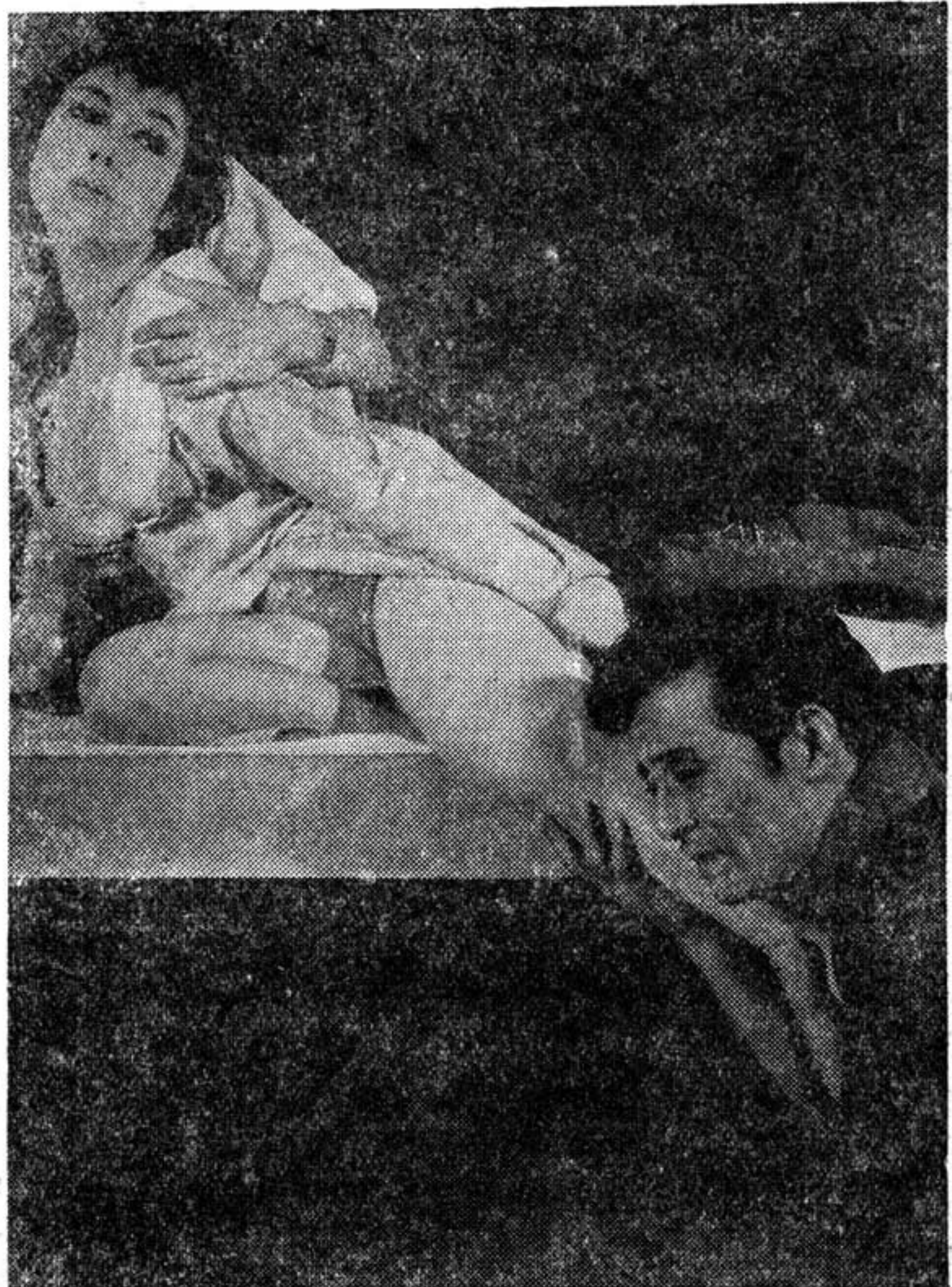
とやま・かづひこ

秘密の味

—— 今晚九時、いつものところへ来い。
美^{うつく}しの女神、私の女主人、あき子様から、
待ちに待ったお電話がかかりました。

六十名の使用人をアゴで使う、食品会社の

社長、〇〇区議会議員で、年は五十八歳、人
もうらやむ私ですが、ひとたび女王さまから
お召しを受ければ、私は、社長としての威光
もプライドも、いいえ財産も家庭も何もかも
忘れ去り、一匹の犬と化して、指定の場所へ
あわてて飛んでゆきます。



私が、あき子女王さまのお見出しにあずかったのは、半年ほど前のこと、"すみれグループ"の例会の夜でした。

新聞や週刊誌を賑わした"すみれグループ"という愛好家の会合にさそわれて、かねがねそんな団体にはいりたい希望をもっていた私が、五万円の入会金を支払い、月々の会費一万円、パートナーには、おつき合いいただくつど三万円の謝礼を差上げるという規約を、喜んで承知したのは、私の収入から言えば、その程度の負担はなんでもないことなのです。

私には、人にいえない趣味があります。

それも、少年時代から、いつとはなしに体内に植えつけられた趣味が、相変わらず胸のなかにくすぶりつづけ、今では、どうにもおさえ難いものになっているのでした。

今から四十年以上も昔のことになります、ある作家の『少年』という有名な小説を、私は読みました。

その小説の終わりちかくで、主人公が、美しい年上の少女から、無理矢理に、あるものを飲まされるシーンがあります。

これが、私には大きなショックでした。

——自分も、そのように、美しい女性か

ら、ひどい目にあわされたり、汚物を口のなかへ入れられたら、どんなだろう。こんな空想が、少年の私の心のなかいっばいにひろがりました。

後日、家で働いていた見習い女中のおきよにせがんで、その小説にあるようなことを実行してみました。まさに失神せんばかりのショックだったことを、今日まで、ありありとおぼえています。

それからというもの——あるときは、人妻のそれを、またあるときは、家で働く美しい女中のそれを、そして、またあるときは、金にモノを言わせて商売女性のそれを。

金にあかして、買い求め、飲み、くらって、はげしいショックを感じたこともしばしばでした。

私が肌身はなさず持っている秘密ノートに記された女性の名は、わかっているだけでも一〇〇人にちかく、よくも今まで、これだけの女性を、と、自分ながら感嘆しています。

私の体内には、一〇〇人の女性そのもの、一〇〇人の女性の秘密の味が、たくわえられているわけで、よく病気をしなかったものだ。性病が口にはいることを考えたこともありませんが、異常体質というのでしょうか、有

害どころか、私は若いころから、病氣らしい病氣をしたことはありません。

聖なる時間

例によって、あき子様は、おみ足の下に伏すドレイの私に、十万円の現金を献上することを命令されました。

社長として、礼金の支出は、それが営業上必要なものなら、カンタンに、私のサインひとつで経理から支払われますが、いくらなんでも、理由のない金は出せません。

しかし、"すみれグループ"で、はじめてお目にかかったときの、あき子様の態度は、まさに私の趣味にピッタリで、自由奔放に、私を犬として、思うさま扱ってくださって、お別れするときには、ドレイの接吻まで許してくださった、私にとっては、天にもものぼる気持ち存分に与えてくださった、得がたい女神さま——。その女神さまが、

「イヤなの？ いいわ、イヤなら、たのまないわ。そのかわり、もう二度と会ってやらないから！」

美しいマユをきりりと上げて、ムチをつかみ直し、迫ってこられると、私は、洩る心もうせて、かたんに、小切手にサインをして

しまうのでした。

「うん、いいコ、いいコ。じゃ、たっぷりゴチソウしたげる……」

現金に、表情をくずした女王さまは、ニコリ、美しい片ほおに笑みを浮かべて、ナイトテーブルの引き出しをあげ、白い錠剤を取りだすのでした。

「きょうは、一度もゆかなかったから、たくさんかもしれないよ」

言いながら、ふたつぶ……三つぶ……その錠剤を口にふくみ、

「ビール……」

と、命令されます。

床に、ひざまずいた私は、このお声を聞くと、待ってましたとばかり立ち上がり、イソイソとビールをテーブルに運び、チーズやクラッカーを並べるのです。

白いクスリは下剤、ビールは、尿の出をたくさんにします。

……それから三十分間も、あき子様は、ドレイの肩に楽々と腰をおろし、ビールをたのしんでおられました。やがて、待ちに待ったその時が来ます。

あき子女王様のご意志は、無言でいらっしやうとしたとしても、お尻のデリケートな動き

で、じかに犬の首筋に伝わるのです。

……そして、聖なる十分間……二十分間……

……あき子様は、身も心もサッパリと、ドレイから離れられ、そして、奉仕した私も、丁寧にお辞儀をして立ち上がります。

「これで、サッパリした。サア、お帰り、ジョン！」

女王さまのご命令はゼツタイです。

犬は、口のなかに生々しく残るあき子様を楽しく反芻しながら、ドアをあけて出てゆきます。

よほど、あき子様のごきげんがよいときは、オミヤゲを賜わります。

美しい絹のハンカチに包まれたそれは、私のポケットのなかに大切にしまわれ、これから、つぎにお呼び出しをうけるまでのあいだ、私の大切な秘薬として、用いられます。

アクロバット

お気が向くと、アパートに私をお呼びつけになり、美容体操のお相手や、このごろはじめられたアクロバチック・ダンスの助手をさせていただきます。

あき子様は、二十三歳の女ざかり。ゆったりした大柄のおからだ、お肌の色は、雪より

も白くという形容がピッタリする輝くような美しさで、いつものことながら、ウットリいたします。

ファッション・ショウのモデルという職業がら、おからだの手入れは、実に入念に行なわれます。

美容体操のときは、邪魔になるコスチュームはいっさい脱がれ、基本動作のウォーミングアップから、全身運動、ドレイの私のからだを馬に使っての馬乗り練習など、たっぷり三十分も元気よく動かれます。

お汗の清掃も、ドレイの大切な役目のひとつで、お肌が汗ばんでくると、ドレイはおそばにじりよって、お汗の始末をいたします。お肌が大切なので、ザラザラしたタオルは、禁物です。やわらかい人間の舌が、お肌にはもっともよろしいそうで、ドレイの、ポツテリした部厚い舌が、全身くまなく、タオルの代わりに使用され、清掃とマッサージを兼ねた入念なお手入れがされます。

アクロバットは、週に二回、これも、美容のためには欠かせない大切なトレーニングです。

床にマットをしきつめ、美しいお肌を、おしげもなくさらされて、思うがままに、回転

や、逆立ち、天井から、壁の四隅から、サンサンと輝かされる、まばゆいまでのライトに照らされて、桜いろに上気したお肌が、神々しいまでに輝き、その素晴らしさは、なんともいえません。

アクロバットのときの肉台兼助手も、ドレイの大切な仕事です。

床に寝て、顔を差しだす。その顔の上に、腰かけて、かわるがわる、脚を天井につき上げるのが、あき子様のもっともお好きなポーズですが、台になるドレイは、物すごい圧迫を顔に受け、目玉は飛び出し、鼻はつぶれ、あわや息も止まるかとおもわれるほど苦しいときもあります。

横を向いた頬の上に、片足かけて立ち上がられるときも、物すごいショックでした。

あとから、頬をみましたら、クッキリと、あき子様のおみ足の形のとおりに充血し、そのアザが、二、三日消えないこともありました。

アクロバットというものの性質上、おからだは、すみからすみまで、ドレイの目に飛び込んでまいります。ドレイは、あき子様の肉体のすみずみまで知っているわけで、そのとき、垢や脂でよごれがあれば、いち早くおそ

ばにまいり、舌でもって拭わなければなりません。

こうして、足指の黒い垢や、そのほかの、からだのどんなところのよごれも、注意ぶかいドレイの、忠実なサービスによって、美しいうえにも美しく手入れがされます。

いやな奴

あき子様の御前では、いやしいドレイにすぎない私も、会社へ出れば、鬼社長、ワンマン社長と、社員たちからは、恐れられています。会社には、女子社員も三十名近くおり、私の秘書のかづみは、女性として、美しいと若い社員たちにさわがれています。私の目で見て、あき子様の美しさからくらべたら、その足もとにも及びますまい。

あき子様のものだったら、どんなに極端にきたならしい、いやらしいものでも、喜んで口にする私ですが、社内一番の美女と言われるかづみのものでさえ、思っただけでも胸がわるくなります。

なぜ、あき子様のそれだけが、こんなに、高貴で、尊く感ぜられるのでしょうか——。男の社員のなかに、大光明といって、ことしK大学を出た青年がいます。

彼は、まだ見習いで、スクーターで、得意回りをさせていますが、兵隊の位でいえば、私を元帥とすれば、一等兵か、せいぜい上等兵、まだ、口をきいたこともない、ペイペイの社員です。

あき子様から、ひどい目に合わされる反動か、社に在るときは、むやみに社員を叱りつけ、気に入らないことがあると、横ビンタも平気でとばす——なにしろ、五尺八寸、二十二貫の大力自慢の私です。まして、大中ごときチンピラ社員など、叩き伏せるくらい、わけのないこと、いや、社員どもに気に入らないことがあれば、首をチョン切るくらいは朝めし前の私です。

どういふものか、私は、大中という奴が目ざわりで、こんな奴を採用したことを後悔しています。何かチャンスがあったら、あっさりクビにしてやろう、そう思うものですが、いつまでたっても、本社員にしてやらず、邪魔もの扱いにしています。

意外なひと

久しぶりに、女王さまから、お電話が、かかりました。

なにしろ、こちらから伺ったり、電話をす

ることは、嚴重に止められておりますので、あの美しいお声が、受話器の底からきこえてきたときは、感激に身がふるえました。

——来るとき、十万円もってきて……

イエスも、ノウもなく、このごろは、私をお呼びだしになるときは、きまって、十万円を持参するよう命ぜられます。

久しぶりにお目にかかれる嬉しさ、そして、きょうはまた、どんな方法で、存分いじめてくださるのでしょうか、それだけがたのしみで、イソイソと、ノックもせず、いきおいよくドアを引きあけます。

「やあ、きましたね、ドレイの社長さん」

意外にも、太い男の声。私は、ドキリとして、そこに立ちすくみます。

「まあ、中にはいれよ」

思いがけなくも、ドアの向こうに立っていたのは、私の社員の大中ではありませんか。

ふだんは、虫ケラとも思っていない大中が、私の大切な女王さまの部屋に、大きな顔で立っているのですから、私は、目をうたがいました。

「ハハハ、おどろくことあないさ」

「あき子、あき子はどこにいるのか」

「いいのかい、ドレイさん、女王さまを呼び

ずてになんかしたら、ムチが鳴るぜ」

「き、きさま。社長に向かって、何を言うか。ハ、はやく出てゆけ」

「黙れ！ 社長、社長とえらそうに言うな。

いいか、あき子は、おれの女だぞ」

意外も意外、こともあろうに、聖なる主人さまを呼びすてにしています。

「フフフ、ウソだとおもうなら、それ、あっちをしろ」

大中が、指さす奥の部屋をのぞけば、あき子様の、あの高貴なおからだ、ナワでグルグル巻きにされて、ベッドにころがされているではありませんか……

「どうだ、すこしはおどろいたかい。あき子はなあ、おれにしばらくられるのが大好きなんだとよ！」

大中は、ザマをみろという顔つきで、あざ笑います。

「キサマ、よくも、あき子様を……」

怒りにブルブルふるえて、私は、大中にかみかろうとしました。

「お待ち。犬は、よけいなことをしてはいけないよ」

ああ、あき子様のお声です。

私は、ふり上げた手を、ししぶおろしま

した。

新しいご主人

まったく奇妙な話です。

私は、お二人が仲よく横になったベッドの足もとに、首に犬の首輪をかけておとなしくすわっています。

お二人は、二時間も、キャッキツァとふざけておりましたが、今はすっかり疲れて、おやすみの様子です。

何がなんだかわからず、私は、ほんとうの犬のように、床にうずくまって、お二人のやさらかな寝息をうかがっています。

こうしていると、ほんとうに、犬になったような気持ちになって、

「ワン」

と、吠えなくなりました。

と、私の頭が、軽くコツコツとけられました。白く、きれいな足首、それは、見おぼえのあるあき子様のおみ足です。

トントントンと三つ軽くけったら、トイレのご用、と、犬はおしえられております。

ちゅうちょなく、私は、ベッドの下へもぐりこんで、便器を口にくわえて、ベッドの下にかしこまります。



「犬や、少しはわかったかい、アキラさんは、あたしの恋人、女王さまの大切なひと。だから、おまえにとっても、ご主人さま。よく言うことをきくんだよ」

「……………」

「ほんとに、おまえも可愛いそうだね。あたしのものを、クンクン、鼻をならして、飲みたがったりするから、こんなことになったん

だよ」

「……………」

「実はね、はじめから、あたしは、お前には内緒で、あたしのもののなかに、あるクスリをまぜといたんだよ」

「……………」

「それはね、長く飲みつづけると、中毒してしまうクスリ。お前は離れられないの」

女王さまは、ご用を足すあいだ、一人ごとのように、そう言われました。このとき、寝返りを打ったアキラ様が、

「アキコ、犬と、何の話をしてるんだ」

「お小づかいの十万円を出させるところよ。犬に留守番させて、二、三日、温泉へゆきましようよ」

「社長さん、三日ばかり、欠勤しますぜ」

皮肉たっぷり、私の顔をのぞき込みます。

「あーあ、ねむったら、すっかり疲れがとれたわ。アクロバットをしよう」

思いついたように、あき子様は、スラリとした美しい裸身で、ベッドから下りたちました。

「アクロバットもいいけど、おれは、犬の芸当がみたい。ひとつ、ムチをつかってみようか」

アキラ様は、面白そうにムチをとりあげ、いきなり、私と、あき子様を荒々しく向かい合わせにさせて、ナワでしばりつけ、

ビュウ……

と、ムチを振り上げました。

美しいムチの下で、一對のドレイは、思わず身をすくめます。

こうして、新しいご主人さまの足の下で、犬の新しい生活がはじまったのでした。

士に加えられた、目を覆う苛烈凄絶の責め苦



立石さま縁起

蘆 立 鋭 吉

そつくりのご神体

二、三年前のことだった。

私は、東京のX大学の民俗学研究会の人から、T県I郡にある立石神社の神体について見学の案内の依頼をうけた。

私は、趣味として民俗学研究会の会員の人であり、「フオークロア」という研究誌に、東京の近在のリングア（陽神石）について筆を執ったことがあったので、そんな依頼が来たのであろう。

S 駅に集まった七、八名の学生と助教授の先導として、バスもない山道を小半道歩いて、立石神社へ着いたのは午下がりであっ

下総の郷土史に残る残酷無類の拷問，青年武



た。早春の山気があたりに満ちていたが、比較的春のはやいこの地方は、早咲きの桜がちらほら、枯れたクヌギの枝のあいだからみえた。

神社といっても、小さな祠ほくらがあるきりで、古びた鳥居が一基立っている、雑然としたところだった。おとずれると、神主とも堂守りともつかぬ男が出て来て、それでも、うやう

やしい態度で扉を開けてくれた。

薄暗い堂内には、おびただしい大小の石製、木製のリングが立ち並べられてあり、壁や欄間にもリングを描いた絵馬が掛けられてあった。中央に黒光りのする厨子ずしが安置されて、新しいしめ縄がかけられてあった。

学生たちは、歓声とも感嘆ともつかぬ声を発しながら、リングに手を触れるもの、携帯

のカメラのピントを合わせるもの、スケッチ帳で写生するものなど、まちまちだった。

堂守りの老人は、いささか得意気に、

「関西は知りませんが、まず関東で、当神社ほどリングの数を集めているところはありません。明治以前には、この倍ほどあったのですが、廃仏棄釈のときに淫祠いんしとみなされて取り捨てられ、堂も破壊され、今日のような見る影もない有様になったのです。しかし、ご本体だけは無事でした。今は年一度しか開帳いたしません、皆さん方は大学の研究会の方々ですから、特別に開帳いたしましょう」といって、古風な鍵を鳴らして、厨子の扉をひらいた。それは、五、六歳の子供の等身大の石製の逸物で、頭の部分は人間の手擦れで黒光りがしていた。

しかし、近づいてよくよくみると、なまなましいリアルな写真手法を用いたもので、亀頭のみごとな線や、翻転した包皮、かつは無数に張った静脈までが、はっきり窺うかがわれるもので、リアルというよりも、一種のデフォルマシオンを感じさせるものがあった。

人々は、声もないほど驚いたようすで、この神体に見入っていると、堂守りは、「もとは、もっと実物に近いものらしかった

のですが、何分とも長い年月に、すっかり磨減してしまいました。石女は、このご神体に手を触れると子宝がさずかるというので、近在はもちろんのこと、東京からもはるばる祈願にくる方があります」

私は、欄間に『国土安泰、五穀豊穰』の扁額のかかげてあるのに目を止めて、この種の性器崇拜と農産とが必ず結びついていることを考えて、

「やはり農業の神としての信仰があるのでしょいか」

ときいた。日本民族の信仰になった生殖神は、そのまま農産神として考えられていたからである。

「この付近は、ごらんの通り百姓ばかりですから、自然と、農産の神として信仰されて来ましたが、一方、生殖の神として、子種のない方の信仰にも、なかなか靈驗あらたかなものがあります。その証拠として、このリングは子種を得た方々のお礼に奉納されたものです」

と言った。堂内に林立したおびただしいリングは、素朴な木彫りのものも、極彩色のものもあり、それらは息ぐるしくひしめき合った肉感を感じさせた。

「ここに、当明神の縁起があります。ご参考までにごらんください」
 と言って、柱に掛けられた一枚の額を示した。

立石明神縁起

「当立石明神は宝暦二年、無実の罪によりて断罪せられし藩士菅井俊之介を哀れみ、村人の手によって建立せしものにして、国土安泰、五穀豊穰、子孫繁栄、郷土を長く守護するものなり」

と誌されてあった。

「ほう、この立石様のご神体と、無実の罪で処刑された侍と、どういう関係があるのですか」

と、かたわらで写生の手を動かしていた若い助教授がきいた。

「そうですね。なにぶん二百年も前の話ですから、私もよくは存じませんが、郷誌にたえられた話や、先代からの聞きつたえをまとめますと、まるで小説のような話があります。まあ、座敷のほうで、お休みになりながら、おききください。お茶でも入れさせますから」

堂守りはそう言いながら、私たちを促すのであった。

側室の浮気

昔、下総のその地方一帯は、江戸幕府大目付補佐役の真野内膳正の支配下にあった。内膳正は四十を幾つか過ぎたころ、今でいう軽い中風にかかり、目付補佐の要職を引退して、隠居の身となった。

正室ぬいの方は、元来、病身で、城外の真珠院という寺に入って養生生活を送っていたので、内膳正の身辺は、もっぱらお滝の方があずかっていた。お滝の方というのは、奥女中上がりの側女で、素性については皆目わからないが、持ち前の美しさと利発さで、内膳正はじめ家老の堀帯刀の心を捕えてしまった。

お滝の方は、三十を二つ三つ過ぎた年だという噂だったが、みずみずしい美しさで、年より三つ四つは若く見え、肥り肉の大柄な、妖艶な美しさをもっていた。

まだ若い彼女は、癡人めいた内膳正に飽き足りなくなっていた。城内で、江戸の観世太夫を招いて能の催しがあったとき、選ばれて太鼓の役を引きうけた菅井俊之介の若く凛々

しい姿に心を惹かれた。彼女はひそかに、老女の浅茅と奥女中瀬波とはからい、鼓の稽古にことよせて、俊之介を招き、言い寄った。

忠義一徹で節操堅固な菅井俊之介は、お滝の方の技巧をつくした誘惑に目もくれず、きっぱりとはねつけたばかりか、彼女によって落政が乱れて行くことについて、かなり強い語気で意見を述べた。

自分の美に絶対の矜りと自信をもっていた彼女は、この若侍からうけた屈辱に一夜泣きもだえていたが、彼に対する愛情は激しい憎悪に変わり、陰險な復讐を思い立った。

讒

言

「殿、滝は口惜しうございます。たかが納戸役の小堀風情に、あのような辱ずかしめを受けねばならないのでございましょうか」

お滝の方は、内膳正の前で泣きぐずれた。節分を昨日にすぎし、庭には桜のにおいがどこにもなしに漂っていた。

内膳正はやや顔色を失ったようになり、しばらく黙っていた。かたわらから老女の浅茅が口をそえて、

「本当を申し上げますと、俊之介どのの奥方さまに対する淫らは、一度や二度ではござい

ません。恋文をかき、幾度か私に橋渡しをせいと送ってまいりましたが、そのつど、私は火中に投じて、一度も奥方様へはお渡ししなかったのでございます。あの鼓の稽古の夜のことを考えますと、私でさえも腹立たしく思えます。きっぱりはねつけました奥方様は、本当にございりました」

奥女中瀬波も、その言葉をうらづけるのであった。

内膳正は、きつとして近習をよぶと、「堀帯刀に命じて、直ちに菅井俊之介を捕縛し、城中に引いてまいれ。きつく糾問する」と言った。興奮にわなわなふるえている内膳正の背後で、お滝の方と老女浅茅との目が意味あり気にかち合った。

吟味の庭

紅白梅の香る城内の大庭は、ときならぬ警護の役人、吟味役、中間などが居並び、正面の座敷には内膳正が、側室お滝の方をはべらせ、老女、奥女中、腰元などをしたがいえている。家老の堀帯刀は縁に腰をかけて、菅井俊之介の取り調べに当たっている。

菅井俊之介は二十七、八歳。色白であるが、逞しい骨格の美丈夫。黒羽二重の紋服に

袴をつけ、ムシロの上に端座して、少しも悪びれたふうはない。

「いかようにお尋ねなされても、菅井俊之介、そのような、臣下にあるまじき所行をしかけた覚えはございません。奥方さまには何かお間違えあそばされたのでは……」

皆まで言い終わらぬうち、お滝の方は、「まあ、なんと白々しいことを……よくも、そのようなことが言えたもの、のう」

と、かたわらの老女をかえりみて言った。「本当に、盗人たけだけしいとは、このことです。痛めを受けぬうちに、武士らしく白状しや」

と老女浅茅が言った。つづいて、奥女中瀬波や腰元たちの証言で、彼の罪状は動かせぬものになった。

俊之介は、お滝の方の無態な恋慕を拒んだ報復であることを覚えて、唇を噛んだ。「どうじゃ、これだけの証人があって、その方の罪状は明白なのじゃ。男らしく白状せよ」

と、堀帯刀は言った。俊之介が黙って唇を噛んでいるのをみて、内膳正は怒り、「ええ、面倒じゃ、帯刀、こやつを責めて白状させ、口書きをとらせよ」

静かな城の内庭は、たちまち番所の白洲に早変わりした。帯刀の下知によって、俊之介は黒羽二重の紋服も衿も剥ぎ取られ、ふんどし一貫の赤裸にされて、荒縄で高手小手に縛り上げられた。

「最初は、あの松の古木に逆さ吊りに掛けよ」

という命令で、中間たちは俊之介の両足を一括して、松の古木のかたわらに引きずって行き、縄を、松の中枝に掛けると、二、三人がかりで、えいや、えいやとかけ声高く引いたので、俊之介の裸形は、無残にも真逆様に吊るし上げられた。

「うーむッ」

と齒を食いしばった無念の様相。わずかに腰に緊められた白妙の褌が、見ている人々の目にしみるようにすがすがしい。

お滝の方たちは、むごたらしさに少し顔をそむけるようにしたが、若い逞しい美貌の武

士の体に加えられる加虐を期待する興奮が、恐怖を先走った。

手桶に手が満々と満たされて、二本の青い割れ竹が水に浸されてあった。帯刀は、その一本をとり、水をさっと切ると、

「俊之介、白状せぬとあれば、責め抜いても口を割らせるが、異存はあるまいな」

俊之介は、やや充血した目を見開いて、「くどい、菅井俊之介も男だ。身に覚えのないことは、いくら痛めつけられても白状はせぬ。早く打て」

と叫んだ。その言葉が終わらぬうちに、青い割れ竹は、彼の白い太股に炸裂した。

「うむッ」

と苦痛とも呻きともつかぬ声が洩れた。二撃、三撃、見る見るうちに全身に赤い条痕がいくつもできた。打たれるたびに体は左右に揺れ、くると回ったため、彼の体は、胸を、背を、臀をと、万遍なく打たれた。

およそ二、三十の鞭を受けても、毫も苦痛の色をみせない俊之介に、帯刀は根気負けがしたのか、松の古木に掛けた縄を刀で斬ったので、俊之介の体は音を立てて転落した。帯刀は、しばらく棒立ちになって考えていたが、

「強情なやつ、今度は木馬に掛けよ」

と命令した。やがて、中間たちは、番所から取り寄せたらしい、背が三角錐になっている木馬を引いて来た。

人々は、寄ってたかって俊之介を担ぎ上げて、木馬にまたがらせた。

「ううッ、うーむッ」

股間に食い入る錐の三角鋭角に、さすがの剛気な彼も身もだえした。

「俊之介、貴様は馬術の名手だそうだが、このような馬に乗るのは、初めてであろう」

と内膳正がいった。次第に加わる身体の重味で、股間に食い込んでいく苦痛。



刺



「ううッ、うーむッ」

と、かたく噛んだ唇から洩れる呻き声が、お滝の方の官能に、しびれるようにひびいた。

「誰か、足におもり石をくくりつけよ」

という命令で、中間たちは、用意のおもり石を左右の足首にくくりつけた。

「うう、うう、うーむッ」

とさすがの彼も、首を右左に振って苦悶した。俊之介の顔は朱をそそいだように真紅である。

逆さ海老責め

次に加えられたのは海老責めであった。

長短種々の縄が用意され、俊之介の体は四、五名の中間たちに取り巻かれた。「この野郎」とか「強情者め」とか口々に罵りながら、俊之介の裸身を右に捻り、左に倒しして、あぐらをかかせると、足首にかけた縄を首にかけて二、三人がかりで力まかせに引き緊めたので、

「ぐうッ」

という声とともに、彼の体は、首と股間とが密着しそうになった。

「よくあんなに曲がるものですね。あれが海老責めという責めだそうでございます」

と瀬波は、かたわらからお滝の方に説明した。

それは、見苦しい姿の責め苦であった。股間を開ききるだけ開き、背を海老のように曲げられたので、ガマガエルのような姿であっ



た。俊之介は全身から脂汗をたらたら流し、目は血走っていた。

「ハッハッハッ、家来の分際で、主公の寵愛の者に不義をしかけた天罰じゃ」

と、内膳正は高笑いをしていたかと思うと、

「こりゃ俊之介、かりにも武士たるものが、そのような無態な姿にされて、恥辱とは思わぬか。馬鹿者め」

と罵った。俊之介は、苦しい息の下から、
「殿、殿は何もご存じありませんが、俊之介は、お滝の方に謀られたのでございます」

と言うと、内膳正はさっと顔色を変え、
「まださようなことを申すか。このうえは、余がじきじきに責めてつかわす」

と言って、割れ竹を取って庭に降りた。

「殿、私風情をお責めなさるのに、殿ご自身がなされては、ご身分にかかわります。どうぞ下郎にお任せください」

と俊之介は苦しうに言った。

「生意気なやつめ、殿じきじきの責めだぞ、有難くお受けしろ」

と帯刀が言った。内膳正は、割れ竹を振って丁々^{ちようちよう}と海老責めの、身動きならぬ体を鞭うった。そして、庭下駄で彼の肩先を蹴上げ

たので、どうと仰向きに転倒した。首を下にして、臀部を空にむけたあさましい姿であった。

その臀部めがけて、また鞭が降った。

「あれが逆海老という責めで、拷問では最も苦しいものです」

と瀬波が、またお滝の方に説明した。お滝の方は、まだ自分の愛情がもえつつづけている男の体に加えられる責め苦に、体がしびれるようなふしぎな陶酔を覚えた。

このとき、内膳正のふるった割れ竹が、俊之介の股間の急所に命中したので、

「うう、うーむッ」

と一声呻くと、そのまま悶絶してしまった。

矢 緋 責 め

奥庭の、さらに奥まったところに、松韻亭^{しやういんてい}という数寄屋造りの建物がある。内膳正

が、お滝の方のために建てたもので、京都の某茶席の写しと言われている。

俊之介の吟味のあったその夜、お滝の方は、老女浅茅や奥女中瀬波を侍らせて、琴を弹奏していた。すると、家老の堀帯刀が入って来た。

「お部屋様、俊之介めは、あのままお城内の地下牢に檻禁しておきました。明日は、志津ガ河原で、斬罪にいたしますから、もうご心配はございません」

するとお滝の方は、

「しかし、あのような強情者ゆえ、白状しないとならば、口書きもとれまい。口書きのないものを処刑したとあっては、そなたの落度^{おちど}になろう」

「実は、そのことで思い悩んでおります。俊之介の父頼母^{たのぼ}は、忤^{たふ}の無実を表明しようと、仲間の者たちとカタラって、再三参内してまいりました」

するとお滝の方は、にっこりとして、

「それならば心配はない。わらわが今夜、夜通し、きやつをもう一度責めて、せがひでも口書きをとらせてみせる。そなたは早速、こへ俊之介を引いて来やれ。口書きの用意も忘れぬよう」

帯刀は、お滝の方の執念に慄然とした。あれほどきびしい責めを加えたうえに、今夜夜通しの責め苦、剛気な俊之介も、このまま、美しいお滝の方の手で責め殺されてしまうのではないかと思った。

「しかしお部屋様、俊之介は、責め殺しては

なりませぬ。どこまでも罪を自白させて、公衆の前で斬罪にせねば掟は保てませぬ」

するとお滝の方は、あでやかに笑って、

「帯刀どの、その心配には及びませぬ。たかか女子たちの責め、大の男をどうして責め殺せましょう。しかし、女子の責めはきつい執念があります。あの剛気な俊之介を、必ず白状させてみせます」

やがて、水色の獄衣に縄付きの俊之介が引き出されて、庭の敷き石の上にすわらされた。あれほどの苛酷な責めにも、少しも衰えをみせていない。

四辺には明々と雪洞がともされ、腰元や奥女中は、白襷、白鉢巻きという姿で、手に手に薙刀をかい込んで控えている。

帯刀は、

「こりゃ俊之介、最前の責めにはよく耐え忍んだ。武士ながら天晴れた。今夜は、特別のお計らいで、お部屋様がじきじきにお調べに立ち会われる。見るとおり、美しい奥女中、腰元衆が責めにあたられるそう。拙者は次に控えて見物させていただこう」

と言った。

責め苦に強気な俊之介も、このなまめかしい四囲の様子に、不安と恐怖を感じて、やや

色を失った。

奥女中瀬波が、帯刀の耳元に何かささやくと、帯刀は中間たちに、

「そやつを着衣を一切剥ぎ取って素っ裸にしろ」

と下知した。中間たちは、手取り足取りして、水色の獄衣を剥ぎ、六尺ふんどしまでむしり取って、うしろ手に縛り上げた。

数十人の美しい女性の衆目のなかで、全裸の辱ずかしめに、さすがの俊之介も、満面朱をそそいだような羞恥と怒りにもえた。

「おのれ淫婦、無実の者をかくまでして辱ずかしめるかッ」

と悲痛な声を上げた。お滝の方は、あざ笑って、

「そのように怒らずと、わらわの、さす杯をうけぬか、腰元たち、その男に酒を飲ましや」

と言った。かたわらに用意された大杯に酒をなみなみとつぎ、俊之介の唇に近づけた。

「けがらわしい」

といって、顔をそむけるのを、太勢が寄ってたかって押えつけて、無理やりに酒をしたたかのませる。酒は流れて、裸の胸や腹をぬらした。

やがて、庭に、四本の太い杭が打たれ、彼は仰向きの大の字型にされて、杭に手足を縛られた。羞恥のために彼の腹は、はげしく波打った。

「腰元たち、そやつをくすぐり責めにしや」

という老女の下知で、矢絰着物に黒縹子の帯を立やの字に締めた腰元たちは、四、五人かかって、俊之介の腋や臍、足の裏とくすぐりはじめた。

「うッ、うッ、ううッ」

と悲鳴とも笑いともつかぬ声をあげて、彼はもだえた。全身から脂汗が噴き出た。

お滝の方は、それを冷ややかに見下ろしながら、琴のうまい腰元に琴の曲を弾奏させた。お滝の方は、

「俊之介、琴の音をききながら、そのような美しい女子どものくすぐり責めは、また、よいものであるうのう」

とあざ笑った。俊之介は、何も聞こえぬかのように、

「うッ、うッ、ううーむッ」

ともがいていた。最前、無理に飲まされた酒が全身に回り、やや熱気を帯びた体に、美しい、女性たちのくすぐり責めに、さすがの彼も、ある種の興奮を感じた。俊之介の肉体

の変化に、腰元たちは、顔を赤らめるもの、忍び笑いをするもの、しばらくはくすぐる手を止めてざわめき渡った。

「たわけ者め、なんのさまじや」

と帯刀は、俊之介の隆起した個所を蹴上げた。

「うッ」

と彼は、苦痛にのたうった。

灸責めとうつつ責め

くすぐり責めが終わると、老女の浅茅が、盆の上に山のようにモグサをのせ、線香の束をもって入って来た。

「お部屋様、浅茅はよい責めを思いつきました。この灸を体にすえたら、いかがでございましょう」

と言った。お滝の方は笑っていたが、帯刀は、

「土用灸には少し早いが、女子衆の責めらしくておもしろい。だが、寝小便の餓鬼の仕置きのようじゃの」

と、何々と笑った。

「灸点は浅茅がおろします。これ、俊之介どの、昼間きつい海老責めや木馬責めに会ったので、体の節々がいたむであらう。わらわ

が治療して進ぜるぞや」

と言いながら、乳の上にモグサを盛り上げ、線香の火が点じられた。モグサは黄色い煙を上げて焦げついた。

「――」

彼は、耐え忍んだ。モグサはやがて反対側の乳の上に点じられ、さらに臍の上に盛り上げられた。さすがの彼も、

「うーむッ、うーむ」

呻き声を上げた。腰元たちは固唾をのんでこの光景を見入っていた。全裸、大の字に縛られた美男の武士の若い逞しい肉体に加えられる責め苦、人々は妖しい無残絵にでも接するような、恍惚とした思いでみていた。やがて、浅茅のモグサは、俊之介の逞しく隆起した個所の先端に挿入され、素早く火が点じられた。

「うう、うーむッ、コ、殺セッ、殺セッ」

と、もがいた。火は、亀頭に焦げつき、凄絶の気があたりに漂った。帯刀は、この姿をみて、腹をかかえて笑い、

「俊之介、どうだ、二百石の武士が灸責めにあってはる図は見物だな」

と悪態をついた。

やいと責めが終わると、俊之介は、大の字

縛りから解かれ、荒縄で作ったモッコのなかに載せられて、松の木に吊るされた。

「これは、うつつ責めという、一晚じゅう眠らせない責めです」

と言って、帯刀は木刀で俊之介の臀のあたりを突いた。モッコはぶらりと揺れた。

「腰元衆、交替で揺すってみや」

というお滝の方の命令で、腰元たちは、薙刀の石突きで俊之介のあらゆる個所を突き、モッコをゆるがせるのだった。そんな責めがよもすがら続いた。

無残な最期

お滝の方に無態を行なったという口書きに俊之介が署名捺印したのは、その未明であった。夜もすがらのうつつ責めに、精魂つき果てた俊之介は、夢うつつのうちに、すべてお滝の方と帯刀のなすままにされてしまった。彼が服罪したときいて、菅井頼母は自宅で皺腹を切って果てた。わが子の処刑を見るに忍びなかったのである。

彼の自白によって、改めて怒ったのは内膳正であった。

「臣下の分際で、主の寵愛のものに無態な所行をなすとは人非人じゃ。きつく罰して、諸

人の見せしめにせよ」

と帯刀に言い渡した。

俊之介の処刑は、その日の午後、志津ガ川原の刑場で、磔刑に処せられることになった。城下は湧くような騒ぎであった。

人々から信頼厚かった菅井頼母の子息が、奥方に無態な行ないをして死罪になるということと、わが子の罪を恥じて割腹して果てた頼母のことで、もち切っていた。人々は、この事件の背後に、お滝の方、堀帯刀の陰謀があることを察知するものもあったが、権勢高い彼らを怖れて、誰一人抗議を申し出るものもなかった。

町の角々に、この罪状を書いた高札がかかげられ、刑も引き回しのうえ磔という重罪なので、物見高い人々は、刑場の道に朝から集まっていた。

ことに菅井俊之介は、城下でも噂の高い美男武士であったので、若い娘たちは、身も世もなく悲しみながら、彼の最後の姿を一目見ようと、道にひしめいた。

水色の獄衣で裸馬にまたがせられて俊之介が城門を出たのは、午近かった。色白く、男らしく引き緊まった顔は、観念の目を閉じて、すべて運命に任せたという静かな姿であ

った。珍しいのは、引き回しの行列に、お滝の方つきの腰元が、数人、薙刀をかい込んで警護に当たっていることと、高札をもったり馬の口とりをしている非人のなかに、女非人が多く混じっていることであった。

刑場にゆく途中に、志津川の川原があり、早春の水をかがやかせていた。刑場の露と消える罪人は、この世の罪のけがれを、この川で洗い潔めて刑をうけるというのが、この土地の習慣であった。

俊之介は、馬から下ろされて、帯刀の下知によって獄衣を脱がされ、うしろ手に縛しめられた裸身を、非人たちのむくつけき手によって手荒く洗われた。非人たちは、彼の体を洗い終わり、ふたたび獄衣を着せようとする

と、帯刀は、「主君に姦淫をはたらいた非道な男だ。世の見せしめに、素裸のまま刑場まで歩かせるのだ」

と言って、一筋のふんどしすら許さなかった。

一糸もまとわぬ赤裸のまま俊之介は、嚴重に縛しめられ、非人たちに鞭うたれながら、半里もある刑場へ歩かせられた。道に見送る人々は、この痛ましさに目を覆った。

刑場には、一足先に、内膳正とお滝の方が到着していた。磔柱の正面の幔幕のなかに、彼らの席が占められてあった。

俊之介は、父の頼母が自害したことを知り、すべてを諦めて、なんの抵抗も示さなかった。ただ、その瞳は、憎悪にかがやき、城主とその愛妾のほうを睨んでいた。

刑は、わざと女非人の竹槍で刺させることにした。女非人は、力が弱いので、その苦痛も長いということからであった。事実、俊之介は、竹槍で両脇腹を貫かれてから、かなりもがいていた。そのあいだ、彼の目は、火のように燃えて、お滝の方のほうを見据えて、「奸婦、今に見よ」

と一言、火のように吐くと、二十七歳の若さと美貌と武力と才知に恵まれた身を、刑架の上でむごたらしく相果てた。

堂守りの話はそこで終わった。私たちは、お家騒動の発端にありそうな話だと思いがらきいていた。が、さすがに、無実の罪の若侍の最期のいたましさに、哀れを催した。

しかし、まだこの話は終わってはいないのだ。お滝の方に対する奇怪な物語がつづいているのだ。

ンティー・ マニアの告白

浦 三 郎

その男は、新橋のある商事会社に勤めていた。年齢は二十三歳で、まだ独身だった。

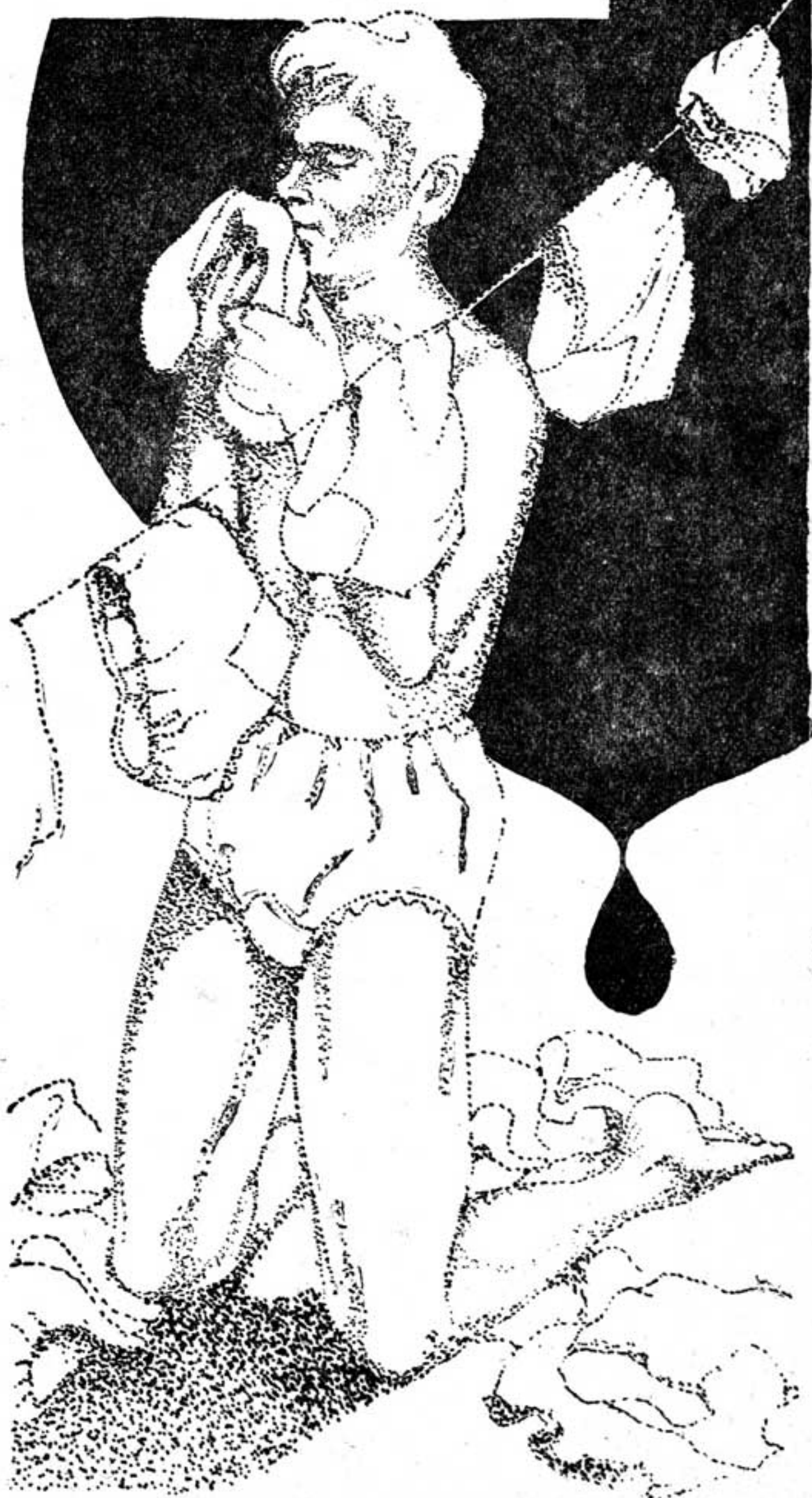
知り合ったのは、烏森の、なんでもない居酒屋で、私の偶然隣にその男がすわったからである。

私が、話のはずみで、大井で洋品店を経営しているといったら、急にその男の瞳が輝き

出して、話しかけてきたのだった。

「頼むから、女性の下着、ハイヒール、ブラジャー、パンティーなどを、内緒で売ってくださいませんか」

というその男の頼みが、あまり熱心なので、ついその理由を聞いて見る気になったのが、この「奇怪な告白」の始まりであった。「私がいかに、若いころからパンティー・マ



あるパ

杉

ニアとして、その対象を入手するのに苦勞したか、とにかく聞いてくださいよ」ということから始まった彼の告白は、こんなことであった。

店から店へ

私がもっと気の強い悪党か、または環境的に女性と接近した身であったなら、パンティーの一枚や二枚はわけなく手に入れることができたでしょうが、なによりも生来のおく病と、一人息子という悲運に、しかも今でも、独身寮という、およそ色気なしの殺風景な――物干し台にゆれているのは、薄よぐれたフンドシかサルマタというくらい環境であってみれば、私の夢は、まったくの夢にすぎず、それゆえ、私の欲望はますますパンテ

イーに向かっていくのです。

パンティー――腰のまわりと両裾口にピッチリとゴムの入った、しまっている、あの優美な、女性の肌の最も神秘的な部分をおおって飽くことなくその体臭を吸っているパンティー――！

しかし、私の求めているものは、そんな芳しい香に満ちていなくても、女性にはきよごされていなくても結構なのです。

ただ、パンティーを、自分ではいたとき、太腿に感じる、あの、なんともいえない緊迫感と、たっぷりふくらんで波うっているヴォリューム感を眺めるだけで、じゅうぶん満たされる私でした。

私は、夜ふけの町角をさまよっては、雑貨屋、衣料品店の店先をのぞいて歩く男なのです。

私には、よその物干し台に登って、干し忘れてあるパンティーをちょっと失敬してくるとか、暗がりて女をおどしてパンティーを巻きあげるとかいう芸当は、絶対にできません。

女の尻を追うという言葉がありますが、私の場合、衣料品店のパンティーを追いまわすという、あわれな男なのです。

しかも、近ごろの下着類の流行は、どの衣料品店の店先にも、私の垂涎の品を並べています。

そのくせ、皮肉にも、そろした幾百幾千のパンティーが私の目につくようになっていながら、私には、どうしても、その店先に入行って、それを買うことが出来ないのです。いかにブトムとはいえ、男が簡単に店に入行って、

「パンティーをくれ」

なんていえるものではありません。気の弱いだけでなく、ある程度理性のある私には、とてもできません。

第一、人前では「パンティー」という言葉さえ、ロクロク口に出せない私なのです。

ただ私は、町角から町角へ、野良犬のように歩きまわり、買いやすい店を求めて、足を棒のようにしていました。

人通りの少ない、ほかに客のない、しかも店には老人か子供が番をしているというチャンス、しかしこれを狙うのは、なかなか困難なことでした。しかも店に入って捜しているうちに、奥から苦手の女店員とか男が出てきたりして、空しく出てきてしまうこともしばしばでした。

全く馬鹿らしいことなのです。それほど欲しいパンティーを目の前にして、しかも、それを買うという正当な合法的な方法によってすらも、私という男は恥ずかしくてできないのです。

相手の目の中に侮蔑、嘲笑という心理的な流れを感じることが、全くやりきれない苦痛だったのです。

したがって、あきらめて帰途につく日が多かったのですが、そんなときの空虚な心は、焦燥にかわり、どうしようもなく、一人もだえていました。

「それは女物ですよ」

でも、うまく見いだした店で、無事にパンティーを手に入れることのできたときの狂喜。躍る心で帰途につき、あとは、私だけのやり方で、それを、あくことなく、楽しむのです。

この方法については、ちょっとお話できませんが、ともかく、こうして、過去に、私は、幾十枚ものパンティーを、はきすててきました。

こういうことは、だんだん強い刺激が欲しくなってくるものでしょうか。私はいつのま

にか、単にこれらのパンティーを眺め、はき、弄^{もてあそ}んだだけでは、もの足りなくなってきたのです。

してみると、私のフェチシズムというのは、一つの方法であって、本来は、マゾヒズムから出発しているのでしょうか。パンティー・マニアである自分を人に露出するときの苦痛とすれすれの快感をむさぼるようになってきたのです。

六日のある夜でした。私は、いつものように、欲望のとりこになって、パンティーの幻影に憑^つかれて、夢遊病者みたい、ふらふら町はずれの通りをさまよっていました。軒並みに横目でチラチラと店のなかを物色しては、私のほしいパンティーの影を敏感によりとっていました。頭は熱っぽく、顔はほてっていました。

すると、やっと運よく、老婆が一人、眠そうにすわりこんでいる、間口一間ぐらいの店にゆきあたりました。

老婆は、私の求めに応じて、ゆるゆると、そこいらの箱のなかから二、三種のパンティーをとり出しては、私の前に広げてみせてくれました。

そのとき、奥から、二十二、三の、派手な

若い女が顔を出しました。

「ああ、それは女物ですよ。男の方のパンツなら、こちらですわ」

と、気をきかしたつもりで、老婆をおしやるようにしてきたのです。"しまった"私の胸はどきんと、自分でもわかるぐらい打ちました。

老婆も困惑した格好でちょっと私の顔をみました。

「お客さんは、女物がいいといわれたんだよ……」

と言いました。

娘の好奇の視線は、パツと私の顔を射て、私は、そのなかに、彼女の私に対する憐^{あわれ}みと軽蔑の色をかぎとりました。ジーンと全身が羞恥に赤くなり、舌の根がぐらぐらに乾いたのです。

いつもなら、うまくごま化して逃げるのですが、そのときは、あまりの突然さと商売下



手な女の高圧さに、いすくめられて、たじたじだったのです。

「えっ、女物のほうを……」

——マア、男のくせにパンティなど買って女の複雑な表情が、消え入るばかりの私の全神経に、ビリビリと感じられました。私はいま、この女から、侮蔑と憐みとを受けている。女は、赤くなっている私の顔をまじまじと見ているのです。

私はわなわなとふるえる手で、老婆から渡された包みを受け取ると、逃げるようにその店先を出ました。アンダーシャツの背中は汗でぐっしりとぬれたようです。

町はずれの暗闇で、私はほっとして息をのみました。そのときになって、はじめて私は、女のそのときの表情が、全神経がしびれたような無限の陶醉感を、私に与えたことを知ったのです。いや、なぜ、女が大声で私を笑わなかったのか、とさえ思ったくらいです。

もし、彼女が、私のふるえる手をピシリと叩いたとしたら、私はもう感きわまって泣いていたでしょう。

夢は尽きない

そのパンティーは、白い、平凡な、いつも

のパンティーなのに、私には、特別に、女だけしかはくことを許されていない「女物」であり、これをはく自分は、女にすら嘲笑される種族なのだという意識にとらわれて、しかし、それは一種の快感でした。私の心のなかで無意識に、ひそかに期待していた快感だったのです。

そんなことがあってから私は、少しずつ大胆になっていました。

わざと、事情のゆるす限り（知った人にみとがめられることはいくらなんでもできませんが）、みんなの面前でパンティーを買うようになり、その店の主婦や、女店員たちが妙な表情をしているのも、好奇と憐みの目つきでだまってみつめることも、みな私を満足させました。

あるときなど、私に聞こえよがしに、

「あの男、パンティー買って……」

とわらっているのを聞いたこともあるのです。

自己凌辱の快感——相手が女の場合など、わざと自分からサイズを合わせるようにして、パンティーを腰にあてがってみたりして相手を驚かせ、次の瞬間には、心理的な侮蔑をうけるように自分から、意識的にしむけて

いるのです。

それと同時に、これらのパンティーを実際に自分ではいているところを人にみられて、恥ずかしめをうけてみた、という願望を抱くようになるのも、当然かも知れません。

といってまだ、その機会をもったこともなく、たいていは、勝手な空想を弄んでいるだけなのですが。

サドの女性から、無理じいにパンティーをはかされ、その奇妙な格好のまま人目にふれてわられるという空想……パンティーを盗みに女学校の宿舎に入り、つかまってしばらく、大勢の前でパンティー一枚の姿で立たされていたり……私の夢は、つぎからつぎと生まれて、つぎすることはありません。

以上が、彼の告白である。こういって彼は人のよさそうな小さい目を、恥ずかしそうに、下に向けた。

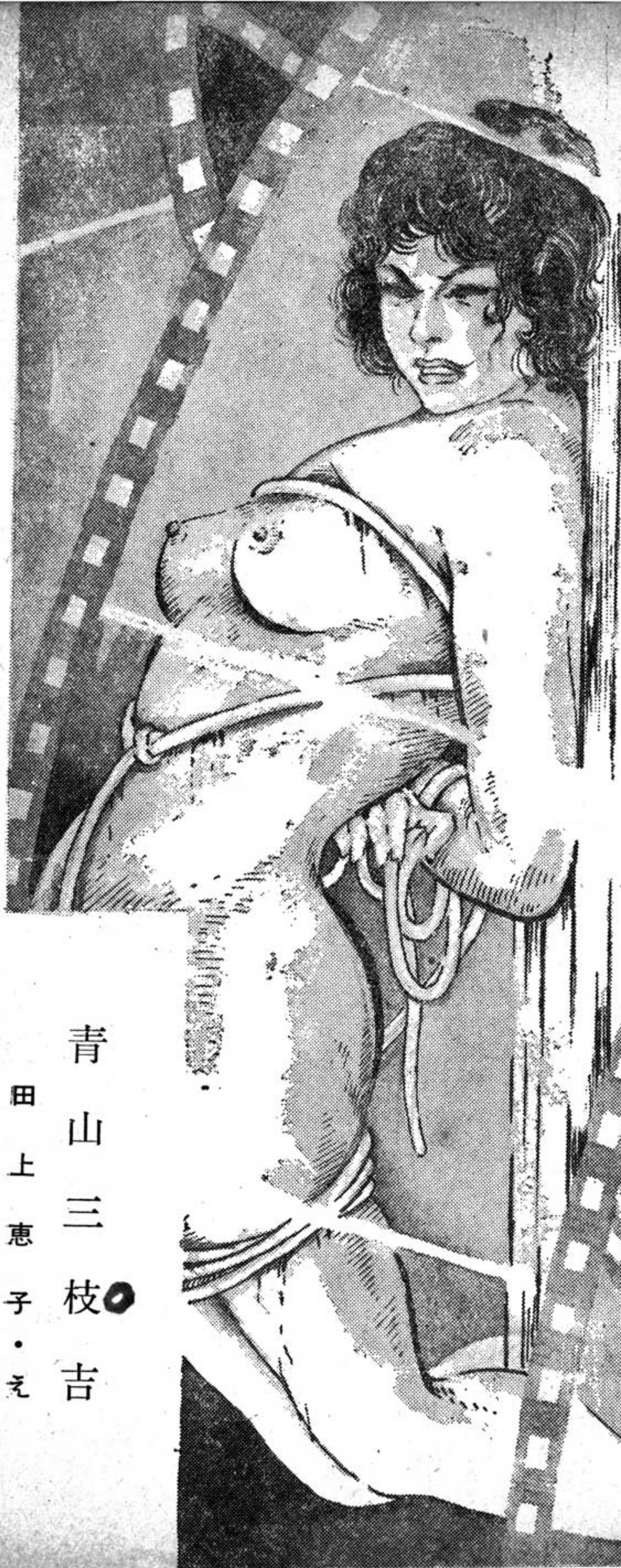
静かに、ゆっくりと話すタイプの彼のことがあったから、これだけ聞きとるにも、かなりの時間がかかった。

しかし私には、その時間が短くてしようがないほど、興味のある問題だった。

自分の「運命」を率直に告白する彼の話に「直実」があふれていたからだろう。

サド小説

艶美荘の恐怖



青山三枝吉

田上恵子・え

1

右手にいちめんの白樺林が、高原の気配をただよわせて、爽涼とつづいていた。

左手は、なだらかなスロープの丘だった。丘の頂上には、なかば朽ちたような、古めかしい格好の山荘が建っていた。

山荘といっても、がっちりした二階建てで、小さなホテルほどの大きさはあった。

藤沢英一は、丘陵のふもとで車を停めた。48年型フォードである。運転席横の窓から首をつきだして、まぶしいような目で、丘の頂点に建つ、黒ずんだ色の山荘を見あげた。

「あれかい、耽美荘っていうのは？」英一はいった。「ちっとも耽美的な建物じゃない。あれじゃ、まるで墓場だ」

「そうよ、墓場にちがいないわ」白木ミドリがこたえた。「あたしのお姉さんは、あそこで眠っているのよ」

「どうしてもきみは、あそこを訪ねる気かい。たった一人で？」英一はきいた。心配げだった。

「もちろんよ。そのためにわざわざ東京からやってきたんだわ」

「よしなほうがいいと思うな。なんだか不気味じゃないか。あの建物には、妖気みたいなものがただよっているぜ」

「殺人鬼！ 姉さんを殺したのは、おまえたちね」——叫ぶミドリの両手は、無残にもバンザイ型に、クサリ

で吊り上げられた。その白い肌に、長い皮ムチが、ピッシリ！ と鳴った。ああ、あたしは責め殺される……

「ふふふ、英一さんて、案外ロマンチストね。みなおしたわ」

ミドリは車のドアをあけた。形のいい長い脚を見せびらかすようにして車をおりた。

「気をつけるよ」

英一は、まだ不安げにいった。

「大丈夫よ。お化け屋敷を探検するわけじゃあるまいし、あたしは、おにいさんの家を訪ねるのよ」

「案外、お化け屋敷かも知れないぜ」

「じゃ、帰りにまた寄ってね。あたし、行くわ」

ミドリはそういうと、英一に握手をもとめた。

「明日の朝十時に、やっぱりこの場所で会おう。まちがいたくね」

英一は、ミドリのしなやかな指を、かたく握りしめた。掌と掌、指と指にあたたかい感情が流れた。

「あなたこそ、お気をつけてね」

ミドリは瞳にかすかなうるみをみせていった。

新聞記者である英一は、このまま車を駆って、これから諏訪湖へ取材に行くのだ。東京で凶悪な殺人を犯した容疑者が諏訪湖畔に潜伏しているという情報が入ったので、それを確かめに行く途中だった。

ミドリは、その英一の車に便乗したのだ。ミドリの目的は、この人里離れた丘の上に建つ、古ぼけた山荘にあった。

すこしの間、ミドリはセンサーショナルな仕事に向かって小さくな

っていく英一の車を見送った。

柔道三段、たくましい恋人だった。

それからミドリは、踵をかえして丘陵にむきあった。ひよろ長い雑木や灌木がかぶさった、貧しげな眺望の丘。道は細く曲がりくねっていて、ハイヒールにタイトスカートでは歩きにくそうだった。

ミドリは、かすかな後悔をした。しかし彼女は、意を決して歩きだした。その背中を、夕陽が血のような赤さで照らした。

2

ミドリは、姉のことを思いだす。名は貴美子。名のと通りの、気品のある、ろうたけた美貌を備えていた。

ミドリにとって、貴美子はたった一人の姉だった。そして、二人きりの肉親だった。

一年前に、貴美子は望まれて綾小路弓彦と結婚した。

綾小路弓彦は、資産家だった。その財産は、弓彦が働いて得たものではない。弓彦は、ただ父親の遺産を受け継いだだけのことであった。この富豪の長男は、あまり金儲けが上手ではなかった。弓彦が口をはさまないほうが、彼の会社は利益をあげた。

弓彦は働くことが面倒になった。社長の地位を、自分から部下に委せた。弓彦には美しい妻がいる。貴美子は夫を愛し、古風なほどの従順な妻だった。

彼は妻を連れて、この丘の上の山荘にひきこもった。耽美荘と名づけて、古今東西の名画、彫刻などの美術品で内部を飾った。そして、なかば隠遁の生活がはじまった。

弓彦の日課は、収集した美術品を眺めること、付近の山林で猟銃をもてあそぶこと、川魚釣り、それから、若く美しい妻を愛撫することだった。

ミドリが弓彦からの短い手紙を受け取ったのは、いまから二週間前だった。

貴美子が死んだというのである。心臓麻痺による急死。そして、すでに火葬を終えたという報告だった。

——おかしい……？

ミドリは手紙を読み終えて考えこんだ。

貴美子が心臓麻痺で急死したという、その死亡の日時すら書いてない手紙なのだ。これは常識にはずれてはいないだろうか。

疑えば、つい近日に死んだのではなく、死んでからもう十日も半月も、いや一カ月も二カ月もたっているともとれる。

急死と同時に、いくら人里離れた丘の上の山荘だからといって、たった一人の肉親であるミドリの所へ、電報なり、人を使ってなりして知らせるのが普通ではないだろうか。

知らせるところか、遺体も、みせないうちに火葬してしまったという。

——姉の死には、なにかある……

ミドリが疑心を抱いたのも当然だった。

そこで、ミドリはやってきた。ミドリの姉の夫、つまり義兄にあたる綾小路弓彦の住む耽美荘へ——。姉の急死にわだかまる不審を解きに。

もともと、ミドリは弓彦がきらいだった。一見穏厚な青年紳士だが、その裏面になにか得体の知れないひややかな棘のようなものを感じ

じるのだ。

ハイヒールの底に、赤い土がつまった。

ミドリは耽美荘の正面に立ち、くすんだニス塗りのドアの前にたたずんだ。額にうっすらと汗をかいていた。ハンカチをだして、その汗をふいた。

ドアの横に、小さな釣り鐘型のベルが備えてあった。ベルの中から、紐が一本、乾からびた魚の骨のように吊り下がっていた。

緊張のために、ミドリの紅唇がひきしまった。しばらくためらったが、ミドリはその紐を握って、左右にゆすった。ちりんちりんという案外に冴えた音がでた。

3

内側から、ドアは、いやな音をだしてきしんだ。

ドアのかげから、色の黒い鼻のつぶれた、背の低い男が現われた。一見して、下男と知れた。

「東京からきた白木ミドリです。おにいさまいらっしゃいますか？」
「いらっしゃいますか、などときかなくとも、いるにきまっていますのだ。綾小路弓彦が、この山荘付近から遠出することを、極端にきらっていることは、ミドリも生前の姉からの手紙で知っていた。

鼻のつぶれた男は、こっくりと顎をひいてうなずいた。目の色がにぶく、不愛想な男だった。

五分後に、ミドリは綾小路弓彦と相対していた。

そこは弓彦の居間らしかった。壁も天井も柱も床も、時代がかった黒光りの艶を放っていた。

「しばらく見ないうちに、ずいぶんおきれいになりましたね、ミドリさん」

弓彦がいった。いわれてみれば、弓彦と貴美子の結婚式以来、会っていないかった。

なにかの値踏みをするように、弓彦は正面からミドリの顔、咽喉から胸もとのあたりまで、しげしげとうち眺めた。唇には卑猥な微笑をうかべていた。

ミドリはむっとした。これが最近妻を失った夫の表情だろうか。
「お姉さんが死んだとき、どうしてすぐに知らせてくれなかったのです」

顔を堅くして、ミドリはきいた。詰問のひびきがあった。

「そのことですか」弓彦は平然として弁明した。「いや、なにしろ、こんな不便な所でしょ。知らせようにも、町の郵便局まで、歩いて二時間もかかるのですからね」

弓彦の女のように白い顔が、また笑った。不健康なブヨブヨした皮膚の白さだったミドリは妙に粘液的な圧迫感をうけた。

「それで、お姉さんのお墓はどこにあるんです？」

ミドリは重ねてきいた。

「お墓？ ああ、それはまだです」

「それじゃ……」

「姉さんの遺骨は、この家の一番静かな部屋に安置してありますよ。ご安心なさい。あとでご案内します」

そういうと、弓彦はまた細い視線を、じいっとミドリにそそいだ。ミドリは背筋に氷をあてられたような寒気をおぼえた。弓彦の目には、ミドリのブラウスやスカートを透して、素肌をなめまわすよう

な、いやらしい光があった。

「ミドリさん」弓彦がいった。低く這い寄ってくるような声音だった。「生前の貴美子の元氣な姿をお見せしましょうか。いや、じつはぼくがね、映画に撮っておいたのですよ。十六ミリのフィルムに。よく撮れています。いかがです。ごらんになりませんか」

「ええ、ぜひ」

と、こたえてから、ミドリはなんとなく不安になった。いまは亡き姉の姿がスクリーンの上で生き生きとよみがえることを想像すると、うす気味悪いような氣もした。

それとも、そんな姉の元氣な姿をみたら、かえって悲しみがこみあげて、泣きだしてしまうだろうか。

「こちらへ、おいでなさい」

弓彦は椅子から立ちあがった。そのとき、唇がまた妖しいうす笑いを洩らした。

ミドリも、腰をあげた。まるで、催眠術にでも、かけられたように――。

重々しいカシのドア。

そして、暗い廊下。古い建物のくせに、内部はどこもかしこも妙にがっしりして、遠い外国の遺跡にでもきたような、湿った厳肅さがあった。

ミドリは、弓彦のうしろから、廊下を進んだ。

この家に、かつては姉が住み、この廊下を、姉は毎日掃除をした。往き来していたにちがいない。そう思うと、すこしはなつかしいとか、悲しいとかの感慨が、胸にくるはずだった。

だが、いまのミドリには、不気味な圧迫感だけが先にたった。その

不気味さに対する、若い女性らしい好奇心めいたものも、かすかにあったのだが……。

4

幾度か廊下を曲がり、奥に入った一室の前で、弓彦は足をとめた。ドアのノブに手をかけ、弓彦はふり返っていった。

「この部屋がね、ぼくの映写室なんです。ミドリさん、さあ、どうぞ、お入りください」

弓彦はドアをあけた。電灯のスイッチを押した。

窓のない部屋だった。椅子とテーブルのほかには、家具も装飾もなかった。壁にはうす汚れた風景画が一枚、置き忘れたようにかかっていた。

ドアと反対側の壁に、白い布がびっちり張りつけてあった。スクリーンらしかった。十六ミリだからかなり大きなスクリーンだった。

サイド・テーブルがあって、その上にはすでに映写機が据えつけられてあった。録音機もそばにあった。

「どうぞ、さあどうぞ、おかけください」

弓彦は、丁重な物腰でミドリに椅子をすすめた。これも頑丈な飾りのついた、時代がかった椅子だった。

ミドリは腰をおろした。ひえびえと湿っている椅子は、スカートを透して、ミドリの尻につめたかった。

「――では、はじめますよ」

電灯のスイッチが切られ、室内が暗黒になると同時に、映写機の中にオレンジ色の光が充満した。軽い回転音が始まった。

暗い室内を、一筋の光茫が水平につらぬいた。光線はスクリーンにぶつかって四角にひろがった。

はじめに、丘の上に建つ耽美荘の全景が映しだされた。

カラーフィルムだった。あざやかな緑の樹木に囲まれた耽美荘は、実物よりもはるかに優雅なポーズで建っていた。季節は春らしく、丘陵のスロープを埋めた草花の色彩は、夢幻的な美しさだった。

つぎに——いきなり、女の顔のクローズアップが、ミドリの眼前に迫った。

「あ、お姉さん！」

思わず低く、ミドリはさげんだ。

たしかに貴美子だった。そして、つぎの瞬間、ミドリの瞳孔は驚愕のために、とびでるほど大きくみひらいた。

「ああッ！」

スクリーンいっぱい、白っぽい生き物がくねっていた。

その生き物は、人間だった。女だった。

素裸の女が、大きな虫のように身をくねらせているのだ。そして女は、まぎれもない貴美子だった。

「お姉さん！」

ミドリはさげんだ。全身がひきつったように硬直した。姉が必死になって身もだえているはずだった。

貴美子は全裸で、縛られていたのだ。

両腕をむごたらしくも背中へねじあげられ、両手首はぎっちり重ねられて縛り合わされていた。黒っぽい色の縄が、その腕や手首に、ぎりぎり巻きつけていた。

肌にくいこむ縄の強さは、とても芝居やなにかの冗談とも思えな

った。

「こ、これは！」

ミドリは三度さげび、弓彦の顔をみた。映写機から洩れる細い光線が、弓彦の横顔をよく照らしていた。

幽鬼のように青白い横顔。しかも幽鬼は、にたりと不気味な微笑を洩らして、スクリーンを凝視していた。

ふいに、録音テープがまわりだした。

「アアッ、アアッ」という苦悶のうめきが、まず最初にそのテープから発せられた。まぎれもない、貴美子の声だった。

「あ、あなた、痛い、痛いわ、ゆるして！」

スクリーンの中の貴美子は瞳に涙をため、撮影者にむかって痛切な声で訴えている。

白いふくやかな乳房にも、縄がきびしく食いこんでいた。うすあかい乳首が、苦痛のために堅くとがり、こまかいふるえをみせているのも、レンズは執拗にとらえていた。

均勢のとれた美しい裸身だけに、その上半身かけられた縄の激しさが、おそろしく残酷にみえた。縄が肉のなかに陥没し、縄の周囲の肉は逆におっくりとふくれあがって、この緊縛の安易でないことを示していた。

ことに、肩近くの腕にがっしりとくいこんだ縄は、肩の肉を盛りあげるほどのきびしさだった。

「こ、これはどういうことなの？」

ミドリはうめき、耐えきれずに椅子から立ちあがった。

「さわがないで、まあ、もうしばらく見ていなさい。これはまだファースト・シーンにすぎないのだから……」

弓彦は、おちついた声でいった。
「いやです。お姉さんをこんなひどい目にあわせた理由を説明してください！」

ミドリは怒った。

弓彦は、またにやりと笑い、背後のドアにふりむいて「松造、松造」と呼んだ。

すると、すぐにドアがあいた。あの鼻のつぶれた背の低い男が影のように室内へ入ってきた。さっきからドアの外に控えていたように。

5

「お呼びで」

松造は、ぼそりといった。

「このお嬢さんは、ぼくのいうことをきかないのだ。そこで、このお嬢さんを、しばらくの間、椅子から立たせないようにしてくれ」

弓彦は命じた。松造はこっくりしてうなずいた。と同時に、飛鳥ひちよのような身軽さでミドリにとびかかった。

「あッ、なにさるの！」

ミドリは悲鳴をあげて抵抗した。だが、小男のくせに、松造は鉄のような腕力をもっていた。

ミドリの身体は、乱暴な勢いで椅子にひきもどされた。ミドリの両腕は、たちまちねじあげられて椅子の背にまわされた。

いつ用意したのか、縄がミドリの両手首を堅く縛り合わせた。暗い室内で、松造の行動はすでに幾度も練習を積んでいるように馴れていた。

ミドリは戦慄した。両手を椅子にくくりつけられ、もう立てない。逃げられないのだ。

「さあ、あばれると痛いですよ。すこしの間ですから、そのままお姉さんが踊ったり歌ったりする映画を見ていらっしゃい」
弓彦がいった。

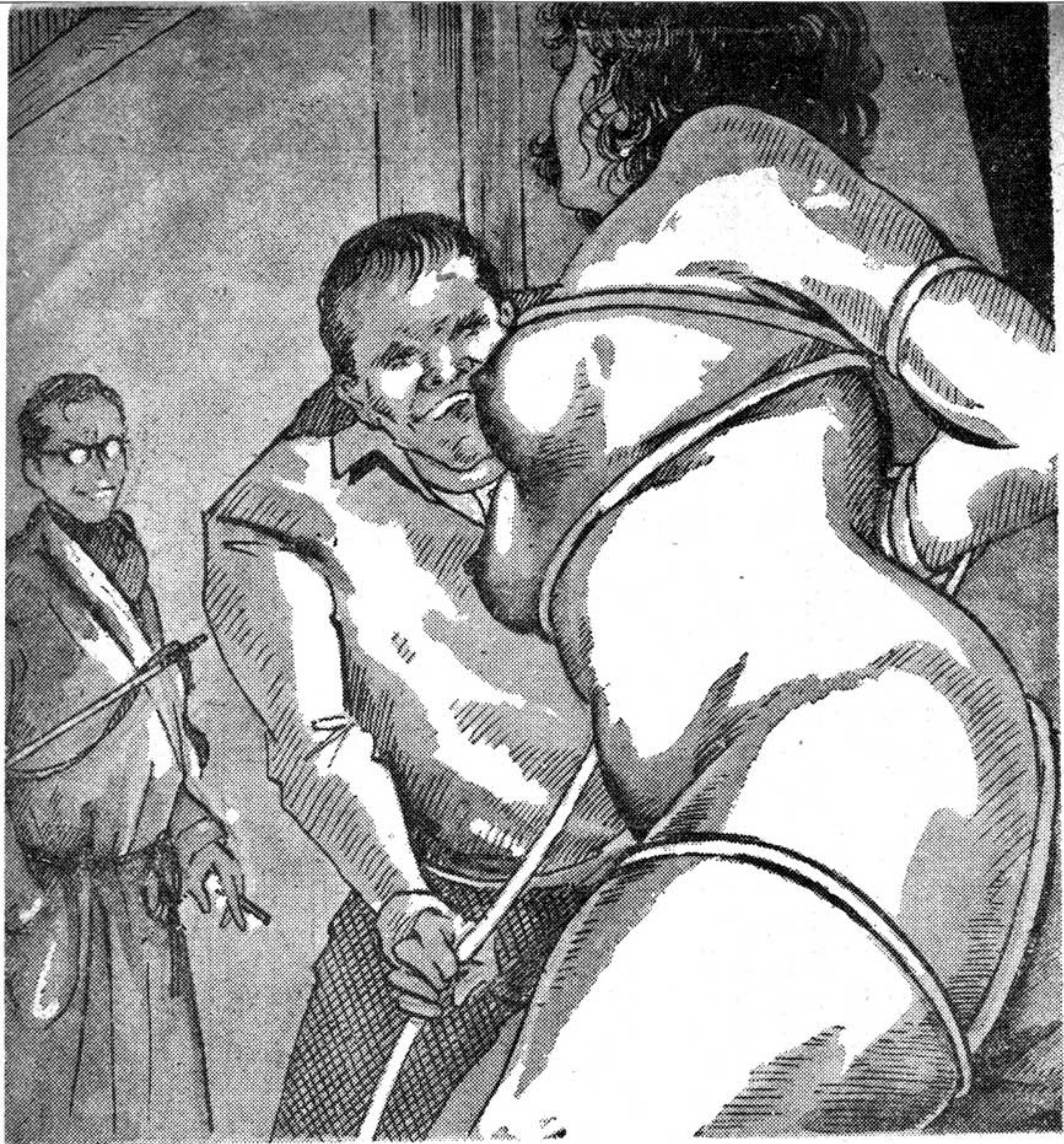
スクリーンの上に、全裸の貴美子の苦悶はつづいていた。録音テープもゆるやかに回転し、せつないうめき声を発していた。

ミドリの目は、再びスクリーンに吸いついた。吸いつかざるを得なかった。

貴美子の全身は、いつのまにか天井から吊り下げられていた。静かに白くゆれていた。足のさきが、床から三十センチほど浮きあがっていた。

だらりとのびて吊り下がったので、どこも





かしこも、さらけだされていた。足や腰をか
がめて、羞恥をかくすことができない。

「ウウウ。ウウウ！」という、しぼりてるよ
うな声が、テープから流れた。

胸に縄がぎしぎしとくいこんでいた。自分
の肉体の重量が、胸の縄にいつそうの強さと
なっにかかるのだった。乳房がゆがみ、ゆれ
て、大きくあえぎ、苦痛はそこにきりきりと
集中しているかにみえた。

カメラマンとしての弓彦の技術は、かなり
巧みだった。カメラマンであり、演出家でも
あるのだ。

あるときはロングで貴美子の全身の悶えを
撮り、あるときは極端なアップで、疼痛に戦
慄する乳房の先端を描写した。柔肌に噛みこ
む縄目を、なめるように大きく映しだしてい
た。

凄惨な描写だった。床に浮く足のつまさき
から、徐々に這いあがり、膝から腿、腿から
上へと、むさぼるようにカメラの目は移動し
た。

「いかがです、ミドリさん。おどろきました
か。美しいでしょう。きれいなショウではあ
りませんか。この世のどんな美術品よりも、
どんなに巧みに演出されたドラマよりも、す

ばらしいでしょう。貴美子は、まったくすばらしい女だった。顔ばかりではない。一流のファッションモデルにも劣らない、みごとなプロポーションをもっていた。ぼくは好きだった。愛していた。妻のすべてを……」

弓彦は熱っぽい言葉をつぶやき、嘆息するように顔をあげた。そして、なおも述懐をつづけた。

「ぼくは、美しい貴美子の身体を、もっと美しくして眺めたいと思った。楽しく観賞したいと思った。それには、縄だ。縄が必要だった。縄で貴美子の両手を縛り、その自由を奪うこと……。縛られれば、苦しくなって貴美子はもたえる。くねくねと腰をくねらせ、胸をふるわせて……。眉を寄せ、目を吊りあげ、口をゆがめて貴美子はのたうつ。美しいのだよ。しびれるほどに美しいのだ。これは生きた美なのだ。死んで動かない美や、古びてカビの生えた美ではない。ピチピチと呼吸し、躍動している新鮮な美なのだ。わかるかね、ぼくの言葉の意味が……」

弓彦の声は、テープから流れる貴美子のあえぎに調和するように、次第に高いひびきになってきた。

「あ、あなたは狂人です！」

ミドリは、恐怖のためのかすれ声でさげんだ。

偏執狂だ、狂人にちがいないのだ、この義兄は。

姉はこともあろうに、狂人と結婚したのだ。そして不可解な急死を遂げ、さらにいま自分は、狂人とその使用人の白痴のような男のために、椅子にくくりつけられ、動くことができないのだ！

ミドリはもがいた。駄目だった。腰を浮かすだけがせい一杯だった。椅子の背にまわされた手首が、まるで鉄の輪でしめられたように

動かない。もがくと両腕の内側が椅子の堅い背にこすれて痛いのだ。「うふふふ……」ぼくが狂人ですって？ わかってくれないんですね。しかし、無理もない。この美がわかる人間は、ごく限られた少数ですからね。つまり、感受性のゆたかな、……感^わ溺^でし、耽美に徹する心をもった人間でないと、わからない……」

自分にいいかせるように、弓彦は首を小さく横にふった。

6

スクリーンの中に、弓彦が登場した。

天井から吊り下げられている貴美子の前に立った。弓彦の手には、皮の鞭が握られていた。それを大きくふりかぶった。

「ああッ」と鋭い悲鳴をあげたのは、観客であるミドリだった。

ぴしりッという無残な音は、スクリーンと完全に一致した。貴美子の裸身が、釣りあげられた巨大な白魚のように、びいんとけいれんしてのけぞった。

その白い肩に、ななめに走った赤い線は、皮鞭の痕だった。

「ひいッ！」貴美子はその美しい顔を一片の見栄もなくゆがめて絶叫した。白い咽喉が裂けるかと思われるほどふくらんだ。波のように胸と腰がゆれた。

背中にくぐられた両手首を中心にして、貴美子の裸身は鈍い回転をはじめた。貴美子の背中から一直線に天井までのびている縄が、きりきりとよじれていく光景が、大寫しになった。

弓彦の皮鞭は、二度三度と貴美子の肩に、腹に、そして尻に鳴った。このときの撮影者は松造であろうか。

悲鳴をあげてのけぞりながら、貴美子の身体はゆるい回転をつづけた。頭上の縄がなおもよじれ、胸にかかった縄がしめあがった。

「わかったわ、もうやめて！」

ミドリは、髪を突っ伏してわめいた。もう、正視することはできなかった。

「わかったとは、なにがわかったのです？」

冷笑をうかべて、弓彦がいった。

「お姉さんは、殺されたのよ、あなたに。あなたにこうして責め殺されたのよ！」

「ははは……あなたの推理はね、半分あたった。しかし、半分はちがっている」

「なんですって？」

「たしかに——」弓彦はつづけた。「形だけをみれば、貴美子はぼくに責め殺されたともいえよう。美しいものはもろく、破壊しやすい。しかし物事は——ことに男女間の愛情に関しては、表面だけみて判断をしてはいけないねえ、ミドリさん。あなたのお姉さんは、ぼくを憎んで死んでいったと思いますか」

「あたりまえだわ」ミドリは激しい言葉を投げつけた。「こんなひどい目にあわされて死んだお姉さんがどうしてあなたなんか愛せて？ あなたは狂人だわ、悪魔だわ。姉はきっと化けて出るわ。そしてあなたに復讐するわ！」

「ははは……」弓彦は声をあげて笑った。「ミドリさん、あなたのような若い女性がそんな非科学的なことをいってはいけません。ねえ、ミドリさん、貴美子はね、けっして化けたりなんかしませんよ。ぼくを恨んだりなんかしません。貴美子はよろこんで、恍惚の中に死んでい

ったのです……」

「そ、そんなことが！」

「ないとおっしゃるんですか？ よろしい、では、つぎのフィルムをくらんください」

すでにフィルムは五巻目に入っていた。映写係は、いつのまにか弓彦から松造に変わっていた。松造はふとく短い指で、器用にフィルムを交換した。手馴れている仕事らしかった。

おそらく弓彦は、貴美子の死後、毎夜のようにこのフィルムを映写しているのではないだろうか。スクリーンに再現する貴美子の苦悶の裸身に眺め入っているのではないだろうか。

そう思うとミドリの背筋にまた悪感^{おかん}が走った。古ぼけた、山荘の、奥まった映写室。たった一人の観客。スクリーンにのたうつ美女の裸身。ミドリは頭を左右にふった。悪夢なら早くさめてくれればいい。だが、夢ではなかった。

7

スクリーンに再び鮮烈な色彩がうごめきだした。同時に、録音テープも交換されて、新しい回転をはじめた。

「ウウ、ウッ、ウウッ！」貴美子の呻吟^{しんげん}が、いきなりミドリの耳に突きささった。

逆さ海老^{えび}の形に縛りあげられている貴美子だった。両腕は背中にぎゅちりといまじめられ、そして両足も膝からがくりと折り曲げられて縛られていた。両手首と両足首が、胴のくびれ、ちょうど尻の上のところで、一つにくくり合わされているのだ。

みるからに苦しげな、強烈な縄のかけ方だった。すこしのゆるみもゆとりもなく、肌と肌、腕と腕、足と足を密着させて、縄は肉のなかにくいこんでいた。

こうなつては、もう一個の肉塊にすぎなかった。四肢を背面に縛りつけられて、貴美子は亀のように腹這いになったまま、火のような呼吸をついていた。白い亀。やわらかいふくらみをもった亀。悲惨な姿だった。

「これはね、ミドリさん、最初にごらんにいれたフィルムから、半年後に撮影したものなのです。お姉さんの表情や、それから声のひびきによく注意してごらん下さい」

弓彦は、ミドリの耳もとにささやくようにいった。

画面に、再び皮鞭を握った弓彦が登場してきた。床の上に俯伏せになつてころがっている貴美子を、弓彦は上からじっと見おろす。

すると、貴美子の顔が、すぐるように弓彦を見あげた。

「あ、あなた、早く、早く打って！」

貴美子は哀願した。

ミドリは自分の耳を疑ぐった。こ、こんなことが！……

しかし、姉はたしかに言ったのだ。早く打って、と……。あの強靱な皮鞭で、自分の素肌を早く打ってくれというのだろうか。あのおそろしい鞭打ちを望んでいるのだろうか。

信じられないことだった。

これはいったい、どういうわけなのだ？

画面の中の弓彦が「ふふふ……」と笑い、そしていった。「そんなに、ぼくの鞭が好きになったのかね、貴美子。いとしいやつだ。それではお望みどおり、この鞭で愛撫してやろうかね」

「は、はやく、あなた、お願い！」
せつなげな声で、また貴美子は哀願した。顎をあげて、弓彦にすがった。

その貴美子の瞳が妖しい色に燃えているのをみて、ミドリは慄然とした。みだらに濡れた目の光……。

ちょうど、腹をすかせた犬が、主人から餌をもらうときの格好に似ていた。いや、犬よりもなお獣的な、家畜めいた、いやしい表情だった。

「そうか、よしよし、それじゃ、いくよ」

弓彦の皮鞭がうなった。

貴美子の肩のつけねあたりに、ぴしりつと巻きついた。

「ひいッ！」貴美子の裸身が、それこそ海老のように鋭くはねかえった。いままで俯伏せだったのが、こんどは仰向けになった。乳房や腹が上をむいた。

手足がうしろにくくられているので、苦しいポーズになった。自分の肉体の重量に、自分の手足が圧しつぶされるのだ。

また皮鞭が鳴った。こんどはその白く盛りあがった乳房の上に、赤紫色の線が走った。みるみるうちに、それはふといみみずばれとなった。血を吸ってふくれあがった。

「クッククック」という、ふくみ笑いにも似た悲鳴が、貴美子の咽喉にけいれんした。

カメラのレンズが、その貴美子の表情を、真上からのしかかるようにしてとらえた。

貴美子の両眼は、半びらきにひらいた。目尻は吊りがって、苦痛を耐えているかにみえた。唇はゆがみ、そのあいだから白い上下の歯が

がっきりと噛み合わさっているのがみえた。

しかし、この苦痛の表情のなかには、かすかな恍惚の色があった。恍惚——信じられないことだが、ミドリにも、それはたしかに恍惚と映った。

皮鞭は乱打された。柔肌を弾く陰惨な音が空中にひびいた。

白い肉塊は芋虫のようにごろごろと床の上をころがった。その反転を皮鞭が追って、なおも打ちすえた。

「うううッ、ああッ！」貴美子の咽喉がふくらみ、そして齒がひらかれ、あえぎの息が唇からふきこぼれた。

その声にも、苦痛のためだけではない、なにかがあった。嬌声、と思えるものも混じっていた。せつなげに、なまめいた。

ミドリの耳にもあえぎの声は濡れてきこえた。陶醉にうめき、快感から思わず洩れてたような濡れた息……。

湯が熱くたぎり、ふきこぼれるような勢いで、貴美子はさけびはじめた。

「あ、あ、あ、あなた、もっと、もっと強く打ってちょうだい、もっと強く……すてき、とてもすてき、ああ！」

この絶叫には、もはや、苦痛のひびきはなかった。まぎれもない、歡喜の表現だった。

ミドリの毛穴はいちどきにひらき、総毛だった。

——お姉さんは、気が狂ったんだ。この男のために、きちがいにされたんだ！

ミドリはそう思った。

そう思うよりほかに、この事態の解明はつかなかった。狂人にされた姉、哀れな姉！

ミドリは唇を噛んだ、血のでるほど強く。

自分の身にも危険が迫っていることを忘れて、ミドリはスクリーンにもだえる姉を凝視しつづけた。

8

ミドリにはわからなかった。知るよしもなかった。

一年の間に、貴美子の肉体と心は、完全に弓彦の調教に屈服してしまったことを。縄と鞭に馴致されてしまったことを。

弓彦のサディズムは、貴美子にマゾヒズムを植えつけたのだ。

はじめは、ただ恐怖と苦痛だけだった縄と鞭。それが日夜反復した。執拗な愛撫とともに繰り返されると、貴美子の肉体の深奥部に眠っていたマゾの芽が徐々に息づきはじめた。

弓彦の熱狂的な調教がつづき、ついに貴美子は苦痛の中にひそむ快感をさぐりあてた。手足は縄目のあいだからにじみでる陶醉を感受しはじめた。

異常なるがゆえに麻薬に似た恍惚感。従順な性質なるがために、夫の教育のままに、ずるずるとひきずられてきた、この甘美な泥沼。

実業家としては無能力者だった弓彦も、自分の妻をマゾヒストに育てあげることには、天才的な努力と才能を発揮した。

貴美子の心身に、はじめてマゾの芽を見いだしたときの弓彦は、文字通り狂喜した。これでこの山荘での、世捨て人めいた隠遁生活を、強烈な享楽生活と変ずることができる！

サディストのヒーローと、マゾヒストのヒロインの、異常で甘美で狂的な遊戯は、誰にはばかることもない山荘の一室で、日夜くりひろ

げられた。

十六ミリの映画も撮った。せりふも悲鳴もうめきも鞭の音も、すべて録音した。

二人でスクリーンを眺めては、また新しい興奮に燃えた。

お姉さんは気が狂ったのだ、とミドリが思わずさげんだ言葉が、あるいは真実かも知れない。

「あなた、もっと強くぎりぎり縛って！ あなた、もっと激しく、本気になって打ってちょうだい！」

貴美子は哀願し、さけび求めた。その言葉に弓彦の嗜虐の血は、いっそう燃えたぎり、皮鞭をふるってびしびし打った。打ちすえた。

貴美子にはねかえり、ころげまわってむせび泣いた。狂喜の涙が、顔じゅうに濡れ、汗が全身からしたたった。齒をくいしばり、被虐の快感に幾度か失神した。

ここまできては、もう獣だった。女獣^{めじゅう}だった。気品のある容貌は嘘

のように消えた。だが、貴美子はやはり人間の肉体をもっていた。しかも労働の経験もない柔肌だった。被虐には限界があった。

興奮に度を過ぎた鞭打ちがつづいた果てに、貴美子の心臓は麻痺し、呼吸は停止した。あるいは恍惚の絶頂によるショックかも知れなかった。

弓彦は驚愕した。妻の死体に抱きついて号泣した。

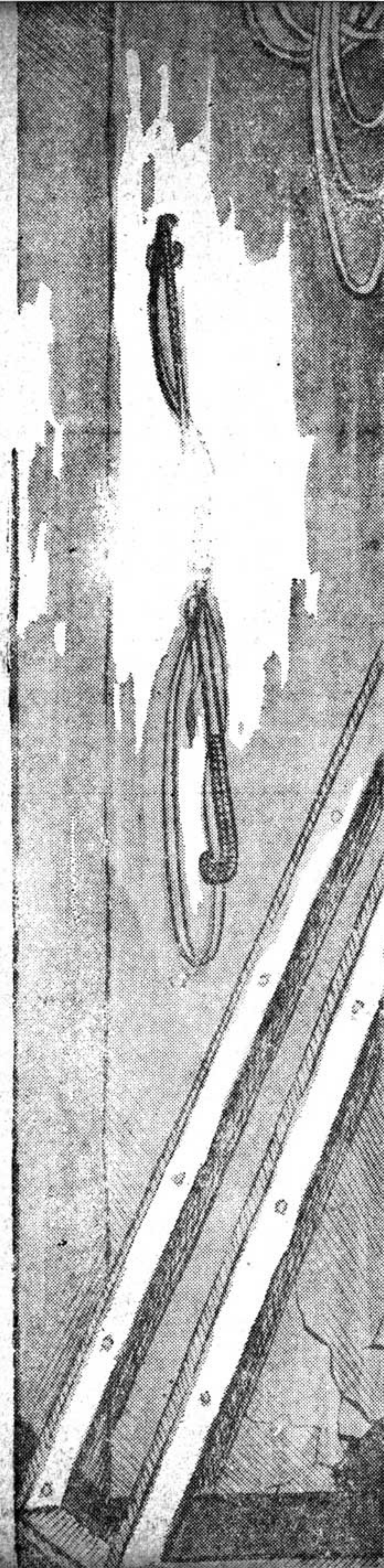
彼は貴美子を愛していたのだ、貴重な玩具として。

美しい玩具、しかし破壊した。もう二度と再生することはできない。いつまでも弓彦は泣いた。

だが死体を放っておくわけにはいかなかった。

弓彦は、田舎医師に莫大な現金を握らせ、普通の心臓麻痺による死亡診断書をつくるように命じた。医師は承諾した。

貴美子は死んでも、貴美子との甘美で刺激的な遊戯の思い出は残っていた。十数巻のカラーフィルムにやきつけておいた、かずかずのし



びれるようなドラマ。毎日毎夜、スクリーンの上にそれを再現して弓彦は妖しい陶酔に浸った。

だがフィルムにうごめく貴美子は、しょせん平面的な投影にしかすぎなかった。テープの声は、しょせん機械による再生音でしかなかった。血も体温もなかった。

弓彦は、飽きた。

愛玩した縄と鞭は、なまなましく弓彦の掌のなかに呼吸していた。弓彦は、飢えた。欲しくなった。



熱い血を秘めた柔らかい肉体が。縄のしめ方によってちがう音色の悲鳴をあげる生きた女体が……。がまんできないほど欲しくなった。このとき、現われたのだ。姉の死をいぶかって、この耽美荘を訪れたミドリが……。

9

「——さあ、映画は終わりました。いかがでしたか。おもしろかった

でしょう」

「ばかり、と天井の照明がついた。室内が明るくなった。同時に、弓彦のほそい目が不気味な艶を帯びて、ミドリの顔に迫った。

「ひえッ！」

ミドリの背がのびて硬直した。

「この縄を解いてください！ あたし、警察に訴えてやります、この山荘の中に殺人狂がいるって！」

「うふふふ……おっしゃるとおり、縄は解いてあげましょう。ただし、あなたの身体は、この耽美莊から一步も外へ出しませんよ。縄を解くのはね、あなたを裸にするためです。そうです、裸にして縛るためです、あなたのお姉さんのように……」

弓彦は陰湿な、しかしこちよげな笑声をあげた。そして、忠実な下男にむかって、目くばせした。

松造は頭をこくりと下げた。すでに、なにもかも承知しているという顔だった。

「あれえッ！」

ミドリはむなしい悲鳴をあげた。

どんなに大声をあげて救いを求めても、この丘の山荘に、誰一人きてくれる者はいない。だから弓彦も松造も、安心してゆっくりと、楽しみながら、この残酷な作業を進めるのだ。

椅子の背にくくりつけられていた手首の縄が解かれた。

同時に、ミドリの腰は、松造の足によってはげしく床の上に蹴倒されていった。乱暴だった。堅い床に膝と腰を打ちつけ、もうミドリから抵抗の気力は失せた。

ブラウスがひき裂かれ、スカートがむしられた。パンティー一枚を

残して、ミドリの肌がしらじらとさらけだされた。

「助けてえッ！」

無駄とは知りつつ、さけばずにはいられなかった。

松造の強引な腕力が、ミドリの腕をつかんで、うしろへねじあげた。肩の骨がポキンと鳴った。

「ううッ」とミドリはうめいた。

ザラザラと堅い縄の感触が、ミドリの手首にからみつき、しめつけた。縄は二の腕にまわり、胸を縛った。ぎりッぎりッと勢いづけて、弾むような腰つきで縄を抜う松造だ。無情だが、この男の胸底にも、妖しい血が燃えているにちがいがなかった。

「痛いッ、ああッ！」

絶望的な恐怖が、ミドリの脳裏を襲った。

相手は狂人だ。縛られて自由を失ったら、なにをされるかわからないのだ。縄は容赦なく、凶暴な力でミドリの腕を縛り終えた。

「よし、ひき起こしなさい」

弓彦が命令した。

依然として無言のまま松造はうなずき、縄尻をひいた。よろよろとミドリは起ちあがった。起たなければ、手首が上に吊られて、ちぎれるかと思うばかりに痛む。

「あたしを縛って、どうしようというの！」

「教えてあげるのですよ、これから。縄の味と鞭のよろこびを……」

「いやッ、いやッ、やめてッ！」

ミドリはのけぞって抵抗した。

「さあ、身体をまっすぐにのばしてよく見せなさい。——ほほう、さすがに若いだけあって、つやつやとした、いい肌をしている。すばら

しい。ぼくのまったく好きなタイプだ」

弓彦は賞賛した。咽喉仏をぐくりと鳴らした。

二十一歳のぴちぴちと張りきった肉づきだった。ふたつの乳房は形のよい大きさに、みずみずしく盛りあがり、頂点の乳首は赤く愛らしくとがって上をむいていた。

胴のくびれも、いかにも現代の若い女性らしく、きゅっとしまって、その下の腰のふくらみにつながっていた。純白のパンティーが、清潔に光って、弓彦と松造の目に沁み込んだ。

「おお、バストもヒップも、なんという愛らしい、いい格好をしているんだらう。よし、ではまず、このヒップから調教をはじめようかね。さあ、松造、用意をなさい」

弓彦のいう準備とに、ヒップへの鞭打ちを容易にするために、ミドリを立たせたまま、固定することだった。

松造は猿のような敏捷な動作で、テーブルの上に椅子をのせた。その上に、ひらりと飛びのると、ミドリを縛った縄尻を、天井についている鋼鉄製の鉤に通した。そしてまた身軽に床へおりと、力いっばい縄尻をひっぱった。

ちょうどミドリが膝をのばし、足が床すれすれに着くところまで縄をひくと、そこで、とめた。縄尻の先端を、壁にはめこんである環にむすびつけた。

ミドリの裸身は、一本の白い柱のように、部屋の中央に突っ立った。映写室が、いつのまにか不気味な実演の舞台と変貌していた。

邪教の祭壇に捧げられた、いけにえのような形だった。ミドリの顔面は蒼白になっていた。生きた心地がない、とはこのことをいうのだろう。いまにも気絶しそうになるのを、かろうじてもちこたえている

といった全身の表情だった。

「はじめから皮の鞭では、すこし刺激が強すぎるかな。まず、小手調べに竹の笞からいこうかね」

この貴重な獲物を、じっくりと楽しむように弓彦がいった。

松造が、その笞を手にして、うやうやしく主人の前にさしだした。弓の折れに似た、長い竹べらのような笞だった。

弓彦はそれを握り、うれしくてたまらないというポーズで肩をすくめた。唇をなめた。おいしいお菓子を前にした子供が、どこからかじりつこうかなと、顔を寄せて楽しい思案をしている、その格好に似ていた。

弓彦は息をつめた。パンティーに包まれたまるいふくらみに、笞はぴしりっという音をたてた。

「痛いッ！」ミドリはとびあがった。

「大げさですね」弓彦は苦笑した。「いまのは、ごく軽いやつですよ。痛いはずはありません」

しかし、はじめは手かげんして加えていた笞も、次第に熱を帯びてきた。

ぴしり、ぴしり、ぴしり！……あるときは、ぱちんっという高い音をたててミドリの尻からはね返った。

十分たつかたないうちに、弓彦の両眼は青白い炎を放って光りだした。異常な快感が急速によりみがえり、早くも彼は憑かれた。彼は没頭し、鞭に熱がこもった。ついには乱打した。

鞭は若い肌によくはじかれ、その感触に彼は陶醉した。この妖しくも強烈な美酒。

ミドリは悲鳴をあげてのけぞり、もだえ、そして耐えきれずに失神

した……。

10

ミドリはベッドに縛りつけられたまま、一夜を明かした。

夜半に至ったとき、さすがに弓彦も疲れて自分の寝室へひきあげていったのであった。

「おはよう、ミドリさん」

朝食を終えた弓彦は、いそいそとして再びミドリの前へ現われた。新しい玩具を与えられた幼児が、朝食もそこそこに、またその玩具に戯れようとする心理だった。

「昨夜は、よく眠れましたかね、お嬢さん」

ベッドに横たわったとはいえ、縛られたままだった。眠れるはずはなかった。

重い疲労に、ミドリはぐったりとなっていた。ああ、まだ生きていたわ、とミドリは思った。

腰が痛んだ。鞭打たれた痛みだ。

このミドリに、弓彦はなおも新しい嗜虐を計画していた。

松造が現われた。朝食の後かたづけをしてきたのだろう。手が水で濡れていた。

弓彦は松造に目で合図した。松造の手が、ミドリの腕をつかんだ。

ミドリはベッドからひき起こされた。

恐怖と苦痛に叩きのめされて、昨日この山荘を訪れたときの元気は、もうなかった。

きょうこそは、きつと殺される！

あたしは、この男の殺人の事実を知ってしまったんだもの……。そのどす黒い恐怖感が、ミドリの顔を早くも死人のような凝固した白さにさせていた。

松造が縄尻をつかみ、背後から突きとばすようにして廊下を歩かせた。

昨日よりは、やや広い部屋に連れてこられた。室内に目をやったとき、ミドリは昨夜自分に加えられたサディズムが弓彦のいうとおり、まったくの序の口であることを思い知った。

そこには、まるで中世の宗教暗黒時代や、江戸時代の町奉行所を思わせるような、奇怪な拷問道具が並べられてあった。

鉄製の檻、鉄の手枷、足枷、首枷。背中に棘が植えこんである鉄製の馬。

天井からは赤錆びた数本の鎖が、黒いつららのように垂れ下がっていた。

各種、各型の鞭、笞、むち、ムチ……。

妙な横木のでている責め柱、十字架台。

「あッ」

ミドリは、ふいにいましめを解かれた。

しかし、ほっとして腕を撫でさすったのは二、三秒間だった。天井から垂れ下がっている鎖に、ミドリの両手は、バンザイ型につながれた。

鎖は重い金属性の音で鳴った。ミドリは目をつぶった。

弓彦が、二メートルはある長い皮鞭をもって、ミドリの背後に立った。それを頭上に大きくふりかぶってまわした。鞭は輪をつくって舞った。

「そうれ！」

長い鞭は、ミドリの乳房に蛇のように巻きついた。びしりと鳴った。

「ひいーッ！」

鋭い悲鳴を發して、ミドリはつまさき立ちにのけぞった。ミドリの乳房が火になった。

やっぱり責め殺されるんだ！

ミドリは戦慄した。

絶望に気が遠くなりかけた。

その時だった。ドアが叩きつけられたようにひらき、

「ミドリさん！」

さけんで、一人の男が体当たりの勢いでこの部屋にとびこんできた。

藤沢英一だった。

ミドリの危機をひとめ見るや、彼は猛然と弓彦にとびかかった。弓彦の手から皮鞭を叩き落としたとみるや、はげしくその胸ぐらをつかんでいた。

つぎの瞬間、弓彦の身体は宙に一回転して床に叩きのめされた。もう起きあがれなかった。

さすがに、血気さかなな若手記者の腕力だった。

主人が倒されたと知るや、松造が熊のように両手をひろげて英一に襲いかかった。

「くるか！」

英一の鉄拳が、松造の顎に炸裂した。

松造は、うおっと吠えて大きくのけぞり、壁に後頭部をぶつけて悶

絶した。

「ミドリさん、どうした、しっかりしろ！」

英一の手がミドリの鎖を解き放った。自由を得たミドリは、よろよろと英一の胸の中に倒れこんだ。

「この二人は、殺人犯よ、あたしの姉を殺したの」

ミドリは、やっとの気力でいった。

——そうか、こいつは特ダネだぞ！

英一は心でさけんだが、口にはださなかった。

「ありがとう、英一さん、よくきてくれたわね」

「約束の時刻が、三十分過ぎても、丘のふもとにきみの姿が見えない。心配して、このお化け屋敷までのぼってきたのさ。そうしたら、女の悲鳴さ。あわててとびこんだら、こんなすさまじい光景だ。なんだい、このぶっそうな道具は……。わけを話してくれないか」

英一は室内を見まわして、あきれたようにいった。

「わけは、あなたの車にのってから話すわ。いまはあたし、この山荘から一步でも遠く離れたいの」

「よし、とにかく警察へ知らせなくちゃなるまい。さあ、行こう。車までぼくが抱いて行ってやる」

英一は、自分の着ていた背広をぬぐと、裸身のミドリの肩から着せかけた。

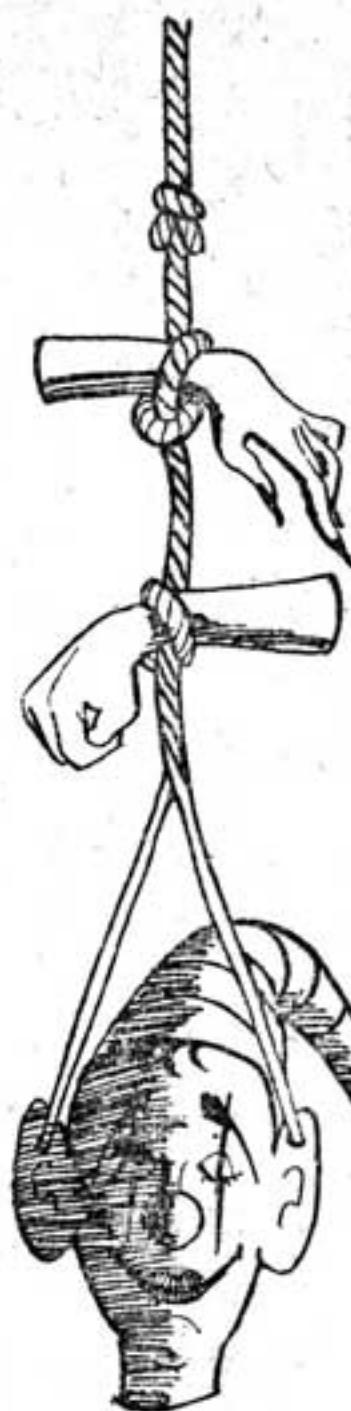
ついでに、その身体を、しっかりと抱きしめた。

「痛いわ」

と、小さくもがいて、ミドリは目をつぶった。

ああ、助かった、あたしはいま、恋人の胸の中にいるんだ、と思うと、きゅうに緊張がゆるんで、ミドリは気が遠くなっていった……。

読者サロン



▼号を追って躍進の気に溢れる御誌の存在には心強きものがあります。「風奇」と「画報」の両方を精力的に毎月出版をされる意気には敬服します。画報のご苦心のフォートの数々、素晴らしく豊満な女体と面白いポーズです。マゾ・フォートが割合あって嬉しいのです。中には肥満した男のマゾ・フォートが時に見つかって小生の好みもある程度満たしてくれまして、ありがたいと思っています。なお一枚でもフォートか絵を裏なしのものを入れてくれたらなおよいと思います（深夜テレビの画面にはりつけるのです。まだどこにもこのことは書いてなく、私の発明（？）かも知れませんが）悦虐誌のおち入りやすいこととしてマンネリズムがございませう。マンネリに陥った以上、ア

ブノーマルとはいえないので、存在価値が乏しくなります。といて、私が考えますのに、アブノーマルの種類というものはそんなにたくさんあるとは考えられないのです。あたかもミステリー小説のトリックのようなもので、ほとんどがすでに小説化ないし告白として世に出ていますので、新奇なものを続々求めようとしても無理かも知れません。が、ミステリーの分野で、その行き詰りが、トリックの合成、タイプの混合で打開されていくように、アブノーマルの分野でもいろいろ合成を行なうことにより、マンネリ化を防止し得ると思います。たとえば今私が書き上げた、二組の夫婦、がそれぞれホモとレスボスに耽る小説などは、その一例です。御誌のグラビアの充実に比べて

本文がいかにも分量が少ないように寂しいのですが、「画報」もある以上、活字中心にしてはいかがですか、漸次本文のページがふえつつあるのは嬉しいですが、まだ不足と思います。本文の内容ですが、今まで面白さを第一に感じたのは谷貫太氏のマゾものです。かびや氏にも大変期待しておりましたが、今号のごとく、昔読んだ記事と同じのをまたまた見せて頂いてガッカリしました。記事や小説は下手でもいいから常に独創的であることが第一に必要で、この点他誌をほめてどうかと思ひますが「奇ク」などが長い歴史を誇っている原因の一つはこんなところにあると思います。また、このような誌の傾向としてサド一辺倒になりやすく、ほとんどが縛り責めですが、それ以外のマゾ、フェチ、ホモにも力を入れてくださるようお願いする次第です。もっとも読者通信の多くが、女に対する男の責めを望んでいるらしいし、またそれが当局に対して一番無難らしいのもわかりますが、類誌の多い現在、強い特色も必要と思ひますが、いかがでしょうか、サド小説などを押しても、得て

して類型的で、地下牢のようなところでの縛り責めとか、秘密の興行などが大部分です。新形式の小説の縛り責めや、心理を掘り下げたものなどもとり上げてほしいのです。また、マゾなら、ただ馬になる男が女をのせて満足だというだけのものなら（それが悪いとはいいません）、馬になる男とサディスタンのイメージはマゾとして、最もシンボライズなことですが、あまりにも今までお目にかかりすぎています。手前みそになるかも知れませんが、九月号にのせていただきましたので、今なおそれを感激しています。小生の「奇妙な再会」などは、マゾ男を中心として、主従の逆転、トリオリスミス、コプロ（尻および尻ふき）。ピーパー太っちょ男のサド（肉体による責め）（やせ馬の上に君臨する大っちょ男の肥満体へのフェチシズムなどが満たされておき、珍しいストリー）と思います。風変わりな上に、マゾ男が五十男というところもあり、一般向とは思えませんが、そしてその後の御誌の様子ではあまり好評のようには見うけられなかったことは残念ですが、実は恥かしいことで恐

縮でありますけど、あれをつけて頂いてから、幾人かの人々から「面白く、変わっているし、もっと面白く、異常肥満体を、もっと書いてくれ」と励ましの手紙を頂き、感激している次第です。

ふつう、よく書かれている「肥満好き」などは、特殊な性向と思われまして、もし自分がそんな趣味を有していても、読者通信のごとき場所でも隠したがるものです。とくに女性の場合スマートな男を好むのが当然という通念があって、「私、太った男好きよ」などと話そうものなら、仲間から軽侮されそうなのがして「太っちゃ」なんていやと言っているものらしいです。

私は、太った巨体を好きな相当数の人を知っています。これらの人々は通信もせず、そっと「風奇」などを読んでいるわけでもない数だと思います。アンコ型の角力の尻や太鼓腹を内心では熱愛する男女が意外に多いのも、こんなところから来ているようです。世の中に太っちゃを賛美する男女が案外多いことは確かで、これは小生も保証しま

す。

江戸川氏のミステリーに類出する「太っちゃ紳士」や、海外の（小説モーパッサンや米英ミステリー）によく登場する肥大漢は、よくこれらの事業を表わしています。「奇ク」に「ヒポイズナイド、ペニスナイド」なる文をのせてもらった私ですが（私の文に河馬という語が出てくる理由も、河馬のポリウムを愛するがゆえです）アブノーマルの分野にまだまだ肥満体の進出する余地は多いと思います。

（静岡・文津部三郎）

▼僕は、六尺禪の愛用者であり、男性責めの強烈なるマニヤです。「風奇」十一月号中の蘆立鋭吉氏の「憲兵狩り」全くすばらしく、僕の長年夢に望み続けて来た男性責め、このすばらしい小説、僕の今まで読んだなかで最高です。

勝股中尉にたいするものすごい拷問水責め、局部を責める振り子責め、少年が中尉に対する急所責め、煙草の火責め、腋・胸毛（そこから股と最後の最後まで中尉にくわえるこの淫刑は全く息もつく間もなく、いくどもいくども読みかえしてたのしんでおります。これから、ど

しどしこのようなすばらしい男性責めとフォトをお願い致します。

それに「風奇」をお願いしたいことは、六尺禪を締めた男性被縛責め写真をぜひ毎号のせてくださるようお願いいたします。僕は、真っ白な幅せまな禪を、股に力一ぱい締め、Y字型に尻の割れ目にぐっと食い込ませて締め、毎日、その感触をたのしみながら働いております。

（福岡・高浜護）

▼「風俗奇譚」十一月号、面白く拝見致しました。毎月見えないが、何か一つもの足りないものを感じていました。が、月号の「憲兵狩り」今までになく面白く読みました。これからも、こんなような物語をどしどし掲載してください。完全に男性的な人が責められるのは、全く面白い、とくに女に責められるのは。それから、これは比較的大に描写してあったこと、やはり責められるのはとことんまで全裸のほうがよろしい。また、男性責めの小説とか絵が、今まで少なかったが、これからはどしどし掲載していただきたい。こんなのを好む人は、たとえ一枚でも二枚でも、また

一つの小説でもあれば、その本が少々高価でも買うということに留意していただきたい。

写真は、どうもモデルが悪いし、また、顔もわからないし、思い切った絵にして、それに解説をしたほうがいい、とにかく「憲兵狩り」は面白かった。

（一読者より）

▼貴社へは初めてお手紙を差し上げますが「風奇」が発刊されていることは「奇ク」または「実話雑誌」などにより知っていましたが、何分東京より遠くはなれたところであるため、書店において販売させておらず、実物を拝見することが出来ませんでした。が、先日、某市へ出張のとき、四月号を古書店で見、さっそくに買いためて読ませていただきました。この本は残念ながら、グラビア写真とい、内容といい、あまり感心できず、あと貴社へ注文しようと思いましたが、今日まで注文する気にはなれません。した。しかし、今日当市において十一月号を発見、どうしようかと求めました。おもしろい買って買いました。あ、四月号に比べると、まったく別の本ではないの

かと思うほどよくなっているのにおもわず「ブラボー」と声を上げました。「風奇」がこんなによくなっているのも知らずに、今日まで注文しなかったのを残念に思い、さっそくですが、左記の通り注文いたしたいと思っています。

だが、まだこの種の本の先輩である「奇ク」に、少し見おとりをするのでないかと思ひますが、これも、まだ発刊らしい十二巻だけという現在では、やむをえないことと思ひます。それで、貴誌がもっとも早く充実した本となることを楽しみにしてまっています。

そこで、二、三気のついたことをのべますと、

①グラビアのうち最後に「まといつくへび」というのが五ペーじありましたが、これはわれわれには少しものたりないと思ひます。せっかく首に縄を巻きつけたのですから、この縄で両手腕、そして場合には足も緊縛して、そこへへびをまとうすとかかったと思ひます。すなわち写真はすべて縛った女体だけだのせていたのだかと思ひます。

②モデルの名前、出来れば身長、体重、胸囲などくわしく、

そして年齢を発表したら、読者とモデルと何か親近感がわきだすと思ひます。

以上、初めて私が「風奇」の悪口ばかりを書きましたが、これも「風奇」がわが国一の風俗誌となることを思うばかりですから、あしからずおゆるしく下さい。(四国伊予 M・K)

▼恥かしい話であるが、小生は男性緊縛に関心を持っていますのである。女体は、各種の雑誌に掲載されているので興味なく、満足を得ることが出来ないで、日夜悩んでいる次第。「画報・風奇」誌には、パンツ一枚で縛られた男と、青竹で責められるフォートがあったので、魚が水を得たように安堵感を覚えた。

男性緊縛!! 社会の強者で、支配者で、社会的にも立派な地位の男性が、縛り上げられて歓喜する。または縛り上げて、苦痛にうめく裸身を見て官能を感じる喜びは、当事者のみを得る暗い地獄の喜びである。逞しい男性が、全裸のまま、うしろ手に緊縛されて、男性の誇りも露出させ、責められるとき、最高に達する。歓喜、それは背徳であり、異常なものとして世間か

らオフ・リミットされるものである。

村の村長X氏は豪放をもって鳴る人物であるが、終戦直後、ある夜、知人宅を訪問しての帰途、村はずれの神社まで来たとき、二人組の強盗に襲われた。X氏は、衣服はおろか、ふんどしまでもはずされ、素裸のまま杉の太木に緊縛された。賊は逃走した。朝になって一番列車の通勤者がX氏を発見し、縛を解いて救助した、その人の話では、裸体のまま縛られていたX氏は、男根を逞しく剛直させ、筋を立て、正に興奮絶頂の状態にあり、縄をときながら、目の遣り場に困ったそうである。裸身に食い入る縄目と、男根までも、自然に露出して晒される屈辱に、村長であるX氏は、いつか露出癖と官能に男根を剛直させたものと推察される。

以上の話を見ても、男性緊縛が、いかに魅力的であり、官能をそそるかがわかる。

貴社は、女性のみでなく、男性緊縛にも深い理解を持たれ、これからの新刊書にも、どしどし男性を裸体にして縛り上げたフォートを載せてもらいたい。

(宮城・山本生)

▼小生、杉並に居住いたし、三十八歳、旧制高校から大学をでまして、しばらく国家公務員をいたしておりましたが、所感あって、ささやかな事業を起こし、現在は中央区に事務所をもっております。家内と二女ありどうにか恵まれた生活を営んでおりますものの、幼少よりのこの性癖だけは、人にも語れず、われとわが心のうちにのみたのみこんでいる次第、腹ふくるるわざとはこの事かと思ひされる次第です。

と申しますのも、なんだそんなことかとお笑ひください。例の流腸でございまして、恐らく私の周囲に、私が「流腸」という文字に、ひびきに、どんな感情を抱いているか知っている者は一人としておりません。社会生活に支障を来たすのが恐ろしいばかりに、私はひとり、夜おそく書斎にて、グリセリン流腸器を、イチジク流腸を、また機の奥深く鍵をかけて、イルリガートル、エネマシリンジを、家内、女中の目をぬすんではそっと愛撫して慰めているわけでございます。

最初はK誌の流腸記事にも胸をさわがせましたものの、最近

のマンネリズムに我慢ならず、大いに貴誌に期待をかけましたものの、浣腸愛好者は僅少と見られたためか、ほとんど記事のないのが誠に残念でございました。最近では浣腸にも熱意を示されるご様子、ただただ嬉しく、恥臆面もなくペンをとった次第です。

もちろんお願いいたしたいのは、毎号浣腸記事を、そして出来れば写真をのせていただきたく、恐らく、私のように、事が事であるだけに発言し得ずにいる浣腸趣味の者に代わって、お願いいたす次第でございます。

(杉並・河)

春村伶子様。十一月号、本欄にて、あなたの通信拝見いたしました。K誌にて、あたのお名前、拝見していただきますので、未知の女性からのお便りとは思えません。

さて、鶴藤恵は、もちろんペンネームですが、あなたのおっしゃる通り、筆名からは男女の判別が出来ません。どちらかといえ、女性に多い名前だと思います。ところが私は、あなたと年齢の大差のない男性です。お読みいただいた浣腸のいけにえ、

は、実際には十月号の「地下室の吊り責め」と題名は違いますが、同じ一編なのです。編集部にて二編に分けられ、別々に題名を付けてくださったので、浣腸のいけにえは単なる浣腸責めの描写のみに終ってしまい、前後のストーリーは判然としな

いわけです。しかも、誤植が相当多く、意味のわからない部分があったのではないかと思います。お尋ねの巨大な嘴管のことで、あの作品自体フィクションですので、浣腸器その物はむしろ、空想上の器物に過ぎません。

そこで私が、あれを書くときに想像した浣腸器について述べてみます。

嘴管は、あなたのおっしゃる通り、円筒ではなく円錐状なのですが、薬液の入る部分はゴム製ではありません。押し出す部分は単なるガラス製浣腸器で、特別製な嘴管をそこに取り付けたと想定したわけです。嘴管の最も太い部分は、牛乳ビンぐら

薬量は、薬液がグリセリンです。刺激性の少ないものならとにかく、そんなに大量ではありません。

結局、私は、巨大な嘴頭部による局部の苦痛を表現したかったのです。

あなたは、同性に興味をお持ちのこと、私は男性ですので残念ですが、あなたからは相手にされないかもしれません。

そこで私が、女性であつたらという想定のもとに、あなたを折檻してみたいと思います。あまり、肉体的苦痛を与えず、羞恥に訴える責めで……。

まず、あなたを全裸にしたうえで、四ツン這いにさせ、股を開かせます。そして、ガラス製浣腸後、イチジク、エネマシリ

ンジ、イルリガートルと次々に浣腸をかけて、腸内のすべてのものを排泄させます。そのときも、トイレはもちろん、便器も与えず、四ツン這いのままか、直立させたまま排泄させるのです。

その後、赤ん坊の握りこぶし大の水を、排泄物で汚れたあなたの局部に数回押し込み、直腸内にそれが充満したところで、大人用おむつカバーをはめます。

す。

やがて、羞恥で頬を真っ赤に染めたあなたは、両手を背後で絞められて、乳房、乳首、腹部のような女性の体のなかで最も敏感な部分を、ローソク、ハリガネ、竹棒などで責められるのです。

あなたは、あまりの苦痛と羞恥に身もだえて許しを乞うのですが、私は絶対許しません。そして、ついには、あなたの望む「股間ムチ打ち」のために失神してしまふのです。

あなたは非常に内気だからいいわゆる、アブノーマルな人々には、そのような性質が多いようです。私もその例に洩れませんが……。

(横浜・鶴藤 恵)

▼本誌十一月号に書かれた獅々村氏のひっぶ・えんど・はいひーるは全くすばらしいものでした。ネチネチした粘膜質を思わせる氏の作品には今後期待しています。とくに女体の部分を丹念に描写するようなアブ小説または独身のアイディアによる責めを期待します。(マリモ生)

本誌「風俗奇譚」の在庫お知らせ

既刊号の本社在庫分が残り少なくなりました。お取り揃えになるにはいまが好期です。お申し込みはお早めに！

創刊臨時特集号 (売切れ)

艶妖特集号 (一四〇円)

多色刷口絵・かぎや店先(春信)

写真口絵・肌の十字架ほか

特集・サディズムの種々相

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の変態心理を衝く

蛇淫の怪(現代怪奇物語)

刑罰人の縄の掛け方(江戸時代)

白人女性を征服した黒人男性

嗜虐への誘い(告白)

女の黒髪に埋もれて死にたい

縄で縛った歓喜の抱擁

仮面舞踏会(伊国・四畳半)

王妃マユラの虐殺(インカ悲史)

種馬にされた男の話

変態演出考(ドサ回り告白記)

明治性的珍聞史②

妊婦を殺す変質魔(ある強殺事件)

件)

犬により快楽を求める女

春の臨時増刊号(二〇〇円)

妖異・猟奇艶笑特選読物25編

多色刷口絵・老女村岡

写真口絵・捕われの白肌ほか

二色刷口絵・小田利美画集

グラビア・責められる肌ほか

変態性欲考(ある性犯罪の分析)

魔の十三号

死体を溶かす(科学者の犯罪)

女に奪われた処女

獣婚・女と犬(異常性欲)

舌を噛み切られた男

悪魔に肌を許した人妻の話

猫の怨霊(怪奇小説)

若い女の生胆をとる老婆

会員三百人の男色クラブほか

悦虐特集四月号(一四〇円)

多色口絵・五彩のサタン

小田利美責め絵集

グラビア・美女緊縛ほか数十葉

の嗜虐編(変態の緊縛圧巻)

特集・鞭打の心理と実相

鞭打の心理(ムチ打ちの極致)

鞭打の歴史ムチ打たれる女たち

ち

鞭打たれる悪魔のイレズミ

鞭打から生まれた愛情

焼け火箸の快楽死(小口末吉の妻)

人間と蛇との交情

地獄尼僧院(おそろべき実態)

火あぶり台の女(印度回教徒の殉教)

縛りあげた女の可愛さ

情事の部屋のサド・マゾ

ピストルを持ったサディスト

夜の淫魔(夏の夜の犯罪)

明治性的珍聞史③

女の死体に憑かれた男ほか

耽美法悦特集五月号

(一四〇円)

折込み口絵・空中人魚

口絵・女と動物ほか

グラビア・捕われの人魚ほか

特集・同性愛

同性愛の種類と実際

女性相男子の恋慕手記

同性愛少年が殺人を犯すまで

白い肌同士の陶酔

マゾッホの被虐待契約書

野獣の夜(フォトストーリー)

女の切腹その心理の分析

女だけに加えられる拷問

ハレムの残酷物語

女の人肉を食べた男

明治性的珍聞史④

吹上佐太郎の性の異常遍歴

性的イレズミ考ほか

嗜虐陶酔特集六月号

(一三〇円)

多色刷口絵・痛ましき祭壇

喜多川歌麿の艶画より

鈴木春信吾嬬土産より

グラビア・足つり裸女ほか緊迫

写真数十葉

特集・フェチシズム(淫物症)

フェチシズムの実態

フェチシズムの源泉は嗅覚

片輪男に性欲を感じる女

排泄物に発情するほか

浣腸に魅入られた女(告白記)

八十七個の洗濯バサミ(サド記)

マゾ妻二代目・矢作ヨネの話

マゾヒストの手紙から①

刑罰はどのように変態的か

レスボスの日、ほかアブ小説

夏の臨時増刊・薫風特別号

(二八〇円)

多色刷口絵・無残石燈

アト口絵・鞭をふるう女たち

蛇責め・穴蔵さかさ吊りほか

グラビア・デヴァンの狼藉・荒

縄と岩・ベッドの愉楽・哀美

の白肌・裸女無残絵ほか

特集・世界怪奇残酷秘話

十代の悪の女王(米国暗黒街)

白肌責め絵図(江戸無残帳)

花嫁を突き殺したサドの夫

人食い人種の太鼓ほか

特集・変態性欲犯罪実録

尼僧強姦魔・大米竜雲

俺のモノをなめろほか
写真物語 責め写真家とモデル
絵物語 無法狼・娘しほり
怨羞無残特集七月号

(一四〇円)

多色刷口絵・落花園絵
口絵・女のプリズムほか
グラビア・恋慕受縛・姐上の白
魚・肌もあらわにほか
海の怪物・山の怪物
特集・食人癖

サディズムの極食人症
食人国物語

中国における食人奇譚
人間料理を食べた人々

死を賭けた遊戯(裁判記録調書)
鉄鎖・鉄環・鉄衣装責め

ソドム族(あるソドミアの告白)
若い女を硫酸で溶かす

ムチの下で陶酔する女
女忍者(戦国忍者の残酷秘話)

白肌をはう毛虫(時代小説)
幻妖異虐特集八月号

(一四〇円)

多色刷口絵・緊縛二重奏
口絵・荒れ小屋の残虐・お針子
の受難・ウインチづり
グラビア・スタンドの美女・柔
肌しほり・竹責め・落花の閨
・亀甲しほり・地獄に落ちた

男・両手づり・嗜虐の白肌・
こぼれる妖美・二つ折りほか
特集・レスビアン of 生態
レスビアン of 実体

東西レスビアン of 愛の技法
レスビエンヌ

サディストとマゾヒストの往復
書簡(あなたの犬になりたい
馬になります)

あたしの悦虐プレイ
男に加えられる責め

妖怪変化とセックス
化粧室談義(トイレット考現学)

真珠とり海女奇譚
明治性的珍聞史⑦

少年の臀肉切り・野口男三郎
若い女についた死霊ほか

艶美悦特集九月号(一四〇円)
多色刷口絵・空中鞭打

原色写真・巖頭の裸女・つるさ
れた白魚・女のポーズ

グラビア・裸女無残・落花の景
柔肌責め・投げ出された女・

どうとでもして・サルグツワ
をはむ女・静かなる地獄ほか

特集・女装する男たち
男が女装するということ

女装する男たちの生態ほか
マゾヒストの手紙から③

浣腸のいけにえ(告白実験)

若年における異常の生態

奇妙な再会(アブ・ストーリー)
おこの殺し(猟奇殺人事件)

変性男子ものがたり
男へ復讐のため男装した女賊

暗黒街の処刑室(本格サド小説)
恋虐呪縛特集十月号

(一四〇円)

多色刷口絵・女体知恵の輪
色特写真・美しき囚虜・あかり

も深く・はなやかな受縛
グラビア・白衣の佳人・石だた

みの無残絵図・長椅子と女・
禪をした男・浴衣も乱れて・

亀甲にしほられて・ほか
特集・サディストの群れ

残虐なるサディスト達
あるサドやぐさの告白

ネクロフィリーの男
私の緊縛の記録

犯罪から見たサディスト
アブチック秘画展

今やスリル第3世紀・ほか
地下室の吊り責め(浣腸記)

生きながら焼かれる女
マゾヒストの手紙から④

男性に加えられた珍刑
全身くまなく刺青した男

明治性的珍聞史⑨
刺激遊戯のあそび方

復讐鬼(サド小説)

裏切りの決算(サド小説)
凌辱無残特集十一月号

(一四〇円)
多色刷口絵・水地獄

女体責め絵・丸太小屋の惨・岩
場ハリツケ・竹しほり責め・

射撃のマト
グラビア・艶麗無残・はなやか

な足吊り・恋縄の姿態・犬の
首輪のブラジャーほか

特集・戦争残虐の記録
拷問倉庫(従軍看護婦の悲劇)

憲兵狩り(終戦残虐秘話)
伊予富士の地獄地帯

人食い人種を食べた兵士
写真・戦争残虐の記録

百十二人の集団ハリツケ
水責め火責めにされた姉妹

毛焼きと髪切り
ビルケナウのたそがれ

男をいじめる女・写真集
マゾヒストの手紙から⑤

あたしの乗馬日記
女の下着に憑かれて(告白)

冷房用女体ベッド(秘境怪奇)
死美人館潜入記(香港魔術)

少年愛の人びと(ホモ禁秘帖)
ひっふ・えんど・はいひーる

(アブ・ストーリー)

譚奇俗風報画

バックナンバ
ーのご注文は
書留か振替が
確実で便利
です。送料は
当社で負担し
ております。

画報・風俗奇譚第2集

(二八〇円)



多色口絵・池畔の愉悦
写真口絵・陶醉する女体八景
第1グラビア・鴨居づり・海老責め・水にひたされてほか
第2グラビア・椅子しぼり・美囚六態・白い人魚のもだえ他
第3グラビア・犬になれ・暗闇のよろこび・冷たいタイル他
マゾヒスチック絵画館
乗馬服の女たち・ほか
アブノーマル秘画展
鞭打する人々・奇妙な連中他
惨憺、目を覆う殺人現場
フォト・ストーリー・偏奇莊奇譚
絵物語・恋の一念、蛇となる
絵物語・狂恋吉弥責め
絵物語・ギロチン台の美女
海外残酷譚・人間ステッキ他

画報・風俗奇譚秘蔵版

(一〇〇円)



多色刷写真・まひるの艶肌ほか
多色刷口絵・空中ハリツケほか
責め絵面集・被虐のロープほか
第1グラビア・二人無残・格子にはりつけられてほか
第2グラビア・白肌のデュエット・裸女キリストほか
第3グラビア・格子責め・異虐図絵・嗜の虐ポーズほか
アブチック絵画館
コルセットをする女たち・浣腸される女たち・亀裂へのあこがれ・レスボスの歌ほか
男をしいたげる女たち
人獣交歓の野外彫刻
乗馬する女たち
小説・永遠の美と若さの泉
(ザッヘル・マゾッホ)

画報・風俗奇譚第4集

(一八〇円)



多色刷写真・五輪石塔の前で・水辺の小屋で・緊縛落花ほか
アート口絵・白肌針責め・納屋の中・焼きゴテを乳房にほか
第1グラビア・水車に縛られて水責め・ローソク責めほか
第2グラビア・青い無残縛巻・変わったエビ責め・ほか
第3グラビア・お灸責め・縛られた肉塊・活魚料理ほか
世界名作秘画誌上展覧会
サルダナパールの死・ほか
リチャード・ミューラー画集
女体緊縛考(その方法と分析)
絵物語・悪徳の栄え(サド)
絵物語・町の野獣たち
絵物語・野盗と女たち
裸女緊縛30態(迫真総集版)

画報・風俗奇譚第5集

(十月号)

(一八〇円)



多色刷口絵・白い肌のいけにえ
首輪しぼり・暗黒の世界ほか
アート口絵・熱気むし・ハナ責
め器・さかさ髪づりほか
第1グラビア・首つり人形ほか
第2グラビア・変わった木馬他
第3グラビア・静かなる苦悶他
奇妙な絵画展覧会
アブチックなアルバム
五十万人の大虐殺
トリックによる残虐写真
死にまさるアヒル行進10マイル
生きながら射撃の的にされた男
サソリ谷の死の戦い
絵物語・続・悪徳の栄え
絵物語・ワナにかかった令嬢
絵物語・女密輸船
フォト・ストーリー・奇妙な媚薬
その他満載

画報・風俗奇譚第6集

(十一月号)

(一八〇円)



多色刷口絵・石橋の上に・緊縛
置き物・受縛絢爛ほか
責め絵・吊ってくすぐる・アリ
責め・肌を巻くベルトほか
第1グラビア・壁上の受縛・浴
室の責め・縛愁のひとほか
第2グラビア・長椅子さかさ姿
態・露台の白魚・ほか
第3グラビア・華麗なるハリッ
ケ・残虐を運ぶ自動車・ほか
画集・ソドムの額縁7景
アブチックな写真集
演劇・緊縛ア・ラ・カルト
ジョン・ウィリー画集
フォト・ストーリー・恐怖のド
ライブ
絵物語・サリィの体験
絵物語・マミの正体
絵物語・悦虐の天国ほか

秘蔵版風俗画報

姉妹誌

本誌の

△秘蔵版風俗画報(特二号)▽ 三〇〇円
グラビアと写真版による緊縛女体の競艶集ノ
加えてクサリとベルトによる受縛や残虐縛り
物語等を満載し、異常美の世界を探究するノ



本誌、画報に加
えて、ますます
好評の性風俗専
門誌、必らずあ
なたを満足させ
る緊縛写真の決
定版中の決定版



座右に一冊を備
えれば、望みの
ときにあなたを
その世界の異常
美の境地に導き
心から陶酔と悦
虐を堪能できる

△秘蔵版風俗画報(特一号)▽ 五〇〇円
全巻総グラビア百五十余ページの豪華大冊ノ
集録した緊縛フォト二百枚、九人のモデル競
って熱演、妖麗凄絶のオール迫真場面集ノ

＜代理部新設ご案内＞

本年一月、『風俗奇譚』を創刊以来、数えて十二号、『画報風俗奇譚』は第六集(11月号)と、号を追うに従って、全国愛読者の皆さんに迎えられ、育てられて今日に至りました。幸い、皆さんのご鞭撻、ご支援によりまして、内容も充実、部数も増加の一途をたどっており、弊社の基礎も、ようやく確立しつつある現状でございます。そこで、皆さまのご愛顧にこたえて、十一月一日をもって代理部を開設することにいたしました。

創刊以来、読者のご要望として、特写フォトの分譲が多かったのでございますが、準備ふじゅうぶんのため、果たせませんでした。ようやく万端の準備を整えまして、代理部開設の運びとなりました。

分譲フォトは、緊縛、被虐、プレイなど、風俗資料として、長く皆さまのご収集品の一部にお加えいただけるよう、とくに厳選いたしました。したがって、妖美、艶麗、迫真、格調、いずれの面からも、じゅうぶんど満足いただけるよう吟味いたしました。

分譲写真目録の一部(手札型送料とも)

吊り責め無残	(略A3)	三枚一組	三〇〇円
華やかな緊縛ポーズ	(略A4)	三枚一組	三〇〇円
禪姿二人プレイ	(略B18)	三枚一組	三〇〇円
クサリしぼり	(略C5)	三枚一組	三〇〇円
豊演なる緊縛女体	(略C6)	三枚一組	三〇〇円

編集だより

▼：責め絵・責め写真の大家といえ、衆目の指すところ伊藤晴雨先生をおいてない。だが先生は、長いこと病床に臥して薬餌に親しまれている。斯界のため、まことに憂うべきこと、

先生のご快癒の一日も早くんことを、切にお祈りしたい。

本号は、先生の業績を特集した。絵画も写真も、先生の爛熟期の作品で、いずれも、逸品中の逸品ぞろい、恐らく、こういった特集は、二度とふたたび企図できないのではないかと思う。もちろん先生の嗜好意と、これら作品を秘蔵されていた「晴雨会」の某氏のご後援によってできたわけであるが、先生ご全快の祈りをこめて、おおくりする次第である。

▼：早いもので本誌も創刊以来一年を経た。これひとえに、読者諸賢のご支援の贈ものと編集部一同、衷心から感謝しております。

月ぎめご購読の方法

風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月(一冊)	一四〇円
三カ月(三冊)	四二〇円
六カ月(六冊)	八四〇円
一カ年(十二冊)	一六八〇円

画報風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月(一冊)	一八〇円
三カ月(三冊)	五四〇円
六カ月(六冊)	一〇八〇円
一カ年(十二冊)	二一六〇円

本社直接ご注文の場合は、現金書留か振替が確實便利です。

風俗奇譚 十二月号

定価一四〇円

昭和三十五年十一月二十日印刷
昭和三十五年十二月一日発行

編集人 高倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の一三五

発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番

電話東京(291)二四三〇番